

# 東方聖酒杯 ～The Lost Dreams of Her Ideals.

ハシブトガラス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

聖杯戦争——只一人の願いを叶える為、7組のマスターとサーヴァントが、存在を賭して挑む戦い。当代の『博麗の巫女』霊夢は、先祖の書き遺した書物に従い、その火中に身を投げ込む。

跋扈する英霊、暗躍するマスター。立ち並ぶビル群の間を魔術師が疾走する。幻想が失われた幻想郷に、仮初の過去の幻想が舞う——。

・本作品は、Arcadia様 (<http://www.mai-net.net/>)  
にも並行して投稿しております。

・この小説はEPUB出力し、タブレット等で読む事を推奨いたします。おしやれ。

# 目次

一日目、自宅、学校、自宅	1
一日目、忘れられた霊廟	27
二日目、自宅、学校	35
二日目、学校——Jump the gun.	58
二日目——The difference	77
t side.	77
二日目、妖怪の山	101
三日目、守矢神社	122
三日目、学校、朝	134
三日目、学校、昼から夜へ	147
三日目——salad bowl	

1.	172
三日目——salad bowl	
2.	192
三日目、博麗神社、夜	210
四日目、博麗神社、朝	233
四日目、学校、昼	246
四日目、夜——Multi-sided	264
struggle 1.	
四日目、夜——Multi-sided	279
struggle 2.	
四日目、夜——魔女の小屋	291
五日目、朝から昼へ	310
五日目、放課後	327



# 一日目、自宅、学校、自宅

目覚まし時計というものが作られたのは、つい最近の事である。時間を刻む為の時計は、そも『幻想の幻想』の頃から存在したそう。普及率は決して高くないものの、既に懐中時計も有ったという。

——びびびびび、びびびびび、びびびびび

時計が存在したのなら、アラーム機能をくつつけるだけで良い。そこに思い当たるまでに、どうして数百もの年月が必要になったのだろう。ひよつとすると河童は、物凄く馬鹿な種族なのではないか？

——びびびびび、びびびびび、びびびびび

いや、違う。彼等は眠りの貴重さを弁えていたのだ。

生物は規則的な睡眠を挟まずして健康的な生活を続行できないよう作られている。体が休息を求めらるならあらゆる外敵を排除し、睡眠を履行出来なければならぬ。ならば、まどろみを切り裂く無粋は彼等の生活に存在する意味は無く、

——びびびびびびびびびびびびびびびび

「ああ、もう煩い」

ボタン部分に一撃加えてやると、目覚まし時計がぴつと悲鳴を上げた。睡眠に対する愚考察は強制中断され、ついでに意識も無理矢理に覚醒させられる。

「人間様には社会生活つてもんが有るのよ、もう」

睡眠の崇高さを信ずるのは甘美な墮落だろうが、既に午前6時30分。着替えや食事、身だしなみを整えるなどの時間を考慮すると、二度寝は出来ない。布団は敷いたままでも良いだろうと部屋の隅に引きずっていき、姿見の前に立つ。死人が身に着けていそうな襦袢を脱いで、鏡に背を向け、姿勢を戻し、頬を搔いて思考を巡らせていた時、左手の甲に目的の物を見つけた。

「……ありや、本当だったか……世の中、不思議な事もある物ね」

驚きならば、表に出ないながらに存在した。この科学全盛の時代、『そういう話』は小説や漫画の中に見るばかり。何処か別の世界のお話が、自分の身に降りてくる幸運を望むべくもないだろう。だから、目に見える形として現れた奇跡とやりに仰天させられるのも仕方がない。

反面、それを喜ぶだとか誇るだとか、そういう感情は薄かった様に思える。自分はそのういう存在をどこかで信じていたし、知っているといるという確信があった。記憶の中に経験として存在はしていないが、『彼等』の姿を明確に思い描ける。

当たり前の様に人が空を飛んでいた『幻想の幻想』——ああ、そういえば。

「次のテストつてその辺りだったっけ、忘れてた」

教科書の189ページからです、なんて担当教諭の声を、『彼女』は脳内で再生した。

朝食は質素に白米と焼き魚で済ませた、面倒だからと言い換えても外れではない。通路の長さの思えば朝食に30分以上を費やすのもやぶさかでは無いが、

「せんぱーい、起きてますかー？　せんぱーい」

玄関先で、低血圧とは無縁の元気そうな声が聞こえてくる。髪を結んだ鞆を持った、戸締り確認元栓締めオーケー、

「せんぱーい、起きないと上がりますよー。先輩つてばー」

靴に爪先を入れる、踵を滑り込ませる、玄関に手を――

「おはようございませす、せんぱ――あ」

気の早い後輩は、合鍵で扉を開けてしまっていた。

『彼女』の家はそもそも盗まれるような貴重品が無く、鍵を掛ける意味は薄い。それでも亡き両親の教えに従い、外出の際には必ず鍵を掛ける様にしている。

そうなる家主がいない時間帯（もしくは家主が眠っている時間帯）、誰もこの家に入れない。だから『彼女』は、此処を良く訪れる人達に、合鍵を作って渡しているのだ。

結果、少し遅い時間に帰宅すると、居間が寄り合い所の様になっている事もあ

……

「おはよう、リグル。もう少し遅く来なさいよ」

「駄目ですよ、朝練が始まっちゃいますから。放っておいたら先輩、目を覚ましそうになりますし。先輩だって所属はしてるんですから、顔を出すくらい……」

「嫌よ、面倒くさい。3つも4つも掛け持ちしてるのに、朝まで運動してられないわ」  
寒いし、と小さく付け加える。家の外には見事な銀世界が広がっていた。雪掻き機を此処まで運びこむ物好きは無く、舗装道路に届くまでは数十m、白い大地。一直線に続いた足跡は、この小柄な後輩のもの。

——リグル・ナイトバグ。『彼女』より学年が一つ下の後輩で、陸上部の期待の新人。人里から魔法の森方面へ伸びる古い街の、これまた古い館に住んでいる。

通学路の途中にあるからと、此処へ顔を出す様になってかれこれ1年になるだろうか。『彼女』の家を寄り合い所にしてきている元凶にして、その連中の中心人物でもある。

「……で？どうだったのよ、あの話」

「えーとですね、寅丸先生の件だったら、根も葉もない噂話みたいです。そりやそうですよね、あの人は誰かと手を繋いでても、その手首まで落つことしちやいそうですし。」



それよりも面白そうなのが犬走先輩の方でしてね、どうにも男性の影がちらほら……」

「ほう、あの剣術小町が。それは聞き逃せないわ、続けなさい」

この後輩が人の中心に居る理由は、偏にその情報収集能力にある。リグルは噂の気配に驚く程敏感で、そして噂の真偽の選択に長けているのだ。

学校中、もしかしたらこの近辺、町内中、噂と名が付いているもので、彼女の知らぬ事柄は無いに等しい。一説には、町内の至る所に間者を放ち、住民を監視しているのではないかすら言われる事も……。

「……そんな訳でして、たまーに部活を早く切り上げたり、眠そうな顔で遅刻してきたり。そういう日の前後に限って、妖怪の山の自宅より更に奥側で見かけられるらしいんですね。やたらと周囲を気にしながら歩いてたそうですし、これはもう誰か或いは何かと会う目的でも！」

「んー……まだちよつと弱いわ、それだけじゃまだ言い訳が色々出来そうなもの。何かこう、もつと分かりやすい、それだけで証拠になりそうな何かを……」

「御安心を。ちゃあんと破壊力十分な証拠を見つけてあります——あ、昇降口」

過去、烏天狗を新聞業界から駆逐したナイトバグ家の嫡子、それがリグル・ナイトバグだ。

彼女に気に入られれば街の噂を無条件に手に入れ放題となり、彼女を怒らせれば私生活に於いてプライベートという概念は消失する。

『闇に蠢く報道一族』などと揶揄されつつも、当の本人は無邪気そのものの愛らしい笑顔で道を行く——と、話を脳の半分で聞きつつ思考していると、『彼女』は何時の間にか、目的地に到着してしまっていた。

「んじや、話の続きは放課後……いや、おゆはんの時で頼むわ。今日は早く帰るから」  
「今日も、でしょ？ 偶には陸上部に顔を出しても……あ、そういえば」  
「ん？」

あまり高くない背を更に縮めるように、リグルは『彼女』の腰の高さまで頭を下げる。

「その……左手の包帯、どうしました？」  
「寝ぼけて柱にぶつけた。痛かった」

さも当然の事と言わんばかり、『彼女』は平然と虚言を弄する。包帯に関してあれこれ探られるのも面倒だ。事前に決めた嘘は、息と同様、自然に吐き出せた。

「はあ……気をつけてくださいよ」

靴箱は学年別に分かれている、リグルの教室は1階、『彼女』の教室は2階、行き先も異なる。特に別れの言葉も無く、自然と彼女達の向かう方向は変わり、

「それじゃあ、また夜に会いましょう、霊夢先輩」

「んー」

背中に聞こえる挨拶には、包帯が巻かれていない手を上げて——博麗霊夢は、簡単な挨拶を返した。

霊夢が通う、私立命蓮寺高等学校には、200人程の学生が在籍している。単純計算で、一つの学年に70人未満、2学級。決して大きな規模の学校ではない。然しながらこの近辺の土地事情、制度と施設の充実度はマンモス校と肩を並べられる程だ。

まず、私立校でありながら、学費が極めて安い。公立校と同程度か、奨学金制度や特待制度を用いればその数分の一。これは長く人里と共に在る寺院、命蓮寺の好意による物であり、平均より優秀な学生であるならば誰でも、この学び舎に籍を置く事を許されるのだ。

私立校としての収益だけを見れば赤字だろうが、坊主丸儲け、懐は痛むまい。おのれの神社にお賽銭が入らない事も、学費に免じて許してやらねばと、霊夢は寛容な気持ちを抱いている。

必修学科は、必要最低限のものしか行われぬ。進学を希望する者にはそれに必要なだけ、働きたいものには相応の時間と予備知識を与える。飲食業に就職したいなら衛生

管理を学ばされ、プログラム志望者にはHello worldからの実習を。学生の自主性を尊重する為、放任ではなく敢えて過干渉を貫く。

学生生活を豊かにする為の施設は、ここ数年で更に進化を遂げている。1階の空き教室一つを使った自動販売機コーナーと、中ホールを占拠する購買。食堂は休憩室と隣接して作られ、近隣の主婦などが時々訪れる程の広さとなる。

視聴覚室の再生装置は管理が緩く、放課後には映画の観賞会を行う連中もおり、プールは10コース50m、格技場では柔道剣道空手道と3種目が同時に練習を行える広さ。

唯一存在しないのが図書室だが、これは紅魔大図書館との業務提携により、週1で移動図書館が派遣される。

蔵書検索機能の正確性と、揃いの制服に身を包んだ有能な司書集団、約30名。彼女達の手に掛かれればこの幻想郷で、見つからぬ本などあんまりない。

以上の様に、この学校は極めて快適な環境にあり、霊夢は非常に学生生活を気に入っている。これから命を狙われる生活が始まるというのに、のこのこ外出しているのも、それだけが理由なのだ。

「おーい、博麗の。朝から机と仲良しだな」

机にうつ伏せになっていると、丁度今朝、噂話を入手したばかりの彼女がやってきた。

真つ白い髪が、窓からの太陽光を照り返し、二倍眩しい。

「あら、椛じゃないの。今日は寝坊しなかったのね」

「う……先手を打たれた、おのれ紅白」

霊夢の先制のジャブは、思ったより深く決まっただけ。平気そうな顔をしているが、今の一言は結構言われたくなかったと見える。耳がぺたんこへたり、スカートから覗く尻尾も力無く垂れてしまっているからだ。

ポーカーフェイスに騙される者も多いが、慣れ親しんだ者からすれば、犬走椛程に心の内が分かりやすい少女もあるまい。

「一講目が自習だとさ」

「あれ、確か英語だったわよね。どうしたのあのハングリータータイガー」

倒れた耳を起こしながら、椛は職員室で聞いてきたのだろう話題を霊夢に届ける。自習を喜ぶのは小学生まで。教員は居ないより居た方が良くと考えている霊夢は、担任教師の平和面を思い浮かべた。

「車の鍵を落としたので自転車漕いできます、だと」

「……ああ、そりゃ遅刻するわ」

少し詳しく聞いてみると、職員室に立ちよった際に、雲居教頭に愚痴の様に教えられた事であるらしい。

楯は剣道部部长ではあるが、公式試合に参加した事も無く段位も持たない変わり者だ。曰く、『剣は実戦と共にあり。敵を一人斬つても、次の敵に斬られたら負けだ』という事で、一対一で剣を振るう剣道というものに完全な信頼を寄せていないのだとか。

剣道部に居るのは、『形式に閉じ込められる事を我慢するなら』練習相手に事欠かないから。

こうして並べてみると、まっこと身勝手な奴ではあるのだが、

「そういう訳で、先生方にプリントを配るよう言われてな。ほら20枚」

「うわーい、自習時間をはみ出して家に持ち帰らないと終わらないわー」

目上の人間に何か言われると、ほぼ確実に従う従順さが彼女にはある。彼女が部長をしているのは、面倒事を全て引き受けて平然としている生真面目さが理由なのだ。寒い廊下を歩きたがらない先生方になど、特に重宝されている。

結果、目下の者には、嫌われるとまではいかないが疎まれる事ならばある。廊下も垂直に曲がるんだらうと揶揄される程、全てに於いて秩序を重んじる彼女だが――

「……んで、最近はどこをほつつき歩いてるのよ、楯。あつちは住宅地ばかりじゃない」「それは聞いてくれるな、友人の自覚が有るなら」

――よもや、こんな話題でかまかけをする日が来ようとは、霊夢は思つてもいなかつた。楯は珍しく、耳や尾ではなく眉根を下げて、この話題から離れようとする。

「友人に隠し事をするなんて酷いと思うわ。えーと、妖怪の山の中腹だったかしら。あの近辺は家の数に比べて若いのが少ないし、家屋以外の施設は更に少ないわ。もしも其処に限定して何かを調べようとしたら、何日で答えが出るのかしら」

「……回りくどい話は止めましょう、要求は？」

「あーあ、何処かの妖精さんが、寝てる間に宿題を片付けてくれないかなー」

普通の授業ならばいざ知らず、自習であるなら、真面目にやるも適当にやるも自分次第。だが、夜にまで引き継ぐ量となると、流石の霊夢も、健全な学生の真似を諦めざるを得なかった。

「……時間的には半分が限度だ。それで妥協してくれないなら仕方がない」

「うわあ、流石は椛。持つべきものは友人よね」

やはり彼女は、犬走椛は扱いやすい存在なのである。

秩序と法則性を愛するという事は、過程から結果を容易に推測出来るという事だ。数個先の答えまで見えているなら、彼女を誘導するのに障害となるものは無い。その点では、秩序的だが何処か先を読みづらい霊夢とは、似ている様で似ていない仲なのかも知れない。

兎にも角にも霊夢は、今夜は徹夜を決め込む予定である。宿題を持ちかえる等は端から考えていない。自習時間で半分为、そして椛に半分为片付けさせ、学業も私用も両立

する事とした。

「ところで、博麗の。包帯はどうしたんだ」

「これ？寝ぼけて柱にぶつけた、痛かった」

また、この問いである。答えもほほ同じだが、然し椀の反応は、目に頼るリグルとは少々異なる。

「ほー。血は出てない様だが、消毒薬も湿布も無しか？」

「いいのよ、面倒なもの」

自分の席へと戻る直前、霊夢の手に鼻を近づけてひくひくさせていた彼女。見た目の印象に違わずの嗅覚である。

これからは香水をつけて歩こうかと、単純な案を一つ練る。

「出費が増えるわねえ……」

決して潤沢とは言えない生活費を、何処から削るべきだろうか。これは、プリント以上上の難題であった。

彼女の学校生活は、おおむねこんなものである。昨日と殆ど変わらない日を過ごし、きつと明日もそう変わらない日を送る。変化の薄いと言えば悪く聞こえるが、平和で心



地良い日々だ。

自分も周囲も学問を身に付け、少しずつ人格を完成させていく。存在する個の質を高め続けながら同系のストーリーが連続する日常は、彼女を飽きさせる事がない。

然し博麗霊夢は、この日常に非日常を付け加える。日が沈んでから昇るまで、1日の半分。冬である今は6割以上。睡眠の時間を差し引いた残りを、これから数週間、戦いへと費やす。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には数えて二十七の規律。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する——」

月は消えた、雪は止んだ、生物の気配も遠ざかった。冷気は遠方の声を境内に運び、然して境内から抜けだす音は無い。詠唱の声は反響を伴い、一つの声質による合唱を始め

——敷設式結界。霊夢が、この家で習い覚えた最初の一。通常の生物ならば見る事は叶わず、また踏み込むも適わない。そればかりか仮に近づいたとしても、踏み込もうと考える事すら無いのだ。

結界は魔術の一つであり、世界の内に防壁を作りだす類の術だ。物理的、魔術的な干

渉を拒絶し、内部の存在を守る為に使われる事が多い。

古来より公共の場では、少なからず結界が存在する。家を囲む塀も、一つの結界と呼んで良いかも知れない。明確に閉ざされていなくとも、地面に線を引いて「立ち入り禁止」と書けば結界だ。そこに優秀な術者の手が加われば、只のライン一つが銃弾をすら止める壁に変わる。

博麗の結界は、「外」と「内」を離絶する。「外」から「内」を守るのではない。「内」を「外」から切り離すのだ。

博麗神社は変わらず其処にあり、然して今この瞬間は幻想郷に存在しない。結界の外誰かは博麗神社を知覚出来ないし、それが存在する事すら忘れるだろう。

だが、術を解いた瞬間には、その誰かは「神社が無かつた事」にも気付かない。世界に存在しないものにどのような干渉が行われたか、そんな事は世界の内に居ては分からないのだから。

星の灯りが薄れていく、夜の黒が霞んでいく。全ての色を塗りつぶして、境内を闇が取り囲む。博麗神社が外界から遮断された事を知らせる光の消失、指を鳴らせば境内の松明に火が灯る。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

数日を掛けてたどたどしく描いた魔法陣。古の星の欠片を、死なせないままに集めた獣の血に溶かした溶液。刷毛に染み込ませて、雪を退かした石畳の上に塗り付けたものだ。

こんなやり方は、数年前に亡くなった母には習わなかった。

神棚を引つ繰り返してうっかり暴いてしまった、その時に見つけた一冊の書物、日記にも見える雑多な記述の中に混ざって、この儀式の存在は記されていた。

閉ざされた境内に寒風が荒ぶ。常より露出の多い巫女服は、叩きつけられる風から肌を守らない。

髪留めと揃えられた赤の、ノースリーブのシャツとロングスカート。数代を経てデザインの変わらないこの衣服を、霊夢は数日前に初めて仕立てた。事前の予想より安上がりだったのは、「当代の巫女さん」という肩書きの為に、呉服屋の主人が快く値引きをしてくれた為である。

白布で作られた袖を通し、赤の紐で二の腕を結んで止める。大別して五つのパーツに分けられるこの服だが、装着は割と楽な部類。古来より妖怪との戦闘に明け暮れた『博麗の巫女』が身に付けるのだから、実用本位も頷ける。

「……さあ、全て整ったわよ。万事がオーケー、おいでなさい……」

必要とされるのは、聖杯にアクセスするだけの魔力でいい。自分自身の魔力量を鑑み

れば、結界と灯りを維持しながらでも、しくじる要素はどこにも無い。

博麗神社は幻想郷でも有数の霊地、世界からのバックアップは過剰に受けられる。駄目で元々と思つて始めた事だが、それでも準備に数日を費やした。此処で失敗してお終いなどという、笑い話にもならない結末など許されない。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

フルスロットル、体内の魔力を、陣の許容量を超えて注ぎ込む。悲鳴を上げる陣の触媒を、根性が足りないとは叱咤して更に鞭打つ。流れ、溢れ、押し戻され、渦を巻き、決壊する。行き場を失つた魔力の奔流は、悉く空間を越えて聖杯に流れ込み——

——霊夢の構築した世界は、内側から崩壊した。

「……………うそ」

境内を覆う敷設式結界が、硝子窓を叩き割つた様に崩れていく。切り離していた雑音、獣と鳥の声に戻ってきた。だが、彼女が目を見張つたのは、自身の術が容易く破壊されたという小さな事ではない。あの文献が本当なら呼びだされる代物は、指の動き一つで結界を無に帰しても驚くに値しない。

魔方陣の周囲の石畳は、数mに渡ってクレーターの中に沈んでいた。家か神社の中で召喚儀式を行っていたら、床がああなっていたかと思うと恐ろしい。だが、彼女の口が上手く閉じないのは、召喚の余波が物理的衝撃になる規格外の魔力の為でも無い。

『あれ』は化け物以上の化け物だ。百の武装を以てしても、人間には勝利する手段が見えない。

「——霊夢？」

それは、己が破壊を確かめるでもなく周囲を見渡し、召喚者の名を呼んだ。土の斜面を軽い跳躍で登り、彼女は霊夢の前に立つ。

霊夢より少し背が高いだろうか。シルエットの起伏も、霊夢に僅かに悔しさを覚えさせる程度には豊かだ。ただ一言だけで、その声と発音は、教養人に育てられたのだろう響き運び、弦楽の音色を思わせる。

月に魅せられた瞳は赤く染まり、逆に月と星を魅せて惑わせるかのよう。彼女は、夜を「在るべき所」として其処にいて——

「聞くわよ、貴女が私のマスター？」

「ええ、そう——いや待って、あんた誰よ」

その姿は、おおよそ霊夢の知識の中に、該当する者の無い姿であった。

指で梳いているのは、きつちり腰で揃えた黒髪。肘、膝から先の四肢には籠手、具足

の黒。胴体を薄手の金属板が、白銀の光と共に守護する。北欧神話を思わせる、羽を模した飾りの冑。劍の収まっていない、形ばかりの鞘。

「名前は答えられないわ、この格好も許していただけじゃない？ お気に入りの服だと、少し目立ち過ぎるんだもの……うふふ、姿なんてどうでもいいわよね。契約は完了、これより私の劍は貴女の為に。聖杯は必ず、私と貴女の物になるわ——勝つわよ、靈夢」  
誰ともつかぬ英霊は、敵の一つも見ることなく、自分の勝利を確信していた。

「変装う？ 魔力で作るとかじゃなく？」

「そうよ、変装。ウィッグは私の時代から有りますの。このお洋服もね」

どうやら儀式の記述は全て本物で、靈夢は完全に成功したらしかった。居間のちゃぶ台に座布団を用意して、ゆのみで茶を啜っているのが「サーヴァント」。『語り継がれる幻想』、『物語になったモノ』、彼女を形容する為の言葉は幾らでも見つけられるだろう。

何せ、あの儀式で呼びだされるのは、多くの言葉で語られた“存在なのである。既に過去になり、だが忘れ去られる事はない、物語の主人公達。

妖怪退治の逸話を持つ英雄や、人間を狩り続けた怪物、全てに君臨した王や神。彼女

達を使い魔として使役する為の手順が、あの儀式という訳だ。

彼女達は、生前の姿でこの世界に召喚される——そう、生前。死に、そして語り継がれる様になる事。その畏敬が集まる事こそ、英霊となる条件。その信仰の総和は、八百万の神の何れにも勝る巨大で重厚なものとなるう。

当然、その様な事、本来なら出来る筈もない。召喚者より遥かに格上の存在だ、呼び出す事すら敵うまい。そればかりか、召喚に用いる魔力だけで、並の術師の数百数千は枯れて果てるに違いない。

仮に叶ったとして、命令に従わせる方法が無い。口先で騙すという手段は有るが、万が一を考えればそれは愚行だ。そして英雄に詐術を用いた者の末路など、悲惨な物にしかかなり得ない。

だから、彼女達を呼び寄せる事が適うのは、幻想郷に彼岸花が咲き乱れる年だけ。六十年に一度訪れるその時に、聖杯もまた力を蓄え、奇跡を顕現する。召喚者は聖杯に呼びかけるだけで良い。経路を作り彼女達を呼ぶのは聖杯の仕事だ。

また聖杯は、彼女達を従える力と、彼女達を知る力を、選別したものに与える。従える力は、霊夢の場合は左手に刻まれた『令呪』。そして知る力は——

「……納得したくないけど、どうみても本物なのよね……」

「そうでしょう？ “それ”が見えるなら、私の力も分かるって事よね」

この能力自体には、呼び名は定まっていな。だが、それが当然であるかの様に、霊夢には己がサーヴァントの力が見えた。

魔力の量だとか質だとか、そんな水かさとして判断する様なぼんやりとしたものではない。明確な基準を持った数値で彼女の馬鹿げた戦力が理解出来る。ただ目視するだけで、サーヴァントの力量が、霊夢に伝わる様になっていたのだ。

先達の巫女の残した書物には、サーヴァント達の能力を計る基準が記されていた。曰く、1を最小単位として10でEランク評価。+の数だけ、特定状況下で能力が倍加する。平均はCランク程と言われ、Bもあれば十分に武器として通用するだけの力。

行儀よく背筋を伸ばし、お茶を啜る彼女はと言えば……筋力、A。耐久、B。敏捷、A。魔力、B。幸運、D——宝具、A++。瞬間的にはAの3倍を誇る化け物出力を得るという事だ。

「……何これ、大当たりじゃないの」

「そうよ、特賞前後賞大当たり。これで負けなんて有り得ないくらいだね。勝ちたいなら強い駒を得る事、その条件を最初にクリア出来たのよ、霊夢」

それは当然嬉しい事だし、望むべくもない成果だ。例え彼女がどの時代の英霊であろうと、これほどの力の持ち主などそうは見つかるまい。召喚の為の触媒を使わずにこの結果、博麗の巫女の幸運は伊達では無い。



だが、良い事が続けば、人は疑心暗鬼に囚われるものだ。霊夢は、彼女が自分の名を知っていた事が、不思議でならなかった。主と従の確認より先、名を問われた事が、大きな疑問として頭を占めていた。

『博麗の巫女か』と問われたのなら、今の姿だ、領けよう。何故彼女は、霊夢と。シテムである巫女の役職を呼ばず、個人の名を知っていて、問うたのか？

「……念の為に聞いわ。あんたの時代に有った、有名な出来事を一つ教えて」

「えー……？ 何の為に変装してると思ってるのよ、正体がばれない為よ？ 私達は物

語の具現、ちよつとした事が誇張されたりするんだから、正体は知られたくないの。ほら、お酒が苦手だつて記述が残つてたら、アルコールをトン単位で持つてこられそうじゃない？ 変装までして来たのもそんな理由、慌てて選んだのよこのウィッグとお洋服」

両腕の籠手をカチカチと、まるで火打石でも使うかの様に打ち合わせるサーヴァント。悪戯気が4割、子供の様な単純な不満が6割の、本心を読みやすい表情である。

「鎧冑を洋服と呼ぶ事に私は異議を唱える……つて、そうじゃなくて。いいじゃないの、私はあんたと戦うつもりはない。あんたを使役して、誰かと戦うのよ。貴女の事を知つていても、貴女にリスクは無いわ。むしろ相互理解は円滑な戦闘の手助けよ」

自分のサーヴァントの正体を知らずして、これからの戦略を練るのは難しいだろう。

どうせやるなら徹底して勝ちを狙いたい。霊夢がそう思うのも無理は無く、また主張に間違つた部分も無い。サーヴァントは湯のみを置き、眉の間に皺を寄せた。

「むう、反論の余地が無い。でもね、正体は教えたくないわ、絶対よ。けど貴女は引きさがりそうにないからね……ええ、そうだったもの。教えてあげる。私の時代の出来事なら——『永夜異変』。明けぬ夜の物語、なんてどうかしら?」

「永夜……それって、『幻想の幻想』時代の事?」

幻想郷が今より遥かに小さく、そして遥かに不可思議な事で満ちていた時代。もう何百年も前の事だろうか。映像記録技術の無い時代の事ゆえ、当時の様子は文献でしか知ることとは出来ない——その中で、最も危険であつたとされる異変の一つが、『永夜異変』だ。

「今はそう呼ばれてるみたいね。そうよ、昔も昔の大昔。空を見上げれば烏天狗が飛び回り、宴席では鬼が大杯を傾ける時代よ。どうしてこんなに地味になったのかしら、幻想郷」

「え、烏天狗つて空を飛んでたの?」

「……何の為の翼よ」

「飾りか上着代わりだとばかり」

彼女は、ウィッグだという黒髪を指先に巻きつけながら、小さく溜息を零した。

「……はあ。何処から説明したら良いのかしら。私だつて当たり前の様に飛べるし、そもそも私の時代の弾幕ごっこは、皆が生身で飛んでたわ。それをしなかつたのは白黒の魔女くらいで、飛べる事を不思議にも思わなかつたわよ。……いや、弾幕ごっこも廃れてるんだっけ。何をして遊ぶのよ今の子供は」

嘆かれるのも無理は無い。彼女の言葉が本当ならば、今はどれ程に夢の無い時代だろうか。人は空を飛べない、だから地を行く術を身に付ける。自動四輪車の普及率は年々伸びている。鬼などは文献と伝承の中にしか見つからないし、人が生まれつき持つ力には限りがある。

霊夢が習い覚えた力は、博麗の巫女が代々引き継ぐ代物。幻想と共に有り続けた力だ。

翻つて生まれ持った力はいえ、『周囲から一歩だけ浮かぶ程度の能力』。それがどの様な集団の中であろうとも、必ず平均以上の力を取得できる。という彼女自身の力は、結局努力を積み重ねばトップに立てないという点で、有つても無くてもあまり変わらないのだった。

そう、一個人の力量を比べるなら、生まれついた瞬間に現代は、過去の幻想に遠く及ばないと定められている。かろうじて縋りつく為には、過去の幻想をそのままに引き継いでいなければならない。

「なんだか凄いのね……まあ良いわ、秘密にしたなら無理に聞かない。けどさ、だつたらあんたを何て呼んだらいいのよ。ずっと『あんた』だと、時々困りそうなのよ」

「呼び名だつたら聖杯に貰つてるわ。セイバー、と呼んで頂戴。最優のサーヴァントの名よ、誇つていいわ……と、霊夢。差し支えが無ければ、私からも質問させてもらいたいんだけど」

「ん？構わないわよ、こつちはいまんとこ質問なくなつたし……あとおせんべ残しとして」

セイバー、それが彼女の寄り代となるクラスの名。主要三騎士の一角にして、最優のサーヴァントと称される。あの書物は三回目の聖杯戦争の際に書かれたものらしいが、過去の二回で最後まで勝ち残つたのは、何れもセイバーだつたと記されている。

力及ばずして負ける危険は失われた、後は戦略で負けなければ確実に勝利する。それが確定した時点で霊夢は、彼女にあれこれ問い詰めるのを止めようと思つていた。然し、質問されるといふのなら別だ。知られて困る事も無い、何より——

「霊夢。貴女は、聖杯を何の為に求めるの？」

——この質問は、予測出来ていた。

「望みは無いわ、誰かに渡せないだけ。私の目の届かない誰かに、聖杯を与えられない。それが万能の願望機だというなら当然よ。私の知らない所で、誰かが私の世界を壊しか

ねないもの。そうね、無理に望むなら……参拝客が増える様に、つて願つてみましょうか。私の日常を壊す全ては、無為に使われて消えるべきなの」

一片の偽りなく、本心を口にする。

博麗霊夢に、聖杯に委ねるべき願いなどない。日常に満ち足り己に満足する彼女に、叶わぬ望みはない。

それは、生物の構造や物理法則的に、決して実現出来ない事など幾らでもある。有るのだが、それをどうしても実現する必要が、彼女には感じられないのだ。

魚は地上を歩けないが、大海を悠々と泳ぐではないか。知性と文化有る人間が、そう在れぬ理由は無い。

人は人の俤、人の如く有るべし。博麗の巫女は人の俤に、人に有らざる全てと接するのだ。

「……そう、やっぱり霊夢ね、それでいいわ。私の願いは——これだけは約束する。私の願いは私にしか影響を及ぼさない、小さな小さな願いだって、ね」

「ふうん、分かったわ……じゃあ、そろそろ歯を磨いて寝ましようか。明日も早いわ」

仮に彼女の願いが全ての終焉だったとしても、霊夢は彼女のマスターになった。令呪を残しておく限り、マスターはサーヴァントに対する絶対の優位性を確保出来る。だから、彼女の願いを知る必要など無く、その対策を練る必要も無かったのだが——

「ねえ、セイバー。その小さな願いって、結局は何なの？」

些細な知的好奇心を、無理に抑える事も無いと、結局はそれを尋ねてしまう。

「本当に、小さな願いよ」

座布団を押し入れに片付けた彼女は、遠い何処かに視線を飛ばした。

それは、もう過ぎ去った何時か、無くなってしまった何処かを懐かしむ様で。死に際

した人間が走馬灯を見る、還る事への羨望を抱いた目で。

「……私が愛したあの時間を、もう一度」

何故だろう。霊夢には彼女が、酷く羨ましく、また疎ましく思えた。

## 一日目、忘れられた霊廟

「閉じよ！ 閉じよ！ 閉じよ！ 閉じよ！ 閉じよ！ 閉じよ！ 繰り返すつどに五度、ただ満たされる刻を破却する！」

物部布都は、運命という不定形の存在に、激しい怒りを覚えていた。

数百の年月を待ち続けた。夢が夢を失い、力の根源は枯れて果て、死の果てに辿り着いたのは似非の不死。

強者と新たに生まれながら、より強い者の下に甘んずる他無かつた主。あの飛鳥の昔の様に、病床に伏す主。千四百の眠りの果てに数十年の自由を経て、また数百年の不由に甘んじた主。

斯様な理不尽を許してなるものか、その天の差配を許してなるものか。怒りが刃となるのなら、剣に隊列を組ませて神の座も滅ぼすが我が意気、と。

彼女は、己が主への忠義と崇拜が故に、幻想郷という世界をさえ、嚇怒で焦がさんばかりであつた

「……いけるか、布都」

「大事なし、我に任せよ。お主は魔力の供給を怠るな」

「おう。しくじるなよ、成功したら褒めてやる」

贅の牛の血と水銀で描かれた魔方陣、満面と水の如く魔力を蓄える。その上に浮かぶ小舟は、小さな触媒の靈的な重さで、喫水線を遥かに越えて沈む。

「——命を下す！ 汝の身は我等が下に、我等が命運は汝の劍に！ 聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ！」

死への道を閉ざし、欲の行き先を閉ざした身。魔力という概念など、知つて会得するは容易い事であつた。沸点が無限に高い液体を熱して、体積を二次関数的に膨張させていくイメージを作る。

液体は世界だ、自身は熱だ。熱の働きを以て世界は膨れ上がり、やがて器から零れ落ちる。その零れ落ちた力を掬い取り、望む所に注ぐのが、彼女が辿り着いた魔力の運用——所謂、魔術の形であつた。

小舟に水を注ぐ。物理的な接触では無い。溢れだした魔力で、魔力の波に船を飲み込ませた。触媒が魔方陣に触れ、ぎいぎいと軋み唸りだす。

幾度も重ねた予行演習と違わぬ過程、全ては事前の調べの通り。もう間もなく、二千年の悲願は形として成就する——！

「誓いを此処に！ 我は常世総ての善と成る者、我は——」

「——待て」



右手の甲、令呪に激痛が走る。抱えて蹲ろうとして、腕が引き戻せない事に気付いた。強い力で掴まれている、ともすればその指が肉を裂いて骨へ達せんがばかりに。

「つが、何をやる屠自古——!?!」

この儀式は決して失敗を許されぬもの。あらゆる外法外道を避けず万事整えたは、我等が主への忠義が故ではないか? さては仇敵への仕打ちかと、咄嗟に浮かんだ邪推は、然し目の前の光景に否定される。

「——布都、その、手」

「手……? ……あ、う、うああああああつ?!」

違う。屠自古の手ではない。かの亡霊は、あの場から動いていない。

この手はあろう事か、布都が作りだした魔方陣の内より伸びている。『未だ召喚の終わらぬまま』『己が主への明確な反抗意思を伴い』、このサーヴァントは彼女の腕を掴み絞めあげているのだ——!

「霊廟の術師、お前達を知っている。お前達の主も知っている。お前達は過去に未練を持たぬものだろう、酷く酷く都合が良い。だが、駄目だ。その手順では駄目だ!」

その声は、他者に命ずるが自分の在り方であると、完全に弁えていた。生まれ付いての強者だけが持つ、無条件の優越を誇る声であった。

「駄目とは、何が、だ。お前は誰で、何故そこに」

「問いは後にしろ！ 令呪はまだ使うなよ、勝ち目が減る。私は聖杯を得る為に戦うのだ、負けへ繋がる一切を赦しはしない！ 我が命に服従せよ、我が言葉に頭を垂れよ、お前達の主の為に！」

高圧的だ、そう言う他にあるまい。

サーヴァントとマスター、二者の関係性はこの名称にある。例えサーヴァントがどれだけ強かろうと、マスターには三度の絶対命令権が存在する。仮にマスターがサーヴァントの自害を願えば、それは容易く実現してしまうのだ。

その様な大事に至らずとも、サーヴァントはその存在自体が巨大な一つの魔法のようなものだ。現界の為に魔力を必要とし、戦闘行為の為に魔力を暴食する。

マスターとの不和は不利益しか招かず、ならば従順を装うくらいの事はするだろうと、布都は予想をしていたのだが。

「甘かった、か」

「そうだ、お前達は甘すぎる。所詮は『ごっこ』しか知らぬのだろうか？ 私は殺すぞ、躊躇わず殺す、誰だろうとだ！ 敵でも味方でも、お前すらも殺す！ 始まる前に敗者となるサダメを厭うなら、我が命に従え！」

このサーヴァントは、力の数十分の一も出していないだろう。人がトンボの羽を掴む程度の感覚に違いない。それでも布都は痛みに涙を流し、泣き喚くのを意地で堪えて、

滲む目で奴を睨みつける程だ。

屠自古は動けない。寧ろ動かないで居てくれた事ありがたい。今の自分達ではとても敵わぬ相手なのだから。

いや、幻想が幻想であつたあの時代でさえ、一介の尸解仙と亡霊では、きつと太刀打ちできぬ存在であろう。彼女には、彼我の力量差が、それこそ焼印の様に刻まれた。

「……なあに、一つだけでいいんだ。それだけ聞いてくれたら、私はお前に完全服従してやるよ。な、それでいいだろ？等価交換って奴だよ、うん。ギブアンドテイク」

「信用しろと、ぐ、うあ……そう、言うか？」

「勿論さ、約束は守るよ。私は律儀なんだ、お前達と同じにしないで欲しいね」

「なら手を離せ！腕がちぎれるわ馬鹿者が！」

おっと、とおどけた様子で、サーヴァントは布都の腕を解放した。血の流れが戻り、手に温かみが戻る。死人の冷たさは、懐かしむものでは断じて無い。サーヴァントの手の届かぬ範囲まで後退する——この部屋の何処にいても、一足で詰められると悟る。

「……望みを言え、この化け物め」

「化け物かあ、人は化け物を倒す為に努力するもんだがね。騙し打ちは勘弁。……まあ良いや、お前は私と契約するんだろう。触媒がそいつなんだ、そういう事だ。だけど私は私だ、私のままでお前には従えない。そして私は生憎と、力が足りちやいないんだよ」

「力が、足りない?」

このサーヴァントの言葉として、それはあまりに似つかわしくない響きだった。暴虐を具現化した様な力、自負と高圧を煮溶かして固めた様な言葉。自分を絶対者と信じて、全てを弱者と見下す、*“それ”*はそういう存在に思えたのだから。

「ならば何とする、いにしえの鬼よ」

「知れた事さ、補うのよ。つまりだな——」

つらつら並べられる言葉を聞いている内に、布都の頭も冷えてくる。

このサーヴァントはどうやら、意図的な威圧を仮面として被れる者らしい。相手を怯え疎ませたら仮面を外して、割と友好的な砕けた本性を見せる。つまりは、暴力に物を言わせて社会に生きる種類の者なのだ。

言い方はおかしいが、小狡い奴。策略という程の事は出来ないだろうが、生き方をほんの少し楽にするコツを心得ているのだ

「……正気か、鬼よ」

「正気だからやんなつちやうのよ、もう」

掌を上に向け、首を傾げる軽薄な動作。友好的な一面を押し出していると見える。

「良いからやりなさい。じゃないとさつきみたいに掴んで、今度は令呪を引きちぎるわよ」

「良からう、その言を承諾する。然し我等は、その為の文言を……」

「そんなのは私がどーにかするわよ！ ほら、私に続いて詠唱しなさい！ あ、そつちで魔力送つてたタンク係、お前も準備するんだよ」

僅かな間も耐えられぬのか、両手を振りかざしてウガーとばかりに吼えるサーヴァント。慌てて魔力の供給を再開した屠自古を視界の端に於いて、布都は幾許かの安堵を感じていた。

「誓いを此処に！ 我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者！」

悪鬼の笑みを浮かべ、サーヴァントは高らかに、己を召喚する為の文言を謳い上げる

「されど我はこの眼を混沌に曇らせ侍らん！」

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし！」

「我、狂乱の檻を望む者！ 汝はその鎖を手繰る者！」

「汝、狂乱の檻に囚われし者！ 我はその鎖を手繰る者！」

感情に生きながら、理性を道具として用いる獣。理性を鎖と断じて、自らを狂気に投げだした真正の魔。

この怪物は主の命ずるが俛、全ての敵対者を、敵対せぬ者をすら、果ては己が狂気すらも蹂躪して支配下に置くだろう。

理知的な笑みが狂気に飲まれて消えるその刹那、英霊は親指を立て、召喚者への称賛

の意を示した。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」  
膨大と言うも不足な魔力の奔流が、暗い霊廟を遍く照らす。

——この戦い、我等の勝利だ。物部布都は、確と信じ、断言した。

## 二日目、自宅、学校

人は人の俛、人の如く有るべし。日常は日常の俛、常の如く有るべし。物事にはそう有るべき形が存在し、それから外れない事が最善なのだ。

茶碗は台所の何処に置いて、靴のローテーションはどういう組み合わせにするか。そんな些細な習慣すら、変わらずに有る事は素晴らしい。

「れーいむー、ご飯はー」

「私用の茶わんしか無いのよ、お皿に盛るから待つてなさい」

「お箸がないと嫌ー。どうしてこの家、箸が一膳しか無いのよー」

だから、朝っぱらからずでんと居間で寝っ転がっているこいつは、霊夢には非日常として無視してしまいたい存在だ。しまいたいのだが残念なことに、このサーヴァントは彼女と運命を共にする相棒、セイバーなのだつた。

昨日身につけていた鎧冑はどこかへやってしまっていて、着るのは簡素なワンピースドレス。薄緑の布地に白の飾りを散らしたその服は、冬の外出には向いていない様に見える。

「魔力の供給は十分でしょ？ 食事なんてあんた達には必要無いでしょうに」

「あら、腹が減っては戦は出来ぬと言いますわ。美食は心の余裕なのよ」

「心の贅肉じゃないのかしら、あんたの場合……大体ね、うちでは美食なんて作らないわ。朝はご飯一杯とおかずが一品、三日に一度は味噌汁やお野菜。それがルールなの」  
「儉約の意味も有るが、元々朝食の時間には、其処まで空腹を覚えないというのも理由の一つだ——補足するが、霊夢は極めて健康体である。」

「……だから太れないのね、貴女。栄養はもつと沢山摂取なさい」

細身であるという点は否定できず、霊夢は苦々しげな顔をした。

「煩いわよ、育てばあんたくらいにはなるわ」

箸でご飯をかつこむ霊夢、スプーンとフォークで焼き魚を解体するセイバー。和食を洋食器で食べる暴挙を、彼女は苦も無くやってのける。

焼き魚の背骨を丁寧に、原型のままに抜きとった。解した身は散らかす事なく、これまた丁寧に掬い上げ、租借音を聞こえさせずに飲み込む。

「どうやら霊夢が習い覚える事の無かった技術を、彼女は高ランクで会得しているらしい。」

「御馳走様、おかず少ないからってお醤油掛け過ぎは良くないわ。美味しいのに」

「あーはいはいそうですか。私は貧乏舌なのよ」

食べ物の好みも、上流のお上品な味付けに染まっている様に感じられ、霊夢はまた妬



まじさに歯を軋ませる。

平民は、調味料で食材の味を誤魔化して楽しんでいくというのに、セイバーを始めとした上流階級は、調味料を本来の用途、味を引き出す為に使うらしい。

羨ましい妬ましい、伝説の橋姫でも神降ろししてしまったかの様な気分、畳の上を転げ回りたいくなる程であった。

さて、朝食を終えた段階で霊夢は、自分が何かを忘れていく事に気付いた。

昨日と今日で、生活の相違点は二つ。朝食を作った量と、朝食を取る家人の数が、何れも倍に増えたという事だ。

これだけ日常に変化が齎されているのなら、隠蔽の手段を考えるべきであり、それを実行しなかったのなら、何らかのペナルティが課されても仕方が無い。

善行にも悪行にも賢行にも愚行にも、全て等しく報いは訪れるのである。

つまり霊夢は、自分なりの直感で、自分の行為に対するペナルティが訪れる事を。そして、勘が鋭い奴はもう一人いる事を思い出したのである。

「せん、ばい……誰ですか、その人？」

「……あちゃー」

「あら、夜の蟲。昼間にも出るのね」

ガラリと戸が開け放たれて、振り向けば其処には、触角に雪が被つたままの後輩の姿が有った。博麗家の合鍵を持つ一人、時偶に箸持参で朝食に参加したり、夕食に参加したりする者。

普通の人間と言えば多大な語弊が有るが、かと言って霊夢の様に、自分から闘争に飛び込む様な存在でも無い。だからこそ彼女には何も気付かせぬままにするべきだったと、霊夢は内心で強く舌打ちした。

「えーと、リグル。これには深くもない話があつて」

「誰、ですか、その人。うちの学校の生徒じゃ、ありませんよ、ね？」

雪道を全力疾走してきたのだろう。陸上部の健脚も肺も、酸素を求めて大騒ぎしている。膝に手を当てて肩を上下させる姿は、競技終了後でさえ見た記憶がない。

下手な嘘は彼女に通じない。彼女の勘の良さは、神掛かり的な物があるのだ。巫女である霊夢を差し置いて直接神霊に働きかけられるのではないかと、そう疑いたくなる程に。

「…………ふーっ…………一応、聞いてあげます。その人は誰で、何で此処にいるんですか!？」

「いや、どう答えたもんなのかしらね」

本当に、どう答えたなら良いものなのだろう。誰なのかと言われても、霊夢自身が良く

分らない。なにせ、真名を知らされていないのだから。

何で此処にいるか、という問いには答えられるが、これを正直に答えると、リグルを聖杯戦争に巻き込みかねない。かと言って嘘をつくには、余程考慮して矛盾の一切を消し去らないと、見抜かれる恐れがある。

——ところで、『恐れ』とはそもそも、何を恐れているのだろうか。霊夢は自らを省みる。

此処は自分の家であり、両親亡き今の主人は霊夢。主人が客の誰を言えに招こうと、それが他の客にどう悪影響を及ぼすというのか。別に理由無く、ただ呼びたかったから呼んだ、では駄目なのか。

そう考えると、そもそもなぜリグルが腹を立てているのか、そこから既に分からなくなってくる。自分は何か、彼女に詫びなければならぬ様な事をしてしまったのだろうか。

「これまで先輩、誰も家に泊めたりしませんでしたよね？　どんな遅い時間でも、家に帰れって言いましたよね？」

「……？　ああ成程、誰かを特別扱いたから怒ってるのね？」

それならどうにか理解出来る。Aには50の待遇、Bに100の待遇では、Aも立場がない。ましてや社会には序列というものがあり、その高い者は高待遇を得られるとい

うのが基本認識だ。

彼女の視点で見れば、霊夢との交流が長期間に及ぶ彼女自身は、きつとこの家の序列の高位にあるのだろう。どこから来たとも分からない流れ者など、そもそも序列の外に有る様に感じられる筈だ。

然し、そうやって理詰めで答えを出して確認すると、リグルはまた少しむくれた顔になり、不機嫌を露わにした。

どうしたもんだろう——と霊夢が悩んでいると、視界の端、呆れたとばかりに嘆息するセイバーが見えた。

「……で、まあそういう訳で」

「なんだか、すごく納得いきません」

遅刻しない程度に丁寧な、順を追って、だが嘘をつかなければならない。この難題を解決したのも、誰であろうセイバーだった。

彼女は自分の事を、10年前に博麗の巫女に世話になった者、と紹介した。10年前といえば霊夢の母、巫女として優秀で在るが故に名も忘れられた彼女の時代。

徹底的にシステムとして働いた結果、個人としての記憶など、殆ど誰にも残さなかつ

た彼女。そんな人を持ちだした訳だから、嘘も何も、リグルには判断の要素がない。

「でもさ、納得しないとあの子——いやあの人、ずっとあの調子なのよ」

「そ、それは困りますけど……」

それでも押しきれないと見るや、セイバーは畳にうつ伏せに倒れ込み、大声で泣き喚き始めたのだ。

霊夢は同学年で背が高い部類だが、セイバーはそれより更に長身だ。どこかつんとすました容姿、物腰は食事の段で語った通りの洗練された姿。そんな大の大人が赤ん坊の様に叫び泣き、両手両足ばたつかせて駄々を捏ねる姿を見せられたら、怒りも何も有つたものではない。端的に言えば、見てはならない物を見てしまった様で、非常に気まづくなる。

その上でセイバーは、善良な人妖を意の俣にする魔術でも知っているかの様に、たった一つの言葉でリグルを黙らせた。

『あの子はどこ、どうしていないの』。

霊夢の母、先代の巫女が亡くなっている事は、この町の住民の殆どが知っている。

真実はどうあれ彼女は、『遠方から亡き知人を頼ってきた身寄りの無い人間』という皮を被った。これを家の外に蹴りだすまでの無遠慮さを持つ者は、中々見つけられないのではないか。

「ほら、さあ。落ち着いたら帰ると思うし、そんなに幅は取らないし、母さん頼ってきたのに私が何もしないって、それもさあ……」

「ううー……」

今のセイバーは、寝室に逃げ込んで泣いている（泣き真似を続けている）。襖の隙間から漏れてくる嗚咽は、古今東西のドラマに舞台を移しても、名優と讃えられるにふさわしいだろう。リグルの触角が、眉と同じ様に下を向いていた。

結局の所、リグルが先に折れるしかなかった。泣いて別室へ逃げ込んだ時点で、この争いはセイバーの勝利である。

昨夜から今朝の騒動で霊夢は忘れていたのだが、サーヴァントは、そもそも常に実体化している必要は無い。寧ろ、利便性を考えるのならば、霊体化——実体を消し、文字通り幽霊の様になっていた方が良い。霊体である彼女等を実体化させるとするのは、それだけでも魔力や霊力を消費する事になるからだ。

とは言っても、セイバーは比較的消費効率が良い方なのだろうか。霊夢の最大霊力に比して、1日実体化させ続けて魔力消費は10%程度だろう。

睡眠によって翌朝には、霊夢の霊力はほぼ回復している。聖杯が契約を仲介しサー

ヴァントをこの世界に繋ぎとめたのだから、霊夢自身の負担はかなり少ないのだ。

だが、仮に。戦闘行動を行ったらどうなるだろう。

——『そうね。相性が最高の相手と当たって、宝具無しで勝てたら20%くらいの消費で済むかも』

彼女達は規格外の魔力兵器だ。その中でもセイバーは、最高出力を誇る超攻撃的機体だ。どう頑張っても1日に4戦が限界、まだ見ぬ敵との相性を考えれば3、いや2戦から辛くなるか。

そういう訳だから平常は、霊体のままで彼女を連れ回す事になる。

「もう、だったら何で昨日、さっさとそういう事……」

「ごめんあそばせ。だって霊夢なら普通に実体化のままでも行けそうかしら——」

「私は永久機関じゃないわよ」

姿は見えないが、そこにいる彼女に愚痴を零す。やたらと広い校庭の、昇降口までの道のりだ。

校門を潜ってから昇降口まで、100m以上もあるのは長すぎると生徒の不評を買っているのだが、世の中の学校には、校門から昇降口の間数十軒の民家が並ぶ所もあるらしい。それに比べれば良心的——なのだろう、か？

「……まあいいわ、学校の中では出来るだけ話しかけないで。変に思われるから——」

？」

不意に背を叩かれた者がそうする様に、霊夢は突然、ぴんと背筋を伸ばした。「りようかーい……つて、どうしたの？」

「いや、ちよつと……気のせいじゃないわよね」

異常が日常に紛れている気配が有った。冬の空気に似合わぬ湿気が有った。

指先に怪我をした時、どうせ浅い傷だからと、血を手で拭うだけで済ませる。乾いた血は皮膚にこびりついて、重さも無いのに違和感を残し続けた。

たった今感じた気配は、例えるならば、その程度の小さな異変である。直ちに体に影響を与える様な力強い異変ではない。

だが放置しておけば、血に集るサメやハゲタカを際限なく引き寄せてしまいそうな早く片付けてしまわなければ、何れ喰い殺される恐怖がそこにある。

「……セイバー。放課後、ちよつと付き合つて」

「デートのお誘いかしら。屋上がいいわ、きつとあそこに腐肉喰らいがいる」  
スカベンジャー

霊体のまま、セイバーは（おそらくだが）校舎の屋上を指差す。そこにはフェンスと、早朝練習に力を入れる吹奏楽部の姿が有るばかりだ。

「……へえ、分かるんだ」

「そりゃあね、簡単な探知魔術くらい使えるわよ。飛び道具でイラスト作つて遊んでた



時代の子よ？」

奇妙な違和感の正体が何なのか、霊夢にはまだ、明確な理解は無い。だが、危惧なら大いに抱いている。

セイバーが言う様なスカベンジャーがこの違和の主だとしたら、目的は？ 腐った肉が置いてある筈もないこの学び舎で、腐肉喰らいは何をする？

セイバーが言う捕食者は、ここで満足のいく食糧を見つけられなかった筈だ。空腹を感じたら、自分ならどうするだろう。霊夢は考え、瞬き一つの間も開けずに答えに至る。単純な答え、食材を料理すればいい。

「セイバー。私、ちよつとムカついてきたわ」

「良い傾向よ、マイマスター」

何を仕掛けているのか、早い段階で突きとめる。日常は姿を変えず、在るがままそこになければならないのだから。

義務感と同居する焦りを抱え、霊夢は昇降口で中靴に履き替えた。

調査を放課後と定めたのは、昼休みには昼休みで楽しみたい事が有るから——だけでもない。やはり、人の数が少なくなる時間帯にならないと、大きな動きは取りにくいか

らだ。

動けないのなら、今は今として楽しむべきである、と霊夢は考える。購買で安く買いたたいたパン類を、牛乳と共に腹へ流し込んでみると、

「あーたたたた……相変わらずダンプカーみたいな奴だな、博麗の」  
「ルーザードッグの遠吠えね、学食に行きなさい」

購買人気パン争奪戦に於いて、体格で負けを喫した椛が、椅子ごとやってきた。

あの戦争には勝ち方が幾つかあり、霊夢の場合は身長とリーチで、上から搔つ攫うのが常套手段。椛の様に細身ですばしっこい者は、スタートと同時に最前列へ踊り込みすり抜けるのが肝心。出遅れてしまったが最後、パワーと体格に勝る上級生の壁に押しつぶされ、押し出される羽目になる。

「友人甲斐がないぞ博麗の……お前だってそんなに買い込んでも食べないだろ」

「食べるわよ。昼のおやつと放課後の間食で」

そうつとあんバターサンドに伸びてきた椛の手を、霊夢は手首を突いて撃ち落とす。この学校の購買はやたら安く、食材を買い込んで弁当を作るより、場合によっては安上がりになる事も有るのだ。他人に譲るなどんでもないと、これが各齋家の共通見解である。

「……小食だから太らないって訳でもないんだよな、やっぱり」

耳を完全に寝かせた負け権の涙を肴に、霊夢は実に美味しい昼食を平らげた。周囲の面々を見ると、やはり早い者は昼食を完了して雑談の時間と洒落込んでいる最中。

小集団の中には更に小集団が生まれるのが常で、机は数か所に偏在している。霊夢などは少し外れた例で、敢えていうなら『全てに所属する無所属』だろうか。

「はー……何だかどつと疲れた……骨折り損のくたびれ儲けは辛いよ」

「これからはお弁当を持つてくる事ね。……つてこら、私の机に張り付くな」

決して広くない机の半分以上のスペースを、権は上半身で占領する。自分自身の机ではなく、此処は飽く迄、霊夢の机である。いつも背筋をしゃんと伸ばしている権には、全く珍しい事であるが、

「んー、ちよつと休ませろー。今日はやたらダルいんだよー……」

「……まあ、良いけど……何が疲れたよ、この体力自慢」

舌を出して耳を寝かせ、きつと尻尾までだらりと垂らしているだろう。学業の後に部活かバイト、その後で更に近所の手伝いで一働き、犬走権は健康体の代表例だ。そんな彼女が、何故こうも――

気に摺るまい、霊夢は自分にそう言い聞かせた。心当たりは有るが、どうせ明日には無くなっているものだ。余計な事を考えて心を乱しても仕方が無い。

「これ、あげる。食べたら自分の席に戻りなさいよ」

椛の顔の前に揚げドーナツを置いて、霊夢は教室を去る。歩いていけば、その内、暇をつぶす何かに遭遇するだろう。流れるまま、在るがまま。霊夢の休み時間は、一事が万事、その通りであつた。

「……であるからして、私はそれを不必要と判断した訳だな」

「どうしてそういう結論になるかが分かりません。分かりますけど分かりません」

時間的余裕に任せて生徒会室方面へ向かつていた霊夢は、学内で名物コンビと呼ばれている二人組を見つけた。

この学校の生徒会は、良く言えば個性的、悪く言えば自分勝手な連中が集まっている。自己主張の激しい奴を優先して集めた結果、そいつらだけで小説の一つも書けそうな環境が生まれているのだ。だから覗きに行けば、それなりの退屈凌ぎにはなる。

同じ事を考えている者は多い様で、休み時間の生徒会室は、数十人が集まる談話室になっている。複数クラス、学年の者が集まってワイワイ騒ぐこの気風は、好ましいものであると言えよう。

そうなると必然、狭いからという理由であぶれる者も出てくる。だったら教室に帰れば良いじゃないかとは思うが、学生にはおかしな縄張り意識が有り、他のクラスに上が

り込んでの談話というのは居心地悪く感じるらしい。談話室もとい生徒会室で親しくなった者同士は、結果的にその近辺の廊下を溜まり場になっている。

2—A河城にとり、1—B古明地さととり、発明家とツツコミというおかしなタッグだった。

「今度は何を作つたのよ、にとり」

「おー、盟友よ良くぞ来た良くぞ聞いてくれた！ 唐突だが霊夢、椅子は使わない時に置き場に困らないか？」

「まずは話題に何かクツションを挟みましょうよ。ほら、霊夢先輩が無表情で呆れてる」にとりとさととり、名前が似てるからとセットでからかわれたのが付き合いの始まりだというが、性格が似てるでもなし気性が噛み合うでもなしに、何故かこの二人は仲が良かった。

にとりの方は常に工具セットを制服に引っ掛けて持ち歩き、さとりは小型ハリセンを持って追いかける。暴走が始まったら引っ叩いて「直す」らしい。古い家電の修理方ではないが。

「……椅子？うちじゃあ使わないけど、そうね……確かに、使わない時はそうかも」

「だろう、だろう？私はそこに着目してだね、全く新しい種類の椅子を開発したんだ！ほら、これを見てくれ！世紀の大発明だぞ！」

何時もの様に無駄に自信満々に、にとりが取り出したのは、分厚い段ボール紙。幅は60cm程、長さは2m程度。何回か畳んで、持ち運び出来る程度の長さにしてある。正直な所、霊夢には、答えがもう見えてしまっていた。

「ああ、霊夢先輩。先にもう答えちゃって良いですよ。分かったみたいですし」

「……それを出汁巻き卵みたいにくるくるっと丸めて椅子にする、とか？」

「な、なにー!?!私の発明を、見ただけで使い方まで看破するとは!?!」

「それ、幼稚園の工作の本で見たわ」

このやり方で作った椅子は、硬くて座り心地が悪いのだ。高さも中途半端でいけない。成程キャンプか何かで使うのなら、持ち運びが楽な椅子として良いだろう。だが、今は軽量パイプ椅子が安価で手に入る時代。何故、段ボールの椅子に座らなければならぬのか。にとりの発想は、こういう根本的な部分から、何か欠けている事が多いのだ。

「あ、にとり先輩が絶望してます。凄いですね、こんなに躁鬱の振れ幅が大きい人も珍しい。ほーらほらどうしたんですか天才発明家さん、数日思案の末に良い子の工作に辿り着いた気分はー?」

「う、うおおおおおおおおおお!!」

打ちひしがれるにとり、死人に鞭打つさとり。吼えるにとり、冷やかな目をするさ

とり。もしかしてこの2人は仲がいいと言うより、面白いからさとりがくつついているだけなのではないか？ 霊夢の脳裏に、そんな予感が走る。

「正解ですよ、霊夢先輩。中々勘がするどいですね」

「……私の心を読むな」

分かっている、と言わんばかりの顔で、さとりが深く頷いた。

コンビでいる時は良いのだが、こうしてにとりが脱落している時、この数歳下に見える小さな後輩は、誰にも扱い辛い存在となる。

別に彼女は、心を読んでる訳ではない。ただ、古明地さとりという少女は、恐ろしく人の表情に敏感なのだ。カードギャンブルをやらせれば連戦連勝、特にポーカーでの強さは神域のギャンブラー。今も、霊夢がさとりに向けた視線と、場の状況から思考を推測し、どうとでも取れる言葉を投げてきた。

思考に先回りをされる居心地の悪さを感じて、霊夢は、床と一体化し嘆くにとりを助け起こそうとして――

「あつ」

「あ、ごめんささい」

急に動いた為、横をすり抜けようとしていた誰かにぶつかってしまった。先に詫びられてしまった、こちらでも詫び返そうと振り向けば、その背中は既に数m先。とはいえ、後

ろ姿だけでそれが誰なのかは分かる。

パーツの比率を計算機で算出しながら組み上げた様な手足に、一本一本を手作業で作った様なきめ細かさの金髪。常に背筋を伸ばして、自分の周囲の何物にも興味を向けずに歩いていくその姿。一挙手一投足、プログラム制御されているのかと思わんばかり、優美に進む脚、足音。

「相変わらず、孤高が服を着て歩いてるみたいな人ですよね、アリス先輩」

「本当にね。凄いもんだと思うわ、ありや天性よ。天性の孤高だわ」

アリス・マーガトロイド、どんな集団にも属さない孤高の華。友人グループ、部活動、委員会、その他あらゆる集団を、彼女は無益だと感じているらしい。誰かと連れだって歩いている姿は見た事が無いし、雑談に興じる光景も観察されていない。

「霊夢は少なくとも1年と数カ月、同じ学級で彼女を観察してきたが、分からない事しかし」ない。

「ねえ、さとり。アリスって、何を考えて暮らしてるのかしら」

「私は人形の気持ちまでは分かりませんが、霊夢先輩」

人形、言い得て妙。だが少しばかり酷い言い方でも無いだろうか。親しくも無いアリスを、霊夢は心の内で弁護する。

段ボール椅子を解体するにとりを置き去りに、霊夢もまた教室へ戻る事にした。休み



時間は、まだ数分ばかり残っていた。

「……多分、ここが起点、スイッチ。他にも何か所か、合図に呼応して発動するしかけが有ると思う」

放課後、屋上、太陽は既に地平の向こうに消えた。早朝から感じた違和の元凶は、不可視の魔方陣として存在した。成程、近づけば明らかに空気が粘っこい。重いだけではなく、呼吸器にこびり付く様な湿っぽさが漂っている。

「ありがとう、セイバー。その何か所かを特定できない？」

「其処までは難しいかしらね、私の専門外なもの。キャスターのクラスなら、昼寝しながらでも出来るのでしょうか」

両手を肩の高さに上げて、セイバーは首を左右に振る。

「はあ……最優のクラスでも無理なものは無理なのね」

「私は全能じゃなくて万能なの、勘違いしないで頂戴」

霊夢が持つ魔術知識は、博麗の巫女として受け継がれた結界の術と、妖怪退治の攻撃的術式ばかり。この様に、長時間の周到な用意の末に発動させる大魔術となると、解読は難しい。内容が分からぬ事には、下手に手出しも出来ないのだ。

「ねえ、セイバー。どうしてあんな、これをスカベンジャーの術だつて思ったの?」

「それはね、んー……説明し辛いんだけど、感覚的なものよ。魔力が無きや何も出来ない私達は、魔力の増減にかなり敏感なのね。校門を潜つて直ぐ、意識してないと髪を何本か抜かれる様な嫌な刺激が有つた。これが人間だったら、魔力から魂までを抜かれつゝして倒れるんじゃないかって……」

「魂を、抜く?」

聞き捨てならない言葉を、聞いた気がした。

生物にとって魂は、心臓や脳と同様に欠けてはならないものだ。脳や心臓の一部が損傷しようと、生きていた人間の事例は幾つかある。それと同様に、魂も傷がついた程度なら、生きている「だけ」の状態を続ける事は容易い。

「そう、魂を。これは存在の中心を吸い取る魔術なんじゃないかしら。ただ、先に殻を壊さないと、中身を吸い取れないのよ。口吻が細いのか、顎が弱いのか。私達サーヴァントなら、魔力の殻を吸い取つて霊核。人間なら同様に殻を取り払つた後、魂。この術の範囲内では、全ての生物が衰弱して……最後は、無傷の死体の完成」

だが、破壊を伴う物理的接触が無くとも、魂には傷を付ける事が出来る。魂喰いの妖怪は過去に存在したというし、その状態を模した魔術も存在したらしい。霊的な手段を用いれば、外見や内臓に傷を残さず人を壊し、葬る事が出来る。魂は、人間の最大級の

弱点なのだ。

確かに殺しの手段としては効率が良いだろう。ただハイスコアを狙うのなら、人の多い場所に爆弾を仕掛けるのが最善手。学校という舞台を選択したのは、賢いやり方だ。

このような大規模魔術は、現在の幻想郷からは失われている。十中八九、サーヴァントの仕業と認定して良いだろう。設置と発動の瞬間には魔力を消費するだろうが、回収分で釣りが有り余る。

「……何で？ マスターになるくらい奴なら、こんなので死なないって分かるでしょ？」  
ただしそれは、相手が普通の人間の場合である。

マスターとして選ばれる者は、多かれ少なかれ、力を持つ者である事が多いという。霊夢は博麗の巫女、言うまでもなく結界術を扱える為、この程度の魔力吸収など、意識すれば容易く防げる。例えこの術が全力で発動された所で、霊夢自身は、自分は平然と生き延びるだろうと自信を持っていた。

なら、他のマスターとて無力ではあるまい。何らかの防衛手段は持っている筈。そう考えるのは、思考の飛躍とはいえないだろう。

無差別に人を殺して、だがマスターの命は奪えそうもない。合理的思考に基づけば、その殺人にも意味が有る筈で――

「あんた達ってさ、人妖の魂を喰うの?」

霊夢が辿り着いたのは、この答えだった。

「そうよ、私達はそういう存在。霊体ですもの、他者の魂は力の源だわ。そりや胃袋の要領と同じで許容量は有るけれど、食べれば食べる程に力は増していく。もしも弱小サヴァントを引き当てたなら、どうやって勝利するか……戦術、戦略、そんな天才的な頭脳を使わなくても、こういう地道なやり方が有るの」

術の影響も無いというのに、霊夢は軽いめまいを覚えた。

聖杯戦争というのは、サーヴァントとマスターの戦いではないのか? 見つけた書にはそう書かれていたし、霊夢自身、勝ちを狙うなら最短距離で敵を叩く。昼間の日常は一切傷つく事なく、夜に敵を葬り、静かに事は進む——それが聖杯戦争だと、霊夢は思っていた。

こうして昼間の生活に、自分の日常に、誰かが牙をむくなど思っていないかった。そんな事は、有ってはならない事だ。

「セイバー、この術の起点を壊せる?」

「私じゃ無理そうだけど、貴女なら出来るわ。上に貴女の結界を張るだけで良いと思う。一度、術者の魔力から切り離されたら、この術の起点は力を失って——」

ひゆう。

頬を斬る様な一陣の風が、屋上の静寂を擦り抜ける。茜色の雲に乾いた空気、冬の寒さ——に、不純物が一滴。肌の上から肉を冷やすのが自然の冷気。違和の雫は、霊夢の肺腑を内側から冷やし、骨の凍る錯覚をすら生んだ。

居る。誰か、何か、分らない。だが、確かにそこには「居る」のだ。

脳裏を駆け廻る警鐘、振り向けば防護フェンスの上に——

「——悪いんですが、それは暫くお待ちくださいいな」

黒衣の死神が、能面を手に微笑んでいた。

## 二日目、学校——Jump the gun.

「——セイバー——」

「任せてなさい！ 霊夢は自分に結界！」

黒いローブ、目深に被ったフード。足首まで黒い布に覆われて、止まぬ風に身を揺らす。左腕はローブの中に隠れていて、おどけた能の面は右手に。中指と人差し指に挟んで、振り子のように揺らしている。

影に溶け込みそうな程に、その影は黒かった。

「マスターが結界、サーヴァントが攻撃？ 成程成程、バランスが良いですねえ。ですが御安心を、私はマスターを狙うつもりは有りませんので——」

霊夢が接近に気付かなかった訳ではない。その影は気配を隠す事もなく、魔力を抑える事もなく、轟音を立てて現れた。だというのに、霊夢が振り向くより先に、影が其処にいた、理由は一つしかない。

「——いえ、まあ。狙うつもりなら、もう既に首を頂いております、が」

その影は、霊夢の感知範囲外からフェンスの上まで——100m以上の距離を、霊夢が気付いて振り向くまでの間に埋めてそこに立ったのだ。領域を支配する結界術師の

索敵を、全くの無用の長物とばかり嘲笑い、目晦ましも何も行わず速度だけで打ち破つて現れたのだ——！

「ランサーかしら、その速さ。霊夢を狙わなかったのは余裕つて奴？」

「いえいえ余裕などございませぬ、そうして良いならそうしてしまいましたとも。ですが私にも、並々ならぬ複雑な事情がありまして……」

黒衣の死神——新たなサーヴァントは、よよとしなを作つて目頭を抑える。……おそらく、目頭だろう。太陽に取つて代わつた遠くの街灯が、フードに大きな影を作つて  
いる。

見た所では、目立つ武器は持っていない。過去に存在した幻想の一つならば、武器か術を見ればその正体は知れる筈だ。隠蔽していると見るべきか、武器を持たないサーヴァントと見るべきか。

武器、というなら。セイバーは武器をどうするのか、霊夢はまだ知らなかった。

剣士セイバーというからには剣を使うのだろうが、まさかいきなり正体を明かす事はすまい。

何処かで武器を調達するか、或いは魔術で以て生成すると考えるのが自然だが、

「霊夢、事後承諾だけど借りたわよー」

からん。木製の鞆が、屋上のコンクリートの上に落ちる。セイバーは、一振りの刀を右手に構えていた。白木の鞆、片刃の反りの無い刀身。強度こそ低いが、どこか神聖な、

懐かしい気配の——

「——つて、それうちの神社の御神刀!？」

「なんか良い雰囲気出してたからね、借りてきちゃった。これいいわ、いけそういけそう。……それじゃ、始めようかしら。あんまり待つのも飽きたでしょう?」

——き、いい。

前方180度、全てのフェンスが同時に軋みを上げた。

「おおお、おつ? つととおつ!」

敵のサーヴァントが飛び降りると同時、軋んだフェンスが「ずれる」。形状を保ったまままで数センチ程ずれて、重力に逆らえず、張り出した3階ベランダへと落下していった。斬ったのか? そこに居ながら、刃も届かせず、金属製のフェンスを? にわかには信じ難く——いいや、疑う意味も無い。彼女達は、そも規格外中の規格外。理の外の存在である。

「……いい、いいやああつ!!」

敵が着地するまでにの時間、自由落下に身を委ねている内に、セイバーは己が身を弾丸と変える。一足未満で間合いを詰めて、余力で体を留め、前進の勢いそのままに敵の胴を横薙ぎに——

「危なっ! 加減ないですねぇ貴女!」



止められた。敵サーヴァントは刀の腹を蹴りあげつつ上体を逸らし、軌道の逸れた刃の下を潜り抜けて、セイバーの後方へと回り込んだ。振り向く間を惜しみ、目視を伴わず背後の空間を斬るセイバーの刀。それをまた、今度は足の裏で押し込む様な蹴りで打ち返す。

弾かれた刃を引き戻して振り向くまでの、ゼロコンマにも満たない時間で、攻守は交代した。

蹴る、蹴る、蹴る。手も魔術も使わず、そのサーヴァントは蹴りの豪雨を降らせる。脛を狙つての爪先蹴り、手首を狙う足刀、踵で鳩尾を打ち上げる背面蹴り、足の甲を用いた廻し蹴り。洗練された武術とは違う。高い身体能力で脚を振り回す、喧嘩にも似た野卑な蹴撃——！

だが、セイバーも負けてはいない——いや、技量では勝っていると言ってもいい。敵が放つ蹴りの全てを、後退する事なく左手で打ち払い打ち落とし、合間に刀で突きを放つ。線の斬撃に比べて攻撃範囲は狭くなるが、一度に加わる力は比較にならない、突き。然して突きを回避するだけならば、軽く刀の側面を叩いて、自分自身の体をずらしてやればそれでいい。黒衣の影は余裕を以て対処する。後退しながら蹴りを放ち、突きを避ける為に側面へ動き、時折は背後を取ろうと潜り込み。

セイバーは引き離されただけ踏み込み、横へと跳躍し、振り向きざまに首狙いの斬撃

を放ち。

二者は決して必殺の間合いを外さぬまま、立ち位置を変え続けながら斬り蹴り結ぶ。

「斬れないわね、どういう足をしてるのよ?」

「自慢の美脚ですとも、はい」

「馬鹿にして!」

敵サーヴァントの減らず口を叩き潰さんと、セイバーは大上段から刀を振り降ろす。悪手だ。破壊力こそ比類無いが、相手はセイバーを速度で上回る。唸りを上げて振り下ろされた刀が、敵サーヴァントの頭が有る筈の空間に到達した時には、

「……若い子は堪え性が無いですねえ」

「なっ……!?!」

能面を紐で顔に固定し、両手を空けた敵サーヴァントは、セイバーを背後から抱きしめる様に組みついていた。左腕で左肩を抑え、右手で刀を持つ右手首を掴み、胸を背に押し付けて大きく動く隙間を潰す。

組み打ちで勝とうというつもりではあるまい。この短時間の攻防、力ならセイバーが数段上だと見えた。なら、自らの最大の武器である速度を殺して、黒衣の狂鳥は何を企む?

跳んだ。セイバーが斬り裂いたフェンスを背面跳びで、彼女を掴んだままで、敵サー

ヴァントは学校の屋上から、我が身を大地へと投げ出した。階数にして四階、十数m。早送りされた映像の様な、不自然な加速で、二者は絡み合つて落下する。

「セイバー!?!」

彼女の事は心配いらぬ、霊夢の理性はそう伝える。この程度の落下なら致命傷にはならない、敵とのスペック差は歴然。寧ろ、マスターという枷を失つた彼女は、遠慮無しに周囲を巻き込みかねない攻撃すら放てる筈で――

問題というなら霊夢の方に有る。彼女自身、感知の対象範囲には自信がある方だ。地上で戦闘を再開した2人を、霊夢は今も補足している。

だが、彼女ははつきりと理解させられた。サーヴァントには人間の術など、破るまでも無い兇戯なのだ。セイバーから離れてしまえば、霊夢を守る者は誰もいない。彼女は、害意を持つ者に背後に立たれるまで気付けないかも知れない。

危険だ。ここに一人で居るのは、漁夫の利狙いのハイエナに、わざわざ新鮮な肉を喰わせる様なものだ。二人が視界から消えて、探知網に反応するだけの存在となつた瞬間、霊夢は階段を一足抜かしに駆け降り始めた。

日の短い冬、夕暮れの境界は夜に浸食された。廊下も教室も照明を落とされて、自分の足が何処を踏んでいるか把握し辛い。こうして視界に制限を加えられて初めて、自分がどれだけ経験則に任せて歩いているか再認識する。慣れ親しんだ廊下をブレーキ無

しに曲がり、靴箱から外靴を引き出した。

履き替える時間が惜しい。だが、内履きの耐久性で外に出るのも、万が一を考えると良しとは出来ない。戦えないなら一瞬でも長く逃げなければ。靴に足を取られてお終い、では間抜けすぎるではないか。

学校指定の内履きが並ぶ下足箱。ただ一足だけ残されたブーツ、それを見落としたのは迂闊だったと悔やむしかない。

一分も掛からずに、霊夢は屋上から校庭まで駆け降りた。だがその時間は、サーヴァント達には長すぎる程の時間だった筈だ。

互いに広いフィールドを好む為だろう。戦場は、校庭の中央へと移動していた。

常に踵を浮かせ腰を落ちつけさせず、数分の一秒も止まらずに馳せる敵サーヴァント。大地に根差した両足を柱とし、鉄槌の如き一撃でそれを迎撃するセイバー。

人間である霊夢の目には、行動の後の残像が線として映るばかり。空を支配した夜陰が、視認の難易度を跳ね上げる。屋上での戦闘より、両者とも数段速い。主という足枷が無ければ、彼女達はこうも化け物じみているのか。

取分け敵サーヴァント、黒衣の影の速さは、霊夢の認識速度を遥かに越えている。

視界の右端に影が映ったかと思えば、その時には左端で方向転換を終え、また姿を消す。

昇降口から彼女達までの距離は50m以上。人の視界が120°程とするならば、かのサーヴァントは200m近い距離を瞬時に消し去る。彼女が道を行くのではなく、道が彼女の為に自らを消滅させているのでは、と思わされる程だ。

駆け抜ける俣に脚を突き出し、爪先を鎌の如く突き出す。地に伏せ、跳ねると共に脚を振り上げ、足甲で顎を打ち抜かんとする。急ブレーキでセイバーの空振りを誘い、肘を狙って後ろ廻し蹴り、踵にて砕こうと企む。反射速度と卓越した敏捷性、バランス感覚は、如何なる場面からでも攻撃に転ずる事を可能とする。

それでも霊夢は、これならば勝てると安堵していた。

敵サーヴァントの蹴りは、チェンソーよりも鮮やかに木々を両断していくだろう。だが、あの死神の脚が伐採機なら、セイバーの剣はビル解体の鉄球だ。迎撃の度に轟く金属音は、これだけ離れていても隣室の事のように聞こえてくる。ただの神社の御神刀が、彼女の手に有るといっただけで、岩塊をすら砕く兵器となる。

如何にあの死神が強靱な脚を持つとも、1秒ごとに数百mを休まず駆けつけている。疲労は少なからず蓄積する。その上でセイバーのあの一撃を、彼女に向かって進みながら“脚だけで受けているのだ。

あれだけの速度があれば、壁にぶつかるだけでもダメージは大きいだろう。増してやセイバーの振るう刀の衝撃は、壁が自分から高速で向かってくる様な物。自らの武器である速度が、自らの脚を痛めつける。このままに均衡が続けば、数分の後には勝敗は決するかに見えた——セイバーの勝利という形で。

だから黒衣の死神が立ち止まろうと、その位置がセイバーより十数mも離れた場所であろうと、霊夢の警戒心は正常に機能しないままに勝利の確信ばかりを告げていた。

「やつと止まったわね、疲れた？もう二度と走らなくても良い様にしてあげるわ」

「御冗談を。私は30分以上動かずに居ると死んでしまうんですよ」

動きを止めた敵の前に、セイバーは漸く息を吸い込んだ。

屋上から転落し砂利の上に叩きつけられ、更に蹴りの暴風を防ぐこと約2分、全身の重さを一転に集中し速度と併せるあの一撃を防ぎ続けるには、力を入れ続ける他は無かった。刀を振るう毎に吐気、鉄脚を止める毎に吐気。息を吸おうとしたのなら、その瞬間の脱力を狙われる。負ける気はしないが、あのままならばセイバー自身も体力を削られていき、何処かで大きな負傷をしていたかも知れない。

嫌な相手だ、心底そう思った。博打に出てくれるなら、そこに全力を注いで一太刀に

斬り潰す。最良の安全策を、更にリスクを薄めて行使してくるが為、捉える事も儘なら  
ない。

然しリスクを冒さない以上、総合的な能力で勝る自分が最終的には勝てる、それも事  
実だろう。

つまり敵サーヴァントは、決して勝利に繋がらない戦法を何時までも続けていて、セ  
イバーは勝利の瞬間をずるずると引き延ばされながら体力を消費させられているのだ。  
漁夫の利を狙う第三者など居たのなら、垂涎物の好機と映つただろう。

焦らず、だが迅速に勝たねばなるまい。相手も流石に速度は落ちてきた、後十数回の  
接触で捉えきれぬ筈。刀を受けさせて脚を止め、掴んで地面に引きずり倒し、急所を貫  
いて一撃で仕留める。組み合えば力の差は、勝負にもなるまい。赤子の手を捻るより容  
易く組み伏せられる。ならば先手を取り行動を誘発すれば、体力の回復を計らせず—  
—。

「……ううん、困っちゃいましたねえ。私じゃどうも勝ち目が薄い様で……」  
だというのに、踏み込めない。こちらが動けば向こうも動く、向こうはこちらより速  
い——そんな、物理的な話ではなく。

間合いを詰めるな、過剰に接近するな、セイバーの中で誰かが叫び、心を掴んで押し  
とどめる。私が勝つには今までの戦法を捨てず、あの展開を繰り返せというのだ。

そうすれば勝てる、勝てるのだから動くな。絶対に動くな。止めろ、考え直せ。本能は勝利を告げるのではなく、負けを恐れて彼女を引きとめている。

「きつと、私の知り合いの誰かなんでしようねえ。お互いに正体を明かせないのは寂しいものです。どうです、ここは一つ昔馴染のよしみ、今夜を無かつた事にしてお互いに手を引くというのは——」

「笑わせないで。今の状況が対等だと思う？ 貴女を斬るわ、斬つて私は凱旋するの」

ふう。黒衣の死神は、子供を宥める親の様な態度で溜息をつく。交渉の決裂、いや交渉のテーブルにつくだけの条件を用意出来ていない事を知つたのだ。

速度の差はあれ、背を向けて逃げようとするならば、振り向く間にセイバーに背中を斬られるだろう。セイバーの力なら、その一撃を十分に致命傷に出来る。戦闘を継続すれば、聖杯戦争初日にして、最初の脱落者が生まれる筈だ。

……筈、だった。と言い変えるべきだ、訂正する。

砂塵が舞う、風避け代わりに植えられた木々が悲鳴を上げる、校舎の窓ガラスが軋む。『それ』を中心として円形に発せられる圧は、空気の流動を因とするもの。

「——仕方ないわね、手加減したげないわ」



黒衣の死神、風の暴魔は、圧の発生源に立ちながらロープを揺らす事も無かった。

屈みこみ、地に両手を付ける。人差し指と中指、親指に体重を被せる。薬指と小指を、バランスを保つ為だけに添える。左膝を胸に抱え込み、右脚は後方に軽く曲げたままに置き、踵を持ち上げる。

前傾姿勢——いや、低すぎる。

獣の狩り——いや、まだまだ低い。

例えるならば——陸上競技のクラウチングスタート。速さを追求した人間達の、一つの答えの形だった。

サーヴァントの争いの射程外（或いは射程という概念すら無為やも知れぬが）にいた筈の霊夢は、平和的な競技の為に発展した筈のその構えが、如何な拳足よりも恐ろしい物に思えた。

汗が冷える、汗を掻いていた事にすらこの瞬間に気付く。背に氷柱を突き通された錯覚すら有る。

あの黒衣のサーヴァントは、数値を見るならばセイバーに遠く及ばない。遠距離、補足している時間が短いからだろうか、幾つかのステータスは虫喰いの様になって見

えないが、筋力と魔力、攻撃に影響するだろうステータスは何れも、セイバーを下回っている。

「……セイバー」

勝てる筈、そう信じた。信じたのに、勝てないと『勘』が訴える。あの構えに勝つには、今のセイバーの刀では駄目だ。その様な貧弱な武器では、持ち主ごと破壊されてしまう。

アレは『宝具』だ。サーヴァントが最悪の兵器である所以の、形を為した伝説。真名を解放されずして渦を巻く暴風、敵サーヴァントの黒に染まった魔力、その規模。一人の術者が数度の生涯を経て、尚も蓄積出来ぬ程の、器を逆に飲み干さん程の常識外れ。

「セイバー、宝具を——」

マスタ  
霊夢の言を待つまでも無い。彼女<sup>サーヴァント</sup>は御神刀を捨て、両手を体の前で組み合わせた。

彼女の宝具は、発動までに時間を要するのか。それでは足りない、足りないのだ。仮に瞬時に転送されたとして、それを振り上げるまでのタイムラグすら惜しい。それだけの時間があれば、あの死神は——

「……あら、お客様」

校庭が、爆ぜた。瞬きはしていない、視線を外してもいない。だが、そこに居た筈の敵サーヴァントは「居ない」し、セイバーもまた其処にいる。異常が起こったとす

るなら、靈夢の後方、校舎の方から聞こえた音くらいで、

——あんな音を、昔々に聞いた気がする。私の手を引いていた人が、私の目の前で吹き飛び、物言わぬ赤い塊になったあの時の、小さな子供の目から見れば世界の全ては巨大に過ぎて肉親とは最も近くに居るが故に常に視界を埋めてそれは巨大で強大でだからその強大な存在がより大きな鉄の塊に弾き飛ばされた時に子供の小さな世界は理解不可能の境界線を踏みにしられてしまつて、平等平等人類一切皆平等、下賤高貴上等等老若男女に分け隔て無し骸は肉と骨の塊皮膚で覆われ血の袋破けて弾けて赤紅朱

「——いむ、靈夢！」

肩を揺す振られ、靈夢は思考を戦場に引き戻した。敵が視界の中に居ない事に、改めて気付いた。

「セイバー、あいつは!？」

「校舎に飛び込んで、屋上から何処かに飛んだ! 逃げられた! ……違う、そんな事より、あいつが……!」

「何、どうしたの!? 分かりやすく説明して!」

靈夢にもセイバーにも怪我は無い。真名の解放は行われず、黒衣の死神は撤退したらしい。

あの爆発的な速度はなんだったのか？ 逃げるための目晦ましに土を巻きあげるなど、中々に姑息なやり方だ。どうしてわざわざ校舎の中を通って行ったのか、進行方向に有ったからなのだろう——

そんな思考も、自分への誤魔化しでしかないと、霊夢は自覚していた。

「……誰かに見られた、私より先にあいつが気付いた。私なら脅すくらいにしたかも知れないけど、あいつは逃げたいからって面倒を避けた……！」

階段を駆け降りた時より、霊夢の脚は速く動いていたかも知れない。逃げ出してきた校舎へと舞い戻り、靴は履き変えず、最短距離で『其処』へ。非情口のランプの下、鉄の悪臭振り撒かれる、階段の踊り場へと馳せた。

「……なにやってんのよ、もう」

もう『それ』と形容した方が正しいだろう『彼女』を見つけて、霊夢はそんな言葉を口にしていた。

「死因」は腹部への打撲による内臓の破裂、出血多量だろうか。鑑識ならぬ身で分かる事ではないし、知識があらうと、『彼女』は背中も潰れてしまっていて、手で触れても何が何だか分からない。

比喩ではなく目に止まらぬ速度で腹を打たれ、壁に背を叩きつけられ、『彼女』は破損していた。手足も無事、首から上も無事、彼女が誰なのかは、階段の下から見上げただ

けでも理解出来た。

衣服の上から、左胸に触れる。流れた血が冷え固まり、冷たくてガサついた衣服。拍動は感じられない。鼻や口に手を向けても、いつまでも呼吸は行われぬ。顔に死の絶望は浮かんでおらず、『彼女』は赤に染まって尚、何時もの表情を保っていた。

ああ、戦争なんだなあ。他人事のように、霊夢は嘆息した。

無関係な誰かが巻き込まれて、何も分からずに死んでいく。そういうのは自分の知らない所で起こってくれば良かったのに。

戦争の参加者である霊夢は、自分に都合の良い願望を、加えて大きな後悔を抱いた。日常は平和に平穩に、些細な変化だけを伴って繰り返されなければならない。一個の人間の死という変化は、あまりにも大き過ぎる。

認められる筈がない、認めてはいけない、認めるものか。あの破壊者を、許しては――

「霊夢、治癒の術は？ 私だと、本当に些細な事しか出来ないの」

「…………え？」

「治癒。助けたくない？ 目撃者だから、死んでしまった方が良くいつて言うのは分かるけれど。こんな危険な遊びだもの、世の中に知られたら大変だわ。こういう事は秘匿すべきで――」

「ま、待つて！ 治癒？ 蘇生じゃなく？」

出来ない事はない。専門ではない、応急処置の為に身に付けている程度だが。

本来は病を払う為、病を患者と切り離す、結界術の応用の技術。負傷に対して用いるなら、概念的に死と危険を遠ざけ、自己治癒への道を繋げるものとなる。

死の概念を完全に払うには、人一人を蘇生させるのと対して変わらない魔力や霊力の消費が必要だが、遠ざけて回復を祈る程度なら、私の魔力残量全て注ぎ込めば十分。

「ええ、治癒。生きてるわ、ギリギリだけど。死に限り無く近づいてて、でも生きてる。命さえ繋ぎとめられるなら、優秀な治療術者の所に運びこむだけの猶予は作れるわ。」

「分かったわ、運んで頂戴。貴女に供給する魔力、最低限まで抑えるわよ。妖怪の山まで行けば、そういう事が出来る奴に心当たりが——」

本当に生きているとは、思っていなかったし、まだ思えない。人間、こうも壊されたら死ぬしかないだろう。一目見てそう思う程、彼女は潰されていた。だが、助かるかも知れないと聞いたなら、それを試してみるしかない。

道中の危険を思わない訳では無かった。魔力不足の俣に襲われれば、セイバーも全力を發揮できない。先程の敵が戻ってきたならば、逃げるという手段すら行使できずに殺されるだろう。

知った事ではない。

「尊命、謹み承る。世を分かつ神、事分かつ言、川を隔てて三千の灯。流れに委ねて万の大火、億の対価を置き留む——」

『彼女』を、ネガティブな概念から可能な限り『切り離す』。あらゆる災厄は彼女の外にあり、遠く無関係な場所へと打ち捨てられる。たつた三の小節で、もう魔力の数割を持っていかれた心地だ。

彼女の存在は世界から隔離する事なく、負の概念だけを選択して遠ざける為の結界。それはさながら、夜道に煌々と明かりを灯し、地を這う虫を駆逐する様なものだ。人の目と手では追いつかない、だから自動索敵・排除の術を組み込む。結界への侵入者を探知する術も、転ずればこの様に使用出来るのだ。

「——彷徨う勿れ、祈りは此処より彼方に。惑う事勿れ、彼方の地は汝の為には在らず。我が言に依れ、依りて留まれ、留まるならば与えられん。内は外を知らず外は内を忘る、汝は知らぬまま赦される者なり。」

『単層隔離結界・祓』  
やくさいいなんじをしらず

魔力探知網、正常作動完了。自動索敵・迎撃スタート。  
フルオートアクション

博麗の結界術は簡略化されたプログラムだ、システムチックに合理的。発動させたのならば魔力を流し込み続けるだけで、装置は動作を続ける。

『彼女』の骨格は既に元の形状を取り戻しつつあり、セイバーはそれに気付きながら、

それを霊夢に伝える事はなかった。



## 二日目——The different side.

私の一日の始まりは、主に二つのパターンに分けられる。

文明の利器に頼らず体内時計に従つて目を覚ますのが、1。今朝はこちらのパターン。手の内の書に葉を挟み、年代物の木の机に置くのが、2。そのどちらにせよ次の行動は、洗面所へ向かい、顔を洗つて歯を磨く事。

眠気を引きずる事は殆ど無いのだが、早朝の澄みわたる空気には、水の冷たさが良く似合う。

蛇口を捻るだけで水が出る、水道とは魔術の一種なのではないか、と戯れの思考。地中を通した管の中を水が流れている、そんな事は知っている。知つてはいるが、こんな森の中の一軒家にまで、科学の恩恵は遍く行き渡っているかと思うと、水脈を探り当てて土を掘り進む、そんな魔術より余程不思議に感じられるのである。

冷水を染み込ませたタオルをきりと絞り、目尻目頭、鼻、頬と個所を移して拭つていく。

「( )までを10分以内……」

時計を横目にキッチンに足を運び、市販のティー・バッグをカップに沈め、お湯を注

ぐ。

味と値段のバランスを考えると、別に1箱幾らの量販店で購入したもので、目覚めの一杯には十分。これ以上の贅沢を味わいたい気分になったのなら、その時にその分だけの葉を購入すればいい。

幸いに今の世の中、美味しいお茶の入れ方は秘伝とされず、世間一般に様々な手段で公開されている。知識は共有物、技術は個人所有、進歩した世界の在り方だ。

「……………」までで15分以内、と」

紅茶で体温を上げたのならば、また寝室にとんぼ返り。寝巻を制服に着替え、登校の準備を完了させる。

体温の馴染んだネグリジエが肌から離れていけば、暖房器具の無い寝室の冷気が皮膚の下まで潜り込むようで、この瞬間を可能な限り短くしようと、細かい着こなしの調節も無しに居間へと戻った。

テレビは有るが、朝のニュースは没頭しかねないのでパス。情報源として使用するのもつばら新聞、『朝刊虫の知らせ』は、午前4時には我が家の郵便受けに収まっている。隅から隅まで読む事は少ない。大見出しを抑え、気になった記事には少し時間を裂く程度。今朝の場合は、白玉楼通り方面での事故の話題に目を止めた。

噂じゃ死後の世界に繋がっているとかいう、好んで住む者も居ない土地。近代的ビル

群こそ立ち並ぶが、深夜の人口密度は、おそらく過疎村落よりも小さいのでは無いだろうか。

「へえ、ガス漏れ事故、怖いわねえ……そろそろ30分」

他人ごとの様な感想だが、知人に向こうで働いている者はいない。親身になって涙を流すなんて事は出来ず、それよりも時計の長針の行き先を気に掛ける。

今から家を立てば、学校に着くのは35分後。常の例に照らし合わせれば、教室に生徒は1人か2人。始業までの時間を利用して、持ちこんだ本を何十ページかは読み進める事が出来る。

鞆を手に家を出て、後ろ手に玄関のドアを閉める。

『Asssemble.』

居間のキッチンの寝室の灯りが消える、暖炉の火が消える。がちやりと音を立てて玄関のロックが掛かる、窓の鍵が閉まる。

今日も平常運転、万事が万事狂い無し。

校門を潜り、校庭を横切る。のんびりのんびり、徒歩の道のり。雪を踏みわけ、白い息を吐く。

目的の校舎からは、合唱部の朝練の美声が聞こえてくる。まっすぐ昇降口へ向かう筈だった足は、ふらふらと引き寄せられる様に校庭の一角へ進み、

「♪……あ、おはようございます、先輩！」

傍で見ているだけのつもりだったのに、挨拶をされてしまった。礼には適う様にと挨拶を返し、邪魔にならない様にそれ以上近づかず居る。

一年生ながら、彼女は合唱部でも指折りの美声の持ち主だという。素人耳にもそう思う、あと少しだけ技術を身に付けたなら、彼女は近隣校随一のソプラニストとなるだろう。

確か、この後輩はミスティアとか言った筈だ。何の妖怪なのかよく分からないのだが、背中の翼を見れば鳥の仲間なのだろうとは推測できる。

美声で獲物を引き寄せて喰う、などといった伝承は、どちらかと言えば人魚の類に似ている様な……ああ、そういえば彼女は『ローレイ』だった、これも忘れてた。

「……あ、あの」

然し、何と言おうか本能的に惹かれる声だ。

人が技術の研鑽の末に辿り着く声とは、それは確かに至高の芸術の一に数えられるものである。目に見えぬ筋肉、肺、喉を思うが俣に動かし、自らを一個の楽器にまで高める声楽は、それこそ素人の私がどれだけ真似をしても足元にも届かないものだ。

だが、彼女の場合は、彼女自身が楽器になるまでは至らない。音量、声質は上級生達と比べて弱く、また未完成。技術を競うのならば、彼女はまだステージに立てない。

だというのにその声は、歌うばかりか言葉を発するだけで、如何な美声よりも真つ直ぐに心を掴み、引きずろうとする。

その方角へ歩いていけば、一切の苦しみを忘れ、永劫の安らぎと共にあるだろう。彼女の声は、そんな絶対に有り得ないと断言できる甘美な誘惑を、四方八方に撒き散らしているのだ。

「あの……先輩？」

少し周囲に目を向ければ分かる、首は動かさずに視線だけを左右に振る。ランニング中の運動部も、ベランダに出てきている悪ガキ生徒も、喫煙中の教員方も、皆が彼女を見ている。

どうせなら最前列まで聴きに来れば良い物を、ああして遠くから鑑賞するだけとは勿体無い事だ。折角、始業に余裕を持った日程を組んでいる。暫くは彼女の歌を聞いているのも――

「——ん？ ああ、御免なさい。続けて良いわ」

聴衆の欲の無さを悲しんでいたら、いつの間にか彼女の歌声が止まっていた。上級生が数mの距離で、無言で立ち止まっていたらそれは気にもなるか。邪魔をするつもりは

無いのだ、軽く詫びて先を促す。

「いえ、あの……歌、お好きなんですか？」

歌が好きか——後輩に投げかけられた問いに、私は不動のまま思案を巡らせた。

嫌いではない、自分で歌うのも聞くのも、人並みには好む方だと思っている。何もする事が無い夜には、テレビのチャンネルを回して歌番組を探したり、ラジオを聴いたりするくらいには好きだ。だが、そういう一般的な『好き』を、合唱部の彼女が訊ねてくるのだろうか？

「いいえ、そういう訳でもないわ」

結論として、特別な感情を歌に抱かない以上、ノーと答えるのが妥当だと判断した。妙に自分の声が響くなどと思って、周囲に目を向ける。校庭が静かだ、運動部の掛け声も無ければ、ベランダからの馬鹿笑いも聞こえない。これは聴衆に悪い事をしてしまった、あまり長い間、彼女の歌を止めておく訳にもいかないだろう。

私の答えを聞いて、平均より二周りほど小柄なこの後輩は、表情を曇らせた……様に見える。言葉が少なすぎただろうか、傷付ける意図は無かったのだが。

悪い事をしてしまったかなと思いつつも、今は聴衆の為に、この場を去る事を優先と  
していて、

「……それじゃ、どうしていつも、私が練習してるのを見に来るんですか……？」

彼女に背を向け昇降口へと歩き始め、その時にもう一つ付け足された問いに、上半身と首だけ後方へ捻る。

どうやら私は相変わらずの仏頂面をしているようで、ミステリアは怯えたのか怯んだのか、きゅつと身を縮める。私にそういう、彼女を害する意図はない。身体、精神の両面でだ。

じゃあ、どういう意図があるのだろうか、自問する、

取り立てて興味が無いのなら、そもそも脚を止めるまでもない。その時間を自分の為に使う。

何故、興味を持ったのか。それは彼女の歌が聞こえたからだ。とは言え、歌としての完成度を言うなら、彼女の先輩たちの方が数段上だ、それは客観的な評価として正しい筈。歌詞やメロディも、競技の題材としては優秀なのだろうが、盛り上がりには掛ける退屈な曲に聞こえた。

成程、自己分析は終了した。ようするに私は、彼女の歌には愛着を抱けなかったが――  
四歩で遠ざかった距離を三步で埋める程、大股で近づき、

「私は『貴女の声』が好きなの。良いから続けなさい」

「え——えっ!？」

俯き気味なのが気に入らない、顎を引いて顔を上げさせる。額を軽く指で弾いてやっ  
てから、同じ速度で教室に向かった。

ふと気付けば、校庭や校舎の賑やかさは、普段の二割増しくらいで帰ってくる。ミス  
ティアの歌声が復旧したのは1分少々後の事であり、声の色は普段よりもむしろ鮮やか  
だった。

教室に到着して自分の席に座ると、珍しく同級生に声を掛けられた。

「アリスさん、大胆だね……」

「そっう？」

何に対して言われた事なのか、良く分からない。分からないがこの日以降、靴箱に忍  
ばせられるラブレターが激減した。メモ用紙の入手先が減った訳である、残念だ。

授業4つを終え、昼休みに入る。進路に合わせて授業科目の変更を受ける我が学び舎  
だが、私の場合は基本的に、受けられるものは全部受ける。

知識は多いに越した事はない。役に立たないと思っただけでも、どこでどのように生き  
るか分からない。どうせこれだけ詰め込めるのは学生の内だけだ、身分の特権を利用し  
ようではないか。



「……見事な模範的學生だな、午前午後で合計6コマか」

「どうせ学費は同じよ」

「そういう事じゃない、ないんだが……間違つてはいないから困るぞ」

別に友人が欲しくない訳ではない。ただ、何故か近づいてくる者が少ないだけだ。机に張り付いている彼女、犬走権は、その例に該当しない珍しい妖怪だった。

彼女は就職希望のようで、午前は一般教養二つ程度。午後は技術実習か、バイトに出るか部活動か、だ。そんな彼女から見れば、確かに私の日程は、過剰積載に映るかも知れない。

実際、そういう事も無いだろう。私は学業が終われば、後は家での時間になる。それに、普通の学校ならこの程度の授業数は当たり前だ。翻つて彼女は勉学を終えたなら運動、或いは労働を行い、帰宅後も近所付き合いで労働。合間合間に時間が入るだけで、彼女は私とそう変わらないか、それ以上に密度の濃い一日の筈だが。

「……隣の芝は虹色なのよ」

「紫色の芝生の上で野球はしたくないよ……どっかいくのか？」

「屋上。静かだもの」

今朝、ミステイアの歌を聞いていた為、結局読書を進められなかった事を思い出した。平凡な恋物語だが、主人公の恋人の回りに、複数の女の影が見えてきた所だ。盛り上

がりそんな部分なのだ。……ちなみに、主人公は女性であり、その恋人も女性である。ドロドロとした愛憎劇であることだなあ、などと古文風に感歎。

置き去りにされた椀も、不平をこぼす事はない。彼女は私の行動に慣れてしまつていゝるらしい。昼食なら誘つても良かったが、生憎と読書。沈黙が支配する場に、同行者を連れていつても仕方が有るまい。

「……いや、同じ本二冊で品評会を開くというのも……」

「お前の独り言は思考の経路が良く分からない」

「気にしないで、大したことじゃないわ」

彼女を友人と呼ぶ事は正しいのだろうか。いや、呼んでいいなら喜ばしいのだが。まあ、休日に二人で買い物にでた事もあるし、こうして短い言葉のやりとりもする。これなら一般的な友人の定義に当てはまるのではないかと信じた。

靴から本を引きずり出して教室を出るまでの間、空腹の椀は学食へと幽鬼の様な足取りで進み始めていた。……普段なら、背筋を伸ばして歩いていくだろうに、どうしたのだろうか。

私自身はと言えば、体調良好の今日の事。歩幅も速度も平常通り、靴に一定のリズムを刻ませる。

廊下の掲示物は、今日は張り替えられていないらしく、昨日と全く同じものばかり。

これもそうだ、これも読んだ、これも読んでしまった、目を滑らせる程度に留めて、人の流れへ興味の方向性を変える。

教室で感じた違和は、風邪の流行かとも思った。何せ、擦れ違う他の生徒にも何人か、椀と似た様な表情の者がいたからだ。人間よりは妖怪に、妖怪の中でも無機物の怪よりは半獣形の妖怪に、その割合が多かった気がする。

自分自身が健康体だからだろうか、昼まで気付かなかったのは迂闊だった。帰宅したらうがいくらいはしよう——

「あつ」

「あ、ごめんなさい」

——廊下で話をしていた誰かにぶつかってしまった。詫びて直ぐに去ったが、顔を見る事もしていない。誰だっただろう？

髪を止めるあの大きなリボン、確か同級生の博麗霊夢の筈だ。近くで何か打ちひしがれていたのは、隣のクラスの河城にとり。その2人を観察する様に、何か嗜虐的な笑みを浮かべていたのは、一年の古明地さとりだったと記憶している。

我ながら、関わりの薄い人妖の名を、良くぞ此処まで覚えているものだ。先輩達の名前も顔も、普段は意識しないが、おそらくは8割方は覚えている筈。同学年は全員、後輩なら9割程……む？

先輩と後輩で、記憶しているであろう割合が違う。それはつまり、興味の持ち方に差が有るといふ事だ。

「……そうか、私は年下好きだったのね」

独り言を聞く者はおらず、ツツコミを貰う事も無い。屋上への階段を登り、躊躇う事も無く鍵を開けた。うっかり鍵を閉められても、実は私の場合、そこまで困りはしない。

さて、私の半日を振り返ってみて、疑問を抱いた方もいるかと思われる。起床からの6時間、睡眠時間も併せて14時間（する事が無くて早く寝たのだ）、私は紅茶一杯しか口にしていない。

それで、健康な体を保てるのか？ 空腹で倒れはしないのか、と。端的に言えば、私には食事の必要はなく、本来なら睡眠の必要すらない。

アリス・マーガトロイドは魔法使いという種族である。

幻想郷に住む者を大別すれば、人間と妖怪の二種類に分けられる。多数派の人間、少数派の妖怪。私の住む地域では、むしろ妖怪の数の方が多い様にも思えるが、それに私を当てはめるなら、後者に分類されるのだろう。

だが、私のご先祖——それが何代前かは知らないが——は、人間であった。人間が魔

法を、現在の呼び方でなら魔術を身に付けた結果、食と睡眠が不要な存在となつたモノ。それが魔法使い、私という訳である。

かの『幻想の幻想』より更に昔から、幻想郷には魔法が当然の様に存在した。様々な文献に記述が残っているし、昔話の類にも語られている事が多い。歴史の教科書を紐解いてみれば、魔術史と題して数ページばかり、人名十数個が散らばっている。

然し、今の幻想郷では、日常的に魔術を用いる者など殆どいない。何時の頃からか幻想郷は、内包する存在を、現実的なものへと変えてしまつていたからだ。

長命の種族は過去に居た。今は、妖怪と人間の寿命に大差が無い。

空を行くには飛行機という巨大な金属塊が必要になる。自力で飛べるのは、言葉を解さぬ鳥や虫だけだ。

魔術という知識はあれど、実行する技術を持つ者が殆どいない。魔術が生む奇跡の代価、支払うだけの魔力を持つ者が少ないからだ。

然し、例外はどの時代にも存在する。

例えば、『博麗の巫女』。幻想郷の守護者として定められた彼女“達”は、生まれながらに強い力を持つという。それは魔力の最大量であったり回復量であったり（彼女達なら霊力と呼ぶが相応しいだろうか）、勘の良さだったり頭の良さだったり運動神経の良さだったりするらしい。

妖怪の脅威に、それ以上の脅威として相對するのが役目。そして彼女達は、それを苦とは思わない。彼女達が代々受け継ぐ術の数々は、今の幻想郷に於いて、對抗できる者は十を数えないともされる。……今の幻想郷とは、海の向こうの大陸やら何やら、兎角広い世界を示す言葉である。

例外というなら、私も例外だ。私の場合は、生まれつき魔術を知っていた。

赤ん坊がやがて立ちあがって歩くように、私は長ずるにつれて魔術を思い出し、扱えるようになってきた。

身長が伸びるのに合わせて魔力の最大量も増え、体重が増えるに合わせて魔力の回復量も増え、過去の文献に記された魔術の幾つかも、今ならば十分に再現できるレベルの力を持っている。

殴り合いなどしたら、非力な私では、校内ですら下から数えた方が早いだろう。

だが、事が全力の——互いの存在の否定し合いとなるなら、私に勝るのは校内で一人だけだ。そう、先に名を上げた博麗の巫女、博麗霊夢。客観的に彼女には勝てそうにないが、その他の誰に負ける気もしない。

飛ばうと思えば、何時かは飛べるようになるかも知れない。今は無理だが。もしかしたら何処かの文献に、小さな魔力消費での飛行技術を発見できるかも知れない。

得た知識の数だけ、私が出る事は増える。こんな楽しい事、そうは見つかるまい。

だから私は、一人でこうして読書をするのが気に入っているのだ。

「……でも、寒いもんは寒いのよ」

ここは校舎の屋上、季節は冬の真ただ中。制服は冬服だからと言って、完全に寒風をシャットアウトしてくれる訳ではない。

習慣だから此処で読書を楽しんではいるが、我ながら半分程意地になつてゐる気がする。雪が積もつた時など、座る事が出来ないからと、直立したまま昼休みの終わりまで過ごした。

そろそろ新しい定住地を見つけよう。いつそ校内に図書室の設立を要求してみようか——在学中に叶うのか？

ぱたむ、適当な所で紐の葉を挟み、B級恋愛小説を閉じる。屋上は一応立ち入り禁止の場所、階段を降りた時に教員に出くわすのは御免だ。たしか5歳ごろには使えるようになっていた、探知魔術を発動させて……

「……………」

屋上に、何か有る気がした。

何も無い、目に見える範囲では。だが、私の探查網には、確かに魔力の塊が引つ掛かる。いや、塊というよりは図面、複雑な図形を描いた様な……？

意識して探知範囲を広げていけば、似た様な形状のものがもう1つ、2つ、3つ、校

舎の様々な個所に。まだ有るだろうと網を広げていつて、その内に私の探査限界距離に達してしまふ——と、いうのと。

きーん、こーん、かーん、こーん。

「……あ、始業5分前」

時間的な限界もあり、それ以上屋上に留まっている訳にもいかなかった。

少なくとも昨日、こんなものはなかった筈。昨日の夜から今朝に掛けて設置されたものだろうか。学校に仕掛けられた魔術の匂い、これはどういう目的で用意されたのか？ 知的好奇心が猫ならぬ己を殺す羽目になろうとは、流石に私も予測していなかった。

幸運だったのは、今日は6コマ目を終えた後は、先生方もほぼ全て学校を離れる日程だった事だ。生徒の家を回ったり、何処かに出張したり。学校の守りは防犯装置にお任せ。完全に学生がいなくなった6時半ごろ、用務員が鍵を掛けにくるらしい。

この季節なら、その時間はもう完全に夜。確かに学生は残ってはいるまい。いや、部活動もこの季節だと、明るさと足場を求めて、校外で行う部ばかり。

——或いはこの特異な学校の体質が、餌場として狙われた原因かも知れない。

校内をくまなく歩き回り、違和を感じたのは、屋上を含めて8か所。校舎を立体的に



感じれば、それぞれの間隔はほぼ等しい。

8つの魔力の塊は、相互に何か繋がりを持ち、魔力を送信しあっている様だった。

それは、監視カメラの様でもあり、警報装置の様でもあり、何らかのトラップの様でもあった。正体がまだ分からないからこそ、私はそれに気を惹かれた。

魔力探知の種類を切り替える。生物非生物を問わず“動くもの”を捉えていた今までの探査網から、魔力だけを見る、より限定的なものへ。何処から何処へ、どういう目的で魔力が流れていくのか、それを探る為だ。

「……外部から魔力を注がずに作動する……自家発電？違うわね、これは……」

設置型の術式は、発動時に注がれた魔力が無くなったのなら、外部から補給をしなければならぬ。ところがこの術の場合は、どうやら術自体が魔力を收拾する事で、術者からの補給を不要としている。

大気中の魔力を回収するだけでは、最終的に赤字になる。密度が薄すぎる為だ。霊地にセッティングするならば兎も角、謂れも無い土地の学校の大気など、ただの酸素でしかない。

この術は、術の効果範囲内に存在する生物全てから、継続的に魔力を吸い上げているらしかった。これならば、吸い上げられる側が持ちさえするなら、確かに効率が良いのだろう。一人一人の所有魔力量が微弱になった時代でも、常に200人近くから魔力を

吸い上げ続けられる。帰宅して一日休めば、一般人ならばまた、所有する魔力の量は最大まで回復している筈だ。

……以上が、私の見立てである。全て正しいという自信はないが、6割方は真実に近づいている筈だ。誰が仕掛けたかは知らないが、あまり気分の良いものではない。撤去できるなら、それに越した事はない。

とは言え、私の得意とする術の分野は『使役』、自分に権利が有る物を扱う技術だ。他人の土地で、他人が作った術をどうこうするというのは、正直な所、苦手な部類に入る。まずは帰宅しよう、明日になったら図書館へ向かおう。過去の文献をあさり、解呪の術を中心に調べ、この魔力塊を除去する。正義の味方を気取るでもないが、自分の周囲にこういう事が起きるのは耐えがた——

が、しゃあん。

「……………」

鉄板を床に倒してしまった時の様な、けたたましい音が聞こえた。校舎の外だろうか、音源はなんだろう。あんまりに、危険な音に感じた。

近くの教室のベランダから覗いて、考え違いに気付く。私がいた3つ向こうの教室のベランダ、屋上のフェンスの一部がそこへ落下していた。

あまりに、状況の変化が急すぎる。何が起こったのかを正確に理解出来ぬまま、落下

してきた金属フェンスへと掛け寄った。

「斬られてる……!?!」

ニツパーで1つ1つ切断したり、重機で纏めて引きちぎったり、そういう痕跡はない。鋭利な刃物で一息に切断すれば、この様な断面が生まれるだろう、そう推察できる。

フェンスを、誰が斬るといふのだ。意味が分からない、目的が分からない。いや、考えるべきはそこではない。

誰が、フェンスを斬れるというのだ。

細くとも金属、戯れに刃物を振り回して切断できる代物ではない。長さも長さだ、普通に手に刃物を持って振り回して、届く範囲を超えている。

危険だ、と思った。探知魔術も用いる事なく、階段を駆け降りた。昇降口まで駆け降り、靴を履き換え、直ぐにでも家に帰ろうと決めた。一晩過ぎれば、その異常ももしかしたら収束しているかも知れないと、期待を抱いたので。

昇降口の直ぐ外には、見知った後ろ姿が立っていた。長めの髪を止める大きな赤リボン、やや高めの身長、同級生の博麗霊夢だ。彼女は、私が探知を行わずとも感じ取れる程の魔力を、自らの周囲に巡らせていた。

術の種類も、見れば分かる。『結界』——外と内を分断する、守りに長けた術。彼女は、何かから自分の身を守っている。

その「何か」が1体ではなく2体だという事に気付くまで、暫く時間が掛かった。私より数m先に霊夢、その数十m先に人影1つ。夜ではあれどその姿は、手にした刃から散る火花に照らされて映し出される。

成人女性、だと思った。きつとインドア派なんだろう色白で、細身で、出来の良いドルのよう。ここから見える情報には限りがあるが、彼女の手足が、まともな人妖のそれと作りが違う事は分かる。

柔らかそうな肌、薄くしなやかな筋肉、骨格から華奢な腕が、相応の重量を感じさせる刀を振りまわしている。戦闘行為を行う為に必要であろうと予測されるシルエツトから、それは大きくかけ離れていた。

纏う衣は、袖丈が二の腕の程までしかないワンピースドレス。薄緑色の布地は、きつと絹か何かなのだろう。白い布を花の形に作り、またレースにして、所々に装飾を散らした彼女の服は、普段着にしては小洒落ていて、フォーマルな場には品格が足りていない。時折こちらに背を向ける時、背面の大きな汚れが目立ち、それが彼女にそぐわぬ風に映る。

あのフェンスはおそらく、彼女がやったのだ。何の変哲もない刀にしか見えないが、

彼女が手にしていたのならそれも領ける。外見は只の女性だが、まさかその通りの存在だと思える筈もない。

彼女は、妖怪ですら有り得ぬ程の速度で動いている。生物が、あの様な無理のある速度で動ける筈がない、と私は思っていた。現実動いてしまっている彼女は、私の知識と常識の遙か外に存在するらしい。

見えぬ「庄」と衝突する度、彼女はか弱い脚に掘削機械も斯くやと力を込めて踏みとどまり、押し返している。

「庄」の正体が、そこにいたもう一体。刀を持った彼女を襲う火花の製作者。

それを、私はまともに目視出来ていない。黒い風景に黒い線が惹かれる、一瞬一瞬を見ていただけだ。どうやらそれは、彼女を左右から襲っているらしく、そしてどうやら人型の何かであるらしい。

空間に引かれた黒線を追って、視線を横へと走らせる。一秒程度も有っただろうか、それを観察する機会が与えられた。

黒かった、としか言いようがない。頭から足首まで、一枚の黒布に覆われている。手足をどれだけ動かしても衣は剥がれず、瘦躯に黒は張り付いたまま。周囲に比較対象が無いから確実ではないが、私や霊夢より背は高く、刀を持つ女性よりは低い様に見える。フードの隙間から見えた顔はいやに白く、おそらく面を付けているのだらうと思われ

た。

私は動けないし、霊夢も動かない。あの戦いに、割って入る術が無い。どちらが優勢なのか、それすらも分からない。

ただ、見ている事を知られてはいけなさと、何故だろうか、悟ってしまう。

あんなものは、そもそも今の幻想郷に存在出来る筈がない、外れに外れた規格外の常識外れ。座して待てば首を掴まれ、引きずられて何処か知らぬ場所へと捨てられてしまいうそう。

そうなれば私は朽ちた人形となって、倒木に背を預けるのだろう。水気を失った眼球が、眼窩を転がってからりからり。見ているだけでもそうなりかねない、瞬きも出来ず目が乾く。

そうして、逃げようという思考と、その試みに従わない体との葛藤を繰り返す事数度。黒い影はとうとう脚を止め、周囲に暴風を散らし始めた。

陸上部の練習風景で見かける、クラウチングスタートの構え。その意図は明明白白、最大の速度で飛びだし、駆け抜ける為のものだ。先程までの視界に止まらぬ速度を、更に増して、自らの質量をそのまま凶器に変えてしまえば？ それはきつと、機械仕掛けの巨大な鉄杭となって、刀を持つ彼女を貫くに違いない。

そう、あの構えを見た瞬間に、私は其処まで想像してしまった。私に理解出来なかつ

た彼女達の優劣は、この瞬間に限っては明確になる。黒い影がスタートを切った時、火花散る戦いは終わるだろう。

終わつた時、私は？　ここにいてはいけない筈の私は、どうなる？

逃げよう、あの2人の決着が付く前に。彼女達から見えない場所まで逃げよう。昇降口に留まつていてはいけない、上の階の教室に隠れるのだ。太陽が再び登れば、影も光に照らされて、居心地の悪さに消え失せるだろう。

そうだ、時間が解決策となる。此処から逃げれば助かる。私は、足音を立てない様に最大限の注意を払い、且つ迅速にその場を去つた。つもりで居た。

10mも行かず、階段が有る。階段は音が響く、慎重に、慎重に。1段、2段、3段、一步ごとに脚を休ませ、音の反響が無いか耳を澄ませる。

大丈夫だ、これならいける。4段、5段、6段、更に登り続けて踊り場に辿り着いた。まだ半分ではない、ここから先はまだ長い。

自らの安全と成功の確認の為、私は不必要に後方を顧みてしまい、  
——ぐしゃ

その瞬間は私には知覚出来ず、理解したのは、胸と背中がほぼ同一箇所に移動させられたという事。一秒未満の時間の中で、黒い布の隙間に覗く能面が、本来のそれよりやけに白く見えた事。

なにがおこったんだろな、なんて、言葉にする暇を貰えなかった。  
電源を落とす様に、全てが消えた。



## 二日目、妖怪の山

霊夢は、妖怪の山の坂道を下っていた。

時刻は既に8時を回り、街灯に頼つても足元は暗く、雪が轍となつて足を掬う。遠くに見る家屋の窓から零れる光には、住人の姿が幾つか、影となつて混ざっていた。

「霊夢、助かると思う?」

「助かるわよ、生きてるなら」

不可視の霊体が、霊夢の脳裏に直接問いかける。そうあつて欲しいと祈る様に、また、そうなると固く信じて霊夢は答えた。

彼女を、アリス・マーガトロイドを運びこんだのは、この聖杯戦争では唯一絶対の安全地帯だ。

あの場所は、争いの火を不必要に広げ、衆目を集めない為に定められた中立地帯。それと同時に、この戦争の脱落者や、無関係にして巻き込まれた者を保護する場所でもあるという。誰かに伝え聞いた訳ではなく、博麗神社で見つけた書物に記されていた事だ。

奇遇にもその場所は、霊夢自身が昔から、個人的に知っていた場所でもある。

成程、あの場所にすむ彼女なら、或いはあの状態のアリスさえ救えるかも知れない。彼女の力を、霊夢は幼い頃に幾度か見せられた。個人の人格を抜きにするなら、彼女の力は信用に足るものである。

「運びこんだ時点で、まだ息は有ったけど……結構、神頼みよ?」

「神頼み上等よ、こちとら八百万の神様を扱う巫女さんなんだから。あれだけ苦労して運んだのに、助からなきゃ嘘よ」

妖怪の山の道中、霊夢は、アリスを自ら背負って歩いた。

セイバーを実体化させて背負させた方が楽ではあっただろう。だがその場合、先程の黒い影の気が変わり、戻ってきた時の対処手段が無い。

セイバーの感知範囲はおそらく霊夢より広いだろうが、あの影の移動速度は未だに上限が見えない。アリスを降ろして戦闘態勢を取る前に、霊夢かセイバーかアリスか、誰かに一撃を加える事は十分に可能だろう。

その一撃が、先の校庭で未遂に終わったものだとしたら、セイバーすら耐えられない恐れがある。

霊夢が担いでいけば、セイバーは武器を構えたままで霊夢に同行出来る。万が一、敵サーヴァントの接近を感知した場合、奇襲の一撃を防ぐ事は可能だろう。それが宝具による高速攻撃だったとしても、同様に宝具を展開すれば良い。

更に言えば、靈夢の意向はどうあれ、セイバーはアリスの生き死にに絶対の執着が有る訳でもない。奇襲を察知したら、最悪でも靈夢だけを抱えて逃げるといふ手が有るのだ。セイバーが護衛、靈夢が背負って歩くという手段は、両者共に達した結論であつた。

「それにしても、ねえ……靈夢、貴女、あの女とそんなに仲が良かったのかしら？」

「まさか。人生において接点すら数回しか無いわよ」

「じゃあ、どうしてこんなものを貰つたのよ。丁度良いから私が使うけど」

靈体化した状態では見えないが、セイバーは現在、二振りの刀を所有していた。

一つは、博麗神社から持ちだした御神刀。飾りとはしか思つていなかったこの一振り  
は、セイバーが手にするや、戦闘に用いるに十分な性能を發揮する様になつた。

これはセイバーの持つ保有スキル『魔術：C』の為だろうか。通常兵器が効力を發揮しないサーヴァントに対しても、魔術的効果を纏わせる事で、斬撃が通る様になっているのだらう。刃が届かない範囲への斬撃も、おそらくはその副次的作用と思える。

そして、もう一振り。博麗神社から持ちだしたそれと違い、神代を思わせる壮麗ながらも重厚な装飾の鞘に収まつた長刀。僅かに鞘をずらして眺めた刃は、底冷えする様な靈力を放ち、それ自体が既に人界の宝具といえる代物であつた。

これがナイフや短刀なら、靈夢自身が護身用に持ちたい程だ。何せこの長刀は、魔術的干渉を一切行わずして、サーヴァントにすら傷を与えられるものだったのだから。

何故このような物がセイバーの手に有るかと言えば、アリスを預けた先で霊夢が与えられたからである。去り際に呼び止められ、押しつけられ、そのまま送りだされた。

霊夢としても、渡された理由が理解出来ないし、容易く渡して良い代物にも思えない。かと言って、貰ってしまったなら返したくならない程、それは魅力的な武器だったのである。

「良いわね、この刀。適度に重くて、すつぽ抜けが無さそう。反りの浅さも気に入ったわ」

「反りが深い方が抜きやすい、って聞いた事が有る気がするけど……実際にどうなの？」  
「この長さじゃ居合いはどっちみち出来ないから同じよ。それと、反り過ぎててもそれはそれで抜きにくいわ」

長刀を背に括りつけて、セイバーは甚く上機嫌であった。新しい玩具を得た子供の様でもある。このサーヴァントは、緊迫した場面でなければ、外見に釣り合わない幼さを見せるらしい。刀に対する寸評を聴きながら、霊夢は、客観的に見た自分の姿を想像していた。

学校の制服、ただし全身が鮮やかな動脈血と暗い静脈血の混合物に塗れ、それが乾いている。事情を知らぬ者が見れば、死人が歩いているとも思うか、或いは殺人者が獲物を探しているとも思いかねない。

アリスを背負って歩いていた時は、セイバーに周囲を警戒させ、姿を隠しながら歩いていた。あれから何時間か経過したからと言って、こうも不用心に歩いていて良いものか。

そういえば、不用心と言うなら――

「ねえ、セイバー。近くに他のサーヴァントの気配は？」

「無いわね。少しだけ、感知範囲を広げてみるけど……」

歩いている訳でもないからこの表現はおかしいが、セイバーが脚を止めた。霊体化したままで、彼女は目を閉じ、精神を静めて集中を開始する。

セイバーの感知範囲は、通常時で半径200mに及ぶ。だが、彼女の場合は、他の事に意識を裂くと、その範囲が極めて狭くなる。

例えば、校舎の屋上で術式の検証をしていた時、セイバーはせいぜい数十m程度しか周囲の気配を察知出来ていなかった。一度探知を始めればコンスタントに一定距離を把握する霊夢とは、感知の手段が異なるのだ。

そして、逆も然り。気を抜けば感知範囲が狭まるなら、集中すれば範囲は広げる事も出来る。現在のセイバーは半径400m、通常時の倍の範囲で、サーヴァントの気配だけを探っていた。

「……見つからないわ、この距離に居ないなら大丈夫。何か有っても、私が反応出来る距

「離よ」

「なら安心したわ、早く帰りましょ。警察にでも見つかったら厄介だし、早く制服を洗わないと明日が大変よ」

聖杯戦争、先は長い。そして、明日も学校には普段同様に通わなければならない。敵サーヴァントの襲撃で実行できなかった、校舎に仕掛けられた術式の無効化を行う必要がある。

更には、その術者の特定、撃破。自分自身の情報を隠蔽しつつ、他のマスターの探索。為すべき事は山と重なっていて、1日は24時間と定まったまま融通を利かせる様子も無い。

「……………」

「ん、どうしたの、セイバー？」

「ちよつとね、うん……………あ、気にしないで。気のせいだった」

「……………なら、良いけど」

帰路、セイバーの気配が立ち止まり、霊夢達が降りてきた山の方に意識を向けていた。霊夢達の感知範囲に敵サーヴァントの反応は無く、その日、これ以降の戦闘は、この2人の身には降り掛からなかった。

## —— S t a r t .

白い、白い世界に打ち捨てられていた。

立ち上がろうとしても床が無いので、手を付けられないし足も踏ん張れない。けれど、落す様子もなかったから、ふわふわと漂う俣に任せた。

どうして、私はこんな所にいるのだろうか？

首を傾げようとするが、動かない。

顎の下に手を添えようとするが、腕も動かない。

自分の体に何一つ、自分が動かせる部分が無かった。

動かなくても良いかな、とさえ思える。白い世界は少し寒いけれど、こうして横たわっているには楽でいい。

でも、直ぐに退屈になってしまった。

動けないから、思考を巡らす。どうして、私はこんな所にいるのだろうか？

こんな空間が本当に有る筈無いから、これは夢か何かに違いない。でも夢と思うには、何か決定的な欠落が有って、目を背けたくなる。

良く考えれば、どうしても目覚めなければならぬ理由なんて無いかも知れない。

目が覚めるから、人は生きようとする。二度と覚めない眠りなら、目覚めようと足掻

く意味は無いのだ。そうと決まれば、見たくない物は見ないで、自分の思考の中を泳ごうか——

「……懐かしいですね、こういう光景」

——……誰の声だろう？

私の漂う世界の天蓋を、ゆったりと揺す振る音がする。初めて聞いた筈の音が、その発した言葉同様、懐かしく耳を撥った。

「眠っていられるならば、それが良いのかも知れませんが。何も得られない代わりに何も失わない、そこは完全な世界です。完全を外に求めるなんて、自分を知らない人のする事なのに……ええ、自分が完全だと知らない人のね」

夢を見ているのだとしたら、外から聞こえるこの音も、また私の心が生んだ声なのだろうか。なら私は、この退屈な世界を、完全だと思っているのだろうか。

いや、確かにこの世界は完全だ。新しく付け足すものがないから、何も知る余地がないだけだ。

ああ、知的好奇心が帰ってきてしまった。欲が出てきてしまった。何も知る事が出来ない世界には、私は退屈で身が腐ってしまうだろう。

閉じた瞼の下では、周囲の景色がひたすらに上昇を続ける。私が沈み続ける。浮かびあがろうとして、右手を高く掲げて、水を掻こうとして、



「……、あう、く、あ、あつ……!?」

世界の白が、コートタールで塗りつぶされた。穢れ穢れて光を失い、粘度を増し、絡みつく世界。眠りを呼ぶ冷たさは、意識を呼び起こす灼熱となり、身の内に灯る。熱さから逃れようと口を開いても、タールが流れ込むばかりで息が出来ない。

苦しい。

苦しい、痛い、苦しい。

救いは、周囲の黒が重すぎるせいで、私自身の体が浮かび始めた事だった。遙か高みに、明かりが見える。不自然に優しい白ではない、冷徹な蛍光灯の蒼白でもない。火の赤から逃れる為に、そこにある安らぎの緑に手を伸ばし――

「おはようございます、今は午後10時29分。良い目覚めでしょうか?」

私の手は、誰かの手を強く握りしめていた。

私とそう変わらない年齢にも見える、ずっと年上の様にも見える。年下でない事だけは確かだろう。

長い緑髪が私の顔の数センチ上で揺れている。顔を覗きこまれているのだ。

視界を遮る頭部の向こうには、文明の利器の電気の光。やや煤けた、茶褐色混じりの白。

重ねた手は冷たかった。人の体温は有るのに、それを私に分け与えてくれない。小さ

な傷痕の幾つかを、薄くなった皮膚の感触で知る。その部位だけ、脈が強く伝わる。誰かの心臓の鼓動、生きている。そして、私も生きている。

「生き返った様な心地の筈です。普通ならば死んでいる様な重傷でしたから」

「……あな、た、は？」

その女性は、首の位置を変えようともせず、口角も最低限の変化に留め、だが良く通る声を発する。覚醒したばかりの私には、その声が少々騒がしく、逃れられるならば逃れたいとすら感じた。

「治療のし甲斐がない患者でした。私が手を付ける前に、もう4割程は回復してしましたから。貴女はキョンシーの親戚ですか？ 神霊を喰らって身を繕う、道士の忠実な部下の。

……ああ、2度の催促は必要ありません。ですが、まずは私に思う俣に語らせてください。過ぎ去った過去に想いを馳せるのは未来に絶望する事と同義にはならないのですから」

私の問いに、答えを返さない。返すつもりは有るのかも知れないが、雑多な言葉がその意思を埋める。

彼女の目と私の目は、未だに距離の変化を生まない。彼女が離れていこうとしないのだ。

「ですが、未来の形は既に一つ定まった。それはどう足掻いても変えられない事です。喜びなさい、望んでも与えられないものを、貴女は望まずに手にする事が出来た。或いは望みすら、貴女には与えられるかも知れないのです」

「……？　ちよつと、待つた……」

話を通じていないのだろうか。言語は理解出来ていても、意思疎通が出来ている気がしない。横から水を流し込んでも大河の流れが変わらない様に、彼女の言葉もまた、淀みを見せない。私がか言葉を差し挟もうと、飲み込んで無に帰してしまいそうな程だ。

「貴女は、生きていていい。生きる事を選んでもいい。その為に答えられる事は答えましょう、貸せる力なら貸しましょう。求めたまえさらば与えよう。私も万能ではありませんし、立場という枷は存外に重いのですがね」

緑髪の女は、そこまで語り終えると、私から離れて壁の方へと寄つた。首が動かせる、彼女を追つて首を傾けると、そこには椅子が一つと机が一つ。彼女は椅子に腰かけ、机に両肘を付いて、

「私は東風谷早苗。此度の第五次聖杯戦争に於いて、監督役を務めます」

初めて、私に表情を見せた。邪氣の無い笑み、純粹な喜びに満ちた笑顔だった。

何から聞けば良いのか分からなかったから、疑問を抱いた順に、追って訊ねていった。最初に確認した事は、私はほぼ確実に死んだのでは無かったか、という事だ。自分の身に何が起こったかは分からない。が、あの瞬間を今振り返れば、私の胴体は潰れていた。常識的に考えて、生物があのような状態になったら、生命活動を維持できる筈がないのだが。

「運よく死ななかつたのでしよう。だから、こうして生きている」

こんな答えを返されてしまつては、それ以上喰いつく事も出来はしない。実際問題、自分がこうして生きているのだから、あの時に死ななかつたというのは確かだ。意識が無くなつただけで死にはしなかつた、そう納得する他は無い。

「……じゃあ、何で、私が？」

では次は、私が殺された——殺されかけた理由だ。確か、私が最後に見たものは、黒と白で構成された殺意の塊。

「私はその場にいた訳ではない、本当の所は分かりません。ただ、貴女を運んできたご友人の言葉に従えば、貴女はサーヴァントの攻撃を受けたらしいですね。

聖杯戦争は可能な限り秘匿すべし、これは聖杯とサーヴァントの間の契約……いやさ口約束程度のもですが、律儀にそれを守るとは、中々見どころの有る英霊ではありま

せんか」

「友人……」

「命の恩人の名前を知らないなどは、薄情と言われても仕方がないでしょう。博麗霊夢、現在の博麗の巫女、彼女です。制服を見ると、貴女と同じ学び舎に通っている様です。が？」

霊夢、彼女が？ 彼女と私に、特別な交友関係は無かった筈だが。

幾らかでも接点を見つけるとすれば、私の数少ない友人の犬走椋が、確か彼女とも親しいという程度。

それでも、彼女に助けられたと聞くと、なんとなしに頷けた。彼女は、私だったから助けたというのではなく、誰かが死にかけていたから助けたのだろう。そういう人間に、彼女は見える。平等で、誰にでも同じ態度で接する。

誰にでも冷徹なのかも知れないとさえ思っていたが、そうでは無かった様だ。ともあれ、命を救われたからには、明日にでも礼を……

……待て、彼女という人物を突き詰めて考えている場合ではない。

「ええと、早苗さん？ 私にはまだ、良く分からないって言うか……その、聖杯戦争とか、サーヴァントとか、何なの？」

私には、早苗の言葉を理解する為の、前提となる知識が著しく欠けている。彼女が何

を語ろうと、それが何処か遠くに存在する、実感無きものに感じるのは、それが理由だろう。

「聖杯、というものが有ります。それは万能の願望機、あらゆる願いを実現する奇跡の具現。ただし、その奇跡を手にする事が出来るのは一人だけ。故に、聖杯を奪い合う戦いが起きる。」

聖杯自身に選ばれた7人のマスターは、サーヴァントを呼びだして戦わせ、競争相手を排除する。そうして最後の1人を選ぶ、それが聖杯戦争。分かりやすいでしょう？  
得る為に殺す、原型を保った闘争です」

私の疑問は半分ほど解決されたが、代わりに幾つか疑問は増えてしまう。この女性の言葉はそうだ、親切丁寧に答えてくれていて癖に、分からない事ばかり増えていく。彼女に好きに喋らせていけば、その内、分かる事すら分からない様になってしまいうので、「聖杯は、自らが選んだマスターに、闘争の為の武器を与えます。この幻想郷に於いてすら幻想となり、語り継がれる英雄——いや、英霊。彼女達をこの世界に顕現させ、令呪による拘束を承諾させ、サーヴァント……従者とするのです。」

数多の人妖が如何に足掻こうと為せない、過去の幻想の使役。これこそ、聖杯が万能たる証拠と言えましょう。現に貴女は、自らの知と理解の及ばぬ存在を、既に目にして  
いる筈では？」

彼女は言葉を緩めてはくれない。私の混乱を余所に、問いの答えを提示しつづける。確かに私は、魔術などといった言葉だけで説明しきれない何かを2体、この目で見た。

学校の校庭で、砂塵を夜気に巻き上げ疾走する黒衣の死神。

命を穿つ死神の突撃を、赤々と火花を散らして打ち返していた女性。

あの時は驚愕が先に立ち、状況を把握出来ずに居たが、時間を経た今は違う。目に僅かにでも留まった光景を再構成し、分析する程度の事は出来た。

過去の文献には、簡単な命令を実行させる使い魔の記述がある。使役する側がされる側より圧倒的に力量が上でなくては、まともに従わせる事は難しいのだとか。私自身も挑戦してみた事は有るのだが、そもそも使い魔を呼びだす事すら失敗した。

あの怪物2体は、何れも、現代の人妖とは次元を異にする力を秘めている。あれを使役するなど、人妖いずれの力を以てしても不可能だ。魔術を扱う者としての知識は、万能の願望機などという荒唐無稽な話をすら、理論的に納得のいく物と見なしていた。

「……………じゃあ、霊夢は」

「聖杯が、己を得るに相応しいと判断した、7人のマスターの1人です。彼女もまたサーヴァントを従え、他のマスターとの殺し合いに身を投じる——」

「……………殺し合い？」

「——私の言葉を遮る程、驚嘆に値する事実とは思えませんけれどね。貴女は自分の身

で実感したでしょう。サーヴァントは、貴女を容赦無く殺害しようとした。

ただの発見者でしかない貴女をすら、そう取り扱うのです。敵対者の殺害を、この戦争に参加した者が、躊躇うと思いませんか？」

躊躇わない筈がないだろう、反論をしたかった。

親しいという訳でもない、ただのクラスメイトの私を、霊夢は助けてくれた。私が彼女に支払える代価などない。そこには好意だけが有った筈なのだ。他者へ無償の好意を差し出せる彼女が、同じ顔で同じ手で、他者の命を奪うなど――

「何も不思議に思う事は無いでしょう。聖杯は、全ての願いを叶える。ここ幻想郷においてさえ不可能とされる自体も、聖杯ならば全て叶えてしまう筈だ。全てを支配する力、巨万の富、天地に渡る知識、願えば失われた命さえ。その為ならば、他者の命の6つくらい、消す事に躊躇いなど持たないでしょう？」

奇跡とはそういうものだ。それを得る為に、どれ程の代償でも支払える。何故なら、自らの支払える代償の総和は、未だに得ていない奇跡には常に劣るのですから。」

——ありえない、と断言できるのか？ 誰かを殺してまで叶えたい願いが、彼女には無いと、言い切れるのか？

理屈で考えれば無理だ、私は彼女の事をそこまで知ってはいない。だが、もしも彼女にその様な願いが有るのなら、



「それとも、アリス・マーガトロイド——貴女には、望みと呼べる物は何一つ無いと？」  
私と彼女は、最終的な所で分かり会えない人種なのかもしれない。

東風谷早苗は、愈々以て楽しげに、両手の指を絡め合わせて顔を覆う。その唇から音は漏れてこないが、両肩は小刻みに震えていた。

「ああ、聖杯の意図は全く読めない。流石に狸だ、いや百鬼に勝る妖魔だ。よもやこの戦争にアリス・マーガトロイドを、望みも持たぬ俣に参陣させるとは！」

仕方がないでしょう、全て吐き出さなければ腹が減る事もない。常に何かを残しては、心からの餓えを覚える事などついぞ無かった筈ですからね」

「……どういう意味よ」

早苗の言葉はやはり変わらず、私の分からぬ知らぬ事を、後から後から増やしていく。彼女はこういう人間なのだろう、その言葉一つ一つを捉まえて、問いただしていく事もあるまい。

が、何故だろう。今の言葉だけは、そのまま聞き流してはいけない気がした。  
「殺された」と知って、どう思いました？

自らが営々と積み重ねてきた力が及ばず、悔しかったか。遠く及ばない天上の存在に、恐怖を覚えたか。自分がその様な悲劇に出会った事を、悲しいと嘆いたか？

何れの感情も人としては当然。今の3例にその他数百種の色合いを混ぜて描いた絵

こそ、正しく人間の感情です。

只の7色で描けるのは見栄えが良いだけの虹ばかり……アリス・マーガトロイド、左手の包帯を解きなさい」

早苗の言葉に、状態を起こして視線を体に落とす。私は、ベッドの上に、包帯をぐるぐると巻き付けられて横になっていた。特に胸の辺りは、皮膚が見える隙間は1ミリたりと存在していない。

だが、右腕と両脚は無傷。左手には、手首から先だけ、包帯が巻かれていた。

左手の甲に、焼ける様な痛みが走る。包帯に手を掛けると、それが少しだけ収まる。早く解放してくれと、皮膚にのさばる何かが喚いている……？

目を瞑って、包帯をもうひとつ巻きつけて、横になったら誤魔化せないだろうか。そう出来るのなら、私は喜んで、今この場で睡眠を取るのに。

「おめでとう、貴女はついに全力で生きる機会を得たのです。7人目のマスター、アリス・マーガトロイド」

包帯を解いたその下には、三本の槍を重ねた様な、赤々とした文様が刻まれていた。

「……………これは？」

「令呪です。サーヴァントへの絶対命令権にして、マスターの証。これが有る限り、貴女がサーヴァントに裏切られる事は無い。」

これを失った時、貴女は絶対の命令者ではなく、一個の人妖となり果てるのです。迂闊に使う事の無い様に。使わずに終わらせられるなら、それでも良い」

マスターの、証？ どういうことだ。聖杯戦争などという訳のわからないものにエントリーした記憶は無い。私には、他人の命と引き換えに叶えたい願いなど……

「怪訝な顔をしていますね？ 言つたでしょう、『聖杯は、自らが選んだマスターに、闘争の為の武器を与えます』と。望みを持つ者全てが、その望みを叶える機会を得られる訳ではない。犬猫に生まれれば獅子を喰らう事は叶わないのです。

貴女は権利を得たのだ、権利を行使する事に何か問題が？

……尤も、この権利すら重荷になるというなら、権利の放棄も出来なくもない。幸いにも、貴女はまだサーヴァントを呼びだしていないのですから」

「……その方法は？」

「おや、乗り気ですか？ 方法と言っても単純です、私にその腕を預ければ、私の術で令呪を回収する。

令呪を失いサーヴァントも持たないなら、それはもうマスターでは無いのですから。何、痛みは有りませんよ。爪を切るより簡単に終わります。……それを、本当に望むのならば」

他者の命を奪つてまでの、どうしても叶えたい願いなどは無い。そんな事を望むくら

いなら、私は非日常からの脱却を望む。

誰かの命を奪うという事は、自分も命を奪われるという事だ。生きているのなら、死にたくないと思わない道理があるのか？

「……それで良いわよ、お願い」

「話は最後まで聞くべきですね、アリス・マーガトロイド。マスターでなくなれば、貴女は聖杯戦争から解放されると思っている。

おかしな事だ。そもそも貴女は、マスターで無かったのに殺されかけ、此処へ来たというのに」

「あ………」

「この社は中立地帯、不戦協定を結ばれた場所、目的が円滑に果たされる為の聖地。ですが、この建物を出たどの場所でも何があるろうと、私はそれに関与しない。隠蔽工作の手伝いくらいならしますがね、サーヴァントの前に立ち塞がるなどと言う愚行は出来ません。」

貴女が此処に立て籠るといふなら構いませんが、聖杯戦争の終わりは何時になるやら。数日か、数カ月か、此処へ隠れ潜むというのですか？

「……そうら、羽音が聞こえてきた。逃がした獲物を取り戻そうと、ハゲタカが空を飛んでいる」

時計の針が、もうじき午後11時を指し示す。聞こえてきたのは、秒針が時を刻む音だけだった。

羽音なんて聞こえない、どれだけ耳を澄ましても聞こえない。

「……最後に決断するのは貴女だ。ですが、最大限の助力はします。黒い影に怯えてこの社に立て籠るか、自らの剣と盾を取り、己が全てを尽くして戦う事を選ぶか。

或いは武器を持たず、然し社に隠れる事もなく、堂々と外を歩いて殺される道も有りますが……?」

聞こえないのに、聞こえないからこそ、早苗の言葉だけを耳が捕まえ、噛み砕く。

私は一度殺されかけた、何の手も打たずに外へ出れば、やはり殺されるに違いない。この建物の中は安全だというが、それも早苗がいる時だけかも知れない。

もしも彼女が外出する事が有れば、本当に此処は安全地帯だと言えるのだろうか。

私には、身を守る手段が無い。

「そんなの……」

一つしか、道はないじゃないか。

## 三日目、守矢神社

「随分低地に引つ越したもんねえ。今の人間は山登りを楽しまないのかしら」

午前5時、日が昇り切らない薄闇の中。

地上1000m、低地に出現した雲の海に隠れて、黒衣のサーヴァントは地上を窺っていた。

彼女の生前には、『山』といえば『妖怪の山』の事で、山の神社はやたら高所に有った。幾ら不便な場所に有ろうが、通う者は通う。飛べるなら飛び、歩くなら日が暮れる事も厭わず、だ。

それが今では、平地から歩いて10分で辿りつける様な低地に越して来ている。人に近くなれば、それだけ信仰は得やすくなるのかも知れないが、

「所詮は外の世界の神社、土地への愛着は薄かった……と、お？」

神社が土地を軽々しく移すとはなどと嘆こうとして、彼女は、地上に意外な顔を見つけた。目を細めるまでもなく、米粒より小さなその姿を、サーヴァントは追っていく。

『千里眼：C』を所有する彼女の目なら、この程度の距離は苦にもならない。

元々、1秒未満で数百mを移動する超高速戦闘を主体とする彼女なのだ。視力も動体

視力も、桁はずれに高くなくては、真っ直ぐ飛ぶ事すら危険に過ぎる。その目に映ったのは、自分が昨夜殺害した筈の、1人の少女の姿だった。

「……ありや、しづとい。しつかり死ぬるくらいのは力は出した筈だったのに」

全力を出した、とは言わない。死体が原型を保っていたのはその証拠だ。あまり酷く散らかせば、掃除をする人間に辛い思いをさせるだろうなど、些細な親切心が有ったのだが。

「……ま、いいわ。今度こそ、確実に……」

ここで殺してしまっても、どうせ近くに住んでいるのは風祝だけだ。微塵の挽肉が社の外に転がっていようと、参拝者が訪れる前に片付けてしまおう。未遂の仕事未完遂させよう、彼女はそう決めた。

空に体を留めた俣、頭と足の位置を反転させ、虚空に倒立する。周囲の雲を噴き散らさない程度に、魔力を風に変え、スターターブロックの様に足の後ろに配置した。

猛禽類にも勝る双眼は、獲物の表情から肌の血の気、爪の先の状態までを把握する。

地上へと我が身を打ち出し、獲物を叩き潰すまで4秒。この場所へ戻るまで、6秒。合計10秒あれば、完全に仕事は終わる。

目撃者狩りさえ終われば、いよいよ次からはマスター狩りも許可される。自分の能力を最大に活かせる分野だ、3日もあれば聖杯戦争を終わらせてみせよう。久しく離れて

いた闘争の予感、彼女を大いに高ぶらせていた。

「残りもの処理と行きますか……」  
ナイト・オブ・アポローン 『遠矢射る光明の徒』

英霊の英霊たる印、宝具、その真名の解放。渦巻く風の魔力を爆発させ、自分自身の体を風にのせ、黒衣のサーヴァント——騎乗兵ライダーは、地上へ降り注ぐ彗星と化した。

速度ゼロから動き始める以上、最高速へ至るまでにはどうしてもタイムラグが生まれる。最高速度に長ける重量級の列車など、走り始めは人間の脚に劣る速度ではない。

その点、体重も軽く、また体重と釣り合わない程の加速力を持つ彼女ならば、そのタイムラグはほぼゼロに近い。ゼロコンマの下にゼロを2つ並べる短時間で、ライダーは最高速へと達した。

1秒、2秒、行程の半分を過ぎる。此処からは僅かに減速と方向転換、攻撃の瞬間には地上と並行に飛ぶ。二次関数のグラフの如き放物線を描いて、ライダーは地上の獲物との距離を詰め、

「……………!?!」

残り、200m以下。時間にして1秒未満で埋まる距離。獲物の髪が風圧で乱れる程に接近して、ようやくライダーは自らの認識不足に気付いた。

加速に用いた以上の魔力を前方へ配置し、暴風を自分に当ててブレーキを掛ける。体の上下を入れ替え、降りてきた場所へ再び舞いあがらんと、放物線を強引に曲げる。



人の比ではない反射速度と思考速度が生んだ、地上との100mの距離。

「悪いな、私のマスターはやらせない」

その猶予のアドバンテージを無に帰す一条の光が、ライダーを中心とした円筒状の空間、半径10mを薙ぎ払った。

「いよいよしつ、不意打ち成功！な、言っただろ？絶対ばれないって！」

空に光芒を柱と為して、私のサーヴァントは、大手柄を立てた子供の様に飛び跳ね、拳を突き上げた。

いいや、実際子供のようなものだ。背丈は私より20cm程も低いのではないか。腕も脚も、骨格がまだ未完成である事を窺える細さで、手の爪の薄い事と言ったら。髪も肌の質感も、彼女がまだ成人と呼べる年齢に遠く達していない事を窺わせた。

だが、彼女もまたサーヴァントである以上、外見相応の存在ではない。召喚され、名乗りを交わし、現状を幾つか説明すると、彼女はすぐさま一計を案じ、実行に移したのだった。

曰く、「お前が囷になって飛びだしてきた相手を、私が撃つ」。何とも乱暴な作戦に聞こえるだろうか、当然私も聞いた瞬間に却下した。

だが、彼女は自身を持ってこう断言した。

「そいつは凄く速さで飛ぶんだろ？速いつて事は、直ぐに止まれないつて事だ。大丈夫だ、今、そいつは私達の頭の上にいるよ。そうだな……1029mつてどこか？」

サーヴァントは、例えば霊体化しようとして、互いに互いの気配を感じ取る事が出来るという。索敵可能範囲には英霊毎の、また、クラス毎の差も有る。彼女の索敵可能範囲は、どうやらキロ単位にまで及ぶらしい。

「どれだけ速くても、この距離なら私が先手を打てる。向こうの感知範囲は知らないが、仮に500m有るとしても、道中の半分だ。そこでブレーキを掛けようと、離脱前に一撃打ち込んでやるよ。なあに、ばれないばれない。見てろつて、な？」

自信に満ちた物言い、霊体化し、同時に魔術の詠唱を開始したサーヴァント。詠唱がほぼ全て終わり、後はキーを引いて射出するだけの段階で、彼女は私の背を押した。

「……大丈夫なんでしょうね。向こうが思ったより速かった、なんて無しよ？」

出会って数分の彼女を、全面的に信用出来た訳ではない。言葉に疑念がありありと浮かんでしまう。

それを、彼女は露程も気にしていないと言う様に、底抜けに明るく笑って、

「私はアーチャーだ。撃ち抜く事に関して、サーヴァントで私以上の奴はいないよ」

私の背を、小さな手でぽんと叩いた。

地上から放たれた光芒に飲まれる寸前、ライダーは、退避用の魔力を防御に用いた。自らを吹き飛ばす筈の風を下方に撃ちだし、破壊的な光と相殺させたのだ。仮にブレーキが間に合わず更に近距離で受けていれば、相殺は間に合わず、より光源に近い位置での直撃を受けていただろう。

ライダーの感知範囲は、他のサーヴァントに比べて、決して広くはない。通常時で半径100m程度、攻撃に意識を裂けば30m前後にまで距離は縮まってしまう。高速で飛翔する彼女には、そもそも広い感知範囲などは必要無い。その場所に自分から近づけば良いのだから、そんな技能を身に付ける事も無かったのだ。

「……チイツ……よくも引つ掛けてくれたわねえ！」

体を覆っていた黒い布は半分ほど焼けおちて、四肢が露わになる。姿を隠す為の布は、サーヴァントや宝具程の強度を持たなかったらしい。

余分な肉の一片たりとなく引きしまった手足は、ライダーの超越的な速度の源と、領くに足るだけの強さをも併せ持っていた。それらは光に飲まれた為だろう、火に焼かれたかのように、肌に黒い炭の様な痕を残している。

あれは熱閃だったらしい。上空では雲の一部が、再び水蒸気へと姿を変えていた。

クラス特性として、ライダーは『対魔力』スキルを持つ。彼女の対魔力のランクはB、三節以下の詠唱による魔術ならば無効化する。ならば今の魔術は、何節かの詠唱を重ねて打ち出した大魔術なのだろう。

「つこの、不意打ちなんて卑怯よ！」

「お前に言われたくはないな、お前には」

光によって眩んだ視力が、完全に戻るまでのほんの僅かな時間。

風の流れがライダーに、敵の接近を伝える。急降下攻撃を妨害したサーヴァントは、地上を離れ、ライダーの頭上へと舞いあがっていた。

『I guide you Star tours.』！

一小節の詠唱、サーヴァント——アーチャーの手から、『弾幕』が放たれる。旧き良き時代の娯楽、ライダーも身を投じた事のある遊びの、懐かしき華。だが、これは戦争だ。命中しても害が無い術など、真正面から突っ切って、

「ぐ、あつ!？」

突っ切っていけない。明らかにランクの低い筈の魔術が、ライダーの身を打ち据える。星の形状をした弾幕は、ライダーの肩にナイフの様に突き刺さり、更にはその身を地へ向けて打ち下ろした。

空中で体勢を立て直し、襲撃者の姿を見る。そして、今の不条理の理由を探す。自分

の対魔力スキルなら、今の魔術で傷を負う筈などは——

「——そうですか、貴女が呼ばれましたか……お久しぶりですねえ」

「久しぶりなのか？ 顔を見せてくれないと分からないぜ。いいさ、お前が名乗らないなら、私だけ勝手に名乗る」

——アーチャーの姿を、ライダーが見紛う筈も無い。

周囲の同年代の者と比べても、一回りほど小さかった身の丈。伸ばせば伸ばす程にくせが付く、少し困った質の金髪。1色では色の併せが悪いからなのか、エプロンを重ねた黒いドレス。箒に跨り空を掛け、右手には緋々色金の火炉。

「アーチャー、霧雨魔理沙。普通の魔法使いだぜ——『ミニ八卦炉』」

彼女の手にある小型の火炉が、詠唱により生まれた魔力を増幅し、単純な術をすら大魔術に昇華する。

高所の優位を得ようと上昇を狙うライダーへ再び光と熱の柱が放たれ、質量をすら持った魔力の束に、彼女は地上へと叩きつけた。

「ちよつ、何でいきなり名乗ってんのよこの馬鹿ー!？」

サーヴァントを召喚する用意は、昨夜から開始していた。その間に早苗から、聖杯戦

争における幾つかの心構えも聞かされている。

曰く、自分のサーヴァントの真名は秘匿せよ。語り継がれる幻想であるのなら、サーヴァントの弱点もまた、伝承の中に存在するかもしれない。そうでなくとも、名を知られたら手の内を読まれる事にもなりかねない。有利になる要素は全く存在しない。

だから、相手の名を探る必要は有っても、自分から名乗る意味など無いと言うのに……！

「そう言うなつてアリス、どうせ何時かは分かっちゃう事なんだからさあ」

「最後まで隠し通すつて考えはないの!？」

「あ、そりや無理。私の魔法を見られたら、遅かれ速かれどうしてもバレる。魔法を使わず勝つなんて無理だろ? 宴会騒ぎの小異変の時とは違うんだから」

「宴会がどうか知らないけど、それでも——」

「いーからいーから! ほら、実際にあいつはこうして……あ、まだ駄目か」

幾ら反論しても、こいつは少しも悪びれた様子を見せない。それどころか、自分が圧倒した印を見せようと、落下したサーヴァントを指差した。

冗談じゃない、まだまだ相手は動けそうじゃないか。この戦闘で勝ちを決めるなら兎も角、逃げられて、仕切り直しとなつてしまったら?

「……はは、は……魔理沙さん、とはねえ。そうと分かつてたら、また違う手を……」

「ほらー！ もう対策打たれ始めてるじゃないの！ アーチャー、とどめ！ もう襲ってこれない様に、確実に——」

確実に倒してと言いかけた所で、ごうと風が荒れ、声は足元の砂ごと吹き散らされた。うつ伏せにそこに伏していた筈の敵サーヴァントは、私の視界から忽然と消えていて、「おー、やっぱり速いな。追いつくのは無理かー……」

アーチャーの視線の先は、やはり上空。敵サーヴァントは風を巻き、己のフィールドの空へ舞い戻ったらしい。そちらへ目を向ければ、既に敵サーヴァントは霊体化し、戦闘から離脱していく所だった。

仕留めきれなかった事が悔やまれる。奇襲で混乱していた今こそ、最大のチャンスだっただろうに。

「無理かー、って……あのねえ、私はあいつに殺されかけたのよ！ また狙われるかもしれないの！」

「結構しつかり傷めつけてやったろ？ そうだな、数日ばかりは回復しきらないんじゃないか。

多分だけど、私の予想が当たってるなら、あいつはさっきのでかなり痛手を負った筈だから」

「はあ……頼むからちゃんと説明しなさいよ、自分に分かる事を飛ばさないで」

「悪い悪い。ええとな、多分あいつ、今は思う様に飛べない。そういう事だ。……それよりアリス、冬の朝は寒いぜ。社に戻って炬燵を借りよう、炬燵。蜜柑と熱燗も欲しいなー、今はどんな酒が有るんだ？」

早苗も大概会話のし辛い奴だったが、こいつはそもそも私の話を聞いていないのではないだろうか。

そう思う程、この小さなサーヴァントはマイペースで、自分の勢いだけでぐいぐいと進んでいく。

今も、敵サーヴァントが撤退したのを確認したからと、早くも社の中へ戻ろうとしていた。

「ん？ どうしたんだよアリス、朝食を御馳走になるだけだ。遠慮するなよ」

「貴女が用意する訳じゃないんでしょ？」

「そりやそうだ。人が作ったご飯を食べるのが良いんだからな」

中立である事を理由に、不可侵とされている守矢神社。そこに朝食をたかるサーヴァントなんて、監督役だという早苗も呆れるのではないか。

「まったくもう、ついさっきまで命がけの戦いをしてたつていうのに……」

「あれくらいなら日常茶飯事だろ？ 弾幕ごっこの本気版だよ、それだけだぜ。さー、この時代の食事はどんなのかなー。レトルト食品つていうの食べてみたい」



厚かましくも無欲な欲求を持つアーチャーは、ずかずかと社に上がり込んでいく。その後ろを、昨日からの物事の展開速度についていけない私は、借り物の草鞋を履いて追うのだった。

## 三日目、学校、朝

真つ赤に汚れた制服は、ドライヤーと暖房器具の総動員の結果、どうにか事無きを得た。霊夢は、私服登校する必要が無く、安堵していた。

黒い冬服だったのが幸いだった。これが白基調の夏服だったら、クリーニングに出す事さえ出来ない。受け付けの係が血相変えて、警察か病院に電話を掛けてしまいかねないからだ。

「……洗剤って便利よねえ」

「いきなりどうしたんですか?」

「河童の技術力に感心してたのよ。環境汚染が進むのも分かるわ」

今朝の霊夢は、気まぐれに、普段より何分か早く家を出ていた。深い理由は無いが、ただなんとなく、早く教室に入りたかつたらしい。

見えぬお供を引き連れ、寂しく通学路を行く羽目になるのかと思いきや、家の前には何時もの後輩、リグル・ナイトバグがいた。

霊夢自身、この後輩を悪く思っていない。賢く勘も良く、接していて飽きない相手だ。

何より、霊夢と彼女は付き合いが長い。霊夢が一人暮らしを始めた頃から——霊夢の母、先代の巫女が病没した頃からの交友となる。かれこれ4年となるか。

「……なーんか、まだ信じられない」

「霊夢先輩、今日は独り言多いですよ？」

彼女自身、自覚は有るのだ。話を聞いていても右から左、音を情報として捉えずに受け流していると、自分を正しく認識している。噛み合う答えを返せず、自分の思考を自分で言葉にして、1人で完結してしまっている。

今もそうだ、自分が置かれた立場にどうしても実感が湧かず、纏まった言葉を作れないでいるのだ。

無理も無い。1人の人間がトマトの様に潰されているのを目撃したのだから。しかもその人間は生きていて、治療が可能な場所に運びこむまで命を繋いでいた。その元凶はサーヴァントという名前こそついていて、実際何が何だか分からない幽霊みたいなもので、

「あんたさ、私自身が頭おかしいって思う様な話聞いても、私を心配しないでいられる？」

「……えーと、何を言ってるかよく分からないんですけど……」

「うん、ごめん。私だって良く分からない」

どれもこれも、他人から聞いたのなら、霊夢は信じなかつただろう。にわかには信じられない様な出来事が、自分の身の回りで起こって、日常を侵食している。

今この瞬間も、背後に霊体化したセイバーがいなければ、あの黒衣のサーヴァントが奇襲を仕掛けて来るかも知れない。

そうなれば、霊夢はこの後輩諸共、ゴミの様に吹き飛ばされている事だろう。

「……何か、有ったんですか？ 霊夢先輩、今日はやたら空を見上げてますし」

「そうかしら……そうかもね。隕石でも降ってきたらどうしようかと思つて」

「それは……すごく難しい質問ですね。どうしましょう……」

「冗談よ、真剣に考えないで」

リグルは首と触角を傾げて、真剣に大気圏を突破してきた岩への対策を練っている。と、ぼんと右手を左手に打ちつけ、素晴らしく明るい笑顔を見せた。

「地下に潜りましょう。妖怪の山は地獄洞——」

「鬼が済む地獄へ続く洞窟、だっけ。50mくらいで崩落してたわよね、確か」

「夢を持ちましょうよ……地下の大空洞なんて夢のある話じゃないですかー」

「今は現実主義が流行なのよ、幻想郷でも」

笑顔が萎れ、また思案顔、プラスして不平顔。知恵は有っても、リグルは幻想に生きたい年頃であるらしい。

ちなみに地獄洞とは、妖怪の山中腹にある、小さな洞窟の事である。地盤は頑丈なのだが、なぜか最奥部（とは言っても高々50m地点）だけ、完膚なきまでに崩落している。生物、植物、鉱物、別段見るべきものもなく、子供の度胸試し程度にしか使われない場所である。

「そういえばさあ、あんたは前に行つてなかつたつけ、あそこ。ほら、中学の理科で」

「あ……言わないでくださいよそれ」

が、世の中には物好きな奴がいる。例えばリグル・ナイトバグの様に、昆虫の生態調査という題材の宿題で、『洞窟にすむ節足動物の生活環境を再現した水槽』なんて物を提出する奴などだ。

手ごころな洞窟という事で地獄洞を採用したは良いのだが、しかし洞窟にすむ外骨格生物と言えど——蜘蛛やら百足やらザトウムシやら、その他名前も分からないが気持ち悪いという事だけ分かる生き物やら。クラス全体から不評を買い、泣く泣く逃がしに行く羽目になった——と、これで話は終わらない。

「うちの教室にまで逃げてきてたわよ、30cm級の百足。椀が椅子で潰して回つてた、すごい真顔で」

「私は悪くない、私は悪くない！ 因幡に足を引っかけられなかつたらあんな事には

……！ あと犬走先輩はいつも真顔だと思います」

運んで行く最中、階段の目前で、リグルが派手に転倒したのだ。大きな水槽一杯に詰め込まれた、生理的な嫌悪を生む大量の節足動物が、中学校の廊下に撒き散らされたら——思春期まっさかりの女学生たちがどんな悲鳴をあげた事か。結局、犬走椀と博麗霊夢を筆頭とする数名の例外が尽力し、数十の奇怪な生物は駆逐された。

リグル自身の仁徳——と、敵に回したくない耳の早さが無ければ、彼女の中学生生活はまさしくどん底となった事だろう。今では、本人以外は笑い話にしまっている思いい出に、霊夢は喉を鳴らす様な笑いを零した。

「あんたってさあ……めったなことじゃ死にそうにないわよね」

「……? 勿論、私はしぶといですよ。虫の妖怪ですから」

平和である。

これまでと全く変わらない朝の道のりは、昇降口を潜るまで続いた。

「あら、早いわね。昨日はありがとう」

教室の扉を開けて、霊夢がまず聞いたのは、馴染みの薄い静かな声。授業の発言以外、彼女は寡黙なのだ。

「……なんでピンピンしてんのよ、あんた」

彼女を背負つて登山した疲労は、靈夢の体からまだ抜けていないというのに、殺されたかけた筈のアリス・マーガトロイドと言えば、手を振つて靈夢を迎える余裕を見せていた。

「聞いたわよ、貴女が運んでくれたつて。優しいのね」

「誰だつて半死人を見たらそうするでしょ……じゃ、なくて」

「何で元氣か、だったつて。守谷の風祝は優秀ね、目が覚めたら殆ど傷は治つてたわ」

靈夢は思わず溜息を吐く。襲撃を警戒し、疲労と共に歩いた道のりは何だったのか。もう放つておいても勝手に治つていたかも、などと無茶な考えまで浮かんでくる。

が、浮かんできた感情はそれだけではなかった。

「……あなた、何でのこのこ出てきてんのよ？」

「平日だもの、学生は学校へ、当然でしょう」

「そーいうことじゃないの！ 折角あそこなら安全つて決まってるんだから……」  
拾つた命を、何故彼女は無為に危険に晒すのか。靈夢は腹を立てていた。

昨日の一件で分かつた筈だ。彼女の命はサーヴァントの気紛れで、瞬時に潰えるような代物だ。身を守るすべを持たない以上、聖杯戦争の間は、どこにいようと危険だ――それこそ、海の向こうまで逃げてしまわない限りは。

だが彼女は、一片の怯えを見せる事もなく、教室の定位置で読書に励んでいる。

「私の労力を無駄にするつもり？」

「貴女には感謝してるわ、お陰で無事に今日も登校で出来てる。……けど、それとこれとは別、おちついて？　まずは冷静に観察してみましよう、はい」

「……金髪青い目真つ白の肌、見れば見るほどむかつくわね」

「お褒めに預かり光栄です。でもそこじゃない、こっち」

両手を広げて立ち上がるアリス。手首を起点とした動作で、すうと手を掲げて見せる。

「は？　……ちよつと、あんた……!？」

怪我人が包帯を巻いている、それに霊夢が違和感を覚えなかったのは仕方がない事だ。

だが、アリスが昨日受けた傷は、胴体にだけ集中している筈。右手、それも指だけにぐるぐると巻き付けられた包帯は……？

アリスが包帯を解く。血の染みも無ければ、下にガーゼが挟まっている訳ではない。

「私もエントリーしたの、これからは宜しく……敵対するつもりはないわ。友人と命を賭けて戦うなんて事、できないものね」

人差し指、中指、親指。三本の指に分かれて一画ずつ、彼女の右手には令呪が存在した。



「……なんでよ」

「ん？」

3本の指で、鍵盤を叩く真似をするアリス。霊夢は、喉に鉛でもつつかえたかのような低い声で数歩詰めよった。

「なんで助けてやったのに、わざわざまた死にに來る様な事してんのよ!!」 早苗の所で引きこもってればいいじゃない、正気!」

「正気も正気よ、だからこうしたの。まさか世の中、全員が律儀にルールを守ると思う? 中立地帯、それは聞いたわ。でも、それを侵犯してペナルティが有る、とも聞かなかつたけど」

「……っ、そりやそうだけど……」

「引きこもって安全が確保されるのは護衛が有る時だけ。だから私も護衛を雇ったのよ、契約金は食費と寢床の提供くらいで済んだわ」

出来の悪いSPだけど、と、アリスは諦め声で付け足した。

「……参加するって、意味は分かっているのよね?」

「誤解しないで、さつきも言ったわ。敵対するつもりはない、それでいいでしょう? 私と私のサーヴァントには、最終的に叶えたい望みがないの」

「望みがない……?」 良く分らないわね」

理に叶っている事だ。確かに早苗は中立で、目の前で誰かが襲われていようと助けはしないだろう。少々目を離している隙に誰かが侵入した所で、それを追い掛けて咎め立てする事もあるまい。

そもそも、罰する権力が無い。面倒事の処理を引き受けた分、安全を確保されているだけだ。本気で自分の身を守るのなら、サーヴァントに対抗するにはサーヴァントしかない。

だが、望みがないとはどういう事か。偶発的に巻き込まれただけのアリスは、生き延びられれば儲けものと考えられるのかも知れない。然しサーヴァントは、何らかの望みを持つて聖杯に呼ばれ、この時代に現界するのではないのか。

「聖杯が欲しいならあげるわ、協力しましょう。2人掛かりなら、大概の相手はどうにかなる筈。私が生きているまま、この戦争を終わらせられるなら、少々の無理はするわよ」  
霊夢には、アリスの真意が分からない。いや、彼女のサーヴァントの真意が分からない。自分の命——既に無い命だが——を賭して戦いに身を投じるには、相応の理由がある筈なのだ。

少なくとも、霊夢はそうだ。自分の命と引き換えに求めるのは、自分の世界の平穏、安定。他者に世界を改変されたい為、聖杯の願いを無為に消費する為、身を投じた。

だが、アリスに願いが無いというなら——それが本当なら、と注釈は付くだろうか——

「結果は同じではないか？ 彼女もまた、仮に勝ち残ったところで、聖杯の奇跡を無為に消費するだろう。それは、霊夢にとつて望ましい事なのだ。」

「……アリス、あんたのサーヴァントは？ セイバー、そこにいる？」

分からないものは、見て確かめるべきだ。見えないにせよ、そこに居て会話を聞いていたのかは確認しておきたい。霊夢は視線をアリスに向けたまま、背後で霊体化しているセイバーに問う。

「この学校のどこかに居るわ、移動してる。探索中なのかしら」

「そうなのよ、マスターほっぼらかしてどこ行つてるのかしらあいつ。何か有ったら直ぐ飛んでくるーって言つてたけれど」

少なくともこの場にはいない事が、セイバーの探知とアリスの溜息、二方向から裏付けされる。主の傍らに控えない従者に、アリスは頭を悩ませている様だった。

「……いいわ、今はそういう事にしておく。そろそろ皆が登校してくる頃だしね。放課後、話をしましょうよ。その放蕩サーヴァントの面、拝んでやるわ」

協力して戦う。それが本当に可能なのか、必要なのか、見極めねばならないと霊夢は感じていた。今日は、授業に身が入りそうにない、とも。

朝のHRは、連絡事項が無い限りは、短時間で済まされる。あまりに短時間だということに、枠を多く取ってあるから、暇が余りに余ってしょうがない。

が、こと2年B組の担任は、その少ない枠をギリギリで使いきる事に定評が有った。話が長いのではない。話が始まるのが、やたらと遅いのだ。つまりは遅刻してくるのだ。

寅丸 星（とらまる しょう）、この学校の母体である、命蓮寺の血縁者だという。然しながら、僧職関係者にありがちな固さが、彼女には全く無い。勤勉さはあるが、何か欠けている。

53週、週5日、そこから長期休業を抜いて約200日前後、その9割を遅刻してするのが彼女だ。理由の7割が車のカギの紛失、2割がガソリン切れ、そして残り1割にアラームのセットミスやら自転車チェーンが切れたやら。

「おっはようございまーす！ 私遅刻しませんでしたよー、褒めて褒めて！」

そんな彼女だから、HRの時間丁度に教室に姿を見せると、おーと歓声が上がった。自然とわき上がる拍手を万感溢れる笑顔で受け、勝利者の様に両手を掲げる、ハングリータイガーことクラス担任は、

「静粛に！ 今日皆さんに素敵なお知らせがあります！ 遅刻しないで良かったー……」

為政者の演説の様に、両手を教卓に置いてから話し始めた。学級全体が鎮まる様、目で私語に耽る生徒を牽制する。この辺りは、流石に教員である。

「なんと今日は、転校生が来ましたー!」

今度の歓声は、「おー!」。先程の拍手より、本心から驚愕している。

それもその筈、昨日までそんな話はなかったのだ。既に2年次も終わりに近づいた今日この頃、転校してくるとは御苦労な事だと、何人かは怪訝な顔をする。

「分からない事が沢山だと思っから、みんな色々教えてあげてね! ……あと、高い所の物とか取ってあげてちょうだい。多分、手が届かないから。さ、それじゃあどうぞー!」  
ノリのいい生徒が率先して拍手をし、それにクラスの全体が追従する。拍手の雨の中、教室の戸が開けられ、1人の少女が入ってきた——と、後ろの方で、がたんと何かが崩れる様な音。見れば、アリスが机の上で、額を抱えて蹲り、

「ま、魔理沙あああああ!?!」

霊体化して回りに聞こえないのを良い事に、セイバーが声が裏返る程叫んでいた。

「おっす、北白河ちゆりだぜ、宜しく!」

学年が4つは下に見えるその少女は、グツと親指を突き立て胸を張る。それを見ている霊夢の目には、彼女のステータス情報が流れ込んで来た。

「……………うそ、あの子サーヴァント……………?」

同級生達との質疑応答は、霊夢の耳に入つてこない。彼女はただ、現世で学生生活を謳歌しようと企むサーヴァントの存在に、あっけに取られていた。

## 三日目、学校、昼から夜へ

昼休み、である。本来なら一人で居られる場所を探し、校内をうろつく時間だ。だといふのには私は、教室の一角に出来た人だかりを、やや離れた位置から観察しつつ頭痛に耐えていた。

人だかりの中心にいるのはあいつ、私のサーヴァント。何処から借りてきた偽名を使う、小さな少女だ。

「ちゆりさん、何処から来たの？」

「ねえねえ、この辺りはどれくらい知ってる？」

「学食に案内しようか」

珍しい物好きの同級生達に囲まれて、彼女は質問攻めに遭っている。私のこの頭痛には気付いていないだろう。

クラスでも最も低い身長で、椅子に座って脚を揺らしながら、彼女は何とも楽しそうだ。

携帯電話とは非常に便利なもので、連絡先さえ知っていれば、固定電話無しでも相手を問い詰められる。昨晚世話になったばかりの風祝に、これはどういう事なのかと電話

を掛けてみると、

『魔理沙さんが学校に行きたいというので、急いで手配しました』

などと、簡潔かつ何の役にも立たない答えを貰えた。人を殴りたくなつたのは初めてだ。

この短い時間で偽の身分証明を作り、更に転校を済ませた処理能力には恐れ入るのだが。

「……何なのよ、もう……」

別に、現界し続けられると魔力の消費が大きいとか、そういう問題はない。

アーチャーは単独行動に向けたクラスで、しかも彼女は魔法使いだ。自分自身で魔力を生成する力が強い為、戦闘さえしなければ、消費魔力は極めて小さい。

事実こうしている今も、私が彼女に供給している魔力は、スプーンを持つ労力と大差ないかも知れない。マスターが供給する魔力は、サーヴァントの魔力生成機能をオンにするキー、そういう物なのだ。

私が問題視しているのは、彼女の隠しきれないサーヴァントとしての気配を、他のサーヴァントに察知されないかという事だ。

霧雨 魔理沙、魔法を魔術に引き下げた最後の魔法使いにして、異変解決の立役者。知名度で言うならば、おそらく呼びだされる英霊の中では最高クラスだろう。名前も、



外見も、だ。私でさえが、あの黒白二色構成の姿を見れば、それが誰なのかを推測出来ていた。同じ時代に生きた者達は、もしかしたら体の輪郭だけで気付いてしまうのかも知れない。

もしも彼女が、対策を練らずとも全てを打ち倒せるクラス——最優と称されるセイバーなら、そう気苦労も無かつただろう。

だが、彼女はアーチャーだ。遠距離を主戦場とし、宝具の強さを売りとするクラス。三騎士の一角とされながら他の二者には、近接戦闘の技量や単純なステータスで後れを取る。だからこそ、敵に情報を渡さずして自分だけが情報を握り、策を練って堅実に戦う必要が有るのだ。

仮に私が、敵が彼女であると知ったのなら。

まず第一には、遠距離からの魔術による狙撃に対し、防御か回避の手段を探るだろう。それが魔術だと知っているのなら、きつと手段はある。怖いのは、魔術か物理的攻撃か分からない時だけだ。

そして、一撃さえ防ぐ事が出来たのなら、私は身を隠し、サーヴァントに攻撃を任せるとよし。彼女は、英霊とはなったが元は人間で、ただの少女だ。妖怪変化に近づかれれば、無力に引き裂かれてしまうのではないか？

今日、何回目かの溜息を吐く。どうしてこのサーヴァントは持つ知恵を出し惜しみす

るのだろうか。

椅子から立ち上がり、廊下へ出ようとす。どうせ、本を読んでも内容が頭に入らない。戸に手を掛けた所で、後方から声が飛んでくる。

「待てよアリス、置いてくなよー！」

不満げな、しかもそれを隠そうとしていない事がはっきり伝わる、アーチャーの声。彼女と私の関係は、誰かに明かそうと思つてはいなかっただけに、私は思わず凍りついた。

「あれ、ちゆりさんとアリスさんつて、知り合い？」

「ああ、私が住んでるのつて魔法の森の方だからさ、越してきて直ぐに知り合つたんだ」  
質問好きの同級生に対し、何処かで聞いた様な嘘をあつさり返すアーチャー。椅子から降りて、狭い歩幅に早足で、私の後ろを追つてくる。

「そーいう訳だから、じゃー！ 話の続きは明日だぜ」

これまで和気あいあいと話していた彼女達にあつさり別れを告げて、こちらの後ろをカルガモのヒナの様に歩く。

きつと、悪目立ちするだろう。これまであまり人と係わりを持たなかつた私と、転校生の少女との取り合わせ。同級生達からしてもそうなのに、私は手に包帯を巻き、そしてアーチャーは分かりやすくサーヴァントなのだ。他のマスターからしてみれば、今の

私は全く良い獲物ではなからうか。

「……何でこうなったのよ、もう」

「日ごろの行いが悪いんじゃないか?」

「あんたのせいでしょうが!」

「私を怨むのはお門違いだぜ、鳥と聖杯に文句を言ってくれ。……それより、ちよつと屋上良いか? 鍵とか有るか?」

「十分あんたは怨んで良い存在だと思——待った、屋上?」

思わず、口も悪くなる。霊夢がうつつたのかも知れないと自分でも感じた。が、寧ろ耳が引つ張られたのは、それに続いた彼女の言葉だった。

「そう、屋上。嫌な気配がぶんぶんするぜ、ここは命連寺の縁故だった筈だろ? だとしたらなんだこりゃ」

「経営の母体は同じらしいわね……鍵は開いてるわ、行くわよ」

昨日の昼、私を感じ取った違和感を、アーチャーもまた察知していたらしい。横をすり抜け私を追い越し、屋上へ向かう階段を、一足抜かしの駆けあがって行く。そこに何が有るのか。言うまでもない、昨日撤去出来なかつた魔法陣だ。

「……やる事はやるのね、あんた」

「ん? やる事やらないなら何をやるんだよ」

一番小さいサイズの学生服に身を包んで、それでも余った袖を捲ったアーチャー。意図せずしてロングサイズになってしまったスカートは、彼女本来の衣服と同様、翻って尚膝の下にあった。

屋上の扉は、鍵が掛かっていなかった。先客がいたからだ。

姿が見えるのは1人、だがきつと2人そこにいる筈。足音かアーチャーの気配か、そのどちらかでこちらに気付いていたらしい。

「あら、あんたも気付いてたんだ？」

「昨日の昼にね。……そっちはどうなのよ、霊夢さん」

「昨日の朝。セイバーが、屋上だつて言つてた。当たつてたわ、この通り」

先客は博麗霊夢と、おそらくそのサーヴァント、セイバー。霊体化しているのだろうか、私には気配が察知出来ないし、姿は当然の様に見えない。自然と視線は霊夢の所で止まり、

「……それ、解除できるの？」

彼女が踏みつけている、魔法陣へと下ろされた。

昨日と変わらずそこに有る、不可視の魔力によって形成された魔法陣。誰が設置した

かは分からないものの、この学校全体を覆い、内側の人間に害を為すもの。

私では、一切の手の着けようがない代物だったが、

「出来るわよ。結界をこれの上に張って、魔力の収拾を妨害する。暫く待てば自然に枯れるわ、花に水をやらないでほっとく様なものよ」

成程、術を破壊するというよりも、維持が出来ない様にしてしまうのか。それならば、大きな力を必要とはしないだろうし、博麗の巫女なら結界術はお手の物だろう。ならば自分は邪魔にならない様に、一歩引いて見ていようかと思うと、

「待った、霊夢。そいつを消すのは少し待ってくれ、私が見てみたい」

小さな体を、しやがみ込む事で更に縮めたアーチャーが、私達の誰の方をも見ずに静止した。

「何ですよ？ こんなもの、さっさと潰しちゃうのがいいじゃないの」

「そりやそうだな、でも直ぐに潰せる。だから待て、ステイ、いいな？」

「あ、こら、ちよ、押すな押すな押すな！」

犬にでも言う様な口ぶりで、アーチャーは不可視の魔方陣に近づく。上に立っている霊夢の脚をぐいぐいと押して、その場から無理に退かしてしまった。そして、両手を屋上のコンクリに触れさせ、瞬きもせず押し黙る。

僅かに、本当に僅かにだが、周囲の魔力の流れに乱れが有った。アーチャーを起点と

し、幾重か大気が渦を巻き、広がっていく。

おそらくは広範囲に魔力の目や耳を伸ばし、何らかの情報を探っているのだろう。魔術を行使する彼女は、静かで穏やかで、それでいながら冷たさを感じる表情をしていた。私は——きつと霊夢もそうだったのだろう、声を掛ける事も、身じろぎする事も憚られる様な気持ちになっていた筈だ。

「ねえ魔理沙、見立てはどう？ 私だって専門外なんだけど」

「……んー、あー……まず、お前と霊夢がどう認識してるか、聞きたいかな」

沈黙を破ったのはセイバー。実体化し、しゃがみ込むアーチャーを見降ろしている。それでもアーチャーはやはり立ち上がる事はなく、自分の足元に視線を固定するばかり。

問いを向けて逆に問いを投げられたセイバーは、霊夢の方に何か訴える様な顔を向けた。

「私はよく分からなかったわ、セイバーに聞いて。わかんなくても解除出来れば良いんでしょ？ さっさと解除しましょう、1秒だって長く置いておくのは嫌よ」

「霊夢はそりやそういう考えよね……そうね、『魔力・魂の融解・吸収』じゃないかしら。

魔力という防壁を喰い尽して、守るものが無くなった魂を最終的に引きずり出して喰う。術式自体も、その過程で吸収する魔力を消費して維持されてるみたいね……

「ここだけじゃなく、何か所か設置されてる。でも、メインのスイッチはここだと思う」  
へえ、と思わず感心した。

早苗が言うには、セイバーは剣士のクラスだという。なのに彼女は、魔術に関する知識も持っていて、設置された術式を解釈する事が出来るというのだ。

最良と称されるだけは有って、多芸なものだ。少しばかり自分の、この勢い任せな魔法使いと比べてしまった。

……そもそも、魔術師の自分と魔法使いの彼女では、あまり相性が良くない気もするのだが。

「ん、良い見立てだと思うぜ、セイバー。それじゃアリス、お前の方は？ 昨日の昼に見たんذار、お前はこういう風に感じた？」

「え、私？ そうねえ……」

が、セイバーの万能ぶりに感歎しつつ、私には疑問が一つ生まれていた。

私が昨日、この術に探知を仕掛けてみた所では、彼女と少し違う答えに辿り着いた。この場合、どちらが間違えているのだろうか。

「……『魔力の吸収、並びに監視』が用途だと思うわ。

校舎内に設置された魔方陣は8か所、それぞれが吸収した魔力をやりとりしてる。何処か一か所でも無効化されれば、他の7か所が察知して……多分、術者に警報でも送る

んでしようね。

魔力吸収に関しては、セイバーと同じ見方。余所から魔力を集めて、術を維持してるんだと思う。出来るだけ長い間吸収する為に、一回に吸い上げる量は少ない。卵を産む鶏は絞められない、って事かしら」

セイバーの見解では、監視という機能がごっそり抜けおちていた。彼女は寧ろ、魔力の吸収という面に於いて、この術式は恐ろしく凶悪な効果を生むものと見ているらしい。

だが私は、この術はエコノミックである事を良しとし、リサイクルに励む穏便な術に見えていた。だから、2つの見解を並べてみれば、どうにも食い違いが生まれる。

それぞれの異なる見解を聞いて、漸くアーチャーは顔を上げ、立つ。立ち上がった後も、この場では最も背が低い。顔立ちも声も、子供そのものだ。

ただ、声の重々しさ、目の光の強さは、彼女が決して与しやすい存在では無いと語る。「ん、良い感じじゃないか、さすが私のマスター。50点だ。100点満点で。」

セイバーも50点。良い機会だ、魔理沙様の魔法教室を始めるぞ、よく聞いとけ」黒板もホワイトボードも無い、空中にジェスチャーで8つの円を描く。指が辿った軌跡は、それが当たり前の様に、暗く発光する線として空中に留まった。



「……まず、こいつの第1の目的はアリスの言う通り、監視だ。監視範囲はこの校舎全体。数はここを含めて8つ、それぞれは等間隔に設置されていて、魔力をそれぞれにやりとりしてる。1つが7つに魔力を渡して、7つから魔力を受け取る訳だから……28の魔力ラインで構成された網って事だな」

アーチャーが空中で指を動かすと、描かれた円と円が、細いラインで繋がれる。視覚的に魔力のやりとりを表す為か、小さな星のマークが行ったり来たりを繰り返す。

1つの星に目を向けていると分かるが、基本的に1度通過した円は、他の7つ全て通るまで、また訪れる事はない。

「仮に、この魔力ラインが1本でも断ち切られたり、ラインの起点である魔法陣が破壊された場合、魔力の流れが乱れて、他の7つの魔法陣がそれを察知する。魔法陣の近くで魔力を使用しても同じだ、張った糸の近くで声を出したら糸は震えるだろ？ こいつは映像も音も送らないが、魔法が使われた場合はとにかく敏感に察知する様に出来てるらしい。……と、こいつが1つ目の用途。正直に言うとな、監視装置としちゃ出来が悪いな、うん」

円の1つがアーチャーの指に指で弾かれると、それはシャボン玉のように弾けて割れる。

途端、他の7つの円が、ミラーボールの様に多色の光を放ちながら回転を始めた。

ここまでの認識は、少々細に入っているが、大まかな部分では私と同じという所だろうか。

「その2、術自体の維持。こいつは、その3の副産物みたいなもんだが……先に話しく。

と言つても簡単なもんさ、かき集めた余剰魔力を維持に使つてるだけで、何の不思議もない。

意思の無い式神みたいなもんかも知れないな。あいつらは自分で魔力を作れるから、食事で十分だが」

「……ワンクツション、置いた訳？」

「ああ、そうだ。私やお前なら良いだろうけど、霊夢やアリスにはちよつと覚悟を決める時間を取らせたかった。

先に言っておくが、結構えげつないぞ。でも耳を塞ぐのは駄目だ、逃げるのは許す。5秒以内だ」

もう1つの用途、魔力の吸収について話すのだろう、そうは思った。逃げるとはどういう事だろうか、主語は私と霊夢でいいのか？

霊夢の方に視線を向けた。彼女もまた表情を強張らせ、小さく頷く。何故頷かれたの

か、正直には理解が出来なかった。

私と霊夢の、失敗した意思疎通に、潜められたアーチャーの声が割り込む。

「……よし、5秒だ。目的その3、魔力と魂の吸収。

と言つても、こいつは根性が無いしねじ曲がった術式でな、一度に大量に吸えないんだ。魔力だつて細々と吸い上げるだけだし、魂なんて頑丈なものには歯が立たない。

だから、『歯を立てなくても良い様にする』んだよ、こいつは。この術は、まだまだ〃発動してない〃つて事を忘れるな。

この術が発動すると、8つの魔法陣が簡単な結界を張り巡らせる。外から侵入は簡単だが、中から出るのは難しい。落とし穴みたいなもんだな。

で、魔力を吸い上げる。大量に、兎に角大量に、だ。本人が持つてる最大量を越えて吸い上げる。……当然、出来る筈もないな。無い袖は振れない、じゃあどうするか？

こいつはな、中の生き物の『内臓を溶かして』『直接飲める様にして』『放置するんだよ。その上で、魔力も魂も、ドロドロに溶けた肉の中に、肉団子みたいに混ぜちゃう。

魔力を吸い取るのは、抵抗されない為もあるんだ。臓腑を溶かす呪いを防がれない為にな。

脳から心臓から溶かされたら、当たり前だが死ぬ。腹がぺしゃんこにつぶれた死体の山が出来る。そうなつてから術者は悠々と出てきて、死体の腹でもかつさばいて、中身

を啜るんだろうさ。ああ、えげつないと思うだろ？　まだまだだぜ、まだ話は終わってない。猶予はもう1度、5秒だけだ」

——死体の山。そんな言葉を、現実に関がる文脈で、誰かが吐く日が来ようとは思わなかった。

死体とはフィクションの中に存在するか、ニユースの文面に現れる程度のもの。私自身も死体になりかけたとは聞くが、実際に私は生きていて、死にかけた私を私が見た訳ではない。実感が無いとは言えないが、その実感を重く受け止められない。

だが、この術が仕掛けられたのは、他でもないこの校舎だ。狙われているのは、網にかかっているのは、この学校の生徒だ。つまり、それには自分も含まれている。今この瞬間まで、命の危機に在った事を知らなかったのだ。

「5秒。人間の内臓を融解する様な強力な術だ。しかも、発動しなくとも外へ効果を及ぼすタイプ。アリスや霊夢くらいの魔力があれば今は別に何も感じないだろうけど……全員が全員そういう訳じゃあない。」

どう抑えても——いや、抑える気も無いのか。この校舎には少しづつ影響が出てくるよ。体調不良を訴える奴、昨日から増えてないか？　なあアリス、今朝は病欠してるの居なかったか？」

「病欠、は……居たわよ、何人か」

「だな、席に空きが有った。私に話しかけてきた奴も、顔色がやたら悪いの居たぜ」

「そうだ、確かクラスで2人、病欠が居た。急な発熱と体調不良で、大事を取って休むという事だったらしい。」

隣のクラスでも1人か2人、だが冬という事もあり、風邪の可能性もあるとは思っていたのだ。

「もう影響が出てきてるんだよ。溶けはしなくとも、内臓にダメージが少しずつ蓄積し始めてる。抵抗力を失って、魔力は簡単に奪われる様になるだろう。この学校は餌場として最適化されていく。」

本格的に発動されればその瞬間に。発動されなくても……1週間以内にアウトだ。その頃には対抗手段を知らない奴ら全員、病院のベッドの上に移動する事になるぜ。

……以上、これが私の解析結果だ。98%くらいの自信が有る」

「防ぐ手段は!?!」

淡々と語り終えたアーチャーに、掴みかからんばかりに訊ねたのは霊夢だった。私が口を挟む間も無い。常に校内を飄々と流れている、彼女の面影が見えない。彼女が大声を出すのだという事すら、私は今日、初めて知ったのかも知れなかった。

「有るが、その前に確認するぜ。こいつを壊せば、仕掛けた奴に伝わるだろう。ここにマスターとサーヴァントがいるのを知らせる事になる。平日の日中、学校に居られる立

場、と特定してな。ここは餌の集まりじゃなく、敵が隠れる場所かも知れない、と思われるんだ。

先に言うが、木を隠すなら森の理論は嫌いだ。巻き添えが出るからな」

「……つまり、マスターである事を隠すのは諦めろって事？」

「そう言う事だ、アリス。危ないかも知れないが、それが一番良いんだよ」

激している霊夢を制し、アーチャーの言葉を引き継ぐ。

この学校の生徒か教師の誰かが、サーヴァントの術を見破って解除できる、と知れた場合を想定する。その様な事が出来るのは、同じサーヴァントかそのマスターである可能性が高いだろう。もしもそれが誰なのか分かれば、ピンポイントで攻撃するのが良い。労力は抑えるべし、だ。

だが、誰なのか分からない場合は？ 簡単な話である、全員殺してしまえば良い。サーヴァントの前に、人間の命など紙屑より軽い。少しでも抵抗出来る者がいたら当たりだ。

「寧ろ、名乗り出ちまおうぜ。私がマスターですよーって、名札着けて堂々とき。どれが肝心の得物だか分かれば、向こうだってピンポイントに狙ってくるだろう。巻き添えにしちやいけない理由はないが、目立たないに越した事も無いんだから。」

……それに、多分向こうは、今夜動く。今夜この学校に居れば、一組くらいとは遭遇

出来るんじゃないかな」

「トランプが解除された、きつと相手はサーヴァントだろう。向こうはそう判断する、という事かしら？」

「だったら早く始めるべきよ魔理沙、今も魔力は吸い上げられている。僅かな一滴も、与える事を惜しむべきだわ。昼休みの時間内には終わらずとも、放課後までに8か所全部……」

「大丈夫だ、もう始めてるさ」

「実行に移すべしと提案したのはセイバー。8か所の術式の解除は、移動時間も含めて考えれば、おそらく数十分から1時間は必要だ。昼休みの残り十数分では、2つか3つを片付けるのが関の山だろう。」

「だが、アーチャーは急ぐ様子もない。セイバーの言葉に割り込んで、足下の陣に指先を向けた。仄かに、夜の星の様に淡く光るアーチャーの手。彼女の持つ星の属性を、小さく収束させたものだろうか。」

「教えておくれ、魔法使いは面倒を嫌え。楽な方法をどんな時でも探すんだ。1つ1つ潰すんじゃない、纏めて一気に叩き壊す——『My fingers down the stars "Cold Inferno"』」

一小節の短詠唱。私の耳には、たった一言で終わった様に聞こえていた。

私達に説明をしていた時の、倍かそれ以上の速さでアーチャーの唇が動き、早送りの  
 音声を再生する。

詠唱が終了した瞬間には、彼女の足元の魔法陣が、瞬間的に凍結、崩れ落ち始める。

「え、今……」

咄嗟に探知術を発動、探知網を校舎の全域にまで広げる。

昨日位置を確認した、屋上以外の7か所全てに、魔力探知に特化させた手を伸ばす――

「――無い、どっかにも……」

魔力の流れが滞り、砕けている。1つ2つではなく、存在した魔法陣全てが、だ。全てが此処の1つと同様、凍結し、その用途を完全に失って崩壊していた。

アーチャーはこの場を決して離れていない。魔法陣1つ1つに、接触した筈はない。それどころか、今朝からアーチャーが私と離れて行動していたのは、早朝の短い時間だけ。しかもその時間は、彼女は職員室で転校手続きを終了させる為、自由に動けはしなかった筈だ。

「ゴールドインフェルノ、『凍結の概念武装』ってどこか？ 氷精を真似――参考にした。

8つの魔法陣全部に魔力を循環させてる術式なんだ、私が流しこんだ魔力も隅々まで



行きわたる。で、全ての陣に同時に、“凍結した”って概念を張り付けた後、力任せにぶつ叩いて壊した。ちよつと細かい芸だったから、思ったより時間掛かったけどな」

時間が掛かる？ 冗談ではない、アーチャーが詠唱を行ったのは数秒の出来事ではないか。それ以前に魔力の注入を開始していたとしても、それには発声も詠唱も伴わっていない。

ならばこのサーヴァントは、一シングルアクション工程でこの大規模魔術に干渉し、細工を終了したというのか？

指を向けるだけのガンド撃ちと同程度の労力で、校舎1つ覆う規模の術式に、爆弾を仕掛けたと？

「……ちよつと、無茶苦茶すぎるわよ……？」

私の、魔術師としての狭い常識で測る。この様な事が、可能なのか？

時間を掛ければ出来ない事は無いだろう、理論は単純だ。私でも思い付くだけなら思い付く。が、実行に移そうとは決してするまい。複数の魔法陣からなる巨大な術式に、単一個人の魔力で干渉しよう、などとは。

1つのシステムとして完成し活動している術式は、そう容易く外部から書きかえられるものではない。縫物の糸を一本一本解して縫い直す様な、気が長く細かい作業が必要とされる分野の筈だ。こんな力任せに、一撃で一瞬で消し飛ばしてしまえる様なもので

はない。

「……アリス、あんたのサーヴァントってキャスターだっけ」

「本人はアーチャーだつて主張してるわ……あんまり信じてないけど」

霊夢も、どうやら状況の把握が完了した様で、いぶかしげない目を私に向けてくる。無理もない、私自身が疑っているのだから。

仮にもサーヴァントが仕掛けただろう術を、こうもあっさり消し去つて平然としている、小柄な少女。

「私はアーチャーだ、間違いないぜ？ それよりもこの先だ、もう招待状を出しちゃったんだからな。気が早けりや今夜にでも、お客様がやつてくるかも知れないんだ。授業の合間に昼寝をしとけよ？」

「……えーと、次の授業ってなんだっけ。座学も良いけど実験したいなー、キノコの胞子の採取とか」

霧雨魔理沙は事も無げに、階段を降りて教室へと戻っていく。彼女も、やはり時代に名を馳せた英霊なのだ。現代の常識では理解の遠く及ばない存在だ。

だからだろうか。私は、彼女の思う事が分からなかった。

彼女は何を望み、この時代に召喚され、戦うのだろうか。望みは無いと彼女は言った、それは、そのままに受け取って良い言葉なのだろうか。

昼休みの終了まで、まだ十分ほどは有るだろう。少しゆっくりと、私は階段を降りていった。何秒か遅れて、霊夢達も屋上を後にした様だった。

日が完全に落ちて、校舎内の灯りも全て消されてしまった。

懐中電灯無しではとても歩けず、吐き出す息は明らかに白い。外履きで廊下を歩いている為に、足音がやたらと喧しく響く。

「……セイバー、監視装置の方は済んだの？」

「仕組みとか良く分からなかったから、元の電源から壊してきちやった。修理業者も、流石に今夜の内には来ないでしょ？」

「そうね、だと良いけど……あーあ、本当に出てくるのかしら？」

霊夢の隣には、実体化して既に刀を抜いたセイバー。

校舎に侵入する前に、アーチャーの提案で、警備会社が設置した装置の電源を破壊させた。

夜に余計なものを交えたくない。聖杯戦争は、昼の世界から切り離されていなければならぬ。霊夢の考え方は、非常に保守的だ。

二階から階段を降り、踊り場で立ち止まる。昨日、アリスが潰されていた場所だ。

「来るさ、少なくとも近くには来る。そうすりや私の探知範囲に入る。私より広範囲の索敵をするには、使い魔を飛ばすくらいしか手はないぜ」

「霊夢、貴女のサーヴァントは？ 何か見つけたとか……」

「セイバーの方はまだだと思っわ、何か見つけたら言え、とは言っているもの」  
数m離れてアリス、その後ろにアーチャー——後ろ歩きで、時々アリスにぶつかっている。

射手のクラスである彼女は、遠くの獲物を発見する事にも長けているらしい。その彼女の索敵範囲でも正しく捉えきれない以上、少なくとも自分達を察知している敵はいるまい——そう、霊夢もアリスも考えていた。

十分に暗くなつてからかれこれ数十分、彼女達は校舎を彷徨い歩いていた。数分ばかりの滞在では入れ違いになりかねない、教室に隠れ潜むのは危険だ。一か所に留まっているというのは、外からの狙撃などが有り得るといふ事で、セイバー・アーチャー両名に却下された。

昇降口から校庭を覗く。積雪を街灯が照らして、夏の夜よりもむしろ煌々と明るい。昨日夜、セイバーと黒衣のサーヴァントが戦った古戦場だ。

100mや200mの距離を、距離自身が消えたかのように瞬間的に埋める爆発的加速。その速度から生まれる弾丸の様な一撃を、セイバーは凌ぎ切り、反撃に転じる事も

出来そうだった——宝具を抜いて考えれば。

「あの黒いの、速かったよね。最後にも何か凄いの出そうとしてたし……宝具？」

「だと思っわ、見た限りだとあれは……Aランクにプラスが幾つか付いておかしくなさそうだった」

宝具が特に強力なクラスと言え、やはりアーチャーかライダーが挙げられるだろうか。

アーチャーはそのアリスのサーヴァント。ならば、あの黒衣の死神は、ライダーである可能性は高い。ライダーとして現界でできるだけの逸話を持った人妖、そう人数は多くは、——？

霊夢は、思考に走ったノイズに首を傾げた。

「ねえ、そう言えばさ」

「ん、何よ？」

「だからさ、そこに居るお姉ちゃんもサーヴァントなのよね？ 刀を持つてるから……やっぱりセイバー？ 良いなー、最良のクラスじゃない。でも良いんだ、他の人の持つてる物を羨ましがったらいけないって、お姉ちゃんは言ってたもん」

逸話といえ、霊夢自身のサーヴァントも未だに正体は不明だ。

剣士のクラスに該当する、過去の幻想に存在した人妖。果たして誰がいるだろう？

ふと考え始め——何かがおかしいと、ようやく気付く。

「……アリス、セイバー、アーチャー。この中で、今、私と話してた人？」

「私じゃないぜ」

「セイバーじゃないの？」

「違うわよ。霊夢、そいつを捉まえちゃって。サーヴァントじゃないわ、マスターよ」

違和感を抱くことすら出来ず、霊夢は「そいつ」と話していた。声の出所はどこだっただろう、おそらくは霊夢の胸程度の高さだっただろうか。

距離は？　すぐ近くだ、抱きしめた胸の中で喋っている様な距離。

咄嗟に霊夢は、捉えるのではなく殴り倒す勢いで、右手で作った拳を横薙ぎに振るい。

「あはは、危ない！　もう、帽子が落ちちゃうじゃない。無くしちゃ駄目なのよ？」

せっかくな作ってもらったんだもん、これは私の、誰にもあげないよ」

50cmも離れていない距離にいた「そいつ」は、毬のように跳ねながら、霊夢の腕の下を潜って、近くの教室の前に立った。

考え事に耽っていたとしても、霊夢は目を閉じていなかったし、耳も済ませていた。彼女以外にも、この場には6つの目が有り、その内の4つは特別製、サーヴァントの目だ。

完全な透明人間でもなければこうは——いや、透明人間でも足音や呼吸音は残る。そ

これらの要素を持ち、そして隠しもしない。彼女は姿を見せたままで、誰にも気付かれずに其処に居たのだ。

「えーと、いちにいさんよん。半分半分かしら？ 困っちゃったわ、こんなにたくさん殺せないもん。あ、でもねでもね、大丈夫なのよ。並ばなくてもいいように、私がちゃあんと頑張りました！」

小さな体、並べばきつとアーチャーより更に背が低いだろう。それに比例する小さな頭に、鏝の大きな帽子が乗り、だが顔が隠れている訳ではない。

色の白さは人種によるものか、それとも生活環境によるものか。可愛らしさはあるが、その白さは人形というよりも寧ろ——燭台から零れ落ちた蠟、だった。

火はとうの昔に消えて、熱も引け、素手で触れる事はできるだろう。然して指先に伝わるのは整形された滑らかさではなく、重力に従った末の歪な形状。

燃え尽きた芯の灰が、白を穢す唯一の色。灰は彼女の無邪気な声であり、言葉だ。口を開かなければ彼女は、不健康的なだけの少女で居られるのかも知れない。

「初めまして、お姉ちゃん達。私は古明地こいしです」

ぺこり、行儀よく両手を膝の前に揃え、頭を下げる少女。落ちた帽子を慌てて拾い上げると、頭の上に被せ直して、彼女は微笑んだ。

古明地こいしは、目を細めずに笑う癖のある少女だった。

## 三日目——salad bowl 1.

「マスター一人で姿を見せるなんてね、死にたいのかしら？　そういうことなら遠慮無く、痛いと思う前に切り捨てるわよ」

「セイバー、あんまり手荒なことはいししない。命呪だけ切り落とせばいいじゃない。……って言っても、どこに命呪が有るのか分からないわね。剥ぐ？」

単身で眼前に現れた少女に、セイバーは早くも攻撃の意思を見せている。霊夢もまた、命を奪うまでは行かずとも、早急にマスターとしての資格は奪うべきだと判断した。可能なら、聖杯戦争の期間は目覚めない程度に、意識を失わせられればいい。一度聖杯戦争から脱落したとしても、マスターに空席が出来てしまった場合、また復帰される恐れは有るからだ。

「やーよ、私のものだもん。この命呪もサーヴァントも、聖杯だつて私のもの。命呪が欲しかったら、そつちの金髪のお姉ちゃんに貰えばいいんじゃない？　手を伸ばせば届くところに、ほら！　細い首があるんだからさあ」

少女はアリスの首を指差し、大きな目を更に見開く。アーチャーが、す、と進み出てその間に割り込んだ。



「お生憎様だ、それは私が邪魔をする……こいし、お前のサーヴァントの仕業か？」  
「何のこと？　ちゃんと聞かないと分かりません、教えて？」

「すつとぼけた奴だな、この校舎に張った結界術だよ。答えなきや撃つぜ、出力は8割減で」

「それでも私は消し飛んじやうね、こわーい！」

相手の外見に惑わされず仕留めるべしというのは、アーチャーも同じ考えなのだろう。小型の火焔——彼女の宝具か——を、こいしと名乗った少女に向けながら、アリスを自分の背に庇う。それに伴ってセイバーは、霊夢とアリスを同時に視界に収められる背後へ。数の優位性は、死角を埋めるといふ点でも強く働いた。

「そうだよ、私のサーヴァントがやったの。一晩で、殆ど誰にも気づかれないで。失敗しちゃったなー、まさか2人もここにマスターがいるなんて思わなかったもん」

「そうだな、お前の失敗だ。分かったら令呪を使ってサーヴァントを自害させろ。校舎を壊しすぎると早苗に怒られそうだからさ、手荒な真似はしたくないんだ」

表面的な言葉はともかく、アーチャーの真意は別だろう。必要とあらば、それが最善とあらば、手荒な真似はむしろ好んで為す所に違いない。たった1人の敵マスターと、少なくとも敵対していない数百人。秤にかければ悩むべくもない。

手に持つ火焔に、視覚化できるほどに濃密な魔力が収束していく。放たれば確實

に、一つの肉体を霧散させるであろう砲撃を前にして、

「……その方がいいかもね。令呪にて命じまーす!」

古明地こいしはやはり、目を丸く開いたままの笑みで答える。

恐れを抱いている気配はなかった。恐れという概念すら、その少女には無いように思えた。サーヴァントの向けた敵意を浴びてなお、彼女は朋友と接するかのような態度を崩さない。

「こいつ壊れてるわ。何を言っても無駄よ、早く撃つちやつて。絶対にサーヴァントに自害なんかさせない、そうに決まってる」

セイバーが嫌悪感を示す。あの術式を読み解いても平然としていた彼女が、声の棘を頭にする。アーチャーが撃たなければ私が斬るとばかり、早苗から受け取った霊刀を引き抜き構えた。

だが、動かない。殺意を持ち、実行する為の武器を持ちながら、セイバーは動かない。「私のサーヴァントに命令します、今すぐに此処へ——」

「そいつは駄目だ、じゃあな」

無詠唱、対象を目視するだけのシングルアクション工程、火炉が光を放つ。正確に計測したように廊下を隙間なく埋めた光条は、古明地こいしが居た空間をも薙ぎ払った。

明かりの消えた校舎を強烈な閃光が照らす。魔力の鳴動がガラスを共鳴させる。わ

ずか数秒の魔術行使が終わった後、そこには元のように、ただ静かな廊下が有るばかり。そこに、古明地こいしはいなかった。衣服の切れ端や、血痕が残されていることもない。本当にそこには、何も残っていないかったのだ。

「……これで終わり、なの？」

あの光のを、真つ当な人妖が浴びて、生き残れるはずは確かにないだろう。だが、仮にもマスターの一人が、無防備に身を曝した揚句に消える、などは。

あまりにあつけないと、霊夢の口を突いて出た問いの残響が消える前に、

「伏せろ！」

「伏せて！」

二つ同時に声がした。片方はセイバー、もう片方はアーチャー。聞こえたときと霊夢の脳が認識するより先に彼女は突き飛ばされ、アリスともども床に伏す羽目になっていた。

床に押し付けられた頬が冷たい。受け身を取り損ねて、少し胸も打ちつけてしまった。起き上がろうとしたが、背中に僅かな重さを感じる。首と目をぎりぎりまで後ろに向けて、自分を抑え込んでいるのが誰か確認した。

アーチャーだ、アリスの腕を掴んで床に引き倒しながら、霊夢の背中を突き飛ばしたらしい。

何故そんなことをしたのかは、問わずとも、天井から垂れさがる凶器が答えてくれて

いた。

セイバーの刀に押し止められた、二本の巨大な爪。霊夢とアリスの頭が先ほどまで有った空間を、過たず貫いている。

刀や剣のような、人が作り出した鋭利さは、その爪には存在していない。只管に重厚で無骨な、獣が骨の延長として作り出した鈍器と刃物の中間に位置する凶器。

あれが命中していたのなら、人間の頭蓋は西瓜のように砕け、中身を撒き散らしていただろう。

「……ああ、しくじったねえ。さすがにサーヴァントが2人いると辛いさ。これが1人なら……どつちかの命は、貫っていったんだけどねえ……」

「いつから居たのかしら、屋根裏の鼠。ここそこと隠れて情けない……出てきなさい、校舎の床ごと吹っ飛ばしてしまおうかしら!？」

爪は天井に消え、変わりに聞こえてくるのは、威圧感も力も薄い声。失敗した己への自嘲すら含んでいないのではないかという程、後ろ向きな笑い声がする。姿を見せぬ敵にセイバーは、本当に有言実行をしてみまいかねないほどに氣勢を上げた。

「間違いなくアサシんだ。セイバー、分かってるよな?」

「もちろんよ、そうじゃなきゃ私達が気づかない筈がない……そうでしょう?」

「否定したって仕方ない、その通りさあ——」

ずるうり、ずるり。天井からは出した「それ」は、手から床に降り、立ち上がる。液体の様な女だった。動きも立ち様も、決して1つの形に留まらず揺れ続けている。だが、大きく動きまわるのではない。大量の水ではなく、少量の粘泥の様だと評するべきか。

「——わたしやアサシンのサーヴァント、マスターはあのお嬢ちゃん。怨みはないが勝つ為だ、ちよつと死んじやもらえないかね？」

マスターの蠟の様な白さに比べれば、アサシンはまだ、青白いという程度の不健康さに留まっていた。

だが、細い。あの黒衣のサーヴァント——おそらくライダーだろうが——の、引き締まった四肢とは趣が異なる。必要な肉すら不足した、痩せ過ぎの脆い肉体の女性。それが、この場に居た者達の、アサシンに対する第一印象だった。

「セイバー、あいつを倒しちやつて。私はアーチャーに守ってもらおうから」  
「ちよつと、私のサーヴァントよ……でも、異論は無いわ。」

アーチャー、私たちを守つて。あの能力なら、セイバー1人で勝てる……万が一の可塑性も絶つておきたいわ」

受けた印象に違わず、アサシンのステータスは、決して優秀とは言えないものだった。筋力や魔力にはやや優れるが、敏捷と耐久は平均より劣る。クラス固有の技能は1つ

だけ。

そもそも、暗殺者アサシンというクラスなのだから、正面から戦う事は不得手である筈なのだ。恐れるべきはマスターの暗殺であり、姿を確認出来てしまった時点で、アサシンはそれほど脅威ではない。

「お安い御用よ、霊夢。鼠の刺身を作ってみせるから」

「おお、そいつは美味そうだ。ご相伴に預かりたいねえ」

霊夢とアリスは可能な限り近づき、アーチャーが周囲全てに神経を尖らせる。

気配遮断を行えるアサシンは此処だ、他のサーヴァントが接近すれば感知は可能。奇襲の可能性を絶つたと確認するや、セイバーは二振りの刀を翳して、アサシンへと向かつて踏み込んだ。

改めて語るまでもない程に、この二者の力量差は歴然としていた。武器を用いての戦闘は専門外の二人マスター達でさえ、どちらが有利なのかを見誤る事はない。

「は、りやつ、らああっ！」

「ぐ……ぎい、この馬鹿力が……！」

技術を用いる事すらなく、セイバーはアサシンを圧倒している。

ただ力任せに刀を振るうだけで、その一撃は爆薬のように、受けた腕の力を奪い取る。なにも考えずに腕を振り回すだけで、その圧倒的速度は、アサシンの離脱を許さず、雨霰と剣閃を降らす。

アサシンは、両手にそれぞれ短い杭の様な武器を持ち、セイバーの剣劇を防いでいたが——一つ防ぐごとに苦悶の声を上げ、大きい一撃を受けると体が後方に流れる。速過ぎて受け切れなかった幾つかは、瘦せぎすの腕を斬りつけて、血を流させていた。

アサシンには、隙を突いての反撃すら許されていない。防御を解こうとした瞬間、その間隙に切つ先が割り込む。防御の合間を縫う技術ではなく、ガラ空きになった瞬間を見て取る動体視力と反射神経、割り込みが叶う速度をこそ称えるべきだろう。ただ子供のように武器を振り回すだけで、セイバーはまさしく最優のサーヴァントであった。

「こんなもんなのアサシン？ つまらないわね、所詮は日蔭者か！」

左手の刀を振り上げる。短刀で受けたアサシンは、そのまま天井まで打ち上げられた。天井を蹴って後方に退避し、間合いを空ける事が出来たのは流石といふべきなのだろうが——その様な些細な体術、セイバーの前にはまるで無意味な大道芸であった。

セイバーの振るう刀が短刀に打ちつけられ、掘削機の様な轟音を上げる。空気を刃が斬って、ひゅうひゅうと笛まがいの音を鳴らす。もはや暴風域の中心、台風の目となったセイバーに、アサシンが勝てる道理は僅かにすら無かった。

だから、霊夢の直感が、警報を鳴らしたのだろう。

ここまで勝ち目がないのなら、何故、あのこいしという少女はアサシンを逃がさないのか。このまま戦わせればアサシンは確実に負ける。それはこいし自身の、聖杯戦争での敗北を意味する。

いいや、おかしいといえはおかしいのは、その運用方法にも有ったのではないか？

「すつごく嫌な予感がする。アリス、アーチャー、力貸して」

「……………どういう事よ……………」

理詰めで解いて行っても、いつかこの違和感の原因はつかめただろう。

だが今はそんな手段よりも、心の奥の方で喚き散らしている何かを捕まえる方が早かった。

周りを見る、周りを見る、霊夢の頭蓋の内側では、誰か、何かが叫んでいる。

この感覚は、あの黒衣のサーヴァントと、セイバーが戦った時のものにも似ている。

仮に向こうの宝具が解放されていたら、セイバーは危なかったという確信が有った。あの時に感じたのは、敗北という危険に対する恐怖感だったのだろう。

「早く！ アーチャーの索敵範囲を広げさせて、精度が落ちてもいいから！ 何が何だか知らないけど、相当ヤバい気がしてんのよ！」

何かが違う。



恐怖という同一カテゴリに属しながら、霊夢が味わっていたのは、まるで違う感覚だった。

それは、理由の存在する、理解できる恐怖などではない。闇を孤独を人が恐れるように、本能がこれを恐怖すべしと定めたものに相對せねばならない。そんな確信が、勝利の予感を押しつぶした。

索敵に意識を裂かせれば、その分だけ瞬間的な反応がおろそかになるだろう。それでも霊夢は、アーチャーの戦力を索敵に裂かせた。万が一アサシンがセイバーの攻撃をすり抜けてくる事を考えるよりも、何かが自分達に僅かでも近づき、そこに存在する事の方が怖かったのだ。

アーチャーの魔力が、音よりも早く這っていく。彼女を中心として半径1000m以上にも及ぶ、全サーヴァント最長の探知距離。その上で更に、本人の意識を努めて注ぐ事で、索敵範囲を広げた。

「……蝙蝠だの、フクロウだの、小さな生き物ばかり——?!? おいおい、なんだこりゃあ……本当だ、ヤバい、ヤバいぞセイバー!?!」

霊夢もアリスも、一日ばかりアーチャーを見ていた。彼女は、一言で言えばマイペースだ。あまりにマイペースなものだから、マスターである筈のアリスが振り回される。きりきりまいするアリスを余所に、決して変わらぬ自分を貫く、それが霧雨魔理沙であ

る筈だった。

だから、アーチャーまでが焦りを表に出したのは、霊夢にもアリスにも、信じがたい事だった。

「……遅いねえ、あわよくば私が死ぬのを待ってたのかい？ これだからうちのマスタ―は、肝心なところが甘いつて……」

「1900、1700、1500……ああくそ速い、もう届くぞ、800、600！ 初撃に備えろ、とにかく命を守れ……来た!!」

アーチャーに言われるまでもなく、霊夢は既に自分の周囲に、可能な限りの防御結界を張っていた。アリスはそこへ潜り込み、どうやら自分自身に強化魔術を掛けた上で、廊下にしゃがむ。

黒衣のサーヴァントの蹴り、セイバーの剣劇は、雨と形容できた。天から地へと一方的に打ちおろされ、1つや2つでは止む事がないもの。繰り返し、繰り返し叩きつけられるものとしての比喩だ。

その時に生じた衝撃は、性質は似ていたかもしれない。だがとても、雨などと呼べるぬるい代物ではなかった。

耳を劈く、ジェット機紛いの高轟音。

廊下にスコールが降り注いだ。横殴りの、ガラス片を水滴の変わりとした、プリズム

の様な突発性豪雨。割れた全ての窓から、人間を壁へ押し付ける程の“圧”が流れ込んできた。

きつと魔力に『それ』自体の移動速度が重なった末、生まれた衝撃なのだろう。コンクリートの校舎がガラスに削られ、壁に無数の白線を残す。

防御態勢を取っていた霊夢達も、幾つかガラス片での裂傷を受ける羽目になった。アリスは左手に浅く2つ。霊夢は右手と右足に1つずつで、後は本当に小さなものがあちこちに散らばる。

誰も、数えている暇はなかった。セイバーとアサシンの戦闘も、今だけは乱入者の“圧力”に止められている。

「……何よあいつ。あんなのって有り？」

「 arīもあり、大ありさあ。あたしや勘弁願いたいけどねえ」

巨体ではない。セイバーとそう変わらない体格だろう。然し、手足を小さく動かす事さえ、それに掛ければ、山を動かしている様な錯覚を受けさせられた。

それが身に纏う鎧は、色が褪せていた。

仮に黒一色だったのなら、黒い鎧だと言う事が出来ただろう。白一色でも同様に、だ。だが、その鎧は黒の上に、煤けた白が広がったものだった。それは、多色の華美な装飾が、長い年月のうちに色を失い、ただ濃淡だけが残った様な姿だった。

それは、自らの色を失った、狂の化け物だった。

私立命蓮寺高等学校から、3 kmほど離れた小高い丘。その頂上の雪の上に、二つの影が座し、遠く離れた戦鬪を観察していた。

「見えづらいが……一階廊下、『あれ』のほかに影が5つ。二階廊下に1つだ」

「ふうむ。知覚共有で見ている分には……アサシン、おそらくサーヴァントだろう者が2体、包帯を手に巻いた娘が2名だ。数は合うな、間違い無いと見て良いだろう……ああ、マスターの片方は博麗の巫女だ」

「ほう、博麗の巫女？ 懐かしいな、遠く縁のなくなった存在だ……」

1人は、狩衣にスカートという奇妙ないでたち——を、更にコートを羽織って奇妙さをプラスしている。

座し、目を閉じ、見える筈のないものを見て読み上げるその少女は、敷き布代わりの雪と競うばかりの、煌々たる銀髪を後ろに纏めていた。

「で、布都。『あれ』をあの状況に放り込んでなんとする。訳がわからん事になったぞ」「私も分からんぞ、ああもなってしまえばどうにもならん。理解するだけ無駄だろうて」

その隣にいる女性は、脚が無かった。そこに有る筈の部位は、白い霊体に取って代わられている。真冬の夜の寒気に上着を羽織る事もなく、ただ一枚の衣で過ごしているのは、常人ではないのだろう。

明らかに神秘の側に属するだろう彼女の、然し手にしているのは、最新式の望遠・暗視スコープだった。

3 km の距離を隔て、亡霊は校舎内の戦闘を観察している。例え並みの視力しか持たずとも、河童の最新技術の結晶は、僅かな光を集めて視認可能なレベルまで持っていく。磨きあげられ、幾重にも重ねられた計算に支えられるレンズは、米粒ほどにも見えないだろう人影を、表情が認識できるレベルにまで拡大する。

このような代物、一般に出回る程安価には作れず、大量に生産する事も出来ないだろう。極めて限られた者しか受けられぬ技術の恩恵——それは、魔術とは別な方向に、余人の想像の及ばぬところである。

「……無責任な事を言うな、随分と。サーヴァントが1ヶ所に4体も揃うだと？ 知られてもそう困らぬ駒だが、だからと言ってあまり見せびらかすのも考えものだ」

「心配はいらぬよ。マスター4組のうち、1つはあのさとり妖怪……知ろうが知るまいが、あれはあれのままだ。今、アサシンと戦っている2組は……おそらく協力関係だろうな。他の組に情報を渡しはするまい。」

それにな、屠自古。お主の言う通り、知られて困る事など何もなからう？ 技を使うでもない、宝具を使うでもない。狂った脳のまま狂った様に凶を振るう、あ奴の力ならばな」

物部布都、蘇我屠自古、この2者こそが他にもない、褪せた鎧のサーヴァントのマスターだ。

通常、マスターとは単身でマスターとして活動する。令呪を用いる事でマスター権を譲渡、委託する事は可能だが、同時に二者がマスターとして存在する事は少ない。

……少ないと書くのは、決して無いとまでは言い切れないからだ。例えば契約の際に、マスターとサーヴァントをつなぐ魔力のラインに細工を加える事で、令呪をAが所持し、魔力供給はBが行う……という事例も、過去には存在した。

この2人の場合、それに近いが更に楽な方法だ。布都が契約を結び、令呪を所持し、命令を下す。屠自古は、サーヴァントではなく、布都に魔力を供給する。布都と屠自古の間にもまた、使い魔契約にも似た関係性が有り、魔力の相互移動は比較的容易。

聖杯戦争に参加するにあたり、2人は、片方を魔力タンクとする事でサーヴァントの宝具使用回数を増やそうと企んでいた。

宝具を多く使えるということは、それだけ周囲に対し優位性を確保する事ができる。強力な宝具を持つサーヴァントを呼び出し、力任せに蹂躪する事が、理想の戦術だった。

そしてこのプランは、布都が呼び出したサーヴァントが狂化の英霊で有った為、別方向に力を発揮する。

本来なら狂化は、マスターの魔力を激しく吸い上げる事になる為、長期的戦闘には不向きである。だが、千数百年の眠りから覚め更に数百の年月を重ねた尸解仙と、二千年以上を過ごした怨霊のタッグならば、自らの魔力を枯渇させる事もなく、目的の場所にサーヴァントを解き放つだけで、目的を達成できるのだ。

腹を減らした野獣を檻から放てば、気の向くように狩を始めるに違いない。理性を失った怪物を、この2人は御そうとすらしていなかった。

「……然し、何故こうも遠回りな事をする」

「遠回り、とはどういう事だ？」

「お前なら、あの校舎1つ丸ごと、爆薬で吹き飛ばすかと思っていた。或いは……顔が知れているのだ。家に火矢でも放つか、とな」

望遠レンズを覗きながら、屠自古は、それが当然であるかのように問う。問われた布都もまた、おかしな事を聞かれたとは思っていない風の面構えで、

「そうさな、それが楽だろうて。今の世は銃器とやらも発達しておる。我らの腕では扱えずとも、数十kmの射程を持つ砲すら存在しよう。……が、我はそれを選びたくない」

近代兵器の正確性と殺傷力は、魔術に決してひけをとらない。寧ろただの人間を殺害

するという事に掛けては、魔術に大きく勝っている。

魔術は、人の為の術だ。一方で武器とは、人を殺す為の道具なのだ。1つの用途に特化して発展を続けた武器に、魔術師が勝る道理はない。

「らしくもないぞ。理由は？」

それが分かっているからだろう。屠自古は、詰問するような口調にもなる。自分と共に闘うこの小さな娘が、策謀と武に長けた厄介な少女だと知っているからこそ、自らの最大の武器を封印する事に、疑問を覚えたのだろう。

「屠自古、誇れるか？」

「誇れるともさ、勝つのなら。正道にて負けるなら、私は外道の勝利を誇るぞ」

屠自古の思考は、良くも悪くも直線的だ。目的達成の為ならば、その他全てを犠牲にする事も厭わない。仮にそれが最善手となれば、己の命さえ、投げ捨てる様に差し出すだろう。

「例えば太子が負けを喫したとて、太子に抱く我らの誇りは揺るぐまい？」

「……そうだな」

忠義と、目的遂行の意思ならば、布都とて負けてはいない。だが彼女は、少しばかり理想に傾き過ぎていた。

「勝ちたいとも、勝って我らが主を取り戻す。死する前も死して後も、我が忠義に一筋の



傷もない。だがな、屠自古。我らが主の尊厳、偉大なる精神は、敗北を経て猶もまだ崇高であつた。ならば、それを我らが、我らの戦いで穢す事など許されまい」

「戦争だぞ？」

「分かつておるとも、勝たねば全ては綺麗事だ。全ての反則が推奨される場、それが戦場だ。

所詮は自己満足よ、あの方の復活に一つの瑕疵も認めたくない。ただそれだけだ。我らに与えられた駒は暗殺者ではない。なら、我もまた暗殺者の真似事はせずに勝ち抜こう」

言いたい事ならば、屠自古には幾らでも有つただらう。が、反論は声にならず、口を開いたままで暫く固まっていた。両腕を組み、軽く俯き、

「……やれやれ、年を取ると頑固になるといふのは本当だな」

「すまん、屠自古」

呆れた様な、諦めた様な、だが不快感を示さない溜息を、屠自古は漏らした。

本当に勝利だけを目的とするのなら、数十数百の策謀を重ねて、マスターだけを殺害する事も出来よう。勝利へ続く最短距離を敢えて走らず、大路の中央を行軍しようという布都は、自身と誇りに満ちていた。生前も、死後も、一度たりと自らの信じる所に疑問を持たなかつた、異才の少女であつた。

「……で、これからどうする……? と、戦闘の現状は……アサシンが白黒魔女を誘い出したらしいぞ。校庭に移動している」

「ああ、いつの間にか見えなくなっていると思うたら、そういう事か。屠自古、その白黒を観察しておけい。アサシンでは長くは持たんぞ。」

「こちらは……ああ、やはり強いな。だが勝てない程ではない……このままならば、だ」  
望遠レンズと知覚共有。正反対の手段で戦場を観察しながら、2人はこの戦争のプランを練る。彼女たちの目には、自らのサーヴァントが、敵サーヴァントと互角以上に戦っている様が映っていた。

「刀二振り、セイバーだろうな。おそらくはあれが最大の敵となるに違いない」

「では、あ奴らをアサシンに監視させるか。何か有れば、あのこいしとやらから我らに通達させる。狙い目は……そうさな、あ奴らが他のサーヴァントと遭遇した、その瞬間。我らは常に遊軍となり、戦闘が起こり次第そこへ介入するとしよう。最悪で1対1、あわよくば2対1以上の状況を作れば、セイバーといえど勝算は高いぞ」

「……つまり、あの話の通じない娘の説得をしてこい、という事だな? 全く、私を文遣いか何かだと勘違いしていないかお前は……おまけに魔力まで搾取しよって」

「あれを我一人の魔力で養うのは無理だ。お前が居てくれねば、とうに我は干からびておるよ。あの大喰らいの鬼子、今も滝のように魔力を浪費しておる」

2人の戦略の根幹は、いかにして数の不利を作らずに戦うかという事であった。常に複数で動く敵を監視し、戦闘が始まり次第、自らのサーヴァントを投入して場を拮抗させる。それはとりもなおさず、1対1で戦うなら、自らのサーヴァントが最強だと信じている事に他ならなかった

「まだ持つか？ 無理な様子なら、直ぐにでも魔力の供給を始める……これだけ離れていれば察知もされまい」

「うむ、頼もう。私の意識はサーヴァントに全て向ける。任せたぞ」

過信はしない。過小評価もしない。全ての要素を適切に、正しい数値で捕え、判断をする。こと争いに関してならば、この2名以上に長けたマスターは、第5次聖杯戦争に於いて他にいなかった。

白雪の丘に二つの影が、月に照らされ伏していた。

## 三日目——salad bowl 2.

空間の広狭は、もはや褪せた鎧の狂者を留める理由とは成りえなかつた。

天井を疾駆し壁に立ち、床を一時の止まり木としてまた飛ぶ。鋼に包まれた腕が振られるごとに、鎧の隙間から噴出する魔力が暴風となり、床に散らばったガラス片を巻き上げる。

一直線に進むと事を厭うのか、怪物は多角の線を描いて、獲物目掛け突き進む。

「あれが、バーサーカー……」

アリス・マーガトロイドは嘆息した。

無骨な鎧だ。己の真名を覆い隠すためのそれに、積み重ねられた誉は無い。飽きられたドールにも似て、人の手による傷は限りなく薄く、経年劣化の色落ちが激しい。趣味で集めている人形達に比べて、あの狂気の塊は、間違いなく醜いと言えるだろうに。

だが、全ての生物が生まれながらに備える機能美を嘲笑うかのように、その一挙は暴力的に美しい。

その足が踏みなした道に凡俗は、待るは言うに及ばず、背を仰ぎ見るさえ許される事はなく、その手が触れた万象は、散り果てる事を義務付けられたかの様に、砕けて崩れ

去つていくだろう。

戯れに振るう腕が、脚が、敵対者へ一方的な支配を告げる。それは生まれながらにして強者と定められたものだけに許された、他を顧みぬ暴虐の君臨であった。

死が逃れ得ぬ距離にあると、心が凍りついてしまうという。死の恐怖そのものに殺されない為に。ならば今のアリスは、感情を凍らせて、狂者の蹂躪を待つばかりの身なのか。

いや、彼女は魅了されていたのだ。

適切な理論と永遠に積み重ねられ続ける正当性の生む、理路整然とした秩序の中に生きる魔術師は、全ての「正しさ」を喰い殺す化け物の有り方に魅入られてしまったのだ。

きっと自分は死ぬだろう。これまでに抱え込んだ理屈と共に、あのサーヴァントに引き裂かれる。暴力と混沌の海に沈み眠るのは、一度『殺された』あの夜の白い光にも似て、全てが満たされた心地になるのだろう。

暴君の檻に囚われた心を解き放つたのは、正道の騎士の一撃だった。

三騎士の一角にして最優のサーヴァント、セイバーの、様子見を伴わない全身全霊の一太刀。振るわれる腕を掻い潜り、我が身を矢と変え突き進み、確実に首を切り落とさんと振るわれた霊刀は、狂の英霊の面を掠るに留まる。

それでいい、それだけでいい。専横の君主に抗うも、また騎士の華。夜闇を払う白刃の美は、決してかの褪色の鎧に劣つてはいなかった。

「アーチャー……魔理沙、邪魔。離れてて」

「ああ、そうさせて貰う。こんなのとやりあうなん勘弁だぜ」

自ら進み出て、その背に全ての味方を負う。自身のマスターも、協力者たる魔術師も、その使い魔たる英霊も。

直観スキルを持ち合わせない彼女が、自然と悟っていた。この場で「あれ」と戦えるのは自分だけだ、と。あの狂霊の前には、懐かしきモノクロの魔法使いさえ、薄紙の如くに引き裂かれてしまふだろう、と。

同じく、庇われた魔法使いも、その長い戦いの経験と知識によって理解していた。『あれ』は自分の手に余る。どうしても戦うというのなら、相応の準備が必要だ。人が鬼に勝るには、美酒と幾重もの策を必要とする。ここにあるのは、策を練る頭だけだ。

「アリス、あの重苦しい白黒鎧、対魔術スキルは有りそうか？」

「ええ、多分……はつきりとは分からないけど、セイバーよりは低そう」

「ありがとさん、それが分かれば十分だ」

射出武器ではなく魔術を主に用いるアーチャーは、聖杯戦争に於いては異質の存在だろう。その在り方、ステータスの偏りは、寧ろキャスターとしての適性を窺わせる。

なればこそアーチャー霧雨魔理沙は、対魔術スキルを、キャスター以上に警戒しなければならぬ。魔術は万能に思われるかも知れないが、彼女には魔術「しか」ないのだから。

長時間セイバーを見ていたアリスは、彼女の対魔力スキルを『B』と判定していた。おそらくあの狂霊は、それより1つほどランクが低い……Cランクと見て良い。アーチャーの宝具『ミニ八卦炉』さえ有れば、数小節の詠唱で打ち破れる防御だ。この場では勝てない。だが、未来永劫勝てない訳ではない。

ならばアーチャーの相手は、狂霊の背後に控えるアサシンだ。あれも、セイバーと正面から戦って生き延びれる強さはない。それどころか、戦いの余波に巻き込まれる事すら避けたいだろう戦力ではない。霊夢とアリスを同時に守って戦うより、アリス1人を守る事だけ考えられる1対1の方が楽だ。

「お互い辛いなあ、ん？」

「ハ、そうだねえ……」

校庭を親指で指し示すアーチャーに、共に正面から戦うを得手としないアサシンは共感を示す。砕け散ったガラスの隙間を縫い、校庭に飛び出した病瘦の身を、アリスとアーチャーは同時に追った。

暗殺者が望んで平地に立つ理由など、数十数百通りも予想は出来たが、その企みのど

れ一つとして、決して自らの主に届きはすまいと、アーチャーは絶対の自信を持って戦場を移した。

視界に留まる邪魔者一つと、後方に佇んでいた邪魔者一つが消えた事に、狂霊は喜色を表す事も無かった。

鎧と同色の鉄仮面の下で、紅玉の如き瞳は、ただ剣の英霊だけを求めるかの様に瞬く。校舎の一階廊下は今宵、英霊の踊るコロシウムと成り果てた。

セイバーの一太刀は、滝を纏めて叩きつけるような重圧を持って、狂霊の身を穿たんとする。

左右に2 m、上下に2, 5 m。廊下は、底面積5 m<sup>2</sup>の直方体状の空間だ。刀を振り回すには十分とは言えない広さだが、然しセイバーに躊躇は無い。背面から大きくアーチを描いて振り下ろされた太刀は、敵対者の断頭を確約された一撃だった筈だ。

それを、狂霊は事もなげに避けた。頭蓋を断つべく振るわれた刃から、一足の後退にて3 mは遠ざかり空を切らせ、また太刀が振り上げられるまでの僅かな猶予を突いて、セイバーの懐へと入り込んだ。

そこに技術の介在はない。セイバーがアサシンに対して純粋な身体能力の差で圧倒



していた様に、狂霊は速度という一点を以てセイバーを翻弄し、己の間合いへと引きずりこんだのだ。

左右の拳が、右の爪先が、セイバーの腹を狙って放たれる。どれも子供の癩癩の様な拙さで、だが触れれば骨を砕き肉を抉る鉄杭の貫き。

人体が受け止めれば無残な肉片になるだろう打撃が、3発、確かにセイバーを捉えた。ライダーの疾走をすら受け止めていた脚が浮き、セイバーの体は枯葉の様に舞い、

■■■■、■■■■■■■■■■——ツ!!

言語化し難い原始的な怒りを秘めた絶叫。狂霊の左手が、未だ空中に居るセイバーの右肩を掴む。

反撃はおろか防御すら間に合わない。引きずり降ろされたセイバーの胸へ、カウンターの様に狂霊の右拳が突き刺さった。

廊下を、床と並行に10mは吹き飛び、自らの魔力を放出する事でブレーキを掛け、それでも更に5mは転がる。これ以上の追撃を避ける為立ち上がったセイバーの口から、一筋の血が流れていた。

「けほっ、(っ)ほ……(っ)ん、な……!」

力ならセイバーが上だろう。互いに手を組み合わせておし合えば、ほぼ確実にセイバーが押し切り、狂霊を振じ伏せる。だが、その力も「当たらない」のだ。その上に相

手の一撃は、やや劣る力を速度で補い、十分セイバーを屈させるに足る。

「セイバー、無理なら逃げるわよ！　こんなのとやり合うのは割に合わない——」

「逃がしてくれるわけないでしょう！　こういう奴はしつこいのよ、噛みついたら離れない野犬だわ！」

叶わぬ相手と見て撤退を図る霊夢は正しい。だが、セイバーの言う事も全く正しい。

戦場を変えたアーチャーを、あの鎧の狂霊は追おうともしなかった。その目は常にセイバーに向いていたのだ。仮にセイバーが背を向けたなら、速度に勝る狂霊は、嬉々として無防備な背中に爪を突き立てるだろう。

逃げてはならない、逃げられない。射程圏内に捉えられた恐怖は、英霊をして心胆寒からしめるものだった。

「……つたく、躡のできてない犬は嫌いなものよ」

得物は二振り、博麗の御神刀と守矢の霊刀。左手に構える無反りの片刃、刃渡り2尺の軽量の一振りを、セイバーは狂霊へ向けて付きだした。

サーヴァントに通常の兵器は効果が無い。何らかの神秘に後押しされなければ、英霊の体には傷を付けられない。博麗神社に備えられ、またセイバーの強化魔術の恩恵を受けたこの刀なら、サーヴァントにも十分なダメージを期待できよう。

刃の切っ先が狙っていたのは、甲冑の継ぎ目が見える喉元。銃弾程も有ろうかという

速度で、鋼の先端が狂霊へ迫る。

だが、それすらも容易く見切るのがこの怪物だ。刃の到達寸前で、セイバーの腕の動きとほぼ同速度で、また後方に退く。左腕の伸びきったセイバーは、左脇から脇腹に掛けてを無防備に曝す事となる。弱点が広く曝け出されるのを見て、狂霊は舌舐めずりせんばかりに、鉄仮面の下の目を光らせ飛びかかった。

当然の様にセイバーも、それを予測していた。

ここまでの戦闘で理解できた事だが、この狂霊は、回避にバックステップを好んで用いる。円を描くような回避は、高い技術が必要とする。理性を失った狂人に、技術を用いようという発想などないだろう。迫る脅威から身を避けるのに、ただ一步の後退で足りる。それだけの脚力を備えているのが、この狂霊だ。

一つの挙動で回避を完了したならば、目の前には攻撃をしくじり、隙を曝した敵が存在している筈。それをまた一步の前進で埋め、パイルバンカーの様な拳脚で打ち抜くのが、狂霊の狩の常套手段に違いない。

果たしてその推察の通り、褪色の鎧は一直線に襲ってくる。

拳足の間合いに入る寸前、時間にすれば数十分の1秒。セイバーの右手の太刀が、横薙ぎに降るわれた。東風谷早苗に押し付けられるよう渡された霊刀、それ自体が十分な神秘を帯びた魔術的武装。刃渡り4尺、浅い反り、分厚い刀身を持つこの刀の本質を、受

け取った当人である霊夢はまだ知らない。豪壮にして華美なこの太刀は、靈的存在への特効を持つ——ランクD相当の、人界の宝具であった。

銃口を向けられた鳥が飛び立つように、火には熊や狼すら警戒心を見せるように、狂霊は自らの脚を狙う太刀に、本能的な恐怖を覚えた。

後退から前進へと行動を切り替え、体は今まさにトップスピード。ランクA+を誇る自らの敏捷性が、自らへの枷となる。後退出来ぬと見るや、狂霊は四肢全てで床を叩き、自分の体を天井にまで打ち上げた。背中を強く打ち付けるが、その程度のダメージは負傷の内にカウントされない。両膝を斬り落とし地を這わせ、止めを指す猶予を与え得る斬撃。それすらも避けてなお、狂霊はセイバーへと迫った。

前進と上方への跳躍が合わさり、斜めに急角度で打ち上げられた結果、狂霊はセイバーの頭上に位置している。偶然にも手が届く位置にまで来た獲物の首を刈り取るべく、狂霊は両手の指を開き、手を伸ばし、

「……はん、犬はやつぱり犬ね、うちの猟犬を見習いなさい」

届かない。セイバーは逸早く膝を曲げ、頭を低い位置に下ろした。攻撃が失敗に終わった事を理解した狂霊は、また距離を取ろうとし——蹴る床が、足元に無い。

鎧の狂霊に、戦術という概念はない。空振りを誘つての攻撃も、そうしようと考えているのではなく、一瞬一瞬の反射的行動の産物だ。攻撃があれば避け、仕留められそう

なら攻撃する。単純な二つのルールに則って荒れ狂う怪物を、正面から完全に抑えきるのは難しい。

なればこそセイバーは、跳躍を誘うような2手を伏線とした。速度の発生源である両脚が空を切る、ただ1つの場所を探した。天井から床まで落下する間の空間。それこそが、狂霊の全ての力を削ぐリングだった。

近い、刀を閃かす距離ではない。セイバーの手は刀を捨てた。オーバースローの如く巨大な弧を描き、右拳が背中から頭上へ、そして狂霊の腹へと叩きこまれた。

刀の様な細い金属塊を以て、工所用重機の如き轟音を響かせるセイバーの力が、ただ一点に集中された拳打。破壊的、と呼ぶに相応しかった。狂霊の魔力で補強されているだろう鎧が、純粋な物理的衝撃だけで破損し、防御機能を放棄する。金属の鎧を内側へこませ、内部の肉を打ち据えて、それでも余りあるエネルギーが狂霊を床に叩きつける。セイバーの拳、狂霊の鎧と体、学校の廊下。最も軟弱だったリノリウムは衝撃に耐えきれず、天井に突き刺さる程の破片を撒き散らした。

動きを止めた相手には追撃すべし。床に身を食い込ませた狂霊に、セイバーは今度こそ、二振りの刀を振り下ろす。

「■■■■■■■■■■……………」

心臓と首、それぞれを狙ったの刺突。1つは体ごと回避され、もう1つは鎧の腕に阻

まれる。金属の鎧を貫通し、肉を裂き骨を砕いた刃には、不思議と血が付着する事が無かった。

腕を切断した手ごたえが、確かにセイバーの指先に伝わる。狂霊の右腕は力を失い、重力に引かれるままぶら下がった。床に体がめりこむ程に叩きつけられて直、即時戦闘復帰が可能な耐久力、速度。だが、片腕を破壊された今となつては、後は時間の経過とともに不利になり続けるばかりだろう——霊夢は、そう思っていた。

「つよし、セイバー、今のうち！」

それは、英霊という存在を、そして過去の幻想を知らないが故の誤認だった。

「駄目よ、霊夢。あいつはそんな温くない……！」

「……はあ!？」

セイバーは踏み込めない。この瞬間が好機ではなく、寧ろ危険なタイミングだと分かっていたが故に。

狂霊の鎧は、既に修復されていた。拳によつて穿たれた穴も、刀が貫通した跡も。傷口から血が流れなかったのは、流血の前に傷が修復されたからだ。貫かれ破壊された筈の右腕が、指を鉤状に曲げて掲げられる。

「……こーいもうんなのよ、若いもんには分らないでしょうけれど」

「あんた達の時代に生まれなかったのはラッキーね……どーすんのよこの化け物。出し

惜しみしてちやもう無理じゃない……セイバー、宝具を」

果たして、狂霊の傷は完全に消え去っていた。

体内のダメージの程は分からない。修復に消費した魔力も、少ないとは言えないだろう。然し、負傷させる事によって行動の自由を削ぐ戦術は無効であると判明した。

四肢全てが必殺の凶器であり、異常な自己治療能力までも備える。回復能力は宝具なのか、それとも固有スキルの産物か。いずれにせよこの怪物は、セイバーの手にすら余る代物だ。

だから、霊夢の懸念は的を外していない。セイバーが得手とする近接戦闘で勝利出来ないなら、宝具で押し勝つが最善の選択だ。

「いいえ、必要ないわ。私はこいつに勝たなくていいの」

だが、勝利する必要があるとなればどうだろう。

敗退せず、大きな負傷をせず、ただ延々と戦闘を引き延ばすだけで良いとなればどうか。今夜の決着を付けるのは、この二者ではなく外的要因だとすれば、どうか。

大気中に存在する密度の薄い魔力が、強引に何か所に掻き集められ色を為す。金色にも近い黄色、煌々と放たれる光、それ自体に重さを感じるような明るさ。

「待たせたな、戻ったぜ！」

「……本当に、貴女は何時もせっかちよね、魔理沙」

割れた窓の棧を踏みつけて、アーチャーが火炉を狂霊に向けていた。

両腕とも、数えるのが面倒になる程の切り傷が有る。スカートに両脚は隠れて見えな  
いが、靴の変色具合——赤と黒の混合色から、そちらも相当に傷が多いのだろうと予測  
出来る。片目を閉じているのは、額から流れた血が入らないようにしている為だろう。  
アリスを守りながら凱旋したアーチャーには、明らかな苦戦の痕跡が見られた。

特に大きな傷は、左脇腹から斜めに腹部を通過する、15cm程のもの。傷を塞ぐよ  
うに触れさせた左手は、現在進行形で治癒魔術を行使しているようだった。

「……相手はアサシンでしょ?」

負傷の状況を見て取った霊夢の声は、訝る様な咎める様な、そんな響きを含んでいた。  
暗殺者<sup>アサシン</sup>を敵に回すなら、恐れるべきはマスターの暗殺、或いは諜報活動というのが定  
石である。直接の戦闘を行うならば、その為のスキルやステータスに劣るアサシンは、  
サーヴァントの中でも弱い部類の筈だ。

まして戦場は校庭、雪は有ると言えど平地、遮蔽物は無い。狙撃手《アーチャー》が  
苦戦する要因は薄いだろうに。

「仕方がないのよ……あのアサシン、厄介な道具を使うから……」



「そういうなよ霊夢、私のマスターはお前じゃないんだ」

「……アーチャー、私がマスターじゃ不満だっていうの？」

「そうは言わんが魔力不足だ、もうちよつと供給してくれないもんかな。まあ、あいつは追い払ったんだ、私が勝った。それでいいだろ？」

見えた目から感じられる負傷の重さとは裏腹に、アリスとアーチャーの会話は、日中のノリそのままだ。

確かに、言わんとするところは正しい。苦戦の形跡こそ見受けられるが、アーチャーは短時間でアサシンを退けた。アリスの衣服に汚れはない、どうやら攻撃は受けていないらしい。自らの負傷と引き換えにマスターを守り抜いたというのは、サーヴァントの誉れだろう。

「……さあて、その鉄仮面。こっちは2人、お前は1人。フリーズ、ホールドアップ、そしてサレンダーだ。お前がいくら早くても星の魔法には及ばない。下手な動きをしたら、この八卦炉が火を吹くぜ？ ああ、勿論お前自身に言ってるわけじゃあない。お前のマスターに言ってるんだ」

「マスター……まさか、近くにいろの？」

「知覚共有の魔術だよ、お前にも教えてやろうか、アリス？」

『ミニ八卦炉』の力とスキル『高速詠唱』、アーチャーは1秒未満で、狂霊に大打撃を

与えられる。少々の打撃でダメージを受けたが、セイバーも同じだ。狂霊の体に太刀傷を刻むには、瞬き程の間も必要としない。そして、この二者のどちらも、狂霊の攻撃を数秒以上、無傷で耐え凌ぐ程度の事なら出来るのだ。

セイバーに向かえば、アーチャーは狂霊とセイバー、2人を同時に薙ぎ払うように魔術を発動するだろう。セイバーの『対魔力』スキルはBランク。それでギリギリ無効化できる威力で放てば、狂霊だけを攻撃できる。

アーチャーに向かえば更に話は早い。セイバーが背後から接近し、無防備な背を、首を、心行くまで斬り付けるだろう。

チエツクメイト、狂霊の主には投了しか手は残されていなかった。

理性を持たない狂霊が、セイバーの首を欲して、床に這うかの軌道で馳せる。アーチャーがその背に狙いを定める。振るわれた腕が刀に弾かれるより先に、狂霊の姿は忽然とその場から消え去っていた。姿を隠したのではない。電気のスイッチが落とされるように、すくと存在が無くなった。

「令呪、か……？」

何の予兆もなく、一個の存在を消滅、或いは転移させた。宝具を疑うか、令呪の使用を疑うか。あの狂霊に、宝具を用いる理性があるとは思えない。まず間違いなく後者だろうと、アーチャーは推測した。それはつまり、知覚共有の術を、狂霊の主が用いてい

た事の裏付けにもなるだろう。

どこまで手綱を握っているかは分からない。だが、仮に完全に御す手段を持っているのならば、無双の暴虐に術者の姦計を加えた、最悪最強の敵が生まれるに違いない。二手に分かれる事になったのは、手の内の半分までしか見せなかつたという結果からすれば幸運だった。

……尤も、アーチャー霧雨魔理沙は、真名を隠す努力を一切行っていないのだが。

「……あーもう、何よあの化け物。私だって散々化け物扱いされたけど、あそこまで無茶苦茶じゃなかつたわ。あんな甲冑が館に飾ってあつたら、夜も眠れなくて昼寝する羽目になるわよ」

「よく言うぜ、お前より無茶苦茶な奴なんているもんか。……それよりセイバー、やりあつた感想は？ 私とアリスは直接見てないんだ——いや、アリスはステータスだけ見たか」

「強い、しぶとい、早い、三拍子。力比べなら勝てるけど、駆けっこしたら私が負けちゃう。多分、腹に穴開けたくらいじゃ死なないわね。しぶとさは私といひ勝負よ」

狂霊の脅威が去るや、セイバーとアーチャーは、過ぎ去つた台風の目の戦力分析を始める。常識の外に属するサーヴァントから見て、まだ化け物と評価するに相応しい大妖、それと戦つて、然し感情に一切の揺れがないのは、彼女たちの時代にはそれが普通

だったからなのだろうか。霊夢は、アリスは、改めて自分と従者との、認識の差異を思  
い知らされた。

「……そんな事より、一度ここから逃げるわよアリス。あいつ、派手にやりすぎなんでも  
の。警察か何か駆けつけてきて、私達が犯人にされちゃ癪じやない？」

「構わないわよ、ここからなら……博麗神社が近いかしら」

「……え？」

「え？」

戦闘が終わって尚も戦地にある事を良しとしない霊夢が、保身も兼ねて撤退の案を示  
す。同意したアリスは当たり前のように、他人の家を一時の休憩場所にする事を選んだ。

常に一人でさっそうと歩いているのが、霊夢が抱いているアリスのイメージだ。今の  
案は、そこから大いに逸脱する。耳を疑った霊夢にアリスは、『私何かおかしい事言つた  
?』とばかりの呆け顔を返し、

「まさかこれから、あの……バーサーカー? あれに対策を打たない訳にはいかないで  
しょ? これからどうやって他のマスターを探すのかとか、話し合いたい事はいくらで  
もあるわよ」

「ああ、うん……うん、そうよね。いや、構わないわ。ちよつと驚いただけよ。行きま  
しょ、こんなところにいるのを誰かに見られるのはいやだから」

霊夢の方も、反対する理由はない。腰を落ち着けて相談するなら、慣れた境内が一番いい。博麗の血に馴染んだ土地は、睡眠とマスターの魔力さえ足りているならば、サーヴァントの治癒速度を増すだけの霊力を集めている。

今現在、霊夢・アリスの同盟関係において駒は2つだけだ。その1つが万全でないのは、手が欠けているも同じ。追撃を図るよりは、アーチャーの回復を待つ間に、以降の戦略を寝るべきである。

午後11時を過ぎたが、冬の夜明けは遅い。睡眠時間を極端に削る必要は、おそらく存在しないだろう。

## 三日目、博麗神社、夜

雪を掻き分けざっくりざっくり、神社にくつついた自宅にまで帰り付く。

主が不在の家というものは、夜間の寒さを防ぐ術がないというのが困りものだ。外気と室内の温度に大差がない。玄関の戸を閉めても、まだ白く息は濁っている。

「おじやましませ、寒っ。暖房どこよ……の前に灯りのスイッチどこよ」

「スイッチはあなたの右手の直ぐ上。暖房はちよつと待ちなさい、ストーブ入れてくるから」

壁に手をついているアリスに灯りを付けさせ、霊夢は一足先に居間は急ぐ。普段は絆纏を羽織って炬燵に入っていれば十分だが、今日は来客が有るのだ、ストーブくらい付けよう。別に日ごろ灯油をケチっている訳ではない。ただ、着火と消火がなんとなく面倒なのである。

マッチなんて不便なもの無く、使うのは、引き金を引くだけで火が付く簡易ガスライター。ストーブの芯に火が回り、やがて灯油の力で火力が増していく。

或る程度火が落ち着いたのを見てから、霊夢は炬燵のスイッチを入れ、脚をそこへ押し込んだ。何かにつづかった。固くはない、生き物の感触。何故、と思つて見てみれば、

「あー、やっぱり冬に神社来たら炬燵だよな。あと蜜柑」

「炬燵は凄いわよね、これは私の部屋にも欲しかったわ。あと蜜柑」

「……あんだ達、なんで実体化してるのよ」

「そこに炬燵があるからだぜ」

「そこに炬燵があるからよ」

一足先にサーヴァント2人が、肩まで炬燵の中に入り込んでいた。おかげで脚を炬燵に入れるのに一苦労。一番幅を取っているアーチャーの背中の上に、脚を乗せる事で決着を付ける。

そしてアリスは、醜いポジションの奪い合いを傍観しつつ、ストーブの直ぐ前に陣取っていたのだった。

「……こーして見るとあんだ達、和室が似合わないわよね……」

霊夢の言葉も尤もだろう。炬燵から生えた首も金髪、ストーブの前で膝を抱えているのも金髪。3人中の2人は、雪の様な見た目でも形容できそうな色白で、目鼻立ちもはっきりとした西洋人形的な容姿だ。部屋に釣り合う霊夢の黒髪黒目が、寧ろ浮いてしまいそうな程、部屋の現住人達は華やかだった。

「はあ……疲れが増すわ、あんだ達を見てると。アリス、あんだもストーブに張り付いてないの。まず確認よ、あんだのサーヴァントの怪我はどうなの？」

「え、寒いのに……ええとね、傷の深さ自体はそこまででもないし、傷の修復にもそんなに魔力は使わないわ。問題は、そうね……傷を受けてから少し、アーチャーの動きとか反応が鈍いのよ」

「結構おごごとじゃないの、それ」

先の戦闘による被害を確認しようとした霊夢は、いきなり顔を曇らせる羽目となった。

「私の事だから私が言うが……アサシンの爪、多分毒でも塗ってあったな。傷口だけ塞いだは良いんだが、どうも腹の中身だけじゃなく溜め込んでた魔力までやられたらしい。この程度で死にはしないが、毒が抜けきるまで、他の連中とやりあうのは危ないだろうぜ」

「付け加えると、私からアーチャーに流れてる魔力も、少し滞り気味ね。血管が詰まっている感じかしら、供給量を増やそうとしてもちゃんと流れていなくて……」

浮かない表情なのはアリスも同じだ。彼女のサーヴアントはアーチャークラスだが、魔法使いでもあるのだから。アーチャー、霧雨魔理沙は、本人の魔力生成量が多い為、現界させておくだけなら魔力消費量は少なくすむ。それは実体化していようが変わらない。日常生活を送るだけであれば、彼女は非常に燃費のいい存在である。

「……いつそ霊夢くらいの魔力が有ればね……詰まってるとか気にしないで、強引に



押し流せそうなのに」

「否定できないな、それなら私もやりたい放題だ」

「いや、否定しなさいよ」

「私は正直者なんだぜ」

だが、事が戦闘に及べば話は別だ。彼女は一挙一動全て、魔力を消費して戦闘を行う。空を飛ばば、飛行速度の上昇。視力と動体視力のブースト、風圧に負けない為の身体強化。攻撃を受ける前には体を部分的に硬化させ、傷は治癒魔術を以て修復する。敵の位置を探るには探知魔術、発見した敵を撃ち抜く為に攻撃魔術、宝具『ミニ八卦炉』に注ぐ魔力――

生前の彼女であれば、一人で賄えたのだろう。だが、魔術師としての練度で劣るアリスをマスターとしている今、アーチャーは枷を付けて戦っているも同然であった。

そして、自分の魔力の供給量では、アーチャーが満足に戦えない事を、アリス自身が良く理解している。

それは彼女が他ならぬ魔術師であり、アーチャーの技量がどれだけ卓越しているものか分かるからこそだったのだが、分かっってしまうが故に、自分の力の及ばない事が――勿体無い、と感じていた。

悔しいとか恥ずかしいとかではなく、勿体無い。本来発揮できる筈のスペック通り彼

女が動けない、その理由が彼女の外にあるのが勿体無いと、アリスは嘆いていたのだつた。

「はいはい喧嘩しない。話を続けなさいよ、毒とかなんとか一切合財纏めて。あの鎧の事は、その後に相談しましょう。このままじや夜が明けちゃうわ」

「えーと、怪我の状況だったか。毒がなけりやあの爪はそこまで怖くないな。いやまあ普通の人間だったら、頭が腐った蜜柑みたいな潰れ方するだろうけど。私でもそこそこ耐えられたし、セイバーなら無防備でも大丈夫なんじゃないか？」

「私は死ぬかと思つたわよ？ いきなり地面から爪が生えたかと思つたら、箒に引つ張りあげられて飛ばされて……流石はアサシンね、初撃を防ぎ損ねたらそれで負けるわ。……どんな風だったか、順を追つて話すと……——」

割れた硝子が残る棧に触れないように、靴で確かに踏みつけて窓枠を乗り越える。

校舎の外は、街灯の光もあり、少なくとも屋内よりは明るかった。

つい昨日の夜を思い出す。校庭の真ん中でぶつかり合っていた二つの影。見通しが良い筈の校庭に、先に飛び出した筈のアサシンは見つけられなかった。

「逃げたのかしら……いや、隠れてるのよね。アーチャー、アサシンがどこか分かる？」

「……………」

「ちよつと、アーチャー？」

「……正直分からん。気配遮断スキルは厄介だ——つと来たぜ！」

アーチャーの言葉が終わるより早く第一撃。それは地中から襲つてきた。校舎内での襲撃と同じ、巨大な爪を——外骨格の脚が振り回していたのだ。

さながら鎌、いやチェーンソー。触れただけで断ち切られかねない、巨大な刃。私を両断し、そのままアーチャーをも切り裂こうという軌道で振り抜かれた刃は、ひょうと高い音を立てて空を切った。アーチャーに引つ張られ後退した私の数十センチ先を、巨大な脚は通貨していった。

「ちいつ、勘のいい奴めえ……！」

「お生憎様、不意打ち奇襲はお手の物なんだぜ！」

二撃、三撃目は同時に、アーチャーの背後から、やはり私を巻きこむように。空振りしたものは別の脚が二本、アーチャーの首と腹の高さで横薙ぎに振るわれる。

先程とは逆、前方に飛び出して、雪の上を転がるように回避した。

正直に言えば、最初の一撃のほかは、然程速い訳でもない。アーチャーなら回避は十分に叶う速度だろう。でも私にしてみれば、軌道を見る事だけで精いっぱい、とても避ける事など出来ない。この場にいる以上、私は案山子も同様。サーヴアントの戦闘に於いては、脆い荷物でしかなかった。

四、五、更なる追撃。雪の上に転がったアーチャーに1つ、そして私の頭上に1つ。咄嗟に頭を腕で覆い屈んだ私の上に、アーチャーが体当たり気味に被さった。そのまま、私を抱え込むようにして前転、爪を逃れ——いや、逃れられない。背中に一筋、切傷が走る。

「アーチャー!?!」

「大丈夫だ! 飛ぶぞで!」

アーチャー程の魔力と技量があれば、飛行の際に補助道具など必要ない。だから、普段使っているのは別の箒をわざわざその場で作ったのも、私を拾い上げる為のものだったのだろう。魔力を終結させ、形状を整えるまでに一度、アーチャーの腕を爪が掠める。

振り下ろされた爪を側面に動いて回避し、私に駆け寄るまでに一度、脇腹の布を爪が引っかけていった。

箒にまたがり地面を蹴る。跳躍から浮遊、上昇しようとして、

「逃いがしやしないよお……!」

「こいつは——もつと“長かった”のか!」

私達の頭上に、二本の爪。地上からの高さは3m程になるだろうか。地中から伸びる腕は、爪も含めて1.5m程に見えていたし、実際にそれ以上の距離までは追ってこな

かった。

それを前提にアーチャーは回避を続けていたのだ。その計画が、上昇という単純な行動の途中で崩れた。

精確に私達2人を、頭から貫き通そうとする爪。

アーチャーは、箒を強引に後方へ進めながら、その片方を蹴りあげた。後ろに座った私を爪から逃がしつつ、降ってくる爪に対し、仰向けになりながらの爪先蹴り。頭蓋を貫通する箒の軌道は絶妙にずらされ、箒の側面を抜けて地面を穿つ。

「……っはは、怖いな！ 殺す気か！」

「当たり前でしょうが！ それよりアーチャー、お腹！」

「かすり傷だ、どうってことないぜ！」

爪の軌道は、確かに掠る程度だった。だが、命中の瞬間に脚を開いて爪の角度を変え、更に脚を押し込むように突き出す事で、アサシンは魔理沙を捉えていた。

爪の先が左肋骨の下端に引っ掛かり、数センチほど食い込み、斜め下に右脇腹へ抜ける長い傷。即座に治癒魔術の行使を始めながら、アーチャーは上方へと離脱していく。

「逃がさんと言ったら逃がさんさあ、鼠捕りは十八番なんだからねえ……！」

地の底から、水飴を流したように粘ついたアサシンの声が、爪を振りかざし追ってくる。

爪の先でアーチャーの腕と言わず肩と言わず突き刺し、引きずり落とそうとするアサシン。この瞬間は反撃の余地はなく、回避に徹するにも、3本の脚がそれぞれ3方から、内側へ掻きこむ様に繰り返し振り下ろされる。

今から急制動、下降し、脚の横をすり抜ける事は出来ない。逆に最大の加速をし、閉じられる爪のドームに対し、強化魔術を掛けた両腕を盾に、アーチャーは急上昇した。幾度となく繰り返される斬撃が、生身のものとは思えない衝突音に弾かれる。だが、強化したとはいえ、元は脆い人間の体。人外の巨大な爪の前に、小さな傷が無数に刻まれていく。それでも、アーチャーは私に1つの傷も負わず、爪の射程圏外に逃れおさせた。代償として、アーチャーは両脚を突き刺される。深く爪が食い込む前に逃れたが、腹部程ではないものの出血が多い。忽ちアーチャーの白黒のスカートは、赤と黒に染まり、黒一色へ変わっていった。

だが、アーチャーは怯まない。痛みに呻く事もしない。箒の上から地上に手を翳し、瞬間的に詠唱を終了する。高速詠唱に加え、自分自身の声帯を空气中に複製、二つの喉から別々に音を綴る。

『“Viridi” “Rubrum” “Crocus” “Albus” “Niger”

“五は其を以て一を為せ”』

アーチャーの周囲に五つの結晶が展開された。何れも宝石の如き輝きを持つ、平たい

六角中の上下に角錐を張り合わせた形状。

50cm前後の大きさのそれは、旋回しながらアーチャーの魔力を吸い上げ、自らの光を強めていく。

「正体不明の奴にはこれだ、景気良くぶつ放すぜ—— *lapidis philo s o p h o r u m*！」

五種の光が雪に照らされた光景は、この幻想郷にあつてさえ、幻想的と呼ぶに相応しいものだっただろう。

地上をアーチャーが指差した。黄色の結晶が、地面から生えた脚の中央に落下し、小爆発を起こした。

雪を熱で溶かし、爆風で地を砕いて石を跳ねさせる。一瞬の後に、地中に隠れたアサシンの姿が曝け出された

「……あ、ありや？」

「『山地剥』、まずは防御を引つpegがして——」

青の結晶が射出され、アサシンの頭上で炸裂する。

「——『風雷益』、敵が見えたら躊躇うな」

「あがあつ……!?!? ぎ、ああああアツ!!」

炸裂箇所を起点とした局地的暴風が引き起こされ、アサシンの瘦躯を地上に押し付け

る。

骨の軋む音がここまで聞こえそうだ。風圧に押しつぶされたアサシンは、這い蹲り赦しを乞うている様にさえ見えた。

「そうらまだまだ『天沢履』、逃がしやしないぜ『坎為水』」

白の結晶が炸裂し、地上に針の雨を降らせる。五寸釘をネイルガンで撃ちまくった、と言えば分かりやすいか。

風圧で動きの鈍ったアサシンは、頭と首を庇い、雨の下から抜け出すべく、抉れた地面から這い出す。

既に針鼠になりかけたその背後で炸裂した黒の結晶からは、大量の水が溢れ出た。アサシンの足元の土を崩し、体を流し、また抉れた地面の上へ。

処刑台に曝されたアサシンへ、アーチャーの指が向けられる。最後に残った赤の結晶は射出される事なく、アーチャーの指の前に移動し、吸収した魔力を以て特殊なフィールドを形成した。

この結晶は、フィールドに突入した魔力を全て束ね、一点から射出するプリズム。アーチャーの膨大な魔力は、数段階の詠唱を経て、炎の魔力として完成する。

これこそは、霧雨魔理沙という英霊の真骨頂。単純な火力に特化した超攻撃性魔術――

「『離』に『離』を重ねて『離為火』――幻想の光――！」



プリズムを潜りぬけた一筋の光は、大気中の微小粒子を燃焼させ、流星の如き光を放ち突き進む。莫大な熱を束ねた光柱は、アサシンの骸骨にも似た瘦躯を焼き払い、灰燼に帰せしめんとし――

「ツチ…………――『服アサシンの服わぬ八握脛』!!」

光が四方に散らされた。触れるもの全て燃え上がらせる光は、アサシンの胴体に着弾する前に、四本の爪で阻まれていた――精確には、巨大な爪を備えた四本の脚で阻まれていた。

長さは約3m。付け根とは別に二か所の関節を備えた脚は、煎茶色の甲殻に覆われて尖鋭的な印象を見せる。針の様に短い体毛が甲殻の上に並ぶその足は、アサシンの腰から四本、スカートのように生えていた。

見て取れる通り、完全に防いだ訳ではない。その腕は、脚は炎に包まれ、立ちあがって尚も赤々とアサシンを照らす。だが、己の手足が燃えている事すら、この女は意に介さなかった。

「つ……………うおう、第一印象よりバケモンだな…………」

「……………バーサーカーとは違う意味で怖いわ…………」

骨が軋む程の暴風と釘の雨、散々に打ち据えられた体への駄目押しで、もう力など殆ど残ってはいないに違いない。にも関わらずアサシンは、怨みと嘆きの入り混じった目

を頭上に浮かぶ敵2人に向けて、

「——使わせたな、この忌む身を」

水銀を塗りつけたかの如く張り付き纏い付く音声で、血を吐くように言い捨てる。蒼白の面に浮かぶ激情は、暗殺者

アサシン

というクラスに、そして水の如き佇まいのこの女に、とても似合わぬものであった。

「ああ蔑むか！ お前達も私を化け物と罵るかッ！ 我々を地の底に貶めるかアッ!?

その傲慢が気に入らんのさ、空を知つての増長驕傲が！ 幾星霜を経て尚地上は斯くも奢り高ぶるかアッツ!!!」

背の四つの脚が地面を指す。抉れた土を更に抉り、土砂を壁の様に巻き上げる。

「な……目晦ましか!?!」

噴煙を吸い込んでしまわぬ様に、アーチャーは口を押さえ、目を細めた。煙幕となつた土の向こうにほんの一瞬、アサシンの瘦躯が消えていくのが見えた。

「喰らわないと、もつともつと喰らわないと足りやしない。日に当たって焼け死なないくらい、腹を膨らませなきやあ……。餌場をよこしなマスター、私の腹を満たしておくれな……」

尾を引く声は地中に消える。何mか潜つたところで、私の感知では追えなくなった。

おそらくは霊体化し、気配を遮断して逃走したのだろう。逃げ足という一点では、アサシンは上位のクラスかも知れない。

「けつ、陰気な奴。一方的にキレて逃げちまったぜ」

「……一応聞いておくけど、知り合いにああいう人——人？ とにかく、いた？」

「さあな、幻想郷は狭いけど広いんだ。あんなのもいたかも知れんが……いちいち覚えてない。それよりアリス、戻るぞ。こんだけ時間を掛けちまった、セイバーがヤバいかも知れない」

「……ええ、分かった」

箒の先を、校庭に出る際超えてきた窓枠へ向け、飛翔する。

「一応聞いわ。『こんだけ』って、何分掛かった？」

「そうだな、3分は掛かっちゃったぜ」

数度の死さえ有り得た攻防は、たったそれだけの時間の事だった。

「——と、いう感じよ。アサシンの宝具は見る事ができたけど、アーチャーは正体が分からなかった。私も思い出せないわね……というより、そんな伝承を読んだ事があるかどうか」

四人で脚を炬燵に突っ込みながら——セイバーとアーチャーは腰まで引つ張り出した——アリスは、アサシン戦の顛末を語った。

霊夢もセイバーも、相槌こそは打つものの、言葉をさしはさみはしなかった。何故なら、やはりこの2人も、その英霊の正体に心当たりが無かったのだ。

「地中を移動する、毒を使う、爪……確かに、そんな話を聞いた事は無いわね。毒の逸話なんて……うん、薬なら知ってるけど。セイバー、あんたは？」

「んー、分からない。検討もつかないわ……」

四者四様、唸りながら首を捻つても、答えには辿り着かない。

「……よし、一度この話は脇によけておこう。考えが無い事もないんだ。それより今の問題はあれだろ？ あの鎧の」

「バーサーカーよね、多分……」

結局、アーチャーが持ち前の強引さで話題を打ち切り、次の課題を引き出してきた。アリスは、あれをバーサーカーだと推測している。意思の疎通が取れない程の狂気に、セイバーにも勝る暴力の塊。大まかな行動指針までなら制御されているのだが、おそらく完全には律されているまいと考えているのだ。

実際、アリス達からすれば、そうでなくては困る。あの狂霊が完全にマスターの意向通り動くのなら、よほどマスターがマヌケで無い限り、そのタッグは最強と言つていい

だろう。

「バーサーカーね、燃費が悪いって聞いたけど。でも、宝具を使わないであれなんですよ？　アリス達や私達みたいに真つ当なマスターなら兎も角、平気で魂喰いをさせる様な奴だったら……」

どこまで無茶な燃費でも、休み休みなら十分に動かせるんじゃないかと思うわ」

「有り得るわよそれ。バーサーカーは、軽く私達の倍以上は魔力を食いつぶすらしいけど……じゃあ、普通にしてて得られるだけの倍の量、外から魔力を持つてくればいいって事なのよね。うん、ちよつとだけ夜に散歩するのを黙認してくれたら、私もちよちよーつと」

「それはダメ」

「分かってるわよ、その方針に文句もないし、そのやり方が気に入ってるわ」

冗談めかしていいながら、セイバーはその策の効率の悪さを知っていたし、霊夢は実行に移す意思がない。

人間を1人1人襲って魂を集めるなど、得られる魔力に対し、行動の際に消費する魔力が大きすぎる。最終的な収益はプラスになるのかも知れないが、時間と照らし合わせれば寧ろマイナスだ。その時間を探索と諜報に使い、敵の存在を確かめていく方がよほど有益であろう。増してやバーサーカーの燃費の悪さでは、移動と狩りの為の動きだけ

で、大幅に足が出る筈だ。

……ただし、通常なら、では。

「私としちゃ、まずアサシンを叩いておきたいな。あれをほつとくと後々ヤバイ事になる。今回あの鎧のは、アサシンを狙うそぶりもなかった。私達と同じで、マスター同士手を組んでるんじゃないか？」

「アリス、アーチャー。あんた達魔術師、つまり専門家の意見を聞きたいわ。アサシンとあの鎧のマスターが手を組むと、どんな事が起こると思う？」

霊夢の問いに、アリスは一つ咳払いをして、表情の真剣味を増して語り始めた。

「1つ、あのアサシンの結界は、魂と魔力喰いに特化した結界なのよ。その恩恵をバーサーカーが受けられるようになったら、もう本当に手に負えないわ。唯一の弱点は燃費の悪さなのに、外部電源で動くようなものだから」

続けて、アーチャーが炬燵の上に身を乗り出し、言葉を引き継ぐ。

「2つ、アサシンの気配遮断はかなり強力で、サーヴァントの気配探知でも見つからない。あれをいぶり出すには、それ相応の結界が必要で——まあ、この神社なら大丈夫だろうけど。それ以外の場所で取った全ての行動が、あの鎧の奴のマスターにも伝わる、と思っればいいぜ」

「……つまり、私達の隙とかバレバレの上に、ほつとくと幾らでも強くなるっ！」

靈夢が端的に纏めたが、軽く口にしては見たものの、実際は恐ろしい話である。

あの鎧の狂霊と戦力を比較すれば、1対1で宝具を使わない場合、ややセイバーが不利。アーチャーを交えてようやく優位に立てる相手だ。

技術を用いる事のない『狂化』スキル持ちは、ステータスがそのまま強さに直結してくる。これ以上かの狂霊が強くなれば、もはや2人掛かりでも勝利出来るかどうか。靈夢は不安を拭えない。

「やっぱり、私達の方から出て行つて叩くのがいいだろうな。向こうは魂喰いで強化を狙ってるんだろうから、体調不良の人間が増えた所を探せばいいんだ。

まずはアサシンを。鎧の方は、必ず私とセイバーが揃つてる時にだな」

「じゃあ、今夜から始めましょう。とにかく勘を頼りに歩き回つて探し当てればいいのよ」  
善は急げとばかり、立ち上がろうとした靈夢の袖を、アーチャーが引つ張つて座らせた。

「お前だとそれで成功しそうだから怖いけどな、悪いがそりや無理だぜ」  
「なんでよ」

不安が有る時に行動の指針を示されれば、人はそれに飛びつきたがるものだ。靈夢も例外ではない。その日から開始出来るプランを与えられたというのにすぐ取り下げられ、不満げな表情を見せる。

アーチャーの言葉を引き継ぐかの様に、アリスが一度咳払いをする。

「……霊夢。私とアーチャーは、数日は戦闘を避けたいのよ。傷はもう塞がってるだろうけど、毒の正体が掴めないから……どう治療していいのかわからないわ。薬草で治せるものなのか、それとも魔術の領域なのか、そこから調べなきゃいけないの。」

貴女のセイバーと違って、魔力の供給が不十分なアーチャーは……ええ、足手まといになるわよ」

「悔しいが、そういう事だぜ。相手がアサシンで、私だけが事前に準備して戦えるなら、勝てる。それ以外だとかなり辛いし、あの鎧のが相手だったら確実に負ける。今の私はそんなもんだ。数日使って完全に回復させる間、私は……うん、新聞でも読みながらゴロゴロして過ぐす」

「堂々たる引きこもり宣言はやめなさい」

「何を言う、立派な情報収集だぜ。あとはニュース番組とラジオも必要だな」

炬燵の天板に顎を載せて、暖かさに頬を緩ませているアーチャーは、外見的には十全に見える。然し、魔力のパスでつながっているアリスには、その不調が手に取る様に伝わってきていたのだ。

現状、アーチャーは戦力と数える訳にはいかない。どうしても数える時があるとすれば、それは攻め込まれた際の緊急避難に限る。僅かにでも不安要素は残せない戦争であ



るからこそ、霊夢も領かざるを得なかった。

「しかたないわね、それじゃあ私とセイバーの二人で、夜に街を出歩いてみるわ。出来るだけセイバーは感知されやすいようにして、獲物を釣り出すくらいの感覚で。バーサーカーに襲われたら逃げる、それ以外は無理をしない程度に勝てたら勝つ、でいいわよね？」

「……………」

返事が無い。一拍首を傾げ、もう一度。

「……………いいわよね、セイバー？」

「……………」

「あららら——起きんかつ！——」

「はぎやつ!？」

同意を求められたセイバーとは言えば、炬燵にまた肩まで潜り込んで寝息を立てていた。鎧の狂霊と撃ち合い、鉄杭の様な打撃をいくつか貰った。疲労の蓄積でいうなら、アーチャーにそう劣つてはいない。が、それとこれとは話が別だとばかり、霊夢のげんこつがセイバーの頭を打ちすえる。

ご丁寧に、神秘に属するサーヴァントにダメージを与えられる様、拳を靈力で強化しての一撃であった。

「あたたたたた……もう、聞いてたわよー。私と霊夢は外を回る、魔理沙とアリスはニユースの分析。それで魔理沙の体が治ったら、アサシンを叩いてからバーサーカーよね？」

アサシンを潰すまでの間、あの結界を別な場所に張られてたら困るからどうにかしておきたいんだけど、それはやっぱり私と霊夢の仕事になるのかしら？」

「……ちゃんと聞いてるんじゃない。それでいいんじゃないの？ 探してる途中でアサシンを見つけたら倒すし、アサシンの結界が有ったら壊すわ。他のマスターとサーヴァントも、私達の前に出てきたら倒す。簡単な話じゃないの。」

そーいう訳だからあんた達漫才コンビは、さっさと毒をどうにかしなさい」

「漫才コンビとは失礼な、私のマスターをポケ呼びわりするんじゃないぜ」

「誰がどうみてもそっちがポケでしょうが！ ツツコミは私よ！」

「ほら、漫才じゃない」

「霊夢ー、眠いー、お布団敷いてー」

「こっちはこっちでああもう！」

アリスとアーチャーは賑やかに掛けあいを続け、セイバーは目を擦って霊夢の袖を引く。

4者の中で、この家の布団の場所を知っているのは霊夢しかいないのだから、セイ

バーの要求も外的外れではないのだ。が、手伝いをしようというつもりは無いのかとか、言いたいことも浮かんだらしく、

「こうなつたらもう……全員きりーつ!」

「は、はいっ!」

「イエッサー、だぜ!」

「あ、なにににー?」

霊夢はドン、と畳を踏みつけ、蛍光灯がビリビリ震えるような声を出した。思わず丁寧な返事を返すアリス、やはりおちやらけるアーチャー、妙な好奇心を押しだすセイバー。三人の前に立った霊夢は、襖をあげた向こう、押し入れを指差して、

「あそこに私とあんた達の布団が入ってます。4人で3組しかないけどね。寝たきや引き出して敷いちやいなさい、さあ!」

「わーい、お布団だー!」

「おう、外泊はいつまでたつても楽しいなー!」

号令一喝、無邪気に押し入れへすつ飛んで行ったのはサーヴァント二名。まこと人生を楽しんでるようである。アリスは、その2人の背を見送った後で、

「え、泊まるの?」

霊夢からすれば今更な事を確認していた。

「今何時よ、これから帰ってたら起きられないでしょ？ どーせ一人暮らしよ、誰か泊めて文句言われる事もないわ。」

「布団が足りてないように聞こえたけど」

「あんたとセイバー痩せてるしアーチャーちっこいし、大丈夫でしょ」

「……まあ、大丈夫よねえ」

霊夢とアリスは、合理主義者だという共通点がある。その為、これから帰宅して睡眠という手順を踏むより、ここで睡眠を取る方が有益だろうと判断したのだ。

アリスに睡眠を取る必要は無いのだが、アーチャーの現状を思えば夜間に歩きたくない。布団の数が足りていないというのも、少女4人の体格ならば問題は無いだろう。

ただ一つ、アリスが最初、疑問形を霊夢に向けた理由はと言えば、

「大変だわ、霊夢。私、他人の家に宿泊するのって初めてかも知れない」

「それはよーござんしたわね、狭い部屋ですがごゆっくり」

極めて平凡な、つまらないと言ってしまった方がいいだろうものだった。

眠気が限界だったらしくもう眠っているセイバーに、枕に顔をうずめているアーチャー。彼女たちに少し横へ避けてもらって、霊夢とアリスも布団にもぐりこむ。暖房が消えて冷え始める室内だが、普段の4倍の熱量を抱きこんだ布団は、非常に暖かかった。

## 四日目、博麗神社、朝

博麗霊夢は、奇妙な夢を見た。

これは夢なのだと、見ている時から自覚が有った。だから、混乱などは全く無かつたし、本を読む時の様に、冷静に事物を観察できていた。ただ、これが現実に起きた出来事だとも、理由などなく気付いていた。

“彼女”は、瓦礫と血の臭いに包まれて、夜の空を見上げていた。

雲は無い、美しい夜空だ。人工の灯りは周囲になく、星は大きく強く輝いている。手を伸ばせば届きそうに思えて——手が、持ちあがらない。

それならば。立ち上がって近づこうとしたが、脚もやはり動かさない。

何故だろうかと思ひ、視線を横へ滑らせる。両の腕の手首に、黒い槍が突き刺さり、“彼女”の体は瓦礫に縫い止められていた。

もしやと思ひ、首だけ持ちあげてみれば、予想の通りに両脚にも一本ずつ、槍が突き刺さっている。

だが、“彼女”に致命傷を与えたのは、他の何れでもなく、心臓を貫いた一本の槍だつ

たのだろう。

もう、血も流れない。鼓動は一つも聞こえない。風の無い夜で、虫の声一つ、流れては来なかった。

“彼女”は、血を失った体で泣いていた。

理由は、痛みではない。死への恐怖でもない。巨大な、巨大な後悔、ただそれだけだ。過ぎてしまった過去を悔み、己の愚かさを恨み、だが何をする事も出来ず、瓦礫の上に張り付けられている。そんな己の身の上さえ腹立たしくて、悲しみより悔しさが勝つて、“彼女”は泣いていた。

鉄の味に濡れた舌が、乾ききった喉が、音を綴る。誰も答えない、そも聞く者がいない。

当然だ。“彼女”の半径数百mは、地を這う虫さえ死に絶えた、殺戮の跡地なのだから。

滲む視界の中に、生き物の姿は、何一つ見つからなかった。

霊夢は、それが我が事のように悲しくてならなかった。“彼女”の目を借りて、何も居ない世界を見る事が、辛くて辛くて堪らなかった。

これは、霊夢が最も恐れる世界。日常の全てが消え去った破滅の果て。その中にただ一人で取り残され——間もなく、死ぬのだ。

“彼女”の境遇を憐れんだ、とは言えまい。自分はこうなりたくない、強く願っただけだ。だのに霊夢は、“彼女”の嘆きを、我が事として感じていた。この夢の中では、主客は渾然一体となり、彼我の境界は消え去ってしまった。

だから霊夢は、この夜をやり直したくなつた。もう一度、もしも自分が“彼女”の代わりに居られたのなら——きつと上手くやつてみせる。自分ならばきつと、この瓦礫の山を作らせず、この槍を突き刺させず——“彼女”を嘆かせず、居られるだろう。

根拠は無い。霊夢は、強く信じていた。

夜が明ける。黒が濃紺に代わり、朱に染められていく。鳥が朝を告げる前に、“彼女”は永の眠りに堕ちていた。

「……寝覚め最悪」

目を覚ましてみれば、霊夢の胸の上には、アーチャーの両脚が乗つかつていた。布団はほぼ剥ぎ取られ、アリスの体に巻きついてしまっている。腕がやたら痺れると思えば、肘の裏側が、セイバーの枕にされていた。

寝相の悪い連中を、半ば投げける様に散らして立ち上がる。制服のままに寝てしまっていたから、皺が出来てさんざんな状態だ。おまけに、四人分の体温を近づけて寝ていたからか、冬だと言うのに汗も酷い。

「というか、今何時よ……—あ、ヤバ」

現在の時刻は、午前7時。食事を取る事を考えると、もしかすれば朝礼に間に合わな  
いかも知れない時間帯だ。むくりとキョンシーの様に起き上がって、部屋の襖に手を掛  
けた瞬間であった。襖の隙間から、誰かが室内を覗きこんでいる事に気付いた。

「ひっ……!? な、あ……あ、あんたか……」

思わず引きつった声を上げつつ、手近に有った写真立てを、武器代わりに引つ掴む靈  
夢。それを振り下ろさずに済んだのは、襖の向こうに有った顔が、良く良く見知った顔  
だったからだ。

「おはようございませす、先輩……ゆうべはお楽しみでしたか……?」

すす、と襖を開けて姿を見せたのは、陸上部のリグル・ナイトバグ。普段から快活な  
彼女は、今朝髪を振り乱した幽霊の様な顔をしている。

「……どうしたのよあんた。すんごい顔になってるわよ、本当に」

「そうでしょうねー、靈夢先輩がこんな人だったなんて思いませんでしたからね……  
あ、朝ご飯出来てますよー……」

目を丸く見開いたまま、瞬きの回数も極限まで少なく、そして口元は最小限の開き方  
で。表情が抜け落ちた様な顔は、この後輩を良く知っているつもりで、思わずた  
じろいでしまう程であった。



「どうしたんですかー、早く食べないと冷めますよー……勿論二人分しか無いんですけどねー……」

足音も無く、リグルは居間へと向かう。靴下を床に滑らせての擦り足、肩が上下しない為、ますます幽霊じみている。

「……どうしたもんかしらねえ」

未だに惰眠を貪る三名中、登校の必要がある二名だけを叩き起こし、霊夢は諦念たっぷりに溜息をついた。

「ありや？ 私の分のご飯は？」

「……ありませんよ、ちゆり先輩。居るなんて知らなかったんですから」

「うちのお米をたかる事前提で考えないで頂戴」

変わらず能天気なアーチャーのずうずうしい要求を、リグルは無愛想な声で切り落とし、自分は茶碗に大盛りの白米をかつ込んでいく。霊夢は眉間にしわを寄せたまま、この状況をどうしたものかと悩んでいた。

何せ、セイバーを見つけられて少しばかり険悪な雰囲気になったのが、たった二日前。不満が完全に収まっただろう訳でも無いタイミングで、更に火に油を注いだのだ。

そも付き合いの長い霊夢は、この後輩が何故この様に不機嫌になっているか、全く分

からなくてもないのだ。なんとなくでも分かってしまいが故に、あえてそれに言及し辛い点があると云おうか——結果、弁解するにも、どう言いだして良いのか分かりかねている。

暫くは沈黙の中で、箸と食器の衝突音だけが聞こえていた。それを裂く様に、ふいに動いたのはアリスの手。

「二口、頂戴な」

「あ、ちよ、ちよ」

霊夢の手元にあつたお椀をひよいと持ち上げ、中の味噌汁を一口啜る。リグルの不機嫌色が一層濃くなる中、アリスは口を手で押さえて、

「……美味しいわ、これ。貴女が作ったの？」

寝起きで周りのやりとりを正確に把握していなかったのか、霊夢に訊ねた。霊夢は首を左右に振り、それからリグルを指差す。

「貴女なの？ ねえ、これって出汁は何使ってるの？ 味噌とか結構拘ってたり？」

知的好奇心任せに生きているアリスである。美味しい食事への感動より、むしろ構成する材料への興味が勝つたのだろう。

「え——え、普通に、お台所にあつたお味噌を使ってるだけで——」

「そうなの？ じゃあ安物よね、霊夢の事だし。だとすると火加減と時間なのかしら、そ

れとも調味料……？ 前に私が作った時は、とてもこうは……」

自分が宿を借りた相手に対する無礼をさりと混ぜつつ、アリスは解けぬ推理問題に取りかかっってしまう。自分自身の過去の調理経験と照らし合わせてみて、今日飲んだ味噌汁は、あまりにも美味であつたらしい。

決して華美な味わいではない。寧ろ、素朴なのだ。土に根差す様な味わい、程良く体を温める湯気。浮かぶシソの葉の香りが、粗野な中にも気品を通す。もう一口飲もうとアリスは手を伸ばし、霊夢がその手を叩いて落とした。

「意地汚いわね、自分で作って飲みなさいよ」

「作れないから困ってるんじゃないの。貴女、いつもこれを飲んでるの？ 羨ましいわ……通い妻持ちの学生なんて贅沢な」

「かつ、かよ——誰がですか!？」

声が引つ繰り返るリグルへ、アリスは卓袱台を回り込んで詰め寄る。やたら真剣味を帯びた表情である。

「ねえ、私にも作り方を教えてくれないかしら？ 食材と厨房は提供するわよ、なんだつたら私から習いに行くのも……ああそうだ、どうせだからここで練習するのもいいわね。たくさん作っても飲む人がいるし。ねえ、ねえ、ねえ、ねえ」

「私の家を練習場にするな。あとね、あんまりそいつにちよつかい掛けてやらないで。

結構簡単にテンパるんだから」

リグルの手を両手で挟み、真正面から目を覗きこむアリスを、霊夢は言葉だけで制止する。本気で止める気が無いのは明白である。いつそのまま泡を食わせておけば、自分分は静かに飯が食えると、そんな打算も有ったのだ。

「いやー、やっぱアリスはアリスだなー、アリスらしい。ところで霊夢、時間、時間」  
どさくさに紛れてリグルの皿から煮物をちよるまかしていたアーチャーは、まるで旧知の仲の誰かを語る様な口ぶりで笑い——それから、時計の針を指で指し示す。それに釣られて首を動かしした霊夢は、

「……げ、7時30分。アウトじゃないの」

徒歩ではどうにも間に合わぬ時間になっていた事に今更気付き、大急ぎで食事を完了する。

食器洗いは放棄。溜めた水の中に放り込んで、どたどたと家を出たのであった——  
尚、セイバーは霊体化したまま、寝ぼけ眼で追いついてきた。

積もった雪をぎつかぎつかと蹴散らして、それでも結局、遅刻は免れそうにない。

同級生の姿もほぼ見えない通学路の、雪かきされていない歩道を、霊夢達は歩いてい

た——半ば、走る様に。

「ああもー、私は早起きしたのに……！」

「ひー……あんた、ぜー、タイム、また上がったわね……！」

先頭を行くのはリグル。やはり陸上部の面目躍如、汗は流しているが、まだまだ動けそうな様子だ。

その後ろに続くのが霊夢。息は上がっているが、なんだかんだとリグルの直ぐ後ろにつけているのは、元々の体力があるからだろう。

「駄目、もう無理、死んじゃう……、こんな動いたら、死んじゃうわよ……」  
「なんだなんだ、本ばっかり読んでるからだぞアリス。あと何か色っぽいな」

今にも雪の上に倒れ込みそうなのがアリス。霊夢達との差は既に10m。そしてその横を、まがりなりにもサーヴァントであるアーチャー（偽名：北白河ちゆり）が、冷やかしつつ肩を貸していた。

雪中強行軍は、どうやら徒労に終わるだろう予感が有る。事前の予想より雪が多すぎたのだ、まともに歩くのも難しい。ましてや走ろうとすれば、どこの部活動も取り入れないだろう過酷な練習メニューの完成となってしまう。

こうなればいつそ、多少の危険を冒してでも車道を走ろうか——そんな事を考えていた霊夢の耳に、聞きなれたエンジン音が届いた。車に詳しい訳ではないが、その何処か

気合いの入らない古臭く喧しい音は、誰でもすぐに気付くだろう類の物なのだ。

「この音は……もしやー！」

「あつれー？ 何してるのよあなた達ー！」

霊夢達の直ぐ横に停車したボロの軽トラックの、窓を開けて顔をのぞかせたのは、誰あろう2B担任の寅丸星だった。

登校日の九割を遅刻する彼女は、だが今日は、ぎりぎりで刻限に間に合う時間に此処に居た。これは渡りに船である。

「乗せて！ 細かい事は良いから乗せてー！」

まるで信号待ちを狙う強盗の様に、助手席に身を割り込ませる霊夢と、それに続いて狭い中に身を押しこむリグル。アーチャーはその間に、アリスを抱えたまま荷台に飛び乗った。

「ええ？ え？ え？ なになになに？ 先生いきなりすぎて良く分からないんだけど、つてきやー急がないとー！」

ギアをD——AT車なのだ——に入れ、アクセルをぐいと踏み込む。タイヤが雪を撒き散らし、おんぼろトラックは時速80kmで走り出した。

「珍しいわねー霊夢、あなたが遅刻しそうだなって」

「私だって人間だもの、妖怪みたいに気楽に生きてないの」

左手だけをハンドドルに添えて運転する寅丸は、学級担任の立場を忘れ、ただの知人であるかの様に霊夢と話していた。

「ほんとにもー……今日はたまたま私が通りかかったけれど、普通なら確実に遅刻よ？  
ちゃんと早起きなさいー」

「遅刻常習犯の先生が言う事じゃないと思います……」

「あらやだリグルちゃん反抗期ですか？ 先生はかなしーわー」

リグルに対する呼び方と、霊夢に対する呼び方。距離感の違いは何処から来ているのか——それは彼女が、或る面では親類縁者より、霊夢と親しい間柄である事の表れだ。

霊夢は、親戚との関わりが無いに等しい。両親祖母は既に他界していて、顔も知らない伯父や叔母が、一人か二人いるばかりだ。遠方に住んでいる為に接触も無く、そして伯父達は霊夢の父と、あまり折り合いが良くなかったらしい。もはや飾りものでしかない博麗の家に、本家を離れて婿入りした——そんな古風な理由で、不仲なのだから。

だから、霊夢の父親が亡くなってからは、母親が一人で働き、一人で生活や雑事全てをこなした。巫女という職業が、母娘二人の生活を支えられるかと言えば——平和な今の幻想郷、そんな事は無い。社会保障はあれど、困窮は免れない。

それを支えたのが、商売敵でもある筈の命蓮寺の縁者、寅丸星だった。男手が足りない時には、細い見た目に似合わぬ馬鹿力で家具を運ぶ。懐の具合が苦しい時は、金銭の援助はしないが、何かにつけて食べ物を持ってきたり、食事に呼んだり。足として車を提供し、悪心を持つ輩には毅然として槍を振り回し、大いに貢献したのだ。

霊夢の母——先代の巫女が無くなった時に、神道式で葬儀を執り行ったのも彼女だった。信仰の垣根など実生活の妨げになるなら不要と、口喧しい一部の年寄りを蹴り飛ばしての敢行だった。以来、妙蓮寺信者の人数は然程変わらないが、平均年齢は僅かに若くなったとも言う。

そんな人間——いや、妖怪であるから、天涯孤独の霊夢にとつて、彼女は最も親しい存在の一人なのだ。互いに互いを名前で呼び、敬語も使わず、時折は頭を引っぱたき合う様な——姉妹の様な、とでも言えば良いだろうか。

「にしても星さー、今日は珍しく早いわよね、珍しく、本当に珍しく」

「やだひどーい、私を遅刻常習犯みたいにさー。ぶんぶん」

「そのものじゃないですか？ さっき私が言ったじゃないですか？ ……でも確かに、珍しいですよ」

頬を空気で膨らまして不満を示す寅丸だが、然し実績に裏打ちされた称号を消し去る事など出来ないのであった。



「あー、それがさー、最近風邪引き多いじゃない？ 欠席多すぎたら授業進められないし、プリント印刷しておこうかなーって思つて……霊夢もリグルちゃんも、ちゃんと手洗いうがいしてます？」

汚名——妥当な称号だが——はもはや甘んじる事にして、寅丸は、今朝の気紛れの理由を答えた。

「子供じゃないのよ」

霊夢には、その風邪引きというのが、本物なのかそれとも「あの」魔法陣による影響なのか、知る方法は無かった。が、後者ならばこれ以上の心配は居るまい。少しばかりの安堵と共に、短い言葉を返す。

「んー、高校生だとまだまだ子供よね。大人になるのは大学出てからかなー？ たまーに大人になれない子もいるけどさー」

「あんたの事じゃないの、星？」

「いやーん、霊夢まで遅れた反抗期ー！ ……でもうがいはちゃんとしなさいよ、うがい。あと暖かくして寝る事、濡れた靴下は履き替える事」

「はいはい」

あなたは母親か、と心の中で呟いて、霊夢は靴を脱ぎ雪を掻きだす。ポロトラックは校門を潜り、教員用の駐車場に停車した。

## 四日目、学校、昼

欠席者は減っていないが、増えてもいなかった。体調不良者は、見る限り明らかに減っている。魔法陣への対策は間違っていないが、胸を撫でおろしつつ、私は自販機で購入したペットボトルの紅茶を飲んでいた。

「……割と美味しいのが困りものよね」

「だなー、安物なのに。昔はパン食なんて贅沢だったんだぜ？」

隣に座るアーチャーは、小さな手と見合わぬ巨大なクリームパンに、目を輝かせながら被りついている。

今日の授業は、自習が多い以外には特に変化も無かった。ここは屋上、時間帯は昼休み。雪は適度に凍りついて、天然の椅子になっている。その上にダンボール——2Aの河城にとりが大量に持ちこんでいた——を敷いて、私達は優雅なランチタイムを過ごしていた。

とは言っても、この場で本当に食事が必要な存在は一人だけ。

「そんな時代も有ったのね……今じゃ食パンの耳は儉約食よ。油で揚げると美味しい」

「ご相伴にあずかりたいわ、私もこれで和食派でしたの……いやまあ、魔理沙程じゃないけどさ」

たった一人、真つ当な人間である霊夢は、コッペパンにジャムとマーガリンを付けて、もそもそと頬張っていた。あの組み合わせだと、確か73円という所だっただろうか。意外に中身が詰まっているパンなので、満腹とまではいかずとも、日中の行動力を賄うだけの栄養は有るだろう。

こうして屋上で、冬の弱い日差しを楽しみながら集まっているのは、一応真剣な話題の為だ。負傷したアーチャーが回復するまでの間、どう行動するかの方針は、昨夜定めである。今日は、その具体的な行動の打ち合わせだ。

「ねえ、アリスとアーチャー。あんた達がどこかに陣取るとしたらさ、どの辺りを考える？」

「魔術師視点で、って事？　なら……あそこかしら、命蓮寺」

「やっぱりそっか？」

霊夢の問いの趣旨は、『魔術師が迎撃の為の工房を作るなら、何処を拠点とするか』なんだろう。私ならばと考えると、数秒も思索せず出した答えは、彼女にも予想がついたものだった筈だ。

要は、魔力を効率的に回復でき、迎撃の為の術を仕掛けやすい土地が良いのだ。大量

の墓が靈魂を集め、地下には巨大な靈脈も走る命蓮寺は、最高の拠点となるに違いない。「じゃあ、命蓮寺は無視して良いわね」

「同感だぜ。あそこは無いな。少なくとも今は有り得ない……有り得るかも知れんが、その場合は気にしないで良い」

けれど、私達の総意としては、命蓮寺を本拠とする陣営は、存在していないだろうという確信が有った。

命蓮寺は、この学校に近すぎる。少々道に高低差など有るから遠く感じるが、実際は直線距離で200mも無いだろう。これはつまり、セイバー、アーチャー兩名の感知範囲の内にあるという事だ。

彼女達の感知を擦りぬけられるのはアサシンだけ。アサシンのマスターは、どう見ても理知的な存在ではない。魔術師の心得も無いだろうし、サーヴァントも——不確定要素は多いが——靈脈を利用して、何か出来る類の英霊ではないだろう。

あの8つの魔法陣に対する所感を、後からアーチャーに聞いた。アーチャーが言うには、あれは土地の魔力より、生物の魔力を吸うのに適した術らしい。こう考えれば、命蓮寺を本拠とする理由は、アサシン陣営には無い筈だ。

それじゃあ、命蓮寺を陣地と“したくない”理由は？　こちらは割とたくさん出てくる。

参拝者が多く、人の出入りが激しい。人の中に紛れて、招かざる客がやってくる可能性が高い。

塀も低く、壁も決して頑丈でなく、よほどの結界術者でなければ無防備も良い所だ。低地に有り、周囲の遮蔽物はせいぜいが民家程度。

何より、霊夢と私と二つの陣営が、200mの距離にある学校を拠点としている。それこそが最大の忌避すべき理由だろう。こちらの存在を知っているアサシン陣営、あの狂霊の陣営は、可能な限りこの学校に近付くまい。

「……とすると、やっぱり霊地よね。うちの神社に守矢神社、ここは当たり前だけど除外して……怪しいのは、冥界町？」

冥界町は、幻想郷の中でも、特に歴史の長い街並みだ。けれど、古き良き時代の建物は残っていない。数十階建ての高層ビルが立ち並ぶ、夜を知らず眠らぬ街、それが冥界町だ。

私も良く買い物のために足を運ぶのだが、あの土地は魔力が濃い。怨念染みた暗さは無いのだが、かと言って手放しに明るいとも言えない、人の感情がこびりついた様な濃さが有る。

が——その中でも、霊夢が特に取り上げて言おうとしたのは、

「——白玉楼ね？」

片道三車線の舗装道路が生む騒音と、ビル風から離れる事、せいぜいが数百m。街並みの中心をくりぬいた様に、小さな山が有る。長い長い階段を上って行つた先には、美しく水の澄んだ池と——主の居ない、広大な屋敷が有る。

それが、白玉楼。地元の名家、魂魄家が、週に二度の通いで管理する無人の建物。小学校の社会見学で、一度ばかり足を運んだ記憶が有るが——寒気がする程に空気が澄んでいて、そして震える程、美しい屋敷だった事を覚えている。

あの時は確か、春風の強い薄曇りの日だった。長い長い階段を、脚の痛みを覚えつつも上り切つたそこには、数え切れぬほどの桜の木が有つた。今が盛りと己を誇る花卉が、風に巻き上げられ、散つていく最中だった。

「あれ、白玉楼が顕界にあるのか？ どういう事だ？」

きよとん、という擬音がしっくり来る顔で、アーチャーが首を90度傾げる。

「え？ いいえ、冥界町よ」

「ん？ ここは顕界で——いや待て待てなんか分かつたぞ、分かつてる気がする、うん。いやあ、時間の流れは怖いな」

両手をぶんぶん振り、霊夢が訂正する声を遮つて、アーチャーは自分一人で合点顔を作る。私には、彼女の言う事がまるで理解出来ていない。顕界なんて古臭い言葉で、なぜ町の名称と並べて用いるのか——いや、言葉の法則性は分かるのだが。

確かに冥界町という名称は、死後の世界を意味する『冥界』から来ているのだろう。だが、所詮は街の名前だ。生き物が現実に生きる、顕界の存在でしかない。それをアーチャーの言い草では——まるで白玉楼が、本当に死後の世界の建物だった様に聞こえるじゃないか。

「……まさか、ね」

不思議な事は幾らでも有る幻想郷だが、然し今は科学全盛の時代。魔術師である私としても、死後の世界と現実世界が繋がっていて、簡単に行き来できるなどという無茶は——信じられない事も無いが、頭に思い描けなかった。それだけだ。

「続けるわよ、良いわね? ……そうよ、白玉楼。あそこの靈気の濃さはハンツパ無いわ、こいつら魂喰いを飼うなら最高の餌場ね」

「あれ、そういうのは嫌いではなかったのかしらん?」

「もう死んでるなら変わらないうわ、再利用よ再利用」

セイバーの指摘に眉一つ動かさない霊夢だが、その合理精神には賛同できる。生きている人間を殺して喰わせるなら抵抗は有るが、もう死んだ魂をどう使おうが、生者には関係の無い事だ。

……が、不安の残る事を言う。魂喰いに向いていると言うなら、つまり白玉楼とは、魔力の枯渇を回復する為の食事場だと思つて良いのだろう。では、そこにあの黒の狂霊が

陣取って居たら——？

「怖いわね、そこ。今夜にでも見てきてくれない？」

「自分で行きなさいって言いたい所だけど、あなたのアーチャーがあれだもんね……  
しやあないわ」

まだ短い付き合いだが、霊夢と私には、似通った部分と対照的な部分とが有る。例えば合理性と道理を好み、大きな変革を望まない性質などは似通っているだろう。が、例えば何か問題が起こった時——まず考えてから立ち上がるのが私で、蹴つ飛ばしてから考えるのが霊夢な気がする。

基本的に彼女は悩まない。即断即決、分からなければ直ぐに他人の意見を聞き、そして採用するかどうかも即決。

「……改めて貴女とは、いいタッグになれそうね」

「な、何よいきなり、気味悪いわね……」

少し親しげに話してみたら、座ったまま、霊夢は後ずさりを始めた。何故だろうか、何故だろう。

あまり気にしない事にして、私は屋上を後にする。蓋を閉めれば持ち歩きも簡単、ペットボトルの利便性に改めて敬意を表しよう。



昼休みは割と長いので、打ち合わせに全ての時間を使う事もないだろう。

そう考えた私は、生徒会室付近の廊下へと向かつていた。少々、探し人も居たからだ。だが然し、あそこは人がごつちやりと集まる場所である上に、目的の人物は背が低く、恐らく直ぐには見つからないだろうという予測もある。

だから飽く迄、見つけて話せれば儲けものという程度の気構えだ。

「……で、誰を探すんだよアリス」

「後輩の子か、同級生の河童よ。ええと……ちゆりさん」

後ろをひな鳥の様について来るアーチャー——偽名、北白河ちゆり。まだ偶に、人前でアーチャーと呼び掛けそうになる。

背の低い彼女は、学生の群れに埋もれてしまいそうなものだが、無意味なバイタリテイで動き回り、一人悪目立ちしていた。

「河童？ 河童と言えば私にも知り合いが——って、……そう言えば隣のクラスに」  
「そう、あれ。ねえちよつとにとりさん、良いかしら？」

「ひゆい？ あれ、アリス——と、転校生！ おー、何か用かな盟友？」

授業授業の合間に意気投合したのか、屋内でもリユックサクを背負って歩く奇妙な同級生は、アーチャーとハイタッチを交わした。

が、私に向いている視線は、どうにもよそよそしさが拭えていない。それもそうだ、殆ど会話した記憶の無い相手だった。

それ以外にも、私がどうにも人間でなさそうな気配が有る、それも理由となるのだろう。河童は人間と親しいが、それ以外の種族にはやや臆病だ——但し、数の優位が有れば話は別。

河城にとり、2Aの名物発明家、但し自称。おかしなものを作っては他人に披露し、そして発明品の無価値さを突きつけられるのが日課な奴だ。

「用ならあるぜ、ちよつとドライバー貸してくれ」

「良いとも良いともどれを使う？ プラスマイナスポジドライブ、なんならトルクストライバーも——」

リユックサックに手を伸ばし、両手に併せて15本——直径も様々なのだ——のドライバーを構えたにとり。

あまりに淀みない動きだったから、私も思わず拍手してしまったが——それを嗜める、静かな声を通り抜けた。

「解錠用具の持ち歩きは、褒められた事ではないわ。没収——はやりすぎかしらね、隠しておきなさい」

「ぶー、お固い事言うなよ盟友ー、いや会長ー！」

いつの間にか——本当に、いつの間にか、近くに居たらしい。私の視界の隙間から、彼女はとりの手を抑え込んだ。

廊下のざわめきが収まったのは、きつと彼女の声を聞く為だ。何人かが床に座つたのは、後ろの連中に頭を押さえつけられたからだ。

銀色の髪はドライバーの金属部分よりも美しく、ハンカチの素材にしたくなる様なきめ細かさで、編んで痛むのが惜しい程。

何事も無く、ただ立つだけで絵になる、洗練された立ち居振る舞い——生まれついでそのそれでは無く、厳しい自己鍛練を経た成果。

彼女こそは学園の華、支持率99%の生徒会長。

「こんにちは、咲夜。別に取り上げてもいいんじゃないのかしら」

「こんにちは、アリス。貴女は思ったより辛辣でいらつしやるのね」

つんと澄まして礼儀正しく、十六夜咲夜は挨拶を返してくれた。

制服を優雅に着崩して、然し見苦しさは無い。埃さえ怯えて逃げ惑う程、彼女は清潔感に満ちている。

彼女に群がる生徒がいないのは、きつとその清潔さを汚したくない為なのだろうか——まあ、私には割とどうでも良い事だ。

中学の頃からの腐れ縁、今更距離も何も知った事じゃない。

「だつて話が進まないんだもの、あの二人。私を置いて工具談義に熱中しそうな気配があるし」

「工具ならば貸出手続きさえ踏んでくれれば、幾らでも技術室から貸し出すのですけれど。……いいわ。それよりも貴女、珍しいですわね」

両腕を組み、片脚に体重を掛けて壁に寄りかかる。たつたそれだけの動作で、観衆から溜息が零れた。

劇の登場人物にされてしまった様な居心地の悪さを感じつつも、私はその横で、同じように壁に寄りかかる。

「珍しいって、何が？」

「誰かと一緒に居る事、人を探している事。かれこれ五年近く、貴女が誰かと連れ立っていた記憶は有りませんでしたのに……しかも転校生なんて。ちゆりさん、でしたかしら？」

「おう、昨日からこの生徒だけ、よろしく！」

何やらにとりと白熱した議論——聞こえた中にはピンパイスなんて言葉が有った——を繰り広げていたアーチャーが、電気スイッチの様な切り替えの速さで答える。

咲夜は厳めしい表情を作り、きつかり両目を同じだけ細めてアーチャーを見た。

「ちゆりさん、前の学校はどんな所でした？　ここより施設は充実していたのかしら」

「んん？ 岡崎工業大学付属高校普通科、小さな教室一つだけだったぜ——何せ生徒が私だけだ。工学科の連中がいる校舎からブロック離れた所にあつてさ——」

アーチャーは、息をする様に嘘を付く。そういう名前の高校は確かにあるが、普通科は存在しない。

……が、きつと今からネットで調べようとしたら、なぜか情報が出てくるのだろう。恐らく早苗は、こういう細かい所に無意味に拘る、そういう性格に違いないと思つた。「……変わった所にいたんですのね。だから転入手続きも、あれだけ変わったやり方だったのかしら。少なくとも過去の前例とは随分と——」

「ありや。この学校じゃあ、生徒会長は学生の転入にまで関わつて来るのか？」

「事務手続きは手慣れた一人が行うも良いですけど、分業すれば尚更効率は上がるのですわ。……それは冗談にしても、当日早朝の書類持ち込みなんて前例は、当然だけども有りませんもの」

冗談には聞こえず、かつ笑えない冗談だ。昔から彼女は、良く知らない相手にはこうやつて、ナイフを突き付ける様な態度で接する癖がある。

別に、彼女は意地の悪い人間ではない。少々警戒心と縄張り意識が強すぎるだけだ。アーチャーへ対するこの口振りも、きつと一日二日で丸くなる事だろう。

「こうなつたら貴女でもいいかな……ねえ咲夜、古明地さとりつて子、分かる？」

このまま牽制を続ける咲夜を見ているも仕方が無いので、早めに本題に入る事にした。

そう。私が探していたのは他の誰でもない、古明地の名を持つ彼女である。

昨日の夜に遭遇したアサシンのマスターは、確かに古明地こいしと名乗った。決して多くは無い名字で、年の頃も体格も近い筈だ。関連性は有ると考えても、そうおかしくは無いだろう。

「でも、つていうのが気になるけど……IBの古明地さとりさんね？ にとりさんと良く連れだつて、その辺りの壁際で話しこんでいる？ 確か今日はあの辺りで……ごめんあそばせ、道を開けてくださいな」

どこかの預言者の奇跡の様に、人の群れが二つに割れた。その向こうには確かに、アーチャーよりもさらに小柄な古明地さとりが、じつとりと湿った目付きで立っていた。

「先輩方、何か用なんですか？ 私、にとり先輩の発明品を根幹から否定するので忙しいんですけど」

「お前本当に酷いな!! 今回の発明こそはツールボックスの常識を覆す——」

「はいはい、それは私が聞いてやる。だからちよつと離れてようぜ、な？」

拳をぐつと突き上げて演説を始め掛けたにとり。直ぐにアーチャーが引きずつてい

き事無きを得た——昼休みも、あと5分ほどしかないのだ。

「ちよつと聞きたい事が有るだけよ。さとりって、お姉さんとか妹さんとかはいらっしやるの？ もしくは従姉妹とか」

「単刀直入に本題へ。あまり家の事に突っ込むのも何だが、場合が場合だから仕方が無い。」

「とは言え、なんとなく個人名を出すのは躊躇われたので、こういう言い方になる。」

「姉か、妹……？ いいえ、居ませんけど。従姉妹も……って言うより、そういう親戚自体が」

「あー、そいつはさ、ほら、な？ うん、アリスが誰の事を言ってるのか知らないけど、さとりに姉妹はいないよ」

「さとりの声は聞き取りやすいが、音量自体は然程でも無い。急ににとりが大声を上げたから、言葉の後半は完全に書き消えた。」

「工具談義を中断していきなりの行動に、さしものアーチャーも、少しばかり目を丸くしている。」

「それはこの私が保証する！ 五年保証に万が一のデータ復旧サービス付きだー！」

「私はSDカードですか？ そういえば万能リーダーライターを作ったとか言ってたのはどうなりましたっけ、読み込んだデータが全部破損してたとか聞きましたけど」

「う、うおおお!!」 思いだしたくない過去の記憶がああああ!!」

「……はいはい、廊下でコントを始めるものではありません。貴女達も皆さんも、次の授業が始まりますよ? 教室にお戻りなさい、さあ!」

パン、と手を強く打ち鳴らし、咲夜が観衆を散らしてしまふ。ものの数十秒後、廊下には静寂が訪れ、そして巻き上げられた埃が少しばかり、衣服と喉に不親切だった。

にとりは決まり悪そうな顔で鼻の頭を掻き、浅い角度で私の顔を見上げる。

「あ……ええとさ、アリス。こいつは——」

「私、一人暮らしです。両親祖父母、その他親戚、存命は誰一人居ません。その上で、姉妹や従姉妹はそもそも生まれません」

さとり自身は、別にそれを何とも思わないという様に、私の問いに答えた。自分の事だと言うのに、やけに無関心な声の響きだった。

何となくだが私には、さとの心情が分かった気がする。自分自身の境遇は、自分には当たり前な事だ、それだけなのだ。

例えば私も一人暮らしだが、それを殊更嘆いた記憶は無い。昔は料理の際、背の高さが足りずに悩んだが、それも今となつては——

今と、なつて、は……?」

何か、私は、おかしな事に気付いてしまった様な気がして——数秒の間、瞬きを忘れ



ていた。

「アリス先輩、もういいですか？」

「……え、あ。ええ、聞く事は終わったわ、名字が同じだっただけかしら。この間、古明地つていう子に会ったから気になったの、それだけよ」

「へえ。私が言うのも変ですけど、珍しいですね」

それだけ言い残して、さとりは自分の教室に戻っていった。最後まで、目を大きく開こうとしない、眠そうな表情のままだった。

けれど私は、もう彼女の事を考える余裕を——いや、余地を失っていた。脳の処理領域を全て、一つの事に費やしていたのだ。

思い返そう、思い返そう。私の生活の中で、私が考えもしなかった事を思い返そう。

そもそも私は何故、 “親と死別もせず” “一人暮らしをしている” のだったか——  
?

いや、もっと前の次元だ。何故私の記憶の中には、 “両親に関するものが無い” のだ——!?

そんな事は有り得ない、断じて有り得ない。

私の記憶は、断片的な範囲では3歳ごろから。継続した記憶ならば、5歳ごろから存在している。

私は断じて記憶喪失なんかじゃない。それに、そんな小さな子供が一人で暮らしている筈が……

「いや、出来る。そも私は、食事を取る必要が無く、眠る必要すらない生き物だ——生き物と呼んでいいのかわ？」

「親が無く、いきなりこの世界に出現した様な存在を、いや、親がない筈は無い。失った記憶だつてどこにも、然し」

「アリス、顔が悪いぜ。何時も白いくせになんだ、余計白くて蠟人形じゃないか」

「アーチャーに肩を掴まれる。その時に始めて、私は、自分が倒れかけていた事に気付く。」

体が床に近付くのではなく、床が体に近付いてきたような——私のこれまでの生には、とんと無縁の経験だ。

「きつと眠いというのは、こういう状態の事を差すのでは。眠らずとも生きられる私は、なんとなくそう思った。」

「……アリス、どうしたの。良ければ保健室まで肩を貸しますわよ?」

「あー……大丈夫、ちよつと立つたまま寝てたわ。教室に戻りましよ、次もまた自習だったかしら」

「だな、欠席多いから自習。少し遅れても何も言われないさ、だからのんびり行こうぜ」

「？」

「遅刻は駄目よ、急ぎましょう。競歩は必須技能と心得なさいませ」

右肩を咲夜、左肩をアーチャーに支えられ、左側に大きく傾いたまま歩く。

やけにふわふわした、脚に力の入り切らない感覚。動く事に裂く神経さえ、思考に喰い荒されているかの様で、

「そりゃあ、まだ分からんさ。教えてやるけど今じゃない。もうちよつと待ってくれよ、アリス？」

「……？ 全然分からないけど、分かったわ」

耳元で告げられたアーチャーの言葉は、今の私には、全く理解の及ばない内容であった。

## 四日目、夜—Multi-sided struggle 1.

夜の冥界町を、霊夢とセイバーは歩いていった。

日中、買い物に訪れた時であれば、活気のある近代ビル群だ。だがこの時間は、おそらく周辺都市の何処より人口密度の低い過疎の街となる。

まずこの街は、アパートだとかマンションだとか社宅だとか、集合住宅の類が一切存在しない。辛うじて有るのはビジネスホテルか、或いは街の発展より前から住んでいた住民の、如何にも古そうな瓦屋根の家ばかりだ。

終電の時間を過ぎてしまえば、この街に残る人間は本当に少なくなる。だから、近代的な街でありながら、24時間営業の店なんてコンビニ程度しか存在しない。ファーストフード店でさえ、23時にゲートを閉ざすビル地下にしか無いのだ。

「様変わりしたわねー。昔の冥界はもう少し——いや、陰気さは変わらないのかしら。静かですし」

「冥界町って、そんな昔っからあったの? ……ま、良いわ。それよりセイバー、敵は?」

「半径300mまで気配無し。相手がアサシンならどうにかなるわ」

セイバーは常の様に冷静で、そして周囲への警戒を怠っていない。あまりに事務的に答えを返して、時折は目を閉じて耳を澄ます。

無駄口一つ叩かずに仕事を続ける様子は、合理的な霊夢からすれば好感の持てるものである筈だった。

「セイバー、考え事？」

「——？　いいえ、何も」

「そう……やけに無口だったから、なんとなくね」

今になって考えてみれば、霊夢は、セイバーと雑談を楽しんだ事など無かった筈だ。せいぜいが召喚したその日、自己紹介程度に言葉を交わした程度。

後は——敵は居るか、戦闘は継続できるか、結界の性質はどうか。聖杯戦争に直接関わる内容以外で、霊夢はセイバーと言葉を交わしただろうか？

何故、この様な事が気に掛かったか。霊夢は、自分自身の事を良く弁えていた。

「あんたさあ、死んだのよね？」

「……変な言い方するわね。その認識で間違いないですけれど」

朝方に見ていた、おかしな夢が原因だ。

誰かが死んでいく瞬間を、その誰かの目で見ていた不思議な夢。夢でしかないのに、それは真実であると断言出来る奇妙な感覚。

死の現場は——二つばかり見た事がある。その何れより、今朝の夢の死は悲しかった。だから霊夢は、

「今さ、こうして自分の足で歩いて、見た事もない街を見て。良かったな—とか、思う？」  
何か、何でもいいから、彼女と話してみたのだから。

死んだ経験があり、そして今の生を謳歌しようともしない、セイバーは戦う為此処にいる存在。そんな彼女と言葉を交わしてみたのだから。

「……いいえ、特には。物珍しさはあるけれど」

セイバーは、ウィッグだという長い髪を指に巻き付けながら答えた。

霊夢は小さく溜息をつく。冬の夜だ、息は白い。強いビル風が、粉の様な雪を噴き散らす。

「でも、夜の散歩は好きよ。夜気に戯れて人の街を歩く、こんな贅沢が出来るんだもの。行きましょう、霊夢。この辺りに敵の気配はない、もつと向こうを探さないと」

颯爽と、セイバーは歩いていく。僅かな身長と多大な体力の差で、霊夢は少しばかり、追い付くのに足の疲れを感じた。

中央の通りから一本だけ横に外れた白玉楼通りを、二人は西へ進んでいた。

寒々とした空気が更に凍て付いたのは、決して気候の変化だけが原因ではない。冥界町の中でも特にこの古い通りは、巫女である霊夢には寒気のある土地であった。

この通りには、民家が一件も無い。そして、22時以降に開いている店も無い。東西に1km以上も有る三車線の通りは、夜間には街灯の他に全ての光を失うのだ。

誰も、この通りの夜を歩こうとしない。あまりに人がいない為、むしろ治安が良い土地でさえある。然し、この通りに住もうと考える者はいないのだ。

「……何か聞こえたりする?」

「足音が一つ、二つ……たくさん居るわね、ふらふらと」

だのにこの夜は、やたら多くの人間が出歩いているらしかった。

まだ霊夢は、その様を見た訳ではない。人を遥かに超えるサーヴァントの五感が、遠くに居る人間を捕えていただけだ。

然しそれでも、この通りを誰かが歩いていると聞いて、霊夢は強く訝り、警戒する。本来居る筈の無い者が居る——その非日常性は、霊夢が嫌悪する対象であるからだ。

「敵だと思う、セイバー?」

「難しいわね、こつちに来てる訳じゃないわ。皆でどこか……どこかへ、向かつてるみたいに感じるけど。」

向かつてるのはもう少し西の方、何か有るのかしら——、っ?」

「どうしたの……!?!」

突然セイバーは、背に隠した博麗の御神刀を鞘から抜いた。人がいないとは言え、抜き身の刃物を街中で持ち歩く行為の、異常さを知らぬ訳でもないだろう。

セイバーは、西の方角にある、小さな山を睨みつける。まるでそこに、何か許し難い存在でも潜んでいると言わんばかりに。

「あの山、何が有る? 歩いてる連中も、皆あそこに向かつてるみたい。聞こえない?」

「何がよ」

「ピアノの音」

それは、意識していても聞こえない程の、小さな小さな音だった。冬の冷たい空気が、そして西から吹いた風が、人間でしかない霊夢の耳にも音を届けた。

踊り狂う様に高く低く、音の波がうねっている。瞼の裏に蛇を描く様な——奇怪な、音楽と呼んで良いのか迷う代物。だが、不思議と心地好い。

きつとこれを演奏する者は、技量の是非はさておくとして、楽器に長く親しんだものなのだろう。根拠も無く直感的に、霊夢はそう感じていた。

楽器の僅かな癖を知り尽くし、最も美しく歌えるようにしているのだろう。だから音色の一つ一つが、やけに艶やかで鮮やかなのだろう。

奏でられている旋律もまた、短音の連続ながら心躍るもの。好奇心を掻きたてられ、



冒険心を煽りたてる。

誰が演奏しているのか、どこで演奏しているのか。それが知りたくて堪らない、もつと近くで聞いていたい。霊夢は何時の間にか速足で歩き始め――

「危ないわ、気を付けて」

――セイバーに肩を掴まれ我に帰った。

「耳に入れるのは良いけど耳を貸しちや駄目。あれは音楽じゃなくて言葉よ、真剣に聞けば毒されるわ」

「……今のは？」

「さあね、妖精の歌声かしら。何にしたって有害指定よ」

気を強く持てば――そして、軽い境界さえ身に張ってしまえば、その音はまるで無害であった。聞こえるか聞こえないかの瀬戸際で、ピアノがぼろぼろと泣いているだけなのだから。

然し――あれは、なんだ？ 人間一人の意識を瞬間的に奪い取る、あの音は何だ？

「魔術だと思おう？」

「もしかしたら。私にはまるで効き目がなくつて、霊夢には効いて。だったらそういう事もあるかもね。

けど、良い音だったわ。あんな怪しい所から流れてきてなきや、私だって飛んで聴き

に行くかも」

セイバーが指差す方向、ピアノの音の出所は、小さい山だった。街の通りから数百m程離れた所にあり——今は桜の木が、枝に雪の花を咲かせている。

「白玉楼……あそこね？ 予想は当たってたのかしら」

「ええ霊夢、流石の慧眼よ。乗り込むもよし、退くもよし。全ては御意のままに、我が主」  
マイマスター  
 人を招き寄せる音曲の中に——セイバーは、一つの気配を察知していた。

雪よりも冷たく、そして白く澄んだ清浄な気配。あまりに清潔すぎて、近づくと事も躊躇われる様な、墨染の色であった。

霊夢は耳の奥を擦る音に耐えながら、今夜もまた雑談は出来なかつたと、僅かに惜しみつつ歩く。走らず、かすかな周囲の変化も逃さぬように気を張り——既に、戦場に有るべき姿勢を整えていた。

長い、長い階段を上る。

小さいとはいえ一つの山だ。それを、左右に一度も曲がる事なく上ろうと思えば、どうしても無理のある急な階段が生まれる。

然し霊夢は息を乱さない。元々体力は有り、それに加えて靴裏に結界を張り巡らせ、

反発を用いて歩いていたので。

だが、やはり長い。道程にすれば精々が200mも無いのだが、然し角度が有る為に、重力が強力な足枷となる。

「……あれ、釣られた人かしら」

「たぶんね、サラリーマンっぽい。こりやー明日は大変だわ」

会社帰りなのだろうサラリーマンが、覚束ない足取りで階段を上つていく。霊夢は素通りし、セイバーはサラリーマンの背中を軽く叩いた。外からの刺激で我に帰ったらしいサラリーマンは、頓狂な声を上げて周囲を見回していた。

彼を置き去りに、まだまだ階段を上る。改めてこの山は、春に訪れるべき場所だと思えた。

石段は溶けた雪が凍り、ところどころ滑る様になっていて、足元をしかと見ねば転びかねない。が、街灯はここまでは設置されておらず、月と星の灯りが頼りだ。

階段の両脇を埋める木は全て桜。この季節では当然の如く、花も葉も何一つ無い。

「霊気が濃いわー……セイバー、調子はどう？」

「上々。今なら、どんな不意打ちが来ようと怖くは——あ、ごめん、訂正」

幻想郷の中でも歴史の古い土地が、霊夢達の住む地域。その中でも白玉楼は、特に強い霊地である。霊体であるサーヴァントが、最も不自然なく顕現できる場所であり、セ



りかかった。

ギイン、と高らかに金属音。セイバーの右手には守矢の霊刀、左手には博麗の御神刀。二振りを交差させ、狂霊の右手を受け止めたのだ。

衝撃で後退したのは、寧ろ先手を取った狂霊の側。セイバーは一步も引き下がらず、不敵な笑みで応えた。

「……なら負けないわ。おいでらっしやいな、黒犬！」

セイバーと狂霊の身体能力を比較すると、この二者に大きな差異は無い。力でセイバー、速度で狂霊が勝り、動体視力などは五分と言う所であろう。然して近接戦闘の場合、二者の間には致命的なまでの隔たりが有る——リーチの差だ。

狂霊の戦闘手段は極めて単調、進んで押して潰すのみ。武器はまるで用いず、両の腕と脚だけが頼りだ。

一方でセイバーは、四肢の長さではほんの僅かに狂霊に劣るが、それを補って余りある刃を二振り備えている。狂霊の間合いより一步、セイバーの間合いは広いのだ。

そして、その一步は、階段が生む高低差の前では更に拡大される。

狂霊がセイバーに攻撃を加えようとすれば、必ず斜め上方に打ち上げる様な打撃を放つ事になるのだ。地面と平行に打を放てる場合に比べ、その間合いは数割も減少する。頭など狙おうとするならば、余程接近せねば叶うまい。

「ア、ア、アアアッ!!」

打ちやすい場所を、見えた箇所を打つ。狂霊の戦法はあまりにも分かりやすく——だからセイバーは、防御に意識を裂かれずに済んでいる。

どうせ脚か、高くても腰までしか狙われないのだ。始めから到達地点が読めているのならば、どれだけ敵が速くとも防御は容易い。

一方でセイバーの反撃は、全てが上段から打ちおろされるものと変わる。

人型の生物であるならば、どうしても左右より上下の視界は狭くなる。狂霊は終始、自分より高い位置を見上げ続けなければならない。その上で、万力込めて打ち込みやすい振り下ろしを、相手に劣るリーチで防がなければならぬのだ。

左右、もしくは後方に下がって回避する事は出来るだろう。だが、石段から外れればそこは雪、もしくは土。左右に動けば足場が悪くなり、速度を武器とする狂霊には死地かと言つて後退すれば、また高低差は広がり、セイバーの攻撃は愈々激しさを増すばかりであった。

音曲に引き寄せられ、幾人もの人間が階段を上ってくる。数十mも離れた所で、二つの災禍が争っている事を知り、我に返つて馳せ逃げて行く。生物が持つ本能は、この争いに介入する事を許そうとはしないのだ。

「アハハハハッ、これなら——これなら勝てるわ! 勝てるわよ霊夢、これで聖杯は——

！

霊夢達を知るサーヴァントは、現状では五体。セイバー、アーチャーに加え、夜の後者でアリスを襲撃した黒衣のサーヴァントと、アサシンと、そして眼前の狂霊。

セイバーは、狂霊以外の全ての相手に、白兵戦で勝利出来る確信を持っていた。

アサシン以外の奇襲であれば感知できるし、遠距離からの攻撃ならばアーチャーが恐ろしいが、然し彼女の現状は味方の陣営である。

クラスの空きを考えるに、残りは恐らく——白兵戦を得意とするランサー、魔術を用いるキャスター、そして宝具に富むライダーであろう。

まずランサーを相手取ると考える。苦戦はするかも知れないが、だが近接戦闘で自分が負けるなどと、セイバーはまるで考えていない。事実、クラスとしての補正に加え本人の高いステータス、セイバーは紛れも無く最優のサーヴァントなのだ。

キャスター戦を想定すれば——セイバーというクラスは、最高の対魔力スキルを持っている。実は彼女の場合、そのランクが高いとは決して言い難いのだが、然して低いとも言えない。初撃を防いで接近出来れば、近接戦闘の出来ぬ魔術師など、一撃で斬って捨てるだろう。

では、ライダーのクラスと対峙するならば？ その時は——自分も同じく、宝具で迎撃すれば良いと、セイバーは考えていた。だから、叶うならばライダーのクラスとは、最

後の最後まで当たりたくないとも思っていた。

「■■■■ツ、アアアツ!! ■■■■■アアア——ツツ!!」

敵が死なない、それが信じられぬのか、耐えられぬのか、狂霊は闇雲に吠えて両腕を振り回す。然し——その動きには、些かの陰りが見えていた。

無理も無い。狂化の英霊は、マスターの魔力をそれこそ湯水の如く消費する。一度戦闘を行つてしまえば、その回復にはどれだけの期間が掛かるだろう。昨日の今日で戦闘を行える、寧ろその事を驚くべきなのだ。

供給される魔力が不足しているのだろう。凶暴性が変わらぬまま、狂霊の打撃は僅かに軽くなる。それを見逃すセイバーではない。

何時しか戦場は、セイバーが狂霊の初撃を受け止めた場所より、数十段も下に降りていた。霊夢は、敵が理性を持たなかった事に感謝し、そして勝利の予感に安堵していた。だから、とは言うまい。霊夢もセイバーも、油断などはしていなかったのだ。この二者に、落ち度は何一つなかった。

ただ、敢えて理由を探るならば——無意識化に聞こえていたピアノ曲が、激しい曲調の物に変わっていた事。勝利の確信から来る高揚に、心の半分以上を埋められていた事だろう。

「——招かれざるお客様、ですか」



すす、と進み出た声は、靈夢の耳より低い位置から聞こえた。「彼女」は靈夢より一回りばかり小柄だった。

近づかれた——気付いた靈夢は、然し「彼女」に攻撃しようという考えも、彼女から離れようという考えも起こらなかつた。なぜなら「彼女」は、驚く程に敵意が無い温和な表情をしていたのだから。

「良い夜ですね、失礼」

美しい、薄桜の振袖だった。雪の白に、夜闇の黒に、一輪で咲く華だった。小さく靈夢に会釈をして——桜色の「彼女」は無造作に、英靈二人の争いに歩み寄る。

「ちよつ、ま——!?!」

その行動の無謀を靈夢が咎めるより先——狂靈は高く投げ上げられ、セイバーは二刀を弾かれて石段に膝を付いていた。

靈夢の、人間の目にその攻防は映らなかつたが、「彼女」は左手で狂靈の拳を掴みつつ、右手に持つ鞘で——そう、鞘で。

鞘でセイバーの二刀を打ち払い、二体の英靈の間に割り込んだ。そして、左足で狂靈の膝を払い、体勢を崩した所を投げ捨てつつ、鞘でセイバーの、やはり膝裏を打って転倒させたのだった。

戦鬨の外からの完全な不意打ち。この結果を、彼女達の技量の差の反映と、そのまま

に受け取る事は出来ぬだろうが——然し靈夢は我が目を疑う。

「何人たりと我が許し無く、この庭を荒らす事はなりませぬ。名乗られませいご客人、ならぬと言いますなら——」

膝を付いたセイバーの横を、咄嗟に身構えた靈夢の横を、「彼女」はやはり無造作に歩いて階段を上る。「彼女」の言う招かれざる客3名を見下ろし、柔和な笑みはそのま  
まに——6尺6寸6分、化け野太刀を正眼に構えた。

「——西行寺家劍術指南兼当主名代、魂魄妖夢。我が主の悲願マスターの為に、今生にて半靈を尽くしましょう」

7つのクラスからなる聖杯戦争に——イレギュラーの存在は、実は珍しくない。

彼女もまた、枠の内に収まらぬサーヴァントであつた。

## 四日月、夜——Multi-sided struggle

## 1 e 2.

通り過ぎるだけの動作さえ、嘆息を呼ぶ程に優美だった。

戦地に有りながら、身構えもせずに敵の横を過ぎる。これが如何に危険な行為かは言うまでも有るまい。英霊の殺し合いに於いての一秒とは、十数回の死を齎すだけの猶予なのだから。

然して魂魄妖夢は、膝を着いたセイバーを見下ろしながら、肩を揺らさず階段を上った。背を斬り裂かれる懸念など、何処かへ投げ捨てたとしても言う様に。

膝を過ぎる銀髪が、粉雪を纏ってはらり、はらり。墨で描かれた絵の如き立ち姿であつた。

「ご客人、用件は？　我が主は只今、機嫌マスターがよろしくいらつしやいます。故に、お通しする事は出来ませぬ」

その手にある白刃もまた、常世に在るべからざる、怖気を招く美刀である。

6尺6寸6分、日本刀の形状としては異常なまでに長い刃。ともすれば不格好にも成りかねないバランスの奇妙を補い、反りは浅く、刃は分厚く広く。重量を測るなら、尋



だ。

「■■■■■■——ッ!!」

然し、押さえれば跳ね返るのも獣——いや、魔獣。狂霊は躊躇なく、妖夢の間合いへ飛び込んで行く。

化け太刀の間合いに敵が跳び込み、然し妖夢は武器を振るわず——代わりに軽く身を交わしながら、狂霊の腕を軽く引きつつ、逆方向に足を払って転倒させた。

「与しやすい方ですね、有り難い」

「……つまた、なんなのよ。化け物ばかりじゃないのよ……」

階段を何段も転げ落ち、十数mも下で漸く止まった狂霊に、涼しい顔をして妖夢は言う。霊夢は思わず、己のサーヴァントは棚上げて毒づいた。

あれは、強さの性質が違う。

セイバーや狂霊の強さは破壊力に由来する。有り余る力、或いは速度を単純にぶつけての、所謂直線的な「暴力」の強さである。

対して魂魄妖夢の強さは——霊夢の目には影も映らぬ攻防から、逆に推測する事が出来た。

自分は大きく動かず、相手の力を利用して動きを制し、最低限の労力で仕留める。それは言うなれば、達人と呼べる者だけが為せる領域、所謂「武力」であるのだ。

「化け物上等よ、本物の化け物には敵わないでしょう!？」

セイバーは階段を数段抜かして駆けあがり、がむしやらに妖夢に斬りかかった。

だが然し、セイバーの切っ先が届くより先、妖夢は後ろ向きに階段を上りつつ、太刀の長さを利して斬り返してくる。

奇しくも先程までセイバーが行使していたリーチの優位——それがそのまま、セイバーの前に立ち塞がる。

馬鹿げた長さの刀身は、妖夢が筈かに手首を返すだけで、切っ先を縦横無尽に振りまわす。剣速は、有り余る臂力の差を埋めて、尚も妖夢が勝っている。

刃と刃が打ち合わされ、夜闇を払う火花を散らす。照らし出された二者の顔は好対照——セイバーは怒りと焦りで顔を歪め、妖夢は涼やかに笑っている。

戦いを喜ぶ表情——いや、違う。

強者を自覚する愉悦——それもまた違う。もう少し傲慢な感情だ。

彼女は、未熟な剣士を相手にする自分を——過去の自分の師に重ね合わせ、懐かしんでいたのだ。

この戦を決死で戦う理由など無く、寧ろその様に思いを馳せながらで良いと、呆れる程に強者らしく振舞う。子供をじゃれつかせる際に、死を覚悟する父親など居ないのだから。

「……っ!! へらへらしてんじやないわ——」

生前も死後も、軽くあしらわれた事など無いセイバーだ。愈々激怒し、石段を搦鉢状に砕く程の脚力で踏み込み——遙か後方から、それを追い越す影一つ。

「■■■■■■■■■■イ、アア■■■■■■——ツッ!!」

褪色の狂霊は、地を這う様に駆け抜けた。初撃から全霊を込めての拳は、然し妖夢の太刀捌きに敢え無く避けられる。拳の側面を切つ先で叩かれ、横へと押し退けられたのだ。

太刀が横へ向いた——即ち、剣閃の間隙。狂霊とは逆の方向から、セイバーは二刀を以て斬りかかる。

「……そんな、無茶な——」

霊夢はもはや、眼前の光景に驚嘆する気力さえ失いかけていた。

届かない——6尺6寸6分の刀身は、近接戦闘に於いては絶対の防壁となる。

そも踏み込めず、踏み込めば比類無き剣速と、防御の隙間を縫う技量。さりとして——  
「無茶苦茶過ぎるわよ、あいつ?!」

——さりとして、こころも見事に防ぎ得るものか?

狂霊の拳打蹴撃を左手足で捌きながら、右手の野太刀でセイバーの二刀を受け続ける。

防御に徹するばかりではなく、合計六つの凶器の合間を縫って、己から敵へ斬りかかり、時には浅く深く手傷を負わせる。

霊夢の——マスターの目には、サーヴァントのステータスが数値化されて映る。その数値を見る限り、魂魄妖夢は確かに強いが、二体の英霊を同時に相手出来る程とは思えない。

いや——確かにステータスは、強弱を図る明確な指数だ。だがこの戦いに於いては、近接戦闘というルールに於いては、数値は絶対の信頼を示さない。示す事が出来ない。如何なる力も、当たらなければ意味は無い。どれだけ速かろうが、回避出来ぬ局面に追いやられれば意味は無い。

位置の優位に技量の格差、このまま戦闘を続けようが、きつと妖夢は手傷一つ追わずに居られるのだろうかとう霊夢は感じ——

「……ああああもうムツカツク！ ぶっ壊してあげるわ!!」

セイバーが地を蹴り、飛んだ。石段より十数mも飛びあがり、まるで地面を踏み締めているかの様に、一切の揺れもなく留まった。そうだ、『幻想の幻想』時代の英霊であるなら、当然の様に飛べるとセイバーも言っていた。その様にすれば、高所の優位は消え去るのだ。

追って妖夢が空に舞えば、狂霊は真下から妖夢を狙うだろう。前後左右のみならず上



下の挟撃も可能となる空中は、人数の優位は倍以上も強く作用する。

「お帰り下さいませ、これ以上は無価値な争いと存じます。貴女にも主は居るでしょう、主を守れずして何が従者か」

「……霊夢狙いに切り替えるって？ 澄ました顔してセコいわね」

「いいえ、私には不要の一手。然しこの場には、私と貴女だけではありませぬ故」

高く舞ったセイバーを見上げて、妖夢はそれだけ言って、太刀をそつと石段に置いた。得物を手放した敵へセイバーが迫る。残り2mで手が届く距離まで近づいた時、セイバーの視界の端で鎧が動いた。

妖夢にもセイバーにも主が居る——ならばかの狂霊もまた、主を持つサーヴァントであるのだ。狂化の影響を受けているとは言え、或る程度の行動方針は受け取り動く事が出来る。

敵対者の一人は能動的でなく、一人は離れた。好機と見た狂霊は、主命の下、より与しやすい敵へと迫る。

「……………!!?」

狙われたのは霊夢だった。傍らに佇んで、ただ戦いを見守るだけの霊夢は、狂霊からすれば皿の上の馳走。

唯一己に匹敵するステータスの敵を、大した労力も無く仕留め得る好機。狡猾なマス

ターなら逃す筈も無く、寧ろ思い当らなかつた靈夢とセイバーの落ち度であるが——兎も角、狂靈はただ一足で靈夢に肉薄した。

セイバーも空中戦は不得手ではないが、然し地上を駆ける程の熟練は無い。狂靈が靈夢に爪を突き立てるまで、身を割り込ませる事など出来る筈も無い。

僅かに瞬き一つの間も無く、靈夢の頭は破片と成り果てるだろう。靈夢本人が、そう直感で悟つた——瞬間、であつた。

「——人の血で、庭を穢してくださいませぬ。ここは死者の館に御座いますれば」

狂靈の両腕が、妖夢の刃に斬り落とされていた。

妖夢の手に有つたのは、化け野太刀ではない、ただの脇差だつた。そんなものが鎧に覆われた狂靈の腕を、ただ一振りで切り落としていた。

成程曇りも淀みも無い、美しい刀身ではある。刃渡りは一尺と四寸、反りは薄い。

その刀が何時、妖夢の手に出現したのか、その場にいる誰も気付かなかつた。そこに有るのが当たり前であるかの様に、脇差は姿を現して——そして、また姿を消していた。

「■■■■■■■■■■——ッ!？」

狂靈の脅威には、再生能力も含まれる。落ちた腕は早くも復元を始めていた——が、ここに於いて二者の優劣は決定した。

戦場が違えば、時節が変われば勝てる——そういう類ではない。

直線的な戦闘の傾向に対し、卓越した技量で迎え撃つ。魂魄妖夢は存在自体が、この狂霊の天敵なのだ。

敵わぬ敵との戦は、獣の望む所ではない。現れた時の様な暴風の魔力を巻いて、狂霊は戦場を駆け去った。

「……客人の一人は去りました。我が主の演奏もいよいよ終幕ですが——最後まで聴かせる事は出来ませぬ」

変わらずピアノの音色は、聴く者へ言葉の様に語りかけて来る。霊夢は己の足が、勝手に音を追い掛けていかない様に抑えるのがやっとだった。

「セイバー……使いなさいよ。勝てないわ」

「そんな事無い！ こんな奴、今のまんまで十分よ……！」

何を使えと言うのか——言うまでも無い、宝具だ。

セイバーと妖夢、両者のステータスを比較する。耐久はB、敏捷はAでそれぞれ同値。筋力を見ればセイバーがA、妖夢はB。だがこの程度の優位では、技量の差を埋めるには足りない。

だが、宝具ではどうか。セイバーの宝具ランクはA++、対して妖夢は——D。宝具での衝突に持ちこめば、技量差など十分に覆せる。

「セイバー——」

「要らない、これで十分よ。」

だが、セイバーは頑なに、宝具の解放を拒んだ。

校庭で別なサーヴァントと——黒い影と戦った時には、宝具の解放の前兆を見せていた。然して今はそうしないのは——自分の力量だけで切り抜けられると、そう信じているからか。

或いは——プライドが故、だろうか。

あの黒い影と戦った時には、終始優位を保った上で、先に敵に切り札を抜かせた。今回は逆で——終始不利な状況に置かれて、先に切り札を使う事を求められている。

ましてや相手は——彼女の時代で言うならば、決して強者と呼べなかつた存在だ。

魂魄妖夢、言つてしまえば未熟者。身体能力も技術も優れていたが、未熟な心が足を引つ張る類の——半人半霊であつた。

その技も、化け物揃いの幻想郷で見ると、鬼に通じず月人に通じず、有力な妖怪達にはやはり通じない。人間よりは強いが、その程度の存在だつた。

異変が起こつた時、気紛れな主の意向で解決に向いた事も有つたが——大概是博麗の巫女か、白黒の魔法使いが先に解決してしまう。妖夢本人は勘違いから空回りして、主に笑われて終わるのが常だつた。

セイバーは知らない。魂魄妖夢が、人より長い生の後半百年以上も、白玉楼の外に出ず過ごした事。長い長い月日を、武の研鑽という一点に費やした事を。

人に触れず、妖怪に触れず、ただ己の道だけを歩んで——死の間際まで、庭で刀を振る。漸く己で満足の行く一振りを見つけ、それからぱたりと倒れ、間もなく息を引き取った事を。

死の間際までの記憶、経験、全盛期の肉体。こと闘争に関して、魂魄妖夢は生前よりも尚、今こそが強いという事を。

刀を持たず、妖夢は居合の構えを取る。腰に当てた左手の中に、脇差の鞘が出現した。自然、右手は柄を掴み、抜刀の前段階を完成させる。

きつとセイバーは自分から飛び込んでくるだろうとそう信じて、妖夢は迎撃の体勢を取ったのだ。

「この……舐めんじゃあないわっ!!」

果たしてその通りに、セイバーは一度空中へ急上昇した後、二刀のリーチを頼りに特攻した。重力加速、飛翔速度、全てを乗せた剣閃は、岩盤さえも砕くだろう。決して受けられぬ一撃で——妖夢からすれば、受けねば良いだけの一撃だった。

頭を狙う刀を、胴を狙う太刀を、妖夢は静かに後退し、前髪に掠らせて回避する。そ

うして生まれた空白に、セイバーの意識よりも早く踏み込んで、  
「――『斬<sup>ハ</sup>レヌ<sup>ク</sup>モ<sup>ロ</sup>ッ<sup>ケ</sup>無<sup>シ</sup>ン』」

空いた胸から腹へ駆けて、脇差を音も無く閃かせた。

鮮やかな血が、雪に飛沫いた。

## 四日目、夜——魔女の小屋

白銀の鎧が、大きく削り取られていた。黒の籠手が、具足が、ヤスリで研がれた様に破壊されていた。セイバーは雪の上に片膝を落とし、血を吐きながらも妖夢を睨みつけていた——その目に、力は薄い。

霊夢は、眼前で起こった出来事を、理解しようと思考を回転させていた。

確かに魂魄妖夢の刃は、セイバーの胴体を切り裂いた。だが——セイバーの傷は、どうしても刀によるものとは見えなかった。

仮に掘削機械に巻き込まれたならば、この様な傷を負うだろうか。広範囲に渡って肉を抉り取られ、そして傷口は幾重もの波の様に乱れている。

「ぐう、うううう……！」

立ち上がろうとするセイバーだが、足に力を込めようと、体がぐらりと揺れるばかりだ。

分からない——分からない事が、寧ろ確信を抱かせる。あの刀こそは、英靈魂魄妖夢の宝具であると。

妖夢は脇差を鞘に納める——鞘ごと、脇差は何処かへ消える。石段に置いた太刀を拾

い上げ、妖夢はセイバーに背を向け、主の下へと帰参し始めた。

「……待ちなさい、まだ——」

「まだ戦える、と仰いますか?」

二振りの刀を杖の代わりにして、セイバーはどうか体を起こす。その体は既に、傷口の修復が始まっている。

全く並々ならぬ化け物だ。人であれば致命傷だろう傷を受け、早くも立ち上がるようにしている——然し、それでは足りない。

化け物ばかりが参戦するこの戦いに、並みの化け物で勝ちの目は無い。例えセイバー程の怪物であろうが、ただ一振りで戦闘継続を不可能にされてしまう。

「貴女もサーヴァントならば分かるでしょう。今の貴女はもう戦えません。例え継戦が可能であったとしても、貴女が私に勝つことは無い」

何時しか、ピアノの音は止んでいた。霊夢はセイバーに掛けより、その背に手を当て、そっと石段の上に横たえた。

「セイバー、何やってんの! 死ぬわよこの馬鹿!」

「死んでるわよ、馬鹿マスター……ごめん、ちよつと消えるわ」

実体化を保つには甚大過ぎる負傷——セイバーは霊体化し、霊夢からは目に見えなくなる。



霊体の気配だけがそこに有り——動けはするのだろうか、妖夢の言葉通り、戦う事などは出来まい。

見上げれば遙か上方に、硬く閉ざされた門が見えた。過去に訪れた時は、広く開放されていた筈の——今は、賊徒を阻む城壁と化した。

「良く良く覚えておかれませ。我が名は魂魄妖夢、この戦に置いては『ウォーリア』の名を冠します。

私が振るう白楼剣に——斬れぬものなど、何も無い」

その門を、霊体化した妖夢は擦りぬけて行く。奢らず、然して自信に満ちた言葉は、研ぎ澄まされた白刃の如き美しさであった。

学業を終えて帰宅してすぐ、アーチャーは居間を占拠してテレビのチャンネルを回し始めた。

娯楽番組を見るでもなく、芸能情報を仕入れるでもなく、お堅いニュース番組を見始めたのだ。

「……何か楽しいの?」

「ああ、こりゃ楽しいな。烏天狗の新聞なんかよりよっぽど楽しい。新聞と言えばアリ

ス、朝刊とか無いのか？」

「有るけど……何に使うのよ。紙飛行機？」

「折るんじゃない、読むんだ。それから地図もくれ、この街だけで良いから」

「小学校生活科の地図帳で良いわよね？ ……洗濯の手伝いくらいしてくれないのかしら」

私は、主人を顎で使う従者の存在に呆れながら、ここ数日のバタバタで洗いそびれた衣服を片付けていた。

どうせ今の世の中、洗濯機に適度な洗剤さえ放り込んでおけば、後は暫く離れていても問題は無い。

問題は無いのだが、小間使いの真似事をさせられるのが、あまり良い気分が無いのも事実だった。

「えーと、道徳、一年（こくご）、二年国語、三年りか……これよこれ」

一度自室に戻って、古い教科書が並べられた棚を漁る。漢字とひらがなが入り混じる中、一際分厚い地図帳は、端の方に置いてあった。

大概こういう地図帳は、全世界の地図とは別に、その地域のマイナーと言おうかローカルな地図が何ページか掲載されている。

そのページを開いて持っていくと、アーチャーは私の方には顔を向けず、テレビにく

ぎ付けのまままで受け取った。

「ペン。色は何でも——ああ、待った。四色ペンって言うの使ってみたい、有るか？」

「あのねえ……怒るわよ？　ちよつとは自分で動きなさい！」

流石にこの無精には腹が立ち、正面に回って顔を睨んでやる——やけに真剣な顔が、そこに有った。

「……アーチャー？」

「後、ラジオも欲しいな。何個でもいい、夜までにこの街のニュースに、或るだけ全て目を通したい。」

夜までにチエツクを終わらせる。その後でアリス、お前の力を借りるから……そうだな、喰うか寝るか宿題でもしとけ。疲れて引つ繰り返られたらたまらない」

あまりにも強い意思の伝わる声に、私は思わず、画面を遮る身を避けた。

理由は何処にも無いが——きつとこれは、不可欠の事項なのだ、私は気付いていた。アーチャーは、決して退屈な時間を潰す為、テレビにうつつを抜かしているのでは無いと。

「……つぶぶ。見ろよアリス、運転手が居眠りしてトラック横転だと。道路がバナナで埋まって通行止め、凄いい画面！」

「真面目にやれ！」

断言して早々、些か不安になった。アーチャーの頭に拳を落とす、宿題へ取りかかる。どうせ食わずとも堪えない身の上、不摂生に如何程も危惧は無く、呆れと共に私は自室へ閉じこもるのであった。

一度勉強に取りかかると、ついつい熱中してしまう。電気の灯りも時間を忘れる手助けとなり、何時の間にか日付が変わっていた。

「呼びなさいよ……つたくもー」

この時間まで、アーチャーはニュースを見続けていたのだろう。意識を外へ向けると、居間からはテレビの音が聞こえる。

適度な時間で呼んでくれれば良いものをと、気の利かぬ従者に不満を抱きながら立ち上がると――

「悪かったな。お客様だぜ」

背丈より随分大きい箒を担いで、アーチャーが部屋の扉を開けていた。そのすぐ後に――疲労しきった顔の霊夢が立っていた。

「失礼するわ、夜分遅くに」

「どうしたのよ、夜分遅くに。しかも死人みたいな顔で？」

「セイバーが死人に戻されなかったのよ……あんた達の力を借りられる？」

私はアーチャーと顔を見合わせ、ほぼ同時に頷いた。

「オーケー、霊体化を解除させてくれ。専門じゃないが、お前達よりは上手く出来る」

アーチャーは私のベッドからシーツを引きはがし、居間のソファにそれを掛けた。その間に私は、消毒薬や包帯など、僅かな備蓄を有るだけ掻き集める。

セイバーはソファに横たわった姿で実体化し——広く刻まれた傷に、私はきつと青ざめていただろう。

「……何よこれ、パワーシヨベルにでも挟られたの？」

胸から腹へ掛けて、皮膚と肉を削ぎ落された様な傷口。防具の上からこれほどの損傷を与えるには、如何な武器が必要となるのか。

ここ数日で血への耐性は出来てしまっていたが、それにしてもあまりに大量の出血に、頭が痺れた様な気さえする。

アーチャーは冷静に——ともすれば、冷徹とも言えよう程に傷口を眺め、手を触れて、「霊夢、セイバーは何をされた？ こいつがこんな、傷の治りが遅い筈無いんだがな

……」

不思議は見慣れた魔法使いが、不可思議に首を捻る。おかしな光景だった。

患者であるセイバーは、喘ぐように口を開き、だが声を発する体力も惜しいのか、結

局は口を閉じる。

「……たった一回、スパッと斬られたのよ。説明するわ、治療しながら聞いて」

「——そういう訳で、マスターは確認できなかったけど、確かにサーヴァントは確認したわ。

魂魄妖夢、拠点は白玉楼。クラスは——イレギュラーね、ウォーリアアって言ってた。そんな所よ」

霊夢の話は、混乱と高揚で時折は分かりづらい部分も有ったが、基本的には道理の通った内容だった。

だからこそ、事実の重大さが分かる。あの狂霊とセイバーと、二体を同時に相手をして、一つの傷も負わないサーヴァント。

そんな物が本当に、本当に存在するのであれば——大事だ、なんて軽い言葉では済まない。

「……で、セイバーの傷はどうなのよ？ 治るの？ 治るのはいつ？」

「落ち付け、霊夢。耳元であんまり騒ぐな——」

「これが落ち付いていられますかっての！ どうなのよ!？」

然し、私は——きつとアーチャーもだろう——その話を強く危惧していなかった。

だからアーチャーは静かに、事務的に治療を進めて行く。抉れた肉を再生させ、不足した血を補い、肉持つ霊体を魔力で埋めて再構成させる。成程確かに、他の術の手際に比べれば些か劣るが、卓越した術者で有る事に違いはなかった。

早送りの様に肉が“生える”様を見せられ、少なくとも食欲は失せた。食事をせずに生きられる身に、改めて感謝をする。

「……驚いたな。妖夢の奴、ここまでやるようになったのか……こりや確かにセイバーも負ける、頷けるぜ。」

あー、霊夢。こりや簡単に治る、お前の魔力供給が滞らなきやだが。私の傷なんかよりよっぽど楽に回復するだろうよ。

霊体化しなかったのが良かった。けど次は、正面からやり合うのは避けとくのが良いぜ」

「どういう事？ セイバーと私で勝てないんじゃないやあ——」

霊夢の言わんとする所は分かる。確かにマスターとしての保有魔力量、そしてサーヴァントのステータスを見れば、霊夢とセイバーのタッグは馬鹿げて強力だ。

「私とアーチャーならどうにかなりそう。後……アサシンも、やり方次第じゃ行けるんじゃないかしら、聞いた感じだと」

「同感だな。妖夢の宝具が“どっち”なのかは分からんが、多分脇差の方だっただろう

？　じゃあ、近寄らなきやどうにかなるさ」

然しその精強無比は、刀の間合いの内のみ。アーチャーの様に遠距離戦闘を主体とする者や、搦め手を用いて戦うアサシンならば、そう恐れる事は無い。

ましてや魂魄妖夢——ウォーリアは、自ら攻め込もうという考えを持たないのか、完全に守戦に回っていたという。

ならば、無数の策を携えて攻め込めば、十分に勝算は有る。

「ええ、そう思うわ。斬られて分かったけど……あれは、霊体殺しの刀よ」

傷は粗方塞がったセイバーが、か細い声ながら言った。

「霊体にはめっぽう強い……けど、他に何も無い。伸びたりしないし、勝手に空を飛んできたりもしない……手が届かなきやそれまでの刀。」

あんなもの、タネさえ知ってれば勝てるのよ。次は絶対に私が勝つわ……！」

負けた事が余程悔しいのか、セイバーは回復しきらない体で拳を作り、自分の膝をガツガツと殴りつけている、

その様は、外見の年齢より数段も幼く見えて——呆れて、霊夢までが溜息をついていた。

「お前は駄目だ、治ってから私が行く。代わりにお前は、あの鎧の奴をどうにかしてくれ。」



多分だけど、私はあの鎧には勝てそうにないんだ。適材適所って大事だろ？

……それよりも。白玉楼って言ったよな？ だったら一つ、気付いた事があるんだ」

「あ、それ私の地図ちよ……あー」

一先ず、無事と先行きが鮮明に見えてきた。少しばかり安心感が漂った部屋に、アーチャーの威勢の良い声。

彼女が手にしている地図帳が、赤と青のインクで染められていると見て取った瞬間、私はもう頭を抱える事しか出来なかった。

だが——アーチャーが地図に残した印には、一定の法則性が見えた。

見た目の俣に受け取れば、無作為に散らばった印でしか無い。けれど私は、これが何らかの意味を持つものだと——直感で悟っていた。

「アリス、霊夢。この街で最近さ、なんか変な事件って起こって無かったか？ 具体的に言うと、学校での体調不良に似た様な感じの」

「似た……？ んなもん、この寒さよ。……あー」

「それと？」

自分の言葉に何かを気付いたか、霊夢は暫し口を閉ざした。両腕を組み、床に座ったまま自分の足を覗む。

「……悪い風邪が流行ってる、って聞いたわね。咳は出ないけどだるさが酷いって。」

あっちこっちでぱったり来てて、救急車が走り回ってるそうよ。

学校よりは北側に集中してるって話らしいけど、伝染るとかはあんまり聞かないわ。良く考えりや変よねこれ」

「あたりだぜ、霊夢。丁度私も、そのニュースが気になってた所だったんだ。で、その症状が流行ってる所を地図に示してみた」

アーチャーが手にした地図帳の、学校より北側の範囲に目を向ける。

小さな赤い点が幾つか打たれて、横には細かい文字でのメモ書き。日付は、きつとニュースなどで報道された、症状が確認できた時期なのだろう。

こうして纏められると、何となく規則性が見えてこないでもないが、然しまだまだ分からない。赤い点の群れの中に、時々青い点が混じっていたりして、何を意味するのか分からなくなるのだ。

「アーチャー、こっちのは？ この青い点、どつちかって言うて街の西側の方に多く広がってるみたいだけど……」

「こっちは、最近起こった些細な事故とか、そういうもんを片っ端からチェックしてた奴。何かのスイッチを切り忘れてガス洩れとか、見通しが良い筈の道路で余所見の衝突事故とか——まあ、そんなのだな。」

見てもらうと分かるだろうが、青い点は基本的に、21時から27時までの6時間だ

けで記してある。それ以外は多すぎて駄目だ」

事故——何故、そんなものに目を付けたのだろう。私は暫し、その意味を探るべく思考する。

アーチャーが集めたのは、人のミスによる事故。それも夜間に限定して——これには、きつと意味が有るに違いない。

事実から意味を見出すのではなく、意味が有るといふ前提の下に事実を見れば、やがて一つの考えが浮かんでくる。

それは——

「……やけに綺麗な円ね」

「だろう？ ノイズを取り除けば、ここ最近の数十件の事故が、綺麗な円の中に収まるんだ」

青いインクを使い、記された点と点を繋ぎ、或いは間に色を塗る。地図の上には忽ちに、一つの大きな円が浮かび上がった。

アーチャーがノイズと呼び、また私も敢えて線を伸ばさなかつた幾つかは、明らかに円から大きく外れた位置に存在する。これらはきつと、調査の過程で偶然見つけた、たまたま起こつてしまっただけの事故に違いない。

肝心なのは、決して広いとは言い難い範囲で、  
“普通ならば有り得ない程の不注意”

が幾つも起こっているという事だ。

「夜だから疲れてた……とか、無いわよね。急に増えすぎよ、こりや」

胡坐を組んだままの霊夢が、身を乗り出して地図を見る。ふむふむ、と頷く様子が、どこか年頃の少女と思ひ難い難い貫禄を醸している。アーチャーはそれがおかしいのか——懐かしいのか、くすくすと小さく笑った。

似合わない笑い方をする彼女だが、直ぐに頭を切り替えたのか、赤いインクのペンを手に取った。

「霊夢の話聞いて思ったんだが、この綺麗すぎる円は多分、音に誘われて不注意になった連中のもんだらうぜ。

こうやって作った円の中心、私が塗りつぶしちまった場所のど真ん中……此処が、今の白玉楼だろ？」

つてことは、だ。よっぽど鈍い奴でも無い限り、この円の中に、妖夢の主以外のマスターは居ないんじゃないかな。

で、問題はこの次だ。今の要領で赤い点を繋ぐと……ほら、こんな形になっちゃう——半ば予想していた通り、アーチャーは赤い点も円に変えようとした。

だが、こちらは点の位置がぶれ過ぎていて、どう繋いでも円の形にはならない。

やりたい事は分かるが——此処でもう、半ば手詰まりの様に思っていた。

「さあ、ここからだ。今の時代を生きている、お前達二人に期待するぜ」

然しアーチャーは、寧ろこの状況をこそ、解決のためのルートと見ているらしい。

私と霊夢の肩を抱き寄せ、頭を地図に近づけさせた。

「ちよつと、何するのよ」

「良いから良いから。お前達、この辺りを歩き回った事つてあるか？　上り坂の有無とか分かるか？」

「……まあ、生まれた頃から住んでる街だし、そりゃねえ」

霊夢は言うまでも無く、私もこの街は良く知っている。どの路地を通れば、何処へ行くのに近道であるかなど、実体験で良く身につけている。

——そろそろ、アーチャーの意図が見えてきた。私もペンを持ち、直接地図に情報を書き込み始めた。

「ここからここまで、見た目の距離より坂がキツイから5分は掛かるわ。こっちは行き止まり、だから別な道を行くしかないわね。それから——」

つまり、移動手段が問題なのだ。

霊夢達が戦った魂魄妖夢——ウォーリアの陣営は、音を使って他者を幻惑している。夢遊病の様に引き寄せられた者も居るといふから、恐らくは市民から僅かずつでも、魔力などを吸い上げているのだろう。

余談だが、この予想が当たっているとすれば、ウォーリア陣営のマスターは、魔力を殆ど用いずして他者の精神に干渉している事になる。

一般市民を、殺すどころか後遺症一つ残さず吸い上げた魔力など、本当に雀の涙であろう。そんな事をしてプラス収支になるのなら、余程効率の良い手段を持っているに違いない——ますます、厄介な相手だ。

それはさておき、アーチャーが赤い点で示した範囲は、きつと徒歩で移動する場合だ。サーヴァントが、ではなくマスターが、である。

徒歩で移動すれば、当然坂道を登るには時間が掛かるし、行き止まりは迂回して進む必要がある。同じ時間を移動に費やしたとて、東西南北全方向に、等しく進めるとは限らないのだ。

到達距離の違いが、到達点の生む曲線を歪めているのだとすれば、平面の地図には無高低の概念を以て補正し、更に交通事情も要素に用いて——

「ここかしら。これだとかかなり円に近付かない？」

「いやいや、ちよつとこつち端がおかしい。もうちよつと西じゃないか？」

「じゃあこれくらいにして……違うわね、これだとは行き過ぎ。少しだけ東に戻して、幾らか南へ」

「ちよちよ、ちよつとちよつと」

後から消しやすいうようにと鉛筆を地図に走らせていた所、霊夢が横から口を挟んできた。

「私を置いてけぼりにしないでよ、せめて説明して頂戴、説明。あんた達は何をやってるの？」

「アサシンのマスターが、何処を拠点にしてるかの特定。学校に仕掛けられてた魔法陣、あれのせいで広がってた症状は……棍を思い出せば分かるでしょ？」

「……そういえば、あいつもダルそうにしてたっけ」

熱は無いが、体に気だるさを感じ、力が入らない。ちよつと聞くだけだと風邪の初期症状にも思えるが、本当はそんな優しいものじゃない。

アーチャーは、各種媒体に流れる些細な注意喚起の記事が、アサシン陣営の居場所を記す手掛かりになると、そう感づいていたのだ。

私も線を書き足し続けた結果——ついに、美しい円を描く事に成功する。その中心は、小さな住宅地の中に記されていた。

「距離の補正を加えて、最も綺麗な円を描ける一点と、近似の複数個所。アサシン陣営は恐らく、この辺りに拠点を持っている——そうでしょ、アーチャー？」

「グレイト、今回は満点だぜアリス。そうと分かれば早い内に——セイバーを早く治して、襲撃するのが良いだろうな。」

念の為だ、私も行く。二対一で正面からなら、あのアサシンには十分に勝てるだろうぜ。

……という事で今夜は寝よう。明日も普通に学校有るだろ？」

古明地こいしと言う少女は、不気味だが無警戒で、マスターとしての脅威度は低い。奇妙な技を使うアサシンの優位性を、彼女の運用が著しく削いでいる。

確かに、勝算は十分以上。確実に確実に重なるアーチャーは、やはり射手より魔術師の適性が高い様に思えた。

「ところであんた達、片付け始めた所で悪いんだけど」

「……………ん、どうしたの？」

暫く蚊帳の外に置かれていた霊夢を、この声で思い出す。

分析より直感任せの霊夢は、今回はまるで参加する所が無かった為か、幾分か不機嫌そうな表情だ。

だが、この言葉を言い出しかねている様な雰囲気は、そればかりでも無いと思うが……

「……………怪我したセイバー連れて、今から帰るのは危険だと思うの。泊めてくれる？」

「そんな事？ 別に良いわよ」

悩むまでも無い事だった。私も泊めてもらった事だし、これで一対一、丁度借りを返



せる。

ただ一つばかり問題なのは、一人暮らしのこの家には、寝具が一つしか無い事くらいだが、

「パジャマは私ので良いわよね、背丈あんまり代わらないし。寝相は大丈夫？」

「大丈夫だと——って、私は床かソファで良いから。良いから別に」

「私は気にしないわよ？　細かい大丈夫でしょ、アーチャーとセイバーには霊体化してもらえば良いし」

寝室へ案内した所、霊夢は体育の授業で習う様な回れ右をして見せた。肩を掴んで引き留める、遠慮などする必要は無いのに。

「ほんっ……とうにあんたさ、いつか刺されるわよ」

「……？　蜂でも飛んでいたかしら？」

霊夢の言う事は、私には今一つ分からない。

分からないままにしておくのも気味が悪いが、一先ず今夜は、眠って頭をすつきりさせようと決めたのであった。

## 五日目、朝から昼へ

早朝、日が昇り始めた頃には、既にアリスは居間のソファに座っていた。

時間としては、決して早くは無い。何せ冬であるから、空が明るくなる頃には、新聞は郵便受けに収まっている。

普段より幾らか事故の記事が多い朝刊——それを読みながら、アリスはパツクの紅茶を啜っていた。

既に教科書類は鞆に詰め終わり、制服には袖を通し、コートは暖炉の直ぐ傍に吊るしてある。登校の用意は完全に整っていた。

「おはよー……あんた寝てないの?」

「二時間前まで横で寝てたわよ。おはよう霊夢、寝顔は険が無いわね」

「気持ち悪い事言うな」

欠伸を噛み殺しながらも、霊夢は借りていたパジャマをアリスに投げつけた。

こちらにも既に着替えは済んでいるが、まだ体温が上がっていないためか、両手を互い違いに袖に押し込んでいる。

「寝不足は心配なさそうね、直ぐに出る?」

「ごはんくらい食べさせなさいよ、私が作ってもいいから」

厚かましい事を言いながら、霊夢は西洋風のキッチンに入って行く。暫くガサガサと何かを探す物音が続いて――

「……あんだ、何を食べて生きてんのよ」

「霞と雨露と隅つこの埃。右手の下の棚にクッキーの残りが有るわよ」

めぼしい食糧を見つけられず、霊夢は溜息を零した。

雪が多くなつた場合、アリスは、食糧の買い出しを怠ける事が多くなる。どうせ食べずとも問題は無いのだから、面倒ならば買いに行かずとも良いのだ。

アーチャーが同居人になってからも、サーヴァントに食事の必然性は無い為、結局食生活は変わらずじまだったのだが――

「あんだ、随分貧しい暮らししてるのね。住居費用に注ぎ込み過ぎなんじゃないの？」

「クッキー貪りながら人の家計を心配しないでもいいのよ、霊夢。早めに出て購買でパンでも買って頂戴」

優雅に足を組み紅茶を楽しむアリスと対照的に、フローリングに胡坐を掻いてクッキーを貪る霊夢。

境遇の格差を感じて、霊夢は湯気の立つ紅茶のカップを――自然、アリスの口元を眺めた。

人形の様な、という感想は、きつとありきたりで陳腐だろう。だが霊夢には、その言葉が何よりもしっくり来るものだった。

誰が作ったのかと最初に思ってしまう程——つまり、自然に構成されたとは思えない程、計算されつくした顎のライン。

口を閉じている時、開いている時、動作している時、三様に異なつて見えて、何れも美しく映える。

紅茶を喉へ注ぐ為、くくと喉を反らした時など、肌の白さも相まつて、大理石の彫像にさえ見えた。

新聞記事を追う目は翡翠。長い睫毛に守られて、大きな瞳が左右へ——

「……………ん？　アリス、あんた……………」

唐突に湧き出た違和感。霊夢は空になったクッキー缶を放り出し、ソファまで近づいて、アリスの顔を覗き込んだ。

「ん？　何か付いてたかしら、目鼻以外で」

「付いてる目が気になったのよ」

霊夢は、ここ数日の記憶を手繰った。アリスとの接触が増えたのは、ここ数日の事だから断言は出来ないのだが——目の色が、違う気がする。

比喩的な意味では無く、言葉通りの意味。霊夢の記憶が正しければ、アリスは青い目

をしていた筈なのだ。

それを意識させられた機会は二度。一度は彼女が指に包帯を巻き、自分も参戦すると宣言した時。そしてもう一度は、彼女が黒衣の影に叩き潰され「壊された」時――

「……あー、嫌な事思い出した」

なまじ原型を保っているだけに、誰であるかがはつきりと分かる死体――いや、死体未満の肉体。早朝に思いだして、気分が良いものでは全くない。

辟易した表情を隠しもしない霊夢に対して、アリスは新聞から視線を上げ、きよとんとした顔をしてみせた。

「橋姫にトラウマでも？ だったら色は変えておくれ、スカーレット・スカーレット夜王の紅スカーレットで良いかしら」

「変えるって、やっぱりカラコンなの？」

「いいえ、戯れ。『Asssemble.』」

単言、己のみに強く意味を持つワードの詠唱。静かな発光の後、アリスの両目は、ルビーの様な赤色に変わっていた。

「え……何これ、凄い。どういうタネの手品……いや、魔術？」

目の前で起こった不思議な出来事に、霊夢は思わず身を乗り出す。元々、瞳の色を観察しようとしていた所でそうした訳だから、危うく額がぶつかりそうだった。

「簡単なものよ。眼球の一部分だけ、反射させる光を限定するの。全部限定すれば墨になるし、強めに絞っただけなら貴女みたいな鳶色ね。

博麗の術とは形式が違うだろうけれど、多分貴女だったら、数十分も有れば覚えちゃうんじゃないかしら？」

「はえー、魔術師って便利ねえ……こりや変装とか楽だわ」

翡翠から紅玉へ、色を変えた瞳を、霊夢はまじまじと眺めていた。本物の宝石の様にカッツは施されていないが、然し窓に差し込む日光を跳ね返し、輝く緋色はまさにルビー。

普段の青は理知的で、今朝の翡翠色は穏やかに優しかった。然し今の緋色は、人格を主張するのではなく、只管に外見を誇る傲慢さが有る。

己の美しさを知り、それを魅せつけているかの様に、存在の強い赤色。事実彼女は――否定出来ぬ程、美しかった。

鼻の先にアリスの体温を感じる程の至近距離、霊夢は止むを得ず認める。この顔を眺めていると飽きが来ない、と。

アリス・マーガトロイドの居る光景は、完成された一枚の絵の様だ。彼女が表情に乏しい事が、その錯覚に拍車を掛ける。

知らず霊夢は、アリスの目を――絵の主演をもつと良く見ようと、腰を軽く曲げて、頭

を更に彼女へ近づけた。

もはや、瞬きの際に睫毛が僅かに濡れる、その様子さえ見てとれるというのに、霊夢はまるで満足しようとせず——

「おや、朝から仲良しで良い事だな。夜にやってくればもつと良いんだが」

「個人の嗜好をとやかく言う趣味は無いけど、無防備なのは頂けませんわ。……なにやってんのよもう」

背後からのサーヴァントの声二つで、弾かれた様に背筋を伸ばした。

「セイバー、動いて大丈夫なの？」

昨夜、瀕死の重症を負った筈のセイバーは、今はすっかり血色の良い顔をしていた。

無論、万全ではない。マスターである霊夢には、セイバーがまだ、多量の魔力を、負傷の治癒に注いでいる事が感じ取れる。

「お陰さまで、お腹ぺこぺこだけで痛みは無いわ——お腹一杯ではありますけれど」

「人の恋路にとやかくは言わんが、非生産的だぞ同性愛は」

アサシンの毒にやられてるアーチャー共々、このサーヴァント達は、霊夢を冷やかにして楽しむと企んでいる。

無事に安堵するやら気恥ずかしいやらで、霊夢は拳骨をこさえながら答えた。

「恋愛は第三次産業だし、私はそういう主義じゃないの。それよりも、あんた達はもう戦

えるの?」

「一から育む所は第一次産業ではないかしら。正直まだまだ腕が重いわね」

「いやいや加工も必要だろう、関係性とは刻一刻変化して行くもんで——あ、私はあと二日欲しい」

サーヴァントの恋愛談議も珍しいが、霊夢が聞きたいのはそこではない。重要な情報だけ意識に入れ、どうしたものかと考え込む。

折良く今日は金曜日。放課後から明日、明後日と、束縛されることなく活動出来る日だ。

可能で有るならば、二日の間に一つの陣営だけでも捕捉し——あわよくば、潰してしまいたい。

当初の予想を超えて厄介な敵ばかりのこの戦争を、霊夢は一刻も早く終わらせたがっているのだ。

「アーチャーの説に賛成ね。あるがままの感情を加工するのだから、恋愛は第二次産業よ」

が——何故か、アリスもまた、がっしりと話題に食いついてきた。

「へー、ほー、ふーん。仏頂面してあんた、そーいうのも興味有るんだ?」

これ幸いと霊夢は、被害者役をアリスに押し付ける。



面倒な役目は他人に任せ、自分は思考に専念しようという打算が半分。残り半分はやはり好奇心が原因である。

「あんたが恋愛語るとか予想外ね。何よ何、どんなのが好みなのよ？」

「あらん、霊夢ったら野暮ね。いたいけな少女に異性の好みを聞くなで……で、どうなのかしら？」

セイバーまで、一度止める振りはしつつも便乗する。

色恋沙汰は何時の世も、女子の話題の最たる物であるのだ。

「好み……？ うーん、そうねえ」

然して、アリス・マーガトロイドは——

「一に内面、二に外見。性別はどうでもいいかしら」

「……はい？」

——生半な相手ではなかったのである。

「内面が優れている事は最大の前提として、外見と内面の調和は重要よ。顔と精神にギャップは求めないわ。

期待されている方向に、期待以上の美を。それさえ達成できているなら、性器の形質の差異なんてどうでも良くないかしら？」

新聞を折りたたみ、紅茶のカップをテーブルに置き、アリスは立ち上がって背伸びを

する。

自分が発した言葉に、きっと彼女は、一片たりと違和を見出していないだろう。自分の思考は正常なものだと確信しているだろう。

実際のところ、恋愛感情が他社の人格に対して抱くものであるとするならば、確かに性別は恋愛に関係無いのかも知れない。

そういう言い訳は出来るにせよ、アリスが当然のように口にした言葉は、霊夢とセイバーの思考を暫しフリーズさせた。

「……あんたつて、本当にアレよね。え、なに、本気？」

「本気になる程、恋愛に価値は見出さないけれど。ところで朝食はいいの？」

コートを羽織り、紅茶のカップを洗い場に運ぶアリス。早くも登校の用意は整っているらしい。

その背にどう声を掛けていいか分からず硬直する霊夢に、アーチャーが苦笑しつつ肩を叩いた。

「まあ、アレだな、うん。だから私はとやかく言わん。お前もとやかく言わないでやってくれよ」

「言わないけど、言わないけれど、少し先行きが不安になった」

朝から何とも言えぬ疲労を感じ——代わりに、空腹は忘れた霊夢。

結局はクツキーをいくらか頬張った程度で、雪道を掻き分け通学するのであった。

金曜日の校舎は、明日への希望に満ち満ちて、中々に明るい雰囲気を保っていた。

体調不良などを起こしている生徒もあまり見受けられず、外から覗き込んでいるだけならば、この校舎が戦場に成り得るなどとは思えない。

それ程に平和な空気の中、ちょうど頃合いは昼休みである。

「それで、何処から調べる算段にする？」

「どーしようかしらねえ。直感で行く？」

霊夢とアリスは、教室の隅に余っている机を挟み、昼食を取りながら相談していた。

どうせ昼休み、あまり聞く耳立てる者もないが、その上で重要な語句は暈しての会話。聞かれても然程困る事は無い。

霊体化したセイバーは常に傍に控えているし、アーチャーは校舎を歩き回っているが、いざとなれば直ぐに戻ってくるだろう。

寧ろ人目が多いだけ、襲撃を受ける危険も低く——少なくとも、霊夢はそう考えている。

「まず古明地よね、怪しいの」

「そうね、一年生の古明地さとり。そう多い苗字でも無いし……少なくともこの学校に

は、彼女しか居ないわ」

そして二人が何を相談しているかと言うと、残りのマスターを炙り出す算段である。自分達を差し引いた5の陣営の内、確認出来ているサーヴァントは四体——だが、マスターは一人だけ。

その一人も顔と名前が分かっているだけだし、一陣営に至っては影も形も見えていない。

「……やっぱり、私達も別行動した方がいいのかしら」

アリスは、指を組み合わせた上に顎を乗せ、ほうと溜息を吐きながら言った。

逆に考えると、霊夢とアリスの二人は、少なくとも既に四陣営に存在を知られている。

彼我になぜこうも情報の格差が有るのか——やはり行動の指針が原因だろう。

日常生活は崩すまいという霊夢の指針は、必然、外出をせざるを得なくなる。

外出時、サーヴァントを連れ歩かない方策はない。さもなくば二人は忽ちに、骸を路上に晒すだろう。サーヴァントからの奇襲に霊夢とアリスだけでは、瞬き一つの間も持ちこたえられない。

その上に霊夢達は、自分から相手陣営を探して歩き回るのだから、どうしても自分がマスターだと喧伝する事になる。サーヴァントを引き連れ歩く人間を見て、誰がマスターでないと思えるだろうか。

「そりや無いわね。引き籠りはごめんよ、私はアウトドア派なの」

アリスの提案を、霊夢はあつさり蹴り飛ばした。

サーヴァントと行動を別にするならば、確かにマスターは何処かへ隠れ潜む必要がある。が——その場所を、霊夢達は確保出来ない。

「結局さあ、今まで通りしかないんじゃない？ 夜にうろついて、偶然見つけたら仕留めで。非効率的だけど、その内向こうも動くでしょ」

「危険ばかり嵩む案だと思うわ、賛同しづらいわね。それだったらまだ、何処かに隠れて待つ方が——」

「その場所が無い、ってのが問題なのよ」

方針は、未だに纏まりそうも無かった。

一時休憩として、昼食の接種に専念する。朝食が限りなく質素だった為、霊夢はやや多めにパンを買い込んでいた。

ごつてりと餡子にマーガリンを混ぜ込んだ『あんバター』や、油たつぷりの『揚げドーナツ』、そして口の周りを汚す事確実な『シュガーバタートースト』。

コンビニで買うよりは余程安いのだから、多少の贅沢も目を瞑って良いだろうと、霊夢はそんな風に考えていた。

「……バターとマーガリンで油が被ってない？」

「良いのよ、油を入れなきゃ車は走らないの」

だから、味の偏りにも目を瞑る。

今とはとにかく腹を満たして、一秒でも長く歩き回れる様にしておきたい。美食よりカロリーの、これもまた合理的の思考であった。

「お前はガソリンよりもシャフトグリスが必要だろ、博麗の。だからガソリンは私にくれないか」

そんな思考を妨げる様に、鼻をひくつかせながら寄ってきたのは、犬走権である。

「私はせいぜい二輪車って事？」

「カクカクしすぎだから滑らかになれって事。夜更かしと悪巧みの相談か？」

「盗み聞きは関心しないわよ」

実際の所、声量が少し大きすぎたきらいは有る。指摘されて初めて気づき、霊夢はつんとした口調で答えた。

鼻だけでなく耳まで良く出来ているのか、結構な距離は有った筈だが、会話の大半は聞かれていたらしい。

「夜遊びの相談も関心しないな。なんだなんだ、何処へ行くつもりなんだ？ 夜の街に繰り出すのか？」

「発想がおかしいわよ、あんた。もうちよつと健康的な発想しなさいよ」

「これ以上無い程に健全だと思ふが。学生の夜遊びなんて、せいぜいが市街地で屯するくらいのものでらう」

近くの空席の椅子を引き、椀はちやつかりと会話の輪に紛れ込んで来る。何時もの事ではあるので、霊夢は飽ききれながらも、邪見に扱ふ事はしなかつた。

「で、古明地がどうしたつて？ あいつもあれで、色々と噂を聞く奴だけど」

「どうもしないつての、本当にあんたは何時も——ん？」

他愛ない噂話は、休憩時間の花である。今日も所詮、その程度の話題だと霊夢は思つていた。

だが、椀が持ち込んだ話題が、よりにちよつて自分達が一番知りたい相手の話題（かもしれない）と聞けば、黙つては居られない。

「……聞いてあげるわよ、喋りたいんでしょ？」

「横柄な奴め、噛みついてやるぞ」

ギザギザの牙を剥き出しにして、がちんと打ち合わせ——それから椅子に深く腰掛け、椀は声も潜めず語り始めた。

古明地さとりは、交友関係の狭い後輩である。つるむ相手と言えば河城にとり程度のもので、同級生に殆ど友人が居ない——と言うよりも、自ら人を避けているくらいが有る。

例えば、クラスメイトに遊びに誘われたとしても、彼女はまず応と答えない。学校が終了すれば家に直帰するし、その家が何処にあるかさえ、知っている者は少ないのだ。「良く夜に出歩いてる奴らから聞いたらしいんだけど、古明地がこっそりと夜歩きしてるのを見たらしいんだな。」

あんまり楽しげに歩いてたもんだから、声を掛けようか迷ってる間に行ってしまった……つて事らしいけど。

だから本当の所、本人かどうかは確認出来てないらしいんだが——」  
「らしい、が多すぎるわよ」

「仕方ないだろう、又聞きなんだから。で、そこからがちよつと怖い話だ。」

古明地は薄暗い路地から出てきたそうなんだけど、屯してた連中、ちよつとその路地を覗き込んだらしいんだな。

……別に、何か居た訳じゃない。居た訳じゃないんだが——そいつら、次の日から揃って三日寝込んだ」

霊夢は露骨に訝しむ顔をし、アリスは片方の眉をぴくりと動かすだけに留める。何れにせよ、興味深い話ではあった。

「種を明かすと、酷い風邪だったらしいけどな。気怠さが凄くて体が重くて、熱は低いのにろくに動けない。」



医者に診せたら、喉とか鼻の中とか、かなり爛れてたつていう風に聞いてるよ」  
「……ぞつとしない話ね」

だろう？ と同意を求める椀は、耳も尻尾も垂れ下がっていた。怖いもの無しの椀ではあるが、形の無い存在は苦手らしい。

怪談話を楽しむ女学生、そんな形容が相応しい表情に、霊夢は何時の間にか笑いを零していた。

「そんな訳だから、あの古明地には近づかない方が良くも知れないぞ？ だってほら、その、祟られたりしたら嫌だろう。」

君子危うきに近寄らず、そつとしとくのが賢い賢い……つてな」

小さく身震いしてから、椀は椅子を足で押しつけるように立ち上がる。

「どっか行くの？」

「お前を見てたら私も腹が減った、パン買ってくる」

「あ、ちよつと」

懐に手を入れ財布を探す椀。その肩を霊夢が叩いて呼び止めた。

「行くならその前に、その話を誰に聞いたか言つて行きなさいよ」

「二年のリグル・ナイトバッグだよ。今日は珍しく一人で登校しててな、途中からちよつと付き合ったら聞いた。」

良く走りこんでるよな、お前もたまには陸部に顔出してやれ」  
答えは簡略に。椀はそれだけ告げると、やや速足で歩き始める。購買のパンは無制限で無いのだ。

取り残された霊夢とアリスは、顔を見合わせて暫く押し黙り、  
「……あんたはどうする？」

「今回は見、貴女に任せるわ」

リスクの分散で、意見の一致を見た。

有体に言えば——どうにも、胡散臭かったのだ。

## 五日目、放課後

放課後。霊夢はセイバーを引き連れて、さっさと家に帰ってしまった。

マスター探しをしたい気持ちはあるだろうけれど、今のセイバーの状態では、とても戦闘なんて出来ない。夜に奇襲を受けない様にと祈りながら、回復を待つしか無い筈だ。

が——それは私も同じことだったりする。

「そろそろ治らないの?」

「無理だなー、どうやってもあと三日欲しい」

授業から解放された私は、学生服を着たアーチャー、偽名北白河ちゆりと共に街を歩いていた。

「しかし、どうだアリス? やっぱり学生になつといて良かっただろ。怪しまれないもんな」

「そうかしら……まあ、否定はしないけれども」

確かに傍から見分には、ただの学生同士の交友に——見える、のだろうか?

実際に同級生なのは間違いない。然しながら身長は、小学生と高校生程の差が——数

値にすれば20cm近くの差が有る。自分が現代っ子なのだと自覚した。

「いやまあ、そこはどうでも良いのよ。肝心なのは」

「治すには、だろ。分かってる、分かってるってば」

それはさておき、現状は正直な所、逼迫している訳でも無いが芳しくない。

正直に言えば、少し拍子抜けしている。何せマスターを直接殺害しようというサーヴァントは、あの一件以来お目にかかっていないのだから。

だが、仮に狙われた場合、果たして自分が無事に切り抜けられるのか——鼻屑目に見て、かなり難しい筈なのだ。

「……貴女、思った程強くないわよね」

「言ってくれるな、私は人間だったんだぜ。あと魔力不足が否めない」

ここまでに遭遇したサーヴァント——セイバー、アサシン、褪色の狂霊に漆黒の影、この中でアーチャーが勝利出来るのはどれだろう？

セイバーと狂霊の二者は、恐らく一対一では問題外。懐に飛び込まれた瞬間、アーチャーはバラバラに引き裂かれかねないのだから、勝利には少なくとも数kmの間合いが必要になる。

あの漆黒の影には——不意打ち気味に一矢報いはした。が、手の内が割れた状態で正面から戦えば、相当の不利は否めない。アーチャーの得意とする遠距離戦闘も、あの速

度の前にはほぼ無意味となるだろう。

そうなると、勝ちの目が見えるのはアサシンだけだ。あれとは既に一度戦闘し、アーチャーも相手の札を幾つか見ている。

元々の戦闘力に劣るアサシン以外、どれ一つとして勝てそうにないと言うのは、中々気の重い事だ。

「はーあ」

「溜息吐くな、幸せが逃げるぞ」

「幸せは逃げないわ、歩けないもの」

「いやいや、あいつらは軽いからそよ風で吹っ飛ぶんだ」

本当に他愛ない会話をしながら、雪掻きの施された歩道を歩く。見た目だけは平和である。

けれども私は、この減らず口のサーヴアントにどういふ感情を抱けばいいのか、それを考えるのに忙しく、平和を堪能しては居られなかった。

アーチャー——霧雨魔理沙は、無能でも愚かでも無い。知恵も知識も度胸も有り、発想を形にする実行力もある。アサシンとの戦闘の折りに見た横顔は、小さな体に似合わず、歴戦の戦士染みた風貌だった。

強さ、相性という面で見れば、確かにこの聖杯戦争に於いて、このアーチャーは強者

と言ひ難い。だが、彼女と共に戦うならば、或いは私は命を保ち、この戦争を切り抜けるかも知れない、と思うのだ。

——そう、〃かも知れない〃なんて、そんな程度に。

別に、死にたい訳ではない。が、生き延びなければならぬ理由も、良く良く考えれば見つけれないのだ。

内臓の大半を潰されて死にかけて時も、今にして思えば——死んでしまつても、困る事は無かつた。ただ、視界の白が退屈で仕方がなかつたから、どうにか目覚めようと足掻いただけだ。

私には、自己保存の本能が無い。生き物ならば〃自分を重んじなければならぬ〃という固定概念を、引きずつて歩いているに過ぎない。死ぬよりは生きている方が良いでしょうが——死んだら死んで、それで良いとさえ思っている。

だが、そんな考えを、この小さな従<sup>サレヴァント</sup>者には告げたくないのだ。

理由は無い——思いつかない。なんとなく嫌だ、という様な感情論で、無機質な自分の生死観を隠そうとしている。非合理的だが、思いつかないのだから仕方が無い。

何せアーチャーと来たら、一度は死を経験した身であるくせに、とんでもなく生を謳歌しているのだ。食事の度に目を輝かせるし、家電製品を見れば隅々まで撫でまわす。アスファルトやコンクリートなんてありふれた代物でさえ、彼女は化石入りの大理石を

見たかの様に興奮する。

きつとアーチャーは、叶うならば生き長らえたいと、前向きに願う人間だっただろう。怯えるのではなく、生をより楽しむ為に、積極的に死を遠ざけようとする人間だっただろう。

そうだ、私が彼女に対して感情を持って余すのは——彼女が私から遠すぎて、理解が及ばないからなのだ。

「なんで、貴女と私なのかしらね」

「ん？」

「組み合わせ」

うーん、とアーチャーは一声唸って、腕を組んで首を傾げた。

ざつくざつくと雪を掻き分けていた足も止まって、暫くは思考に没頭していた彼女だったか、

「私じゃ駄目だったか？」

自分の顔を指さして、アーチャーはそんな事を言った。

「いや、駄目って訳じゃないけど」

「じゃあ、いいんじゃないか、理由とか。私だって別に、お前がマスターで困ってない」  
今度は私がうーんと唸って、

「そんなものなのかしらね」

「そんなもんなんだぜ、多分」

何も解決はしていないのだけれど、とりあえず良しと言う事になってしまった。

「で、結局何処へ行くつもりなのよ」

「寺子屋の生徒が授業の終わりに、遊びに行くとしたら何処が相場だ？」

「ショッピングモールかゲームセンター、或いは駅ビルって線もあるわね。」

「少なくともこの近辺は、駅どころか線路も走ってないと思うけれど」

随分と歩かされる。何時の間にか街の中心から外れて、家もまばらな地域に来てしまった。

ここまで来ると、軽い食事を取ろうにも、8時で店仕舞のスーパーマーケットしか見つからない。飲食店の類など無いのだ。

代わりに自然は豊富。時折は何処かの学生が、生物の生態研究の為に訪れるとか言うが——断言すると、退屈な地域である。

「図書館、このあたりにあるだろ？ あそこで勉強会でもしようかなーって」

「……図書館だったら、駅前の図書館がお勧め。こっちはちよつと……なんていうか、



ふつうにうちの学校の方が本が有るわ」

この近辺には、確かに図書館が一つだけ有る。使うのはもっぱら、絵本を求める近所の母親達か、或いは暇を持て余す老人くらいのもの。少し移動手段を持つていけば、駅前まで出れば、三階建ての大型図書館を利用出来るのだ。

「あれじゃ私には物足りない。古書が足りなすぎるし——目当ての本は、絶対に無いって言いきれるからな。」

絶対にこつちじゃあなきや駄目なんだ。悪いが付いてきてもらうぜ」

「まあ、良いけれども」

一度動き出せば、有無を言わせないのがアーチャーだ。否も応も無く歩いては居たのだが——やはり遠い。

森の木々の間を通る車道には、中央線も書かれていなければ、縁石の様な物も置いていない。

が、めつたに車も通らないので、車道のど真ん中を歩いていても問題が無い——無い無い尽くしだ。

「で、やつぱりあそこなの？」

「そう、あそこだ。いやー、やつぱり分かりやすいなあ、あいつらの趣味」

それを、暫く退屈を押し殺しながら歩き続けていると、湖の畔に出る。

立地条件も悪ければ、所有する蔵書数も物足りない。こんな所まで付き合わされて何をするのかと、文句の一つも出そうになるが――

「さ、行くぞアリス！ ちょっと走ろうぜ、ここは寒い！」

「あ！……もう、私はインドア派だつてのに……」

やたら楽しそうなアーチャーを見れば、その声も引つ込んでしまう。

これまた長い橋を渡り、湖の真ん中にぽつんと浮かぶ小島――その唯一の施設、『紅魔大図書館分館』へと駆け込んだ。

『紅魔大図書館分館』――仰々しい名前にも程がある。

成程、名前に相応しい真つ赤な建築物。右を向いても左を向いても、真つ赤な壁で目に悪い。目を背けて床を見ても、こっちはこっちでやはり赤い。

駅前建っている本館は、こんな趣味の悪い色はしておらず、勉学に励む者達を受け入れる聖地であるというのに。

「落ち着かないわー」

「本を読むのにはな。ほら見ろ、見事に閑古鳥」

数人ばかり、本を読みに来たのか雑談をしに来たのか、そんな集団が出来ていた。子

供に絵本を読ませておいて、自分は椅子に座っているだけの主婦だったり、特にする事も無いので散歩ついでに立ち寄る老人だったり——過疎集落の様な雰囲気だ。

棚の数も少なく、首を一度右から左に動かすだけで、全てを視界に収める事が出来る。個人の家としてならば広いが、公共の建物にしては狭すぎる。

こんな所では目ぼしい本も無いだろうけれど、それでも時間潰しに——と、歩き出そうとした途端、

「待て待て、そつちじゃないそつちじゃない」

「ぐえっ」

アーチャーに襟首を掴まれた。身長差が有るものだから、背骨が直角に後ろ折れしかける。

「……つたたたた、少女にあるまじき悲鳴が出た……何すんのよ」

「何が悲しくてこんな所で読書しなきゃならんのだ、違う違う」

「図書館で読書以外に何をするのよ。人形劇でもお披露目？」

ぷっ、とアーチャーが嘔き出した。そんなおかしい事は言っていない筈だが、どうもツボが分からない。

「そうだな、何時かまたやって貰うかな。おい司書さん、何処に居たー？」

「図書館ではお静かに……あれ、あれ、あれ？」

少し大きな声で叫ぶアーチャーに、眠たげな顔の司書が近づいて来る。

友人（表面的には）の愚行を詫びようかと思つた私だったが——口を挟もうか、迷つてしまった。

赤毛の司書の眼鏡の向こう、眠たげな目が一瞬で大きく見開かれ、

「……魔理沙さん、どうしてここに？」

「返してた物を借りに来たぜ。あいつは何処だ？」

この時代には知られる筈の無い真名が、その口から告げられたからだ。

「生きてたなんて思いませんでしたよ。なんですか、結局気が変わったんですか？」

「そんな馬鹿な。私は人間だぜ、生きてる筈がないだろ？」

赤毛の司書とアーチャーは、肩を並べて歩いている。私はその後ろを、あつけにとられたまままで歩いていった。

「ちよつ……と、何処まで降りるのよ」

図書館の奥に閉架図書室——そこまでは分かる。分かるのだが、片隅の床に隠された階段までは読めなかった。

細腕の司書が、分厚い床をいとも容易く引つpegがした光景も凄絶だったが、寧ろ私が

驚いたのは、地下から立ち上る空気の清浄さだった。

「エアコンとか使ってるの？」

「いいえ、地下に電気は引いてません。勿体無いですし、ねえ？」

「あいつには不要だよな、苦手そうだし。絶対録画とか出来ないだろ」

「ええ、テレビのチャンネルを変えるのにも苦戦してましたよ」

私には誰の話題なのか分からないが、二人は旧知の友人の様に語り合いながら歩いている。きつとこの赤毛の司書は、『幻想の幻想』時代から生きているのだろうと——突拍子もない事だが、無理なく信じられた。

「なあ、アリス」

唐突に、アーチャーが私の名を呼んだ。

「何？」

「今のお前には早すぎるかも知れないんだが……私の状況が状況だ。ちよつと我慢して貰うぞ」

「話が見えないわよ」

先を行くアーチャーの顔は見えない。だが、その小さな背に似合わぬ力は感じ取れる。

同じサーヴァントを除いては、恐らくこの地上に敵無しであろう彼女が——緊張して

いるのも、感じ取れた。

「見えなくても良い、その内に見えてくる。見えちまった方が大変なんだろうが……配慮してやる暇が無い。」

本当なら切りたくない札だ、軽々しく使っちゃならないカードだ。そこだけ思いだし——覚えておけよ——

階段を最後まで降りて、分厚い扉の前に立つ。ドアノブも何もない扉は、赤毛の司書がそつと触れると、向こうから自然に口を開けた。

「あれから、二百十八万と七千九百四十三冊。六億と六千二百六十五万、跳んで二十八頁を読み進めた」

——その声は、耳を介してではなく、頭の中に直接紛れ込んできた。

「四十万以上の日没を超えて、四千以上の季節を超えた。そこを泳いでるのは湖の主、初代から数えて百二十二番目」

目の前に開けた空間は、夢の中を歩くかの様に、現実から離れた所に有った。

水圧を度外視したかの様に薄いガラス壁——そう、水圧。この空間は図書館の地下、湖の中に存在している。

高い透明度、存在すら意識出来ない程の厚さのガラス。『彼女』が指さした先には、

5 mはあろうかという巨大なナマズが泳いでいた。

「けれども、まだ見終わらない。貴女に関わっている時間は、出来るなら極力抑えたいのだけれど」

林の様に並び立つ書棚。高さは私の背丈の倍もあり、並ぶ書物には僅かの隙間もない。蔵書の傾向は雑多——存在する全ての書を、ひとところに集めた様な風情。

蛍光灯でも、また蠟燭の炎でも無い不思議な灯りは、林立する書棚の影を揺らめかせている。

「相つ変わらずつつけんどんな奴だなー、偶には日光浴してるのか？」

「髪が傷むからしないわ。粗野な貴女と一緒にして欲しくないわね、人間止まりの貴女と」

きい、きい、と金属のこすれ合う音。何時の間にか私の隣には、一台の車椅子が止まっていた。

「一緒にするなら——せめて、こつちじゃないかしら」

次の声は、間違いなく耳から聞こえた。私は咄嗟に音の方角、車椅子の有る方向に向き直る。そこには一人の少女が、膝掛毛布の上に本を乗せて座っていた。

「ようパチュリー、ぜんそくの調子はどうだ？」

「貴女の顔を見たら悪化したわ。ご機嫌よう、歓迎するわよアリス」

歓迎されている——とんでもない。車椅子の少女の冷たい目に、私は思わず後ずさりしていた。



## 五日目、放課後——The Grimoire of

”  
”

「小悪魔、紅茶を。二人分だけで良いわよ」

「はいはい、ちゃんと三人分ですね」

赤毛の司書がぱたぱたと靴音を鳴らし、本棚の間をすり抜けて行く。その背を見送りながら、私は追いつかない思考をフル回転させていた。

ここは——どういう空間なのだろう？

紅塗りの壁以外には見所が無い、蔵書も僅かな退屈な図書館。その地下に広がっているのは、数十m四方も有りそうな広大な空間で、大量の書物が並んでいる。

天井も壁もガラスだが、水圧に負けて割れる様子は無く——そればかりか、明らかにこの空間は、本来あるべき場所から捻じ曲げられて配置されている。

私達は、階段を下りてここにたどり着いた筈だ。現実的に考えるならば、ガラス天井の向こうには、上の階層の床が見える筈。だというのにこの空間では、上方を遮る何者も存在しないのだ。

「アーチャー、ごめん、説明して。流石に理解が及ばないわ」

「全く、魔術師のくせに柔軟性が足りないな。『こういう場所』なんだ、でいいだろ」  
 「いいえ。位相の転換に周囲の光線の屈折、見る者の認識を欺く永続の結界に、光質・気  
 温・湿度・粉塵混合率の自動調節。」

大きな所だけでもこの数よ、あまり適当な数え方をしないで頂戴」

車椅子の少女は、視線を本に落としたまま、アーチャーに不満な声をぶつけた。

両手は本のページに触れているのに、車椅子の車輪は自らくるくると回転し、少女を  
 乗せて動いている。

「細かい事はどうでもいいだろ？ 枝葉末節に拘るなよ」

「細かい事こそ重要なものよ。枝葉が無ければ光合成も出来ない、死ぬわよ」

はは、と軽快な笑い声。アーチャーは冷淡に扱われて、尚も楽しそうだ。

「……用件は？」

「あんまりに急だな、らしくも無い」

少女の小さな背を、それより小さなアーチャーが追う。その途中、車椅子の少女——  
 パチュリーは、またぶつきらぼうに尋ねた。

互いに視線も交わさない、挨拶さえ碌にしていない。まるで二人は、つい前日も会っ  
 た知人であるかの様に、自然と会話をしていた。

それが——私には、至極奇妙に映った。

「ええ、と。パチュリーさん？」

「呼び捨てが良いわ、落ち着かない」

「はあ……じゃあ、パチュリー？ どうして貴女は——」

遙か過去と成り果てた『幻想の幻想』、霧雨魔理沙はその時代の人間だ。彼女の生前の知人であるというならば、この少女の年齢は、私の数十倍にもなるだろう。

そして——魔理沙と離別してから今までの年月は、長いという言葉で表せるような軽さでは無い筈だ。

千以上の年月を重ね、どうして彼女達は、こうも自然に振る舞えるのか。

聞きたい事は、そればかりでは無い。

思えば彼女達は、どちらもおかしいのだ。パチュリーが私に向けた第一声は「歓迎するわよアリス」、アーチャーの第一声は「よう、アリス」だった。

二人とも、私が名乗る前に名前を知っていて、まるで旧知の仲であるかの様に呼び掛けて来ている。

「アリス・マーガトロイドという名前を知っているのか、かしら」

「——先回りされたけど、その通りよ」

ファーストネームは、まだ良い。生まれてこの方、他に該当する者を知らないファーストネームまで、この少女は淀みなく口にする。

彼女達は、何を知っていると言うのだろうか。

「寧ろ、知らない道理が有るのかしら」

それとも——私が、忘れていただけなのか？

パチュリーは上体を捻り、後ろを歩く私に、やはり冷やかな視線を向けた。

そこに一切の悪感情が無く、生来の顔立ちがただそうなっているだけだと気付くまで、暫く居心地の悪さを味わった。

水中図書館の奥には、三角形の机が置いてあった。

底辺だけが異様に長い、極端な角度の二等辺三角形。パチュリーは車椅子を、底辺に合わせて止めた。

「掛けなさい、立ち話も落ち着かない」

「おいおい、椅子が足りないぜ」

机の形状を裏切るように、椅子は一つしか置いていない。その事を指摘されたパチュリーは、一拍の間を開けてから続けた。

「……ここ数百年、小悪魔しか椅子を使わなかったのよ。必要なら買いに行かせるけど」  
「面倒だろ、私は床でいい」

言葉の前に差し挟まれた空白、その意味を知る事は、私には出来なかった。

寂寥感——だとは、思えない。魔術師の生に孤独は付き物だ。

外界に触れることなく、自らの知的欲求を満たすためだけに活動するのが、初戦はそんなものが魔術師だ。

そして彼女は——パチュリーは、如何にも魔術師“らしい”少女だったのだから。

まず、体臭が無い。代謝さえ必要が無い為に、体が発するはずのあらゆる匂いがない。強いて言えば洗髪料の香りが漂うくらいで、吐き出す息にさえ外気との差が感じられなかった。

顔立ちを冷たく見せる要因の目は、見開かれも細められもせず、あるがままの形で来訪者を——この場合は私とアーチャーを見つめている。

細かに眼球の動きを追えば、彼女が僅かな時間の間に、どれ程多くの事柄を見ているかが分かるだろう。

押すもの無く動く車椅子、触れることなく捲られる本の頁。単言の詠唱すら無しに、彼女は自分の周囲に、自立稼働する物体を侍らせている。

——ああ、私はこういうことがしたいのだ。

私が得意とする魔術の分野は、“支配権が自分にあるものの使役”。つまり、自分の所有物や領域にあるものを動かし、或いは変質せしめる事だ。

行く行くは自立行動する道具を、それも無詠唱ノーワードで全ての行程を終える道具を作りたい。それが私の目標だ。

その完成図がここにある。私はなんだか、彼女が羨ましくて仕方がなかった。

「合格点かしら」

「え？」

車椅子の車軸、自立駆動の起点に目を奪われていた私は、パチュリーの一言で引き戻された。

合格——とんでもない、採点する事さえ不可能だ。

現在の私の技量では、最低でも「開始」と「終了」の二点だけは、必ず一工程以上の詠唱を挟む必要がある。

目視さえ用いずに何かを動かすのは、例えばそれがスプーン一本であろうと至難の技なのだから。

「……やっぱり「見比べる」と劣るわね」

だのに彼女は、首を左右に振って嘆息する。

魔術師の見本の様な顔をして、どこか寂しげに溜息を付く。まるで真つ当な人間か何かの様に。

私には、彼女が分からなかった。

「単刀直入に言う。私の治療をして欲しい」

「嫌。かつ、無理よ」

結局赤毛の司書——小悪魔が、もう一つ椅子を持ってきた。椅子の上に胡坐をかき、アーチャーの要求は、僅かに一言で突っぱねられた。

「おいおい、旧友に対してあんまりだな」

「仇敵に対して妥当な線よ。大方その単純無謀な頭で走り回って、壁の釘にでも刺さったんじゃない？」

「あんま間違つてない。ただな、釘が毒入りで破傷風が酷いんだ」

「おめでとう、壊死させればもう治す必要は無いわ」

本の頁から視線を持ち上げる事も無く、取りつく島も無いパチュリー。

然し、彼女が只管に拒絶を繰り返しているのは、単に意地が悪いからだけでも無いらしかった。

「……魔理沙。貴女は私に対して、どういう評価を下している？」

「体力無し、応用性無し、知識は有り。大体の事はお前に聞けば分かるし、困ったら頼れば大体解決する便利屋。違うか？」

「昔ならばそうだったわ。今は違う……見て分からない？」

パチュリーは、台詞に似合わない微笑みを見せた。

微笑みの意味を、そのまま受け取れない事は分かっていた。声の調子があまりに淡々

と、感情を込めないものになっていたからだ。

「自分の脚も治せない、もう何百年も歩いてない。外の事は新聞と伝聞、それからテレビのニュースで知るくらい」

「バラエティは見ないのか？」

「5年前に飽きたわ、医療ドラマなら好きだった。知ってる？ 『保証は有りません』は成功の予兆よ。」

私の脚は『治らない保証が有る』だから、どうしようも無いのよね」

「……何が有った？」

アーチャーは、普段より数段も低い声で尋ねた。

私の知るところでは無いが、パチュリーが車椅子を使っているのは、昔からという訳ではないのだろうか。

軽い態度と口調ばかりのアーチャーが、深刻な声を漏らしているのは、私には少しばかり驚きだった。

「聞いても仕方が無いでしょう、過ぎた事よ。それより重要なのは、私が貴女を治療出来ないという事ね。」

具体的に言うならば、世界全体に存在する魔力の量が少なすぎる為に、自然蓄積の量を自然消費量が上回って——」



「意識的に収束させても無理か？」

「器自体が壊れているのよ、注いでも水は溜まらないわ。ただの人間や魔女ならば兎も角、祭り上げられた幻影を弄り回す様な、大それた真似は出来ないわね」

「……そろそろ、私も会話に入っつていいのかしら」

あまりに置き去りにされている感が強くて、私は思わず口を挟んでしまった。

彼女達が話している内容は分かる。早い話がパチュリーは、私やアーチャーより、魔力の浪費が激しいのだ。

何もしていないでも魔力を消費してしまうから、自然回復に任せていては、やがて魔力が枯渇する。

例えるなら、中程に大穴が、底には針の穴が開いたグラスだ。大量に水を注げば側面から零れるし、少量だろうが放置すれば、やがては全て流れ落ちる。

それだけの不利を背負って、尚もこれだけの空間を作り出すからには、パチュリーはやはり相当の術者なのだろうが――

「パチュリー、で良いのよね。貴女は本当に、アーチャーを治療出来ないの？」

「ええ、確証が有るわ。死んだ筈の霧雨魔理沙が、“アーチャー”と“射手”と呼ばれてここに居るのなら」

彼女は試しもせず、治療は出来ないという。そればかりか――どうも、気になる事も

言っている。

「寧ろ、アリス。彼女を治せるのは、今は貴女しかない。貴女が求める物は、外では無く内に有るものよ」

「……今の状況を知ってるの？」

パチュリーは、私の右手を指さして言った。包帯の下に隠された令呪の存在を、あたかも知っているかの様に。

自分の名前を知られていた事、自分が身を投じている戦争の事、疑念の材料は愈々増していく。私の腰は椅子から浮いて——アーチャーに肩を押され、その事に初めて気が付いた。

「間違いなく、読んだ記憶が有るわ。だけど、『その記述がある本』を『入手した記憶』は無いのよ。……私自身、おかしな事を言っていると自覚は有る。

ああ、脱線はしないわ、自分で引き戻す。『聖杯戦争』に関する知識を、私が持っているかどうか……それが質問の趣旨よね」

「相変わらず自己完結が過ぎるぞ」

茶々を入れるアーチャーに、パチュリーはじつとりと湿って冷たい視線を送る。

「自己完結が魔術師の理想像よ。……端的に言うわ、『令呪で命じれば治る』わよ」  
重く苦しく発せられた言葉は、思つた以上に短かった。

「え？ それだけ？」

つい、聞き返してしまふ。命令すれば治るといふなら、そうしない理由はどこにも無いのだから。

数日間の危険に怯えるよりは、今すぐに令呪とやらを使ってアーチャーの回復を――

「――いや、そもそも」

そもそも、令呪とはなんだろう？

東風谷早苗――監督役と名乗ったあの女に、簡単な説明なら受けている。確か『サーヴァントへの絶対命令権にして、マスターの証』と、そんな言い方だった筈だ。

この言葉をそのまま受け取ると、令呪というものは『私から』『アーチャーへの』一方的な優越権に聞こえる。が、今の時点で私には、そんなものを使う予定が無い。

何せ私は、とりあえず生きてこの聖杯戦争を終わらせられれば、それ以外に望むものも無いからだ。

これがマスターの証だとは言うが、では無くなったらどうなるかは聞かされていない。そもそも、無くなって困るものなのか？

「パチュリー、これって使い捨てなの？」

「三回使えるお徳用。再利用の用途は立ってないわ」

「……意外に庶民派な発言ね」

「どうでもいいわ。令呪は三画を以て一つの凶柄を為す。一度の命令に一つを消費し、全て失ったら命令権が無くなるだけ。別にマスターの権限の剥奪とか、そういう事は無いらしいわよ」

なおさら、使う事に躊躇する必要が無い気がした。

それならばすぐにでもアーチャーを回復させ——それから霊夢に伝えて、セイバーも回復させればいい。私と霊夢を合わせて、命令権はまだ4つも残るのだから。

右手の甲から始まり、指に絡まる令呪を眺め、私は命を発しようとし——パチュリーの物言いたげな目に引き留められた。

「……駄目なの？」

「貴女次第だけど、もう少し考えてからでいいんでない？ その白黒が何を企んでるのか、分からない事なんだし」

彼女の目に促されるまま、アーチャーの呑気な顔を見た。企てを抱え込めるような、複雑な顔はしていなかった。

「サーヴァントとして呼び出される？ 私だったら死んでも嫌よ——死ななきや呼ばれないけど。誰かを主と仰いで、他の誰かと殺し合って、馬鹿馬鹿しい、徒労だわ。」

その白黒は喧しいし鬱陶しいし窃盗癖のある駄目人間だけど、ただの馬鹿じゃなかった。『余程の事』が無い限り、自分の自由意思を他人に——回数限定でも——預け渡

してまで、のこの墓から這い出す筈が無いのよ」

「おつ、お前に褒められてる。珍しいな」

「貶してるのよ。死んで喜ぶ馬鹿の頭には、ブックエンド程度の価値も無い」

仲の良いことだ——私は呆れ果てつつ、少し笑ってしまってもいた。

二人の声は、重なる事が無い。一人が確実に話し終わるまで、もう一人は相手の言葉を聞いている。拍子が狂わず続く掛け合いは、気心の知れた仲なのだろうと伺えて、内容の如何に関わらず心地良かった。

不思議な事だ。初対面の誰かと、出会って数日の誰かの会話を、ただ居合わせて聞いているだけなのに、退屈とは感じないのだ。やけに口に合う紅茶を飲みながら、零れる笑いは抑えきれずにいた。

「大体貴女は、不要な事に出向いて行くくせに、私の本は返しに来ようとしめない。優先順位がおかしいんじゃないかしら、全くアクティブな面倒くさがり屋め」

「勤勉な引き籠りとどつちが良いんだろうな。私は出かけてるんだから、お前も出てくれば良いだけじゃないか。移動距離が半分で済むぞ」

「盗人猛々しい。こんな事なら蔵書全てに、さかむけの呪いでも掛けておけば良かったわ」

「だけど——パチュリーの毒舌が生易しくなる程、私は彼女の事が分かってきた気がし

て、逆にアーチャーが分からなくなつて行く。目の前に居る魔法使い二人のうち、パチュリーは、かなり分かりやすい存在だ。

一見して分かる異質——住まう空間も雰囲気も、周囲に漂わせる小物に至るまで、常人とは異なると、全力で主張するかの様。けれどその実、内面は——こう言うのもなんだが、素直になれない子供の様だ。

最後まで徹底できない罵詈雑言と、その中に混じる旧友への愚痴と——それから、何か私には少しの善意と。魔女というには平凡な、ただの少女らしい感情だった。

翻つて——アーチャー、霧雨魔理沙は、至つて平凡な少女にしか見えない。

学生服を身に着けてしまえば、背が低いだけで、違和感なく周囲に溶け込んでしまう。ソファに寝転がつて新聞を読み、煎餅を齧り散らすのが良く似合う、少しがさつなだけの少女——少なくとも、外面は。

じゃあ、内面は？ 心の内に問いを作ると、答えが見つからない事に気付いた。

「ん。どうした、アリス？」

——私はやっぱり、こいつを良く知らない。

知識だけなら有る。霧雨魔理沙という人間が誰で、何をした人物なのかは知っていない。でも、彼女の人間性を何も知らない。

さっぱりと思いい切り良く、些細な事は気に掛けず——そんなものは表層的な部分でし

かない。肝要なのは、何故そういう傾向に至るのかだ。

博愛は八方への見得からも、また平等の無関心からも生まれ得る。心の発露の形状は、必ずしも一つとは限らない。何にも縛られない彼女の精神の在り様は、果たして何を支えに立つ物なのだろうか。令呪に束縛される身と堕ちて、彼女は何を思うのだろうか。

彼女は、霧雨魔理沙は何を望みとして、こうして地に立っているのだろうか——？

「……あら。貴女達、日が暮れる前の帰宅を勧めるわよ」

「え？ もう、そんな時間だったかしら……」

不意に投げつけられた声。窓の外を見ようとしたが、この空間から見えるのは水中の景色ばかり。

透明度の高い水は、まだまだ空からの光を通してている。

「いいえ。けれど、間に合わなくなるわ。小悪魔、アレを持ってきて。1号書架の4番目」

「はいっ！ ……長かったですねえ、しみじみ」

だがパチュリーは、思わせぶりな事を言いながら、赤毛の司書を走らせた。

「どうせまた、暫くは合わないでしょう。だから先に言っておく。」

魔法使いの行き着く先は、自身の昇華と保身の両立。だから私はまだ生きている、自

分で歩けなくなつてもね。

よ。その白黒だつて、大きく違えている筈じゃなかつた——けれど、無様にも死んだの

若さにも生にも価値を見出さなかつたそいつが、どうして貴女に膝を屈すると思えるかしら？

……分からないでしょうね、別に良いわよ。せいぜい二回目の死が、少しでも遠くなる様に働かせなさい」

きい、きい、と車輪が軋み、車椅子が図書館の奥へ消えて行く。パチュリーは再び、膝の本に視線を落とすと、それつきり言葉を発しなくなつた。

遠ざかつてしまえば、言い知れぬ威圧も感じない。ただ、ただ、小柄な少女だつた。

「貴女の知り合い、相当な難物ね」

「そう思うか？ 同感だな、全く変わつてないぜあいつは」

背後の扉は固く閉ざされている。長い長い階段を、私は汗をかきながら登つていた。

冬だろがなんだろうが、この運動量はインドア派に堪える。横のアーチャーがまるで平然としているのも、疲労感に拍車を掛けた。

「本当に、相変わらず物持ちの良い奴だ。見ろこれ、新品同様じゃないか」



アーチャーに疲労感が無いのは、もともと生物と呼んで良いのか分からない境遇だからというのもあるのだろうけど、やはり手にした一冊の書物が理由なのだろう。

見る限りでは、分厚い手帳の様に感じられる。少し品数の多い書店へ行けば、似たようなものが見つかる筈だ。

明確な違いと言えば、これは「数百年以上前の」書物だと言う事だろう。

「おー、懐かしいな、見ろよこれこれ！ 資料集めの筈が、気付いたら死霊を呼び集める羽目になっててさあ……——」

ばらばらと捲られるページ、その一つ一つから重厚な力を感じる。

当然だろう、これは「グリモワール魔術書」。

魔法使い霧雨魔理沙が、その術の粋を集めた——おそらくは現存する中で、最古の魔術書だ。

そも魔術師というものは、多かれ少なかれ知識を増やすことに喜びを感じ、そして他者には己の知識を秘するものである。

排他的な環境に居を構え、日夜己の研究に心を傾ける。

古い絵本に出てくるような、森の奥の小屋に潜み、大鍋で奇妙な薬草を煮詰める姿——あれは、那样的外れでも無い筈だ。

実際に私は、森の小屋で一人暮らしをしているし、薬草は使わないが人形の部品に囲

まれている。良く良く考えてみると、夜中に覗き込みたくない光景だと思う。

兎角、私達は新たな知識の獲得に努めるもののだが、誰かと共有できる機会は殆ど存在しないのだ。であれば、研究結果は特に念入りに、自分の為に記録しておくものだろう。

それがグリモワール。言うなれば魔術師の、生きる目的と生きてきた成果、全てを収めた書物。万金を積まれても売り渡せない、魂と同価かそれ以上の宝だ。

「そんなもの、良く残ってたわね……大概は散逸してると思ってたけど」

グリモワール・オブ・マリサ。

「魔術師の始祖」にして「最後の魔法使い」、霧雨魔理沙のグリモワール。許されるならば今すぐにでも、彼女の手から引っ手繰って読みたい様な代物だ。

驚いたのは、彼女が自分の死に備え、グリモワールを処分していなかった事だが——  
「残させたんだ、何時かまた使うかも知れなかったしな」

「え……生き返る前提だったの?」

「まさか。焼くのも勿体無いだろう?」

——この答えは、予想できていた。

彼女が語り継がれる存在となったのは、一重に「学問としての魔術の体系化」という功績によるのだから。

元来の魔法は、生来生まれ持つ素質に依存するか、或いは口頭による伝授が主であったという。魔法書というものも存在はしたが、それらはどちらかと言えば、一つ分野に対する論文の様な物だった。

即ち、「着火」の魔法に関する書物であれば、数百ページの全てを、単一の魔法の為に。深い理解の助けとはなるが、その一冊から魔法使いを志すのは、あまりに壁が高すぎた。

その有り方を変えたのが、霧雨魔理沙が書き記した、数冊の魔術書群だったという。一般的な魔法の基礎知識に加え、各種属性魔法の基本体型、物理法則に魔力干渉を行う事への注意喚起。自己に存在する魔力の発見と行使から、魔法使いになる為の体質改善方法——練習メニューや献立表に至るまで。多岐に渡る項目を纏めれば、この一言に尽きる。

即ち「やる気有る者が誰でも、そこそこの魔法使いになれる」本。魔法が不可思議な存在でなく、学問や武術と同系列の存在——「魔術」となったのは、この時からであるらしいのだ。

伝聞系ばかりになるのは、私もその時代に生きた訳ではないからだ。

古い建築物の地下だとか、その手の古書を扱う商人からだとか、回りくどい方法でかき集めた書物から——それらさえ、『幻想の幻想』より百年も後のものだったが——得

た、裏づけの無い知識に過ぎない。

それでも霧雨魔理沙の名前は、この時代にも僅かに残る、魔術を志すものであるならば、必ず知っている。アスクレピオスの杖が医術のシンボルである様に、彼女の名と黒い帽子は、魔術師のシンボルなのだ。

「で……ここへの用件って、それだったの？」

「ああ。正確には、こいつを使ってこれから始める、一連纏めてが目的だ」

閉架図書を完全に抜けて、雑談に花を咲かせる主婦達も横目に過ぎて、今は湖に掛かる橋の上。日は少し傾いているが、まだ明るい内に、市街地へは戻れる筈だ。

横を歩くアーチャーが、グリモワールのページをぱらぱらと捲る。身長差を利用して、肩の上から覗き込んでやると、丸っこい文字の走り書きが大量に踊っていた。

「……不思議なもんだよなあ、こいつは昔のまんまだ。霧の湖だって、地形も変わっちゃいないんだぜ」

「ええ。そんな古書が原型を保っているなんて、どういう術を使ったのかしら……冷凍保存？」

「違う違う違う。アリス、お前は何時も何かずれてるぞ」

私の言葉を笑って受け流しながら、アーチャーは手の中の書を——愛おしげに、とでも良いだろうか、眺めていた。

「グリモワールも湖も、空も山も変わらない。だけど、あいつは随分弱そうになっちゃまった——元々ひ弱な奴だけだな。」

皆、そんなもんだ。長生きしようがなんだろうが、死ぬ前は誰でも枯れ木みたいで、折れないだけが精いっぱいだった。

沢山の奴が死んだのを見てきたが……もつと沢山、私の後に死んだんだよなあ」

陽性の感情ばかり発している彼女の、情感籠った表情。あと一時間後に見たかった、変な事を思った。

だって、そうだろう。あと一時間もすれば、茜色の夕日が湖に反射する。森の木々を遠くに見ながら、照らし出される彼女の横顔はきつと——きつと、素晴らしく絵になった筈なのだから。

「アーチャー。貴女は、死にたくなかったの？」

「生きてりや死ぬんだ、仕方が無い。誰だって同じじゃないか。」

ただ——仕方が無いんだったら、悲しいのだって仕方が無い。だろ？」  
だから、彼女の目の縁の涙を、私は拭ってやりたいと思わなかった。

気付かない振りをして、ちよつとだけ眺めて——後は黙って、街までの帰路を歩いた。積もった雪も、道路沿いに歩く分には邪魔にならない。少し遠回りして、ゆっくり帰りたいたいと思った。

「……ん？ おい、アリス」

「どうしたの？」

——往々にして、些細な願いは叶わないものらしい。

「霊夢に張り付かせてた『テストスレイブ ver 4.9.102』がおかしい。何か……強力な魔力源に近づいてるような……？」

「何よそれ、面倒くさい名前——ちよっと待った。強力な、魔力源っていうと」

何時の間に施したものでしょうか。アーチャーは同盟相手である霊夢をさえ、使い魔で監視していたらしい。

遠隔からタイムラグ無く、主人に各種の情報を伝達する使い魔——驚くのも飽きてきた頃合いだが、少なくとも私には到底作れそうもない。

だが重要な事は、アーチャーの技量の再確認よりも、私にさえ伝えず霊夢を監視していた事よりも——この街に存在する魔力源など、何種類あるかという事だった。

「ああ、サーヴァントだ。器用に気配を消してる……セイバー、気付いてるんだろうな……？」

果たしてアーチャーは、思案さえせず断言した。

霊夢は早々に帰宅したのではなかったか——そう本人に聞いていた上に、最優たるセイバーの存在。彼女達への心配など抱いていなかったが、然し思えば彼女達も私達同

様、万全とは言い難い状況なのだ。

「アーチャー、飛べる？　遠すぎる、急ぎたいわ」

市街地まで、歩けばおそらく30分以上。全力で走り続けるのは、雪道と私の体力を考えると不可能だ。

それをアーチャーも理解していたものだろう。既に箒を魔力形成し、私がまたがるスペースを用意している。

「遮蔽、暴風、対加速。使う魔力は大量だ、いざとなったら覚悟してくれよ」

「構わないわ、途中で落ちないなら」

「そいつは簡単だな、行くぞー！」

地を蹴る音は、小さく軽い。

全身に加速度を感じながら、アーチャーの駆る箒は上昇する。私は、自分の手が透明化し、西日を透かすのを見ていた。

空の茜は——血の色に似てるな、なんて感じていた。

## 五日目、放課後——ステンドグラス

「位置について、よーい！」

スターターを掲げ、引き金を引く。撃鉄は雷管紙を叩き、高らかな破裂音を響かせる。100mの全天候トラックは、丁寧に雪掻きが施され、陸上部員達の足を妨げなかった。気温は5℃にも満たないが、100mを走り終えて戻ってくる者達は、誰もが汗を流している。たとえ半袖を着ていたとて、彼等が寒さを感じる事は無いだろう。

が——たった一人、号令係を任された博麗霊夢だけは、長袖の中に手を引つ込めていた。

「つたく、自然の摂理に反しすぎよ」

「今時、冬眠なんて流行りませんよ」

種族のアイデンティティを投げ捨てて、リグル・ナイトバグは白い息を吐いた。

短髪の襟足まで汗に濡らした姿は、とても虫の妖怪には思えないほど、冬を満喫しているように見える。

「あんたらの体は流行り廃りに流されるの？」

「虫は誰より早耳なんです。だってどこにでも居ますから」



快活な物言いにも、霊夢はじっとりとした視線を返す。昆虫が冬に活動するのは、あまり望ましいものではないと思っっているからだ。

大体にして生物は、その本来の有り方に従うべきだろう。尤も現代で、冬眠する種族など居れば、社会の変遷に追い付くのも難しいだろうが。

「はあ……長期休暇を求めるデモは？」

「女王権限で押し潰します」

「とんだブラック企業ね。あんたは経営者に向いてるんじゃないの」

短距離練習のメニューの合間、霊夢はリグルを捕まえて、取り留めも無い話を続けた。

が——無為に時間を潰している訳では、勿論無い。

「……しっかしあんたら、この寒いのに良くやるわね。わたしや風邪が怖いわ」

「先輩も走りましょうよ。生まれれば大丈夫ですって」

「そうは言うけどねえ、最近は酷いでしょ？ 街の方なんかじゃ、数日寝込むような風邪だって流行ってるそうじゃない。」

椀に聞いたわよ、あんたがなんか聞き付けてきたって。早耳のくせに、どうして私に言わないのよ」

昼休みに拾った情報、真偽は定かならずとも、だったら入手元に直接問いただせば良

い。

安直な思考ではあるが、そもそも駆け引きを行使する様な相手では無く——

「……言う機会が無かったのは誰のせいでしたっけ？」

——実際に、答えは直ぐに返ってくるのであった。

「最近ですねー、朝に行っても夜に行っても、なんだか留守が多いですからねー。こそこそ夜遊びしてる誰かさんのせいで、私がお知らせできないのは不可抗力では無いかと」「皮肉にしてはストレートすぎると思う……いや、ごめんって」

早朝から起こしに來たり、夕食の時間に上り込んで來たり。そんな生活が普通になる程、リグル・ナイトバグと博麗靈夢の付き合いは長い。

靈夢の側としては、特別に何か、親しくなる様な出来事が有ったとは思っていないのだが——別に関係を断つ理由も無かったので、そのまま付き合っていた、それくらいの関係であつた。

「もう……次は本当に怒りますよ？ それで、その話ですけど——」

「はいはい……」

然しながら、靈夢も愚かでは無い。自分が認識していた距離感は、飽く迄自分だけの認識だと、何時頃からか気付いていた。

気付きつつも、殊更に取り上げて今の関係を崩す事もなかうと、何も言わずに居た

のだ。

今必要なのは、疑心を解決する事である。

「——とまあ、そういう話なんで……あ、ちよつと走つてきます」

霊夢が話を途中まで聞いた所で、リグルは練習に戻つていく。その内容を整理すると——整理する程の事も無かつた。

椛が聞いてきたその通り、古明地さとりが夜の街を歩いていて、後をつけた三人ほどが風邪で寝込んだ。

何も事件性は無い。因果関係さえ見いだせない事実だが、霊夢はどうにも気になって仕方が無かつたのだ。

トラックを走る陸上部員達を横目に、霊夢は思考を巡らせる。

椛が「又聞き」と言つたのだから、リグル自身もまた別な誰かから聞いたのだろう、とは分かる。

では、その誰かは、何故に古明地さとの動向を気に掛けていたのだろうか？

目立つ事無く、静かに暮らしている彼女を気に掛けるのは——友人のにとりか、或いは今の自分くらいでは無いかと、霊夢は思つていた。それだけに、動向を探るのに難儀するかも思つていたので、寧ろ噂を聞いた事自体に驚いた程だ。

単純に考えて、その「誰か」は——まだ見ぬマスターの可能性もある。

夜間に市街地を歩き、古明地さどりの後をつける——意味を見出すとしたら、そんな所だろう。

勿論、偶然に出くわしたただけだったり、或いは個人的なストーリーカードという可能性もあるが——当たって見るだけなら損は無い。

「あー、さぶい……どつこいしよ」

長距離の練習メニューであれば、暫くは走り続けるのだろう。少しでも風の弱い所へと、霊夢が歩き始めた——その時、悲鳴が聞こえた。短く、直ぐに消える様な声ではあったが。

「……？」

咄嗟に振り向いたが、セイバーがのんびり構えている以上、大事とも思えない。声のした方へ眼を向けると、雪の上に、陸上部の一人が倒れていた。

「あーらら。セイバー、何か有った？」

「貧血ではないかしら、さつきから青白い顔をしてたもの。あの魔法陣とは関係ないわ、ご安心あそばせ」

「そ、なら良いわ……っつていや、良くないわよ」

わつ、と校庭中に散らばった陸上部員達が、一斉に倒れた部員に近づいて行く。

自分は部外者だという事も有り、霊夢は遠くから眺めるだけに留めたが——問題は、

人の流れの中に、リグルも混ざっていた事だ。

詳しく話を聞こうにも、この状況で割り込んでいける程、無神経では居られない。案の定、リグルは倒れた部員を担いで、保健室まで運んで行ってしまった。

「どうしたもんかしらねえ」

「どうしましょうかしらねえ。打つ手がないのなら、私の案を聞いて欲しいのだけど」

「……ん？」

最初の案が破れ、溜息を吐いていた霊夢に、霊体化していたセイバーが呼び掛けた。

霊夢は陸上部倉庫に、手にしていたスターターを片づけてから、適当な物陰に移動する。

「聞いてあげようじゃないの、話しなさいよ」

「光荣ですわ……実は、授業の合間に職員室に忍び込んできてね」

「あんたは忍ばなくてもいいじゃないの」

「手を使う必要があったからね……はい、これ」

ひらり、一枚の紙を、セイバーが取り出す。それに目を通すと——こまごまとした文字列がぎつしり並んでいた。

「……住所録？」

「原本じゃないけどね。一部だけ印刷して持ってきたのよ——1年生のB組の」

そこまで聞いた瞬間、霊夢はセイバーの手から、住所録を引つ手繰っていた。

「ページに纏められた文字列は、目こそ疲れるものの、すぐに答えを見つけられた。

「やるわね、セイバー。古明地さとの住所、確かに載ってるわよ」

「お褒めに預かり光栄ですわ。で、住所の地名に見覚えは？」

「あるわ。昨日の夜、確かに見た覚えがね」

静かな住宅街の一角、面白みは無いが住むには良い場所——物静かな彼女が暮らすのには、確かに似合いの場所だ。

だが肝心なのは、彼女が相応しい環境で生活している事ではない。

昨夜、霊夢は地図の上で、この住所の近辺を見たばかりだ。謎の体調不良を赤い点で記し、線で繋いだ結果炙り出されたポイント——即ち、アサシン陣営が潜伏しているだろう範囲。古明地さとの住所は、それに完全に合致していた。

「……どうする？ マスターは貴女、従うわ」

「行きましよう。あれが相手なら、今のセイバーでも十分に勝てるわよ。暫くは温存し  
といて」

「仰せのままに」

セイバーは再び霊体化し、霊夢はマフラーを翻す。学校から目的の住宅地まで、走れば20分も掛からないのだ。

周囲より僅かに高くなった土地、新築ばかりの洋風住宅街。改札を見ながら歩けば、目的の家は直ぐに見つかった。

他の家と形状はほぼ同じ。数件纏めて立て、安く売ったのだろうと邪推もしたくなるが――

「嫌な雰囲気ね。どう思う?」

「私からすると、住み心地が良さそうに見えますわ。使用人が居ればと条件付きで」

――古明地の表札が掛けられた家は、他のどの家よりも暗かった。

まだ日中であり、窓から明かりが零れていないのは納得が行く。だが、その窓が丁寧に、目張りされているのは、霊夢の理解の及ばない所である。

向こう側から新聞紙を貼り付けられ、隙間は完全にガムテープで塞がれ、きつと日光は侵入出来ないだろう。人が住まうには、些かならず心地悪い空間の筈だ。

漂う空気も、不純。小さな羽虫が近づいてきては、家の壁に触れる前に、くるりと向きを変えて逃げていく。

「サーヴァントの気配は?」

「何も。暗殺者<sup>アサシン</sup>が相手では、信用し切れないけれど」

既にセイバーは実体化し、周囲に目を光らせている。今のセイバーの隙を突くなど、あの黒い影のサーヴァントでも難しいだろう。

霊夢もまた、制服の懐に右手を差し入れ、何枚かのお札を掴む。いざ有事となれば、咄嗟に対衝撃の結界を張れるだけの術を組み込んだ札だ。セイバーの守りと比べれば気休めの様なものだが、自衛の手段が有る事は、霊夢を深く安心させた。

玄関の扉を押し開ける。鍵は掛かっておらず、踏み入ってみれば、玄関口には靴が二足。どちらも、土埃の着いた靴だった。

暗い家の中だが、廊下の奥に、少しばかり明るい部屋が見える。それも、太陽の光では無く、恐らくは蛍光灯の、人工の灯りだ。

土足のままで上り込み、がさり、がさり、荒い足音を立てて歩く。部屋に居る誰かは、きつともう気付いているだろう。

構わず、霊夢は歩く。寧ろ、私は此処に居ると宣言せんがばかりに。

「セイバー、用意を」

「イエス、マイマスター」

抜刀。白刃が鞘を削る、耳障りな摩擦音。室内の温度が、数度も下がった様に感じられた。

いや——本当に、下がっているのかも知れなかった。顕現するだけで大気を冷え込ま



せる程度、もはや不思議にもならないのだから。

セイバーは普段のドレス姿に、初めて現界した時と同じ、白銀の戦装束を纏っていた。小手、具足、胴当て、兜、吊るされるだけの空の鞘。尤も、鞘はそれ以外にも二つある。白刃はセイバーの両手に抜かれているので、合計で三つの鞘を携え、彼女は歩いていった。……落ち着いてるわね、霊夢。おかしいとは思わないの?」

「静かすぎるし、奇襲もされない。おかしいって言えばおかしいわね」  
「いいえ、そこじゃあないわ」

隙間から光を覗かせるドア——その前に立ち、セイバーは霊夢へ振り返る。

「古明地こいしの事を、霊夢はどれくらい知ってる?」

「さあ……気味の悪い子供だとしか知らないわ」

「じゃあ、古明地さとの事は?」

「同級生の友人である後輩。ちっこい。それくらいしか知らないわ」

唐突な問いだと、霊夢は怪訝な顔をした。

「……古明地こいしは、やりすぎた。必然よ」

だが——利発な霊夢は、直ぐに問いの意図を理解した。

セイバーがおかしいと言ったのは、この家の事でも、また家の主達の事でも無く——  
ほかならぬ主、博麗霊夢に対してだったのだ。

「まだ、死人は出てない筈よね」

「時間の問題よ」

「かも知れないわね。けれど霊夢、私が刃を抜いて立っているのは、生け捕りにする為ではないのよ」

セイバーの表情から色が抜け落ちた。成人らしからぬ大きな目の光は、底に狂気さえ孕んで見える。

言わんとする所は分かっていると、霊夢は小さく頷いただけだった。

だが、それだけで十分に、セイバーは困惑した。人知を超えた英霊をして、霊夢の答えは、遠く理解の外に有ったからだ。

「霊夢、貴女はこの戦争に、自分の欲求を傾けてはいない筈。欲も無く憎しみも無く、貴女は誰かを殺せるというの？」

「殺すつもりは——」

「無い、とは言えないわね。だって私を、戦う為に呼ばれた私を、こうして随伴しているんだもの。貴女は良く知らない誰かを、大きな感情の揺れも無しに、あっさり殺そうと企んでいるんだわ。」

ええ、珍しくは無いわ。きつと私だってそうできるし、魔理沙も——アーチャーも、必要ならばやってのけるでしょう。けれど霊夢、貴女は——今の博麗霊夢は、唯の女学生

ではなかったの？」

平和な時代に、呼び出された筈。それがセイバーの困惑の主因であった。

皮肉にも、死が遠ざかれれば遠ざかる程、人の命は重くなる。死を実感できぬ時代に合つて、人の死は敬遠すべきものだ。

博麗霊夢は——誰かの死を、全く許容していた。

「……だから、殺すつもりはないわ。ただ、あんたがあいつらを殺しても、私は文句を言わない。

今は良いわ。アーチャーの言う事を信じるなら、あの術を発動されたが最後、何人かは死ぬでしょう。何千人かが死ぬかも知れないでしょう？」

だったら一人——いや、二人くらい死なせたつていいのよ、きつと」

いや、違う。

霊夢は、無為の死を許容などしない。但しその精神は、飽く迄も「多数」——「日常」の構成要素だけに向けられているのだ。

即ち、数千の人命の為に、二つの命を踏みにじる事を、正しいと信じて疑わない——そういう精神の持ち主が、彼女なのだ。

それは、きつと数字の上では、正しい事に違いないのだ。

善良な数千と、悪意ある1。何れを切り捨てて何れを生かすべきかなど、議論は既に

尽くされて、もはや答えは決まっている。

だが、その正しさを「行使する」など、誰が望むだろうか？

望まない。善を為さんとする者が、例え1の命であろうと、切り捨てる事を嘆かぬ道理は無い。

つまり博麗霊夢は、善く有ろうとする者では無いのだ。

「おしゃべりは終わり、向こうも待ちくたびれてるでしょ。行きましようセイバー、まずは一組目よ」

動かず——動けずにいたセイバーの隣に立ち、霊夢はドアを足で押し開けた。

暗く、寒い部屋だった。

灯りの無い小さな部屋には、家具は僅かに三つだけ。

丸い机に椅子が二つ、後は家庭ごみが無造作に散らばる床。夜とも紛う黒の中——  
「……霊夢先輩、チャイムは鳴らしてくれませんか？」

「あつ、お姉ちゃん！ 私、私、覚えてる？ 忘れた？ 忘れちゃった？ 遊びに来たんだ！」

古明地さとの眠たげな目が、古明地こいしの壊れた瞳が、霊夢を見上げて浮かんでいた。

## 五日目、放課後——ハルピユイアの止まり木

「土足ですか、屋内ですよ」

「洋風建築だし多目に見てよ、あんたの友人の同級生なんだし」

「繋がりが浅すぎると、そうは思いませんか？ 情状酌量の余地は無いですね」

古明地さとりは椅子に腰掛け、悠々と構えていた。

呆れる程の胆力だと、霊夢は感じた。刀を二振りも構えた不審者に、突然家に上り込まれ、こうも平然としているのだから。

テーブルの上の小さい盆に、クッキーが何枚か並んでいる。その内の一枚をつまみ、口へ運び——年齢からは想像も出来ない、奇妙な貫禄を、さとりは見せつけていた。

「……それで、用件は？ まさか白昼堂々、盗人の真似も無いでしょう」

「私に会いに来たんだよね？ お姉ちゃんたち？」

一方で古明地こいしは、床にぺたりと、脚を開いて座っていた。

霊夢の顔を見るや、丸い目を更に見開き立ち上がり——セイバーを見て、僅かに眉を動かす。然し、結局は白い顔に、底抜けの明るい笑顔を浮かべたままだ。

鏢の広い帽子を被って、薄暗い部屋に居て——だが、彼女の口は赤々と、裂けた様な

笑みを見せている。口の周りについているのは、さとりがつまんでいるのと同じクッキーの食べかすだろう。

「そう、あんたによ。ただ……さとり、どういうつもり？」

「どういうつもり、とは？」

さとりが椅子から立ち上がる。霊夢は軽く身構えたが、セイバーは動こうとしなかった。実際、さとりは荒事に出ようとした訳ではなく、台所へ向かおうとしただけだった。「あんた、一人暮らしだつて言つてたじゃない。つまらない嘘を吐いて、何人を殺すつもり？」

「私の家族構成を、先輩に教える必要はないじゃないですか……仰る意味が分かりませんよ」

「とぼけないで」

その背を追い掛け、霊夢も歩く。

流し台には、現れていない皿が、幾つも幾つも重ねられている。何枚かの皿には罅が入り、今にも砕けて散りそうだ。蛇口を最大に開くと、水が平らな皿に打ち付けられ、ぱしゃぱしゃと飛沫を上げた。

跳ね上がる水をコップに受けて、さとりはぐいと飲み干す。それから、振り向きもせず、霊夢に言った。

「とぼけてなんていませんよ。私ほど無害な学生はいません。……にとり先輩に対しては例外ですが。私が誰かを殺すなんてこと——」

「知らないなんて、言うんじゃないわよね？」

「——ええ、まあ」

続けてさとりは、コップに水を満たし、霊夢についと差し出した。霊夢はそれを受け取って、その場でコップをひっくり返す。水が床を濡らしたが、さとりは表情も変えずに眺めるばかりだった。

「……妹のしている事くらい、姉は理解しているものですよ。けれど、あれこれ口出しする事でも無いでしょう？」

私は妹の自由を尊重します。それがどういう結果を齎そうと、私には関係ない」

「大した身勝手じゃないの。それじゃ、あんたの——妹？ そいつがやつてる事の意味も、十分に理解してらるって事よね」

流し場の直ぐ下、棚を開ければ、戸の裏側には包丁置き。そこから一本、霊夢は無作為に引き抜いた。

選んだのは肉切包丁、使われた形跡は薄く、刃毀れ一つ無い。鋭利な切っ先は冷たく白く——すうと、さとりの首に向けられた。

「強盗の真似事ですか、霊夢先輩？」

「あんたの妹を止めて、サーヴァントを自害させなさい。そしたら素直に帰ってあげる」  
「嫌だと言つたら?」

霊夢が一步、足を踏み出す。きっかり歩幅と同じ分だけ、包丁の切っ先がさとりに近づく。

言葉による答えは不要。霊夢の目に温情は無く、否を通せば刺すと、視線で雄弁に語っていた。

「……『博麗の巫女』でしたね、そういえば」

「異変は早急に解決する。人妖を問わず、異変の原因は断つ。あんたが余計な事をしなきゃ、あんたは無事に居られるのよ」

「つまり、自分の為にこいしの自由を奪えと、先輩はそういうんですね?」

「安い買い物じゃないの」

もう一步。更に切っ先が、さとりの喉に近づく。

細く白い首。掴めば容易く押し折れそうな、野菊の茎の様な首。その皮膚を掠めるまで近づいた包丁の背を、さとりに劣らず白い手が掴んだ。

古明地こいしの、小さな手だった。

「もー、お姉ちゃん、遊ぶのは私! 怒っちゃうよ? 私、本当だよ? 本当に怒っちゃうよ!」



「……いいや、あんたじゃないわ」

霊夢は己の手に、恐ろしい程の重さを感じていた。

僅か数センチを進めるだけで、肉を貫くだろう包丁の刃。それが、柄にいくら力を込めても、僅かにも進まないのだ。

然し、その事に、何の違和感も抱かなかつた——抱けなかつた。

「ん？ 私じゃないのー？ だってだって、お姉ちゃん、私のサーヴアントが邪魔なんやしよ？」

「ええ、邪魔ね。だからさっさと消えて貰いたい、その為に来たのよ。だけど……あんた達、これはどういう事？」

霊夢の問いは、具体性を欠いていた。

包丁を持つ手の力を抜くと、こいしも刃から手を放す。霊夢が一步引き下がれば、こいしは、さとりと霊夢の間に割り込んで——その正面に、セイバーが向かい合った。

「霊夢。貴女が前に出る事は無いわ……こんな陰気な場所では。」

貴女の考えは良く分かる。けれど、古明地さとりはもう、貴女の「日常」の一部では無いのよ」

「そうですね、何を今更。私は出来る限り、静かに暮らしていた筈ですから。」

親も親戚も誰もいない。友人だって作らない。ただ、妹と——こいしと二人で、平穩

な暮らしが出来れば良い。

そこに霊夢先輩は要らない、割り込む場所は無いです。だからもう、帰ってください  
い」

「うん、うん。だよね、お姉ちゃん！ 私にはお姉ちゃんだけ居ればいいの、ねっ！」

さとりは、自分の前に立ちはだかるこいしを、逆に自分の背後に庇おうとした。

然し、こいしは両手を広げて動かない。あたかも自分は壁であり、さとりを守るものだと主張する様に。

「だから、えーと……霊夢さんと、そっちのサーヴァントさん。今日はもう、バイバイしようよ！」

お姉ちゃんが居るんだもん、私だってそっちだって、一杯遊んじや駄目でしょ？

そんな事、本当は霊夢さんだってしたくないって、きつとそう思ってるよね？」

奇妙だった——保護者の如き口振りで守られるさとりが。狂気を「演じる」声が、次第に明朗に成り行くこいしが。

姉妹は何れも、己の有り方から離れて壊れ始め、そして二人で均整を取り続けていた。

「……あんたの言う通りよ、悔しいけどね」

「じゃあ、今日はこれまでにして——」

「いいや、そうはいかないわ」

古明地こいしの言葉は——靈夢の真意の一点を、正しく突いていた。

靈夢の生活に、古明地さとりという妖怪の存在は、殆ど影響を及ぼさない。だが彼女は、同級生の友人である。

発明癖が祟り、興味本位の接触は有れど、友人という友人は少ない河城にとり。その近くに何時も立つ、小柄で淡々として辛辣な、少し生意気な所のある後輩。決して、嫌いではなかった。

叶うならば靈夢は、彼女を無事に退場させたかった——偽らぬ本心である。

「『私』の考えなんてどうでもいいでしょ？ 必要なのは、『病結界異変』を迅速に解決する事。」

その為だったら、犯人を「匿う」「奴の一人や二人、死なせたって構わない」然し一方で、靈夢は「博麗の巫女」である。

人の仇、全ての人妖と対峙し、全ての異変を解決する。そこに一切の例外は無く、そこに一辺の慈悲も無い。

幻想郷のシステムとして、靈夢は自分を認識し、駆動させている。行動理念に感情など、無用の長物でしかない——筈、なのだ。

「……………いいし、それに靈夢先輩？ 何の話をしてるんですか？ その人、何とか言っ

……………」

いつしか、こいしの顔から笑顔が消えていた。さとりは不安げな——年よりも更に幼く見える——表情で、居合わせた三人の顔をかわるがわる見ていた。

「お姉ちゃんを苛めないで、帰って！」

こいしは、小さな手足を精一杯に広げ、さとりの体を僅かにでも隠そうとするかの様に立つ。

丸く大きな瞳に、既に狂気は感じられない。浮かぶのは理知と、溢れんばかりの怒りである。

「いいえ、帰らないわ。……さとり、そいつに言いなさい！ あんたにサーヴァントなんか要らないって！」

「霊夢！ 躊躇わないで、早く！」

怒鳴る様に——或いは懇願する様に、霊夢が叫んだ。

こいしと睨み合いながら、霊夢を背に庇いながら、セイバーが行動を促した。

「……………え？ え、えと。え……………？ あの、霊夢先輩……………？」

「良いからさっさと！ サーヴァントを捨てて、聖杯戦争から手を引かせなさい！」

そうしたら命は助けてやるって言ってんのよ！」

「霊夢！」

流し台に積まれた皿が、騒音を上げて碎ける。戦闘態勢に入ったセイバーの、抑えきれず溢れた僅かな魔力が、物的な衝撃となって周囲を叩いたのだ。

家鳴りがぎいぎいと喧しい。だが、誰もその音に、耳を貸すなどしなかった。

「……やだ。やだ、この子は——こいしは、もう我慢なんて、しなくても」

「分からず屋……！　古明地こいし」なんて、どこにもいないのよつー」

霊夢の手から、包丁が放たれた。

刃を先に、真つ直ぐに。十分な速度を以て——こいしの顔面へと。

こいしが避ければ、さとりが刃の餌食になる。いや、そもそも——3mも無い距離からの投擲だ、近すぎる。

頭蓋の強度が有れば、致命傷にはならないだろうか？　いや、眼球から脳にまで届けば、死に至らしめる事は容易い筈だ。

「……言つたな、お前は」

包丁の刃は、こいしの小さな手に握り砕かれ”た。

飛来する刃を掴みとり、金属の刀身を素手で握り、造作も無く砕く。

常軌を逸した技——いや、力だった。とても、小柄な少女がやってのける事では無かった。

——こいしの声には、並みならぬ憎悪が込められていた。

「……こいし？ 駄目じゃない、そんな事しちや……手が、手が、ああ、なんで」

古明地さとりは、白い顔を更に青白く染め、幽鬼の如き様であった。

“こいし”の手を取り、そこに傷が無い事を見て取り——怯え、震える。

「ねえ、なんで、こんな事しちや——こいし、貴女はなんで、」

気付いてはならぬ事であった。

何れは気付いてしまう事であった。

気付かぬ様にカーテンを閉ざし、光から逃れて暮らしても——窓から差し込む光は、無情に鏡像を映す。

砕け散った刃の破片に、映った顔は酷く臆病そうで——

「何処、なの？」

いない。いなくなってしまった。

「あの子は、何処？」

いる。今もその瞳は、泣き出しそうな顔を見つめている。

「こいしは、何処にいったの……？」

——“古明地こいし”は“どこにもいない”。

人の悪意は、何時の世も変わらない。

数千年前も、数百年前も。きつと数百年後も、数千年後もそうだろう。

些細な欲望を堪え切れず、他者を虐げて己を満たす。つまるところ、それが進歩の原動力でもあったのだから。

だが——欲望の発露は、一つの形で留まらない。

人は所詮、自分の常識から大きく外れた発想を生み出せない。

だから、他者に触れぬ人間の欲望は、些細なこじんまりとしたものとなるのだ。

然し、知識は伝播する。

言葉に乗って、紙に乗って、電波に乗って、人の欲望の形は流布される。

それは例えば、文学という形式であったり、劇画という形式であったり、映画という形式であったり——

何れにせよ人間は、己の到底思いつかぬ欲の形に、容易く触れられる様になったのだ。

古明地さと、古明地こいし——彼女達二人は、他者の思考を読む事が出来た。

飽く迄も見えるのは、その瞬間の思考のみ。然し、心の内の声を、余さず聞き取る事

が出来たのだ。

ならば——必然、無数の悪意からも、目を逸らす事は出来ない。

聞くまいと思えども聞こえてくる。後ろを歩く誰かが、隣に座る誰かが、何を考えているのか。

単純な害意であれば、身を守れば良いだけ、寧ろ気楽であった。

彼女達が苦しんだのは、“理性で押さえようとしている”悪意だったのだから。

理由も無く殴りたい、殴つてはいけない。言葉の限りに詰りたい、そんな事をしてはいけない。

蹴り、踏みつけ、踏みにじりたい。そんな事をしてはいけない。いけないけれど、檻褻切れの様に扱いたい。

あの首を絞めたらどんな顔をするだろう。あの腹の中に詰まっているのは、赤い臓器かそれとも黒いのか。

小さな手足、細い体。組み伏せればどうにでも出来るだろう。そうだ、何時でもそう出来る。

してはいけない。でもそうしたい。すれば犯罪だ。犯罪じゃなければ。ばれなければ。でも止めておこう。

〇〇したい。〇〇に〇を開け、思うが俣に〇〇したい。〇を〇〇〇とし、その〇で〇



○したい。

二人は日夜、方向性さえ定まらぬ悪意の渦に、心を削られていた。

そして——古明地こいしは少しだけ、姉より心が弱かった。

他者への無関心を貫ける程、一人でいる事に慣れていなかった。

誰かに嫌われていても、笑っていられる程の逞しさが無かった。

自分に向けられた悪意の渦を、乗り切るだけの力が無かった。

古明地さとのりに心に、鮮明に焼きついた一つの光景。

洗面所から廊下を通り、階段を上り、二人の寝室まで、刷毛で広げたかの如く続いた  
血痕。

ベッドの上でこの上なく幸せそうに息絶えていた妹を、その手に握られた彼女自身の  
眼球を——

「あ、あああ、ああああ……！」

壊れてしまった。

家庭も、幸せも、そして心も。

「あああああああ、あ、嘘よ、そんな……私が、嘘、いや」

それを、取り戻したかった。

たったそれだけの願いは——もう、思い出せない。

「いや、嫌だ嫌だ嫌だ、やだ……そんなの、やだあつ!! ああああ、あああああああああつ!!」

泣き狂いながら、さとりは何故か笑っていた。

窓ガラスに映った自分の顔が、誰よりも愛した妹に良く似ていたからだった。

「……セイバー、ごめん、お願い」

「仰せの俣に、マスター」

霊夢はもはや、〃古明地さとり〃と言葉を交わす事など出来ないと知った。

ここに居るのは——もはやさとりでもこいしでもない。人格さえ入り混じった、壊れた妖怪である。

セイバーは殊更に無表情を繕い、二刀を振りかざした。

ギン、と鋭い音は、その刀が受け止められた証拠。

〃こいし〃は——いや、暗殺者アサシンは己の本性、瘦せた女の姿に戻っていた。

両手に掴むのは、杭にも似た短い金属。二対一組の凶器は、セイバーの一撃を防いで、損傷は見られない。

腕は衝撃に痺れている筈だが——目に浮かぶ怨念の濃さは、如何なる凶器よりも強

く、セイバーの足を止めた。

「ああ、こいし、ああ……そうだ、私は……！」

「マスター……— さとり！ 何も思わない、忘れな！ そりやあたしらは……ずっと、続けていけるんだ！」

泣き喚きながら、さとりは少しずつ、己の目的を思い出していく。

そうだ、彼女が聖杯戦争に身を投じたのは、妹の幻影と『家族ごっこ』をする為ではない。

例えばアサシンが、さとの幸福はこれだと信じようと、さとり自身はそう考えない。

霊夢は、左手の甲に熱を感じた。

マスター同士が近づけば発する、疼きの様な感覚——それが、一際強くなった。

直感的に霊夢は、セイバーの後ろに完全に隠れ、自分自身の周囲に結界を張り巡らせた。

簡易な防御結界——サーヴァントの攻撃に対しては、如何程の効果も無いかも知れないが。

さとの両目に浮かび上がる赤い文様——鋭角的な花卉の如き形状、それぞれに一画ずつ。

残る一画は何処に現れたものか、それは霊夢の知る所では無かったが——

——古明地さとりは、己の両手で持って、二つの眼球を抉り出した。

「つ、マスター、何やってんのさあ!？」

「アサシン……令呪を以て命ずる……!」

“法具を開帳し”

“私を連れて巢へ潜れ”

……さあ!」

言葉が途切れるか否かの折に、セイバーが指示を待たず飛び出した。

彼女が振るう二つの刀は、内側からガラス窓を破る程の衝撃を以て、アサシンの体に——背から出現した四つの脚に叩き付けられた。

本来の力の差であれば、一撃で肉片にも成りかねぬ程の斬。受け止めたは令呪の力と、アサシンの本質たる“異形”の怪力が為。

「……お前が、お前達が悪いんだ! あたしはこのままでも……悪くないと、そう思ってたんだ!」なの……!」

アサシンの魔力が——魔術を用いぬサーヴァントでありながら、如何なる魔術師にも備え得ぬ程に、力が膨れ上がる。

圧倒的な暴を身に纏って、だがアサシンは悲痛に叫び、床に手を触れさせた。

十指の内、両手の親指を除いた八本から、床を這って広がる魔力の糸。拡散速度は恐らく、音を超える。

「逆らえない、もう止められない……呪うぞ、地上の人間。呪うぞ、博麗の巫女!」

伝承の具現——宝具。今こそその真名が、令呪という最大のブーストを受けて解き放たれる。

『瘴<sup>ゲ</sup>気<sup>エン</sup>満<sup>ナ</sup>つ——大<sup>フィルドミア</sup>窯<sup>アズマ</sup>の底!!』

臓腑を溶かす蜘蛛の毒が、獲物を喰らわんと蠢き始めた。

## 五日目、放課後——Loreley

初めて遭遇した時から、分かっていた事だった。

古明治こいしと名乗る少女が、本当は誰なのか。何者であり、普段は何をしていて、そして何処へ住んでいるのか。

霊夢はそれを知って、敢えて先手を取らず、正体を確かめに踏み込んだ。

「……愚策だった……！」

否にして、然り。

確かに同じ顔に同じ声。言動にまるで差異はあれど、その姿を下級生の古明地さとりと結びつける事は、霊夢にとつて難しくなかつた筈だ。交渉のそぶりも見せず強襲すれば、或いは宝具の発動を許す事無く、仕留められたかも知れない。

だが——誰が、そう出来ただろうか。

後輩に。同級生の友人に。同じ学び舎に通う、小柄な女学生に。敵 〃かもしれない 〃  
というだけで、斬殺の命を下せただろうか？

先に手を打っていればと、霊夢は悔やんだ。殺していればとは思わない、思えない。  
この寸拍、その発想にさえ至らなかつた。

「りやあああつ!!」

セイバーが今一度、斬撃を放つ。刃は届かない——黒谷ヤマメはさとりを抱えて、天井に張り付き難を逃れた。

枯れ木の如き病弱な四肢——対照的に分厚い甲殻を備えた、背より伸びる四つの脚。先端に備えた爪は、自重の数十倍を吊り支える鋼にして——“病”<sup>やまい</sup>の様を示す宝具。

マスターを腕に抱えたまま、ヤマメは天井に溶けて消える。戸の隙間から病毒が忍び込む様に、アサシンはあらゆる壁を擦り抜ける事が出来るのだ。

天井を破壊して追う事は出来たかも知れない。だが、セイバーとて視覚情報を主として戦う者だ。市街地でその様な暴挙に出て、自分が交戦中であると、複数の敵に知らしめる事もあるまい。

それよりも、優先すべき事がある。八方に散らばって行った魔力の行方だ。

「あれも宝具、今のも……どっちが本物よ!」

「どっちも! 宝具の二つくらい、珍しい事じゃない——私もだからね」

一つのサーヴァントに、宝具が一つと決まっている訳ではない。考えられる事ではあったが、今の霊夢にはそんな事さえ驚愕に値した。というより——全ての事物を、今は冷静に受け止められずに居る。

決断が鈍った。だから好機を逃した。次の決断は迅速に行うべきだろうが、そう思う

程に焦りが脳を灼く。セイバーの眩きがどれ程に重要な事であろうと、この時は意識出来ずに居た。

然し、立ち止まったまままでの愚考は、この少女の性質と相違する。直ぐに〃行動しながら〃の思考を開始した。

家の外へ飛び出し、目的は無くとも周囲を見渡す。何か、思考の手がかりは無いものか。巢へ潜れと、さとりは言った。素とはどこの事だ——？

「セイバー、引き籠るのに必要な物は？」

「屋根、壁、食糧……人妖のも、サーヴァントわたしたちのもの」

雨風、他者の視線に銃弾を避けられる環境。外へ出ずに生きる為には、食糧は不可欠——水は水道さえあれば十分。

「逆に聞くわよ霊夢。それが揃う場所は？」

「……白玉楼通りのシヨツピングモール群。住宅地方面だと大型スーパー……いや、違う、違う！」

蜘蛛が巣を張るのは、決して一瞬で出来る芸当では無い。時間を掛け、得物を捉えるに十分な強度と、己が動き回る為の足場を組む。

今から巣を張りなおすのではなく、過去に張り巡らせた糸を流用するのであれば——住宅街にある古明地家から、〃古明地こいし〃が徒歩で歩き回れる範囲内にある施設が



有力だろう。

だとすれば一か所、これ以上は無い場所が有る。壁は厚く天井は高く、調理前ではあるが大量の食糧を有し、何よりも多くの人妖が集まる場所。古明地さとりが歩いていたとて、誰も疑問を抱かない場所——！

「セイバー、担いで。学校まで走って！」

「了解、マスター！」

女性が女学生を担いで道を走る——奇妙な姿ではあろう。

だが然し、人目をはばかる余裕など、今は無かった。

私立命蓮寺高等学校は、放課後に特有の賑やかさに包まれていた。

今日はもう学業に手を染める事なく、思う存分に趣味と部活動に時間を捧げられる。そうなった時の学生達は、社会人とは違い疲れを知らない。

広い校庭だが、トラックは陸上部と野球部、それにサッカー部が団子になってランニングをしている為、恐ろしく狭くなっていた。

校舎のベランダには吹奏楽部。屋内では音が喧しいからと、外へ向けてパートごとに、タイミングを合わせず音を吹き鳴らす。金管楽器は冷たかろうが、彼等彼女等の額

からは、湯気ももうと立ち上がっている。運動部並みの運動量、汗の量も並ではない。

が——文科系かつ運動量というならば、負けていないのが合唱部だった。

声量を保ち、一日に数十曲——或いは数百曲を歌い通す体力を保つには、筋トレが必要不可欠。三年の女子部長など、腹筋が八つに割れているともつぱらの噂である。

「あー、あー、あーあーあー……あーあー」

そんな部活も、今日は週に一度の自習日、つまりは休日。ミスティア・ローレライは一人、屋上で発声練習を行っていた。

天性の美声もトロンボーンに掻き消され、校庭までは届かない。だが、溜息の理由は、そんな事では無かった。

「……あーん、もー… しゅんとしな…い……」

翼をばたばたと羽ばたかせ、両手もそれに負けずばたと振り回す。子供が駄々をこねるような姿である。

彼女の歌声の魅力は、人を無条件に引き寄せる色気にある。

とは言っても彼女の場合、年齢や外見の幼さも有って、いわゆる女性的な色気は薄い。どちらかと言えば中性的、或いは少年的な色合いが強い——強かった。

その声が、自覚できる程に変わってしまった——ここ数日ばかりで。

原因が何か、自分では分かっていない振りをしていた。然し、見えぬ振りばかりもしていられないので——闇夜でも夜目は梟並に利く——真つ直ぐに見つめる事にした。昨日の夜の事だった。

そうすると、ベッドの中で身悶えをする羽目になる。掛布団を蹴り飛ばし、枕を投げ捨て、シーツはぐしやぐしやにして、寝不足に悩み、そして今朝は寝坊で遅刻ギリギリだったのだ。

上級生達には褒められた。顧問にも、今日は調子が良いのかと、非常に上機嫌で尋ねられた。調子の良さが数日も続くと、上達の理由を何人にも聞かれたが——

——言える訳も無かった。

「あー…… あー…… あー…… うあーん！ どーしよー！」

発声練習の筈が、大声を出す練習に変わっている。ひとしきりじたばた暴れて、屋上に積もった雪の上に、仰向けに寝っ転がった。

声の色が変わった理由は、数日前の上級生の気まぐれに有った。

普段は超然と——と言うより、何を考えているか良く分からない変人やも知れぬが——孤高を貫く彼女が、自分の声に耳を傾け、足を止めた。

そればかりでは無い、話しかけてくれたのだ。必要が無ければ、一日誰と会話せず居られそうな、あの彼女が。

最初は何か、機嫌を損ねたのかと思った。僅かに怯えながら尋ねてみれば、全くそのような事はない。寧ろ彼女は——自分の声を、好きだと言ってくれた。

困惑しつつも嬉しかった。ああも真つ直ぐに褒めてくれる人は居なかつたから。だから胸の高鳴りも、称賛を得た喜びだけに起因するものと思ひ込んで——高鳴りが膨れ上がり、呼吸が苦しくなつて漸く、この感情が何かを理解した。

理解した瞬間から、ミステリアの声は美しくなつた。ただ愛らしいばかりではなく、足を止めて長く聞いていたいと思わせる、他者を誘引する力が増した。然しミステリア本人が、それを喜んではいなかった。

「どうしよう、どうしよう……上手く歌えないよう……」

周囲の評価は良い、それは確かだ。だが、皆が褒めている声は、*「彼女」*に褒められたあの声とは違つた。

好きだと言つてくれた、わざわざ近くに來てまで聞いてくれた声。もつと長く聞かせたい、もつと良くして聞かせたい——もつと楽しませて、喜ばせて、褒められたい。そう願えば願う程、声は元の自分と違うものになつていく。

ミステリア・ローレイは、少し幼すぎたのかも知れない。幼くて、そうでありながら、音に敏感過ぎたのだ。

声に生まれた差異——本来なら成長と呼ぶべきそれを、己の不調と取り違え、元に戻

そうと歌い続ける。だが、正しく歌おうとすればする程、上達は愈々留まる所を知らず、艶歌の性は強まるのだ。

「……ちゃんと歌わないと……泣いてちや駄目だ、がんばれ私！　おー！」

つまる所、ミステリアは、あまり賢くは無いのである。

賢くは無いのでよくよくよしてはいるが、実際は簡単に解決する悩み事——“彼女”に実際に聞かせてみれば良いだけなのだ。

益にならぬ悩みを抱え、もう一度発声練習からやり直そうと、息を胸一杯に吸い込んだ時——

「……………」

冬の気は冷たい。だが、肺よりも尚、背筋に寒気を感じた。妖怪も人も区別無く備わっている、異質への本能的な——敵意というべきか、嫌悪というべきか。そんなものが背筋を駆け上がり、首を擽ったのだ。

そうつと背後を振り向く。特に何か、おかしなものが有った訳でも無く——ただ、古明地さとりが。同学年の物静かな少女が、そこに座っていただけだった。

「あれ……？　さとりだよね、どうしたの？」

「いえ、特に……歌を聞いていただけですよ」

目を閉じ、音を楽しんでいたのだろうか。そういう客も聴衆にはまま見掛ける。音を

楽しむのに、他の情報は極力排除するという物好きだ。

ミステリアは、自分にそう言い聞かせる。先程の悪寒は、きっと勘違いだろう。大人しく無害なこの少女を、恐れる何事も有りはしない。

「楽しそうな声。好きな人が出来ましたか？」

「えっ……えっ!!? いや、えっ、そんな事無いよっ!!?」

薄暗い事を思っていると、いきなり凶星を突かれてしまった。

自覚は有る。明確に言葉にしていなだけで、ミステリアは早い話が、“彼女”に惚れてしまったのだ。

「ふふっ、分かりやすい。もう少し上手にごまかしたらどうですか、にとり先輩じゃないんだから」

「いや、違う、違うってば! いきなり変な事を言われたから驚いて——」

「良いんですよ隠さなくて。三日前からでしょう、歌い方が変わったのは」

「………っ!! ああも—— あーも——!!」

連続で本心を言い当てられて、ミステリアは声の限りに叫んだ。肺活量に自信のある彼女をして、息切れを起こさせる程に叫んだ。

雪が積もる屋上に手を着き、肩で息をするミステリアを、さとりは目を閉じたままで笑い、近づいて肩を叩いた。

「……いいじゃない、相手が女の人でも。誰も変に思わないわよ」

「うーっ……どうして分かるのよー。秘密にしてよね、本当に……？」

洞察力に優れているのは知っていたが、そこまで知られていたとはと、ミステリアは顔から火が出る思いであった。

そもそも古明地さとりという少女が、誰かの色恋沙汰に興味を持つなど、計算の外だった。

そんな事をするくらいなら上級生の教室へ行き、河城にとりの発明品に毒を吐いて楽しんでいようかと、そういう認識しかなかったのだ。

「秘密、秘密。約束するわよ」

だが然し、少し面白くも有り、そして楽しくも有った。

自分に無関心だと思っていた同級生だが、こうして話をしてみると、普通の少女ではないか。

目を閉じたままで小指を差出し、指切りをしようとするさとりは、何とも優しく柔らかい微笑みを浮かべていた。

「……それじゃあ、指切り。嘘ついたらハリセンボン投げつけるからね！」

「大丈夫よ。貴女がアリス先輩に恋焦がれて、夜も寝られず身悶えしているなんて言わないから」

「ほら言ったー！　いきなり言ったー！　もー！」

早速約束を破った同級生——いや、新たな友人候補。仕返しと頭をひっぱたいてやるつもりで、ミスティアは右手を振り下ろした。

古明地さとりは目を閉じたまま、それをやすやすと避け、後方に一步下がった。

「……えっ？」

「大丈夫。夢の中で先輩に迫られて、それを受け入れちゃって自己嫌悪した事も。夢の続きを見直そうと、二度寝にチャレンジした事も。

ラブレターを書いて靴箱に入れようとしたけど、先に入ってたラブレターの封筒が豪華で、見比べて引き下がっちゃった事も——」

優しく、優しく、さとり 覚は毒の液を零す。

胸の内に扉が有るとしたら、その鍵はミスティア自身が持っている筈だった。なのに今、鍵はさとりの手に奪い取られている。

「ああして顎を持ち上げられた時、少し期待をしちゃったのを自分で思い出して、授業中に変な呻き声を出しちゃったり。休み時間にはアリス先輩の様子を覗き見に行ったらしいわね。霊夢先輩と並んでいると、絵になるから悔しいって思ったのね……分かるかも。暗いわ、黒いわ、でも健全な嫉妬。緑の目にはなれないみたい。

自分以外の誰かと親しそうなを見て、寧ろ安心したなんて良い子ねえ。あつ、でも



今貴女、私を怖がつてるでしょう」

ミステリアが後ずさる。さとりが目を閉じたまま、完全に歩調を合わせて追う。

見られていたのか？ いいや、それは無いと思った。見ているだけで推測するにしても、彼女の言は細かにミステリアの心を言い当てていた。

「……さとり。あ、あなた……目、どうしたの？」

何よりも、閉ざされた瞼の、平坦さが怖かった。

「知りたい？ じゃあ——」

動けない。蛇に睨まれた蛙——いや、小鳥の雛の様に。手足は酷く震えているが、倒れ膝を着く事さえ俥成らない。

肩を掴まれ、少し前屈みにさせられる。こうして漸く、小柄なさとりと、顔の高さが合った。

さとりが泣いている——泣いた様に見えた。流れる涙が赤い、泣いてはいない。泣いているのは自分だ。赤く糸を引いて持ちあがる睫毛と凹んだ瞼に覆われたそこには——

「良く見てね、ほうら」

「ひっ——!? きゃ、あああああああああああつ!?」

二つの空洞。引き千切られた視神経が、僅かにはみ出す血濡れの眼窩。さとりの両手

から屋上に、ころりと眼球が二つ転がった。

色気も艶も無い悲鳴、断末魔の様だ。それさえ、十数台のトランペットに掻き消される。虚ろな洞から目を離せぬまま、それでも恐怖から逃げようと、震える膝に鞭打つミステリアに——

「おお、美味そうな小鳥ちゃん。可哀想にねえ、いただきます」

——黒谷ヤマメの蜘蛛脚が、背後から毒爪の抱擁を施した。

## 五日目、放課後——天秤

森の上空。自分の体が不可視になった奇妙を味わいながら、私達は飛んでいた。

「アーチャー、何処へ向かってるの!？」

防風の術は施しているが、防音までは想定していない。風切り音もここまでくれば、ライブハウスの轟音もかくやと喚き立てる。私は声を張り上げ、前に座る少女に訊ねた。

「私も知らん、だが霊夢の所だ! あれを追い掛けてるだけなんだからな!」

返る声も叫んでいる。少なくとも私の声よりは力強いが——まだ、足りない。校庭でアサシンと一戦交えた際の声と比べれば、回復の不足は聞いて取れる。

霊夢の前では二日と言い、私の前では三日と言った、回復までの時間。それはまだ一日さえ経過していないのだ。

単純計算で、回復したのはせいぜい二割未満。この状態での戦闘行為を、望ましいとは思えない。

「精度は確かなの!？」

「ああ、あいつらの動きはセンチメートル単位で把握できる! 時速200km前後、速

いぞ、何かを追ってるな！」

もはやアーチャーの技量に関して、何かを疑う事は無くなった。

だから、高速道路でも有り得ない速度を聞いて耳を疑う。移動しているのはセイバーだけではない、霊夢も共に居る筈だ。霊夢は当然だが人間で、結界術は使えるとしても

「——まさか、隠蔽術も無しで、生身のまま?！」

「ああ！ セイバーが背負って屋根から屋根！ 視界の隙間を狙っちゃいるが、何人かには見られてるな！ 私らみたいにかくれんぼはしちゃいけない！」

尚更の異常事態だった。

霊夢は——博麗霊夢は、平穩を望む人物だと思っていた。少なくとも、人の目に付く所で、その様な行動に出る人間では無いと。

とんでもない！ 確かに平穩は望み、平穩を保つ為に彼女は行動するだろうが——  
「巫女っていうのは、〃そういうもの〃なの!?！」

「いつつも〃そんなもん〃だ！ 博麗の巫女の天秤は、絶対に軽重を間違えない——本物ならな！」

自分の欲求なんか何処にも無い、異変の解決の為だけに走る！ 障害は全て取り除き、何も省みない、自分さえもだ！」

異常な存在が街を馳せ、それを誰かが目にする。そんな事態はもしかすれば、目の錯覚と言ひ逃れられるだろう。

だが、数十や数百の死は取り消せない。だから、先んじて防ごうとしたのだ。

例え己の好む“周囲の平穩”を磨り潰そうとも、より多く広くの平穩を守る。利は通り、道義に叶う事だが、

「じゃあ——じゃあ、靈夢は」

「やるだろうな、“博麗の巫女”はシステムだ！ 駄目だと認定すれば、人だろうが妖怪だろうが、一切を斟酌もせず——！」

くそっ！ だから見張ってたんだ、“こうなったら困る”から！」

言い淀んだ言葉の続きを、アーチャーは過たず受け取った。

彼女は——博麗靈夢は、敵対者を殺すのか。

そうなるだろうと、理解していた筈だった。今、改めて事実を受け止めて、私は——きつと、青ざめていただろう。

誰かが誰かを殺す様を、私は未だ、見た事が無い。

小さな虫を、獣を、実験の為に殺した事は有る。人妖の様に歩き口を利く者が、死に逝く様など見た事が無い。

彼女はこれから、その光景を作りに行くのだと、そう思ってしまったのだ。

そしてきつと、彼女は遠からずの行動に移るだろう。

彼女の行く先に何が待ち受けていたとしても、最優の従者を従えて、きつと——

「え……?」

「お前が、一体、どうしたいのかだ! 霊夢を手伝うのか黙って見てるのか、それとも霊夢を裏切るのか!」

アーチャーは思考を止めさせてくれない。先送りにしたかった事を、いきなり突き付けて来た。

「は——はああ!」

だが——だとしても「これ」は、私に聞いて良い事だったのだろうか?

互いに敵対しなければ利が有ると、私と霊夢は同盟関係にある。それを——積極的に維持するか、何もしないか、裏切るかと言うのだ。

「今の時点で、セイバーだけには勝ちが見えない。アサシンには勝てる、鎧の奴は妖夢が倒す、妖夢にも勝てる。後は分かんのが二体だが、恐らくその内片方はキャスター、私が十分にやり合える相手の筈だ——パチュリーは参加してないしな。」

だから、お前が勝ちたいと思うんなら、アリス。今がチャンスだ、今しかないと思え!

「何を言ってるのよ!？」

アーチャーはこの瞬間、霊夢達の身を案じるのではなく、彼女達を出し抜く手を考えている。

然し私が声を荒げたのは、彼女らしからぬ理論の構築にあった。

それは決して、彼女の善良性を信じているからではなく——

アーチャーの推察は、常に理由の元に下される。今の彼女の言葉は、多分に願望を孕んだ、現実味のない物に聞こえたからだ。

アサシンには勝てる——確かに一度は撃退した。だが、もう一度勝つには、少なくとも回復を待たねばなるまい。

妖夢——魂魄妖夢、ウォーリア。怪物二体を手玉に取る怪物を、例え相性の良し悪しは有れど、容易く仕留められるとは思えない。

ましてや、正体不明のサーヴァント二体など、勝てると算段を付ける筈があるだろうか。

それは、無い。

短い時間だろうと、彼女と接していれば、違和感に気付く。

根拠も無い称賛を語って、無謀に飛び込んでいくのが流儀では無い筈だ。幾重もの計算に重ねて、数十の策と罠を用意する。それが彼女の——魔術師の始祖たる者の、戦い

方の筈だ。

「……アーチャー、もう一度言うわ！ 私に、この戦争に掛ける望みは無い！」  
つまり彼女が問うていたのは、私の意思だ。

私が勝ちたいと望めば、勝てぬとは言わず、戦うのだろう。

私が勝ちを譲りたいというのなら、躊躇わず霊夢達に力を貸すのだろう。

その選択を邪魔しない為の、似合わぬ大言壮語——それがきつと、彼女の言の意味だ。

「そうか、じゃあ決まりだ——セイバーを全力で援護する、良いな！」

私に叶えるべき望みは無い。私はただ、この戦争を生き延びたいと思った——願ったのではなく——だけだ。

その為の最善策は、霊夢を支援し、他の五騎のサーヴァントを悉く仕留めて、  
「分かった——もう一度だけ、また死んでやるよ」

嗚呼、そういえば、いつかは結局、その時が来るのだった。

最後の生き残りが、彼女で無いとするならば——彼女は何時か必ず、今一度の死を迎える。

それがセイバーの刃によるものか——はたまた、私の命令によるものかは分からない。  
い。

分からないが、ただ。彼女は己を殺す為に、他者に力を貸すと宣言したのだ。



「……！ 見えたぞアリス、学校だ！ セイバーが飛び込んでいった、テストスレイブも張り付いてる！」

「状況は!？」

「聞くな、出来れば見るな、最っ低だ……！」

森を抜け、市街地の上空に出る頃。霊夢達はとうに動きを止め、目的地——私立命蓮寺高等学校に飛び込んでいた。

何が起こっているのかは、二つを以て推測できる。過去にアーチャーが説いた、学校に仕掛けられていた結界の詳細。そして今のアーチャーの声。即ち、この二つだ。

箒がぐんと加速する。もはや姿勢制御など念頭に置かず、アーチャーはただ速度だけを求める。

一刻も早く辿り着きたい。一刻も早く戦いたい。惜しむべき魔力を湯水のように放出し、速度を増し続けるアーチャーを——

——ひよ、おう。

音は、遅れて聞こえた。

黒衣に身を隠したサーヴァントが、風も巻き上げずに追い抜いて行った。

自動車を追い抜いて、家屋を三件跨ぎに飛び越え、セイバーは直走る。その背で風を受けながら、霊夢は思考を凍りつかせていた。

自分は失策をした。ぬるい考えがミスを生んだ——次はしくじるまいと。それは明らかで、意気込みが強すぎる余り、他の思考に転ずる柔軟性を持たないものであった。進行方向からは、もはや探知を行わずとも、サーヴァントの気配を色濃く感じられる。隠れるつもりが無いのか——或いは、見つけて欲しいとも言えるのか。

「これ以上、させないわ……！」

「ええ、させない。でも霊夢、どうする？ つもり？」

セイバーの懸念は戦場にあった。

そこが学校であろうと、夜間ならば問題は無かった。日は傾き始めているが、今はまだ夕方——当然ながら学生も残っている。

機密保持は捨ててしまったとして、厄介なのは、殺すべきでない障害物の数だ。

現時点のセイバーの移動速度は、時速200km——秒速55m。これでもまだ、全速力ではない。戦闘行為の最中ならば、瞬間速度は更に増す。そしてセイバーの重量

は、武器防具を含めれば60kg以上。さて、これで正面衝突でもしてしまえば——？  
そうならずとも、刀一振りです工機以上以上の破壊力を生む、圧倒的な力を頼りに戦うのがセイバーだ。針の穴を通すような技量は無い。巻き添えにせぬ自信は持てないのだ。

「どうもしない。どうにかする、手立てがあるの？」

霊夢は悩まない——悩もうとしなかった。

何故ならば、もう校庭が見えていたからだ。部活動の時間だろうに誰も居ない——鳥の影さえ見えない、寒々とした校庭が。

セイバーの目ならば、校庭の雪に残された足跡まで見える。多少の風は吹いているだろうに、足跡は殆ど崩れておらず、この寂しさは長時間続いたものでないと分かる。

校舎に目を向けてみれば、ベランダも屋上も、居るのは踏み荒らされた雪ばかり。人影は全て屋根の下、壁の内側へ消えてしまったのか、或いは——？

最後の跳躍に加え、短距離の飛翔。セイバーが屋上に着地した瞬間、霊夢はその背から飛び降り、懐から数枚の札を取り出す。

何れも、護身用にするならば威力が過剰に過ぎる、攻撃的な術を封じたもの。霊夢はこれを、人妖問わず、生き物に使った事は無い。

然し、使い方は心得ている。どう発動させ、どの様な結果を生むか、物言わぬ無機物

で試し続けた。対象が少し動き、少し言葉を発する物になった所で——

「何も変わらないわ。セイバー、最大の警戒を払って」

「言われなくても！」

決意を言葉と発するに合わせ、セイバーは屋上の床を——四階の天井を踏み抜いた。階段を下りていくのは、敵方も予測している筈だ。虚を突くというよりは、虚を「突かれない」為の方策。セイバーは既に、戦闘の為だけに思考を回転させている。

天井の破片と共に、まずセイバーが。ついで霊夢が飛び降り、すぐに背中合わせになった。

四階——静かなものだった。天井から吹き込む風と違って、廊下の空気は暖かい。近くの教室で暖房をつけているのか、ごうごうと音が零れていた。

人の動く気配は無い。床に降り立った際の反響が、数秒先まで残る程に。己の呼吸音が寒々と響き、純粋な生き物がこの階層に、たった一体しかいないと告げている。

廊下の奥まで、誰も見えない。霊夢はそれを確認し、振り返ろうとして——セイバーが肩越しに、手を伸ばして頭を押さえた。

「振り向く前に。事故現場を見た事がある？」

「目の前で、一度。胴体が真っ二つで赤黒い内臓がゴロゴロ、それより酷い？」

止めはしないと、セイバーは手を引いた。下がって行く手を追う様に、霊夢は背後を

振り返り――

「……何、あれ」

「正直に言うとうと、分かりかねますわね。いいえ――」

セイバーが見ていた先には、誰かの骨が落ちていた。

一つと欠けぬ完全な人体標本。うつ伏せで、右手を伸ばして倒れている。

骨の周囲には赤黒い水溜り――漂う悪臭は、もはや何が元凶かも分からない程に混ざっている。

鼻を手で覆って近づくと、霊夢の、一步後ろをセイバーが歩き、生臭い水溜りに指を触れさせて――口へ運び、舌で指先を舐る。

「――臓腑と血が混ざっている。素材は良いけど酷い味、コックの首を落とさないさ」

「味？ まあ、グルメでいらつしやること……うげ」

「少なくとも、人間のじゃあないわ。肉と内臓をミキサーに押し込んで、血と一緒に回せばこうなるかしら。」

……あの結界の効果は、対象の内臓の融解<sup>グ</sup>だったと記憶しているけど」

アサシンが張り巡らした結界法具、『瘴気<sup>ゲエンナ</sup>満つ大窯<sup>ドミアズマ</sup>の底』

の効力は、範囲内の対象全て無差別に、内臓等を融解して殺害する。加えて、そうして対象の抵抗を完全に奪い、体内に残る魔力を吸収する。

一人一人からの吸収量は微量。数をこなして獲得する為に、被害者を完全に殺してしまふのは、決して得策と言えないのだが——

もはや、損得は彼女達に於いて無価値であろう。セイバーは再び、床を蹴り碎き、下の階へ移動した。

三階——静かなものだが、こちらにはまだ希望があった。呼吸の音が増えていたからだ。

それも、弱弱い代わりに数が多い。なのに、廊下に人が居ないのが、奇妙と言えば奇妙である。教室に押し込まれているだけだと気付くまで、時間は掛からなかった。

手近な教室の扉を、手ではなく足で蹴り開ける。そういえば、ここは普段使っている教室だったと——気付くのと「見た」のはほぼ同時だった。

「ここに居たのね。貴女の同級生？」  
「……上級生も、後輩も、教員も」

人が、積まれていた。

床一面に倒れた人間の、その上にまた人間が重ねられている。高さは三列、この程度の重量ならば潰れて死ぬ事もあるまいが——凄惨だった。

最下段に置かれているのは、顔が蒼白いかまたはどす黒く、呼吸は浅いか、或いは殆ど止まり掛けている。

二段目に重ねられているのは、それよりまだマシな有様だったが、不調ははつきり見て取れる。幾人かの口の周りには嘔吐痕——血交じりの黒ばかり。瞬きや口の動きがある——放っておいて、死にそうには見えなかった。

そして、最上段に重ねられているのは。きつとこれは——

「新鮮な、食事かしら」

「……あんたもこんな事してたの?」

「ノーコメント。ただし、死ねば血肉の味は落ちるし、勿論魔力も霧散していく。殺すならば食事の直前、それがセオリーよ——牛馬の肉も同じね。

下から順に喰う。直ぐに死なせる筈の食材程——乱雑に扱うんでしょう、きつとね。行きましょう」

これ以上、この部屋に用は無い——セイバーはそう言って、廊下に出ようとした。霊夢はそつと手を翳し、挙動だけでセイバーを止めた。

言葉を発さぬまま、床に転がる人間を踏みつけ、最上段に積み重ねられた者に近づぐ。手を取り、喉に触れ、口元に耳を近づけた。

「……見ているものは?」

「野球部男子、呼吸は強い。文化部女子、脈が弱い気がする。投擲競技、息が弱い。長距離走、顔色は悪いけど心音は——」

「つまり、貴女の考えだと」

「体力依存。元気な奴ほど死に難い——他にも色々あるでしょうけど」

例外は有るだろう。一番下で、今にも死にそうになっている連中の中に、サッカー部のエースの顔も見えた。

発動の起点に近いか遠いか——そんな偶然が、生死を分ける、或いは分けたのだろう。これから先、この中のどれ程が生き残るかは分からないが——

生きているなら、それで良い。廊下へ出ると、*“そいつ”*が居た。

「助けて！ 助けて！ 殺されちゃうわ！」

「……良くもまあ、忍び寄ってこれたわね」

きいきいと甲高い作り声で、少女が叫んでいる。霊夢は、それが気配も感じさせず近づいてきた事に、内心の恐怖を散らす様に毒づいた。

この少女の顔——*“顔面の皮膚”*に、霊夢は見覚えが有った。声は声で、別に聞き覚えが有った。

「助けて霊夢先輩、襲われて殺されちゃう！ 背後から突き刺されて毒を流されて、お腹の中身をどろどろにされて死んじゃう！」

ああ、どうして助けてくれないの？ 最近になって仲良くなった金髪の子に、懐いてる後輩が鬱陶しいから？」



「顔からずれて浮いた皮膚」は、後輩のミステイア・ローレイのものだろう。彼女の最も美しい部位——声だけは、古明地さとりのものにすり替わっている。

「……違いますね、びっくりする程。今の先輩は誰かさんを嫌い過ぎて、他の人はどうでも良くなっています。可哀想とさえ思ってくれないんですか、私を？」

「セイバー、斬つて」

霊夢の命令が全て声に成る前に、セイバーは動いていた。瞬き一つの間に、さとりの居た空間を薙いで、直ぐに霊夢の傍らに戻る。

だが、その刃がさとりを捉える事は無かった。さとりの体は天井に張り付き——それを、巨大な蜘蛛脚が支えていた。

「……無駄ですよ。巣を張った蜘蛛に、スズメが勝てる筈が無い。だからせんばあい、私を憐れんで？」

軽やかに歌う声帯も、淡い恋心を刻んだ心臓も、素晴らしい未来を夢見る脳髓まで、どろどろに溶けて吸い上げられて——最後に私は何を願ったか。

「助けて」 「助けて」 「アリス先輩」 「会いたい」 「助けて」 「逃げて」 ……良い

子だったんですよ、私。死ぬ直前に誰かを顧みたのは、今の所は私だけなんです。

ねえ、聞きたいですか？ 他の……そうですね、20人ばかりがどんな事を考えたか。

みーんな「死にたくない」とか「怖い」とかばかりで、それ以外の事はなーんにも思

い浮かばないんです。誰も、誰も、ええ、だれも——！」

口が動くにつれて、顔に被せた皮膚がずれていく。下から半分だけ除く顔は、血と、良く分からない体液と、涙で濡れていた。

「……それ以上、口を動かすんじゃない？」

「誰も！ 喜んで死ぬ奴なんかいない！ じゃあなんで、なんでこいしは！ こいしだけが！ 私の妹だけが！」

床をだんと踏みつけて、さとりが叫んだ。顔に纏った皮膚を、引き千切る様に剥ぎ取りながら、空の眼窩を見開いて。

「あんな楽しそうに、嬉しそうに、どうして死んで——ああ、でも大丈夫よこいし。お姉ちゃんも一緒なもの、ほら、見えるでしょう？」

あなたとおなじで、もう何も見えないの。もう怖くないの、だから大丈夫なのよ……ふふ、ふふふ」

「……最初に私が言った通りでしょう。こいつは狂ってる、殺すしかないって」

セイバーは今一度、刀を構えた。

初撃を回避されたのは、アサシンが——黒谷ヤマメが所持する固有スキル、『蜘蛛の巣：A+』による所が大きい。

限定的な低ランク『障地作成』スキルを兼ねるこの技能は、黒谷ヤマメが潜伏する地

点を彼女の「巣」に見立て、彼女の狩りに最適の空間へと変える。

飽く迄効果が適用されるのは、姿を確認されるまでの一撃のみ。だがその一撃は、虫が空を飛んで蜘蛛の巣に囚われるのと同様に、知覚困難にして致命打に成り得る。

しかし、それはつまり、初撃さえ防げばそれ以降は与し易いという事でもある。

「おおっと。殺されちゃあ困るねえ、その子は私のマスターさあ……っはは、酷いや。動かんでおくれ、この子達が死ぬよ？」

「はあ……—あっ!？」

だから、保険を掛けた——人質を取った。

天井から逆さに顔を出したヤマメは、両手にそれぞれ、霊夢の見知った顔を吊り下げていた。

右手で首を掴まれて、犬走椀が。左手で頭蓋を掴まれてリグル・ナイトバグが。床に足は届かず、宙吊りにされていた。

「あんた達、どうして……!？」

「だって霊夢先輩、他に中の良い子が居ないでしょう？ 皆、ほとんどがどうでも良さそうに思ってるのに、少しだけ——本当に少しだけ、その二人には優しい。だから、こうするんです」

視力を、眼球を失った筈のさとりは、何にぶつかりもせず、天井から吊るされた二人

に寄り添う。

「先輩……駄目つ、逃げて、早く……!」

「博麗の、か……こいつらはヤバい、警察を……」

きつと、そう調節したのだろうが——二人には、明瞭に意識が有った。

見れば外傷も無い。傷つけず、命に障りの無い様に、さとりはこの二人を捉えさせた。セイバーは独断で救出を図ろうと身構えていたが、例え敏捷性で劣るアサシンだろうと、この距離で斬りかかって、人質を盾に出来ぬ事はあるまい。条件を突き出されるまで、そして霊夢の命が有るまで、迂闊には動けなかった。

「狙いは何よ、さとり」

「助きたいんですよね、きつと。私への怒りばかりじゃなく、そういう感情が混ざり始めてます。しかも……冷静に考えてる、先に言うのと当たりですよ。」

そう、私は交渉をしたいんじゃない。ただ、この二人の片方だけは助けてあげようと思ってます、嘘じゃない。だって二人を失ってしまったら、比べて嘆く事はありませんから、先輩への枷になりませんしね。

ああ、人質役の二人には伝わりにくいでしょう。言葉にしてさしあげますか？」

「……ふざけんじゃないわ!」

怒声。霊夢は懐から、数枚の札を取り出す。

小規模の炸裂を引き起こす、下級妖怪退治の為の札。頭蓋にでも貼り付ければ、一人の命を奪うなど、造作も無い危険物だ。

だが、使えなかった。さとりの言葉は正しい——救えるという希望を見せられると、それに簡単には逆らえなくなるのだ。

希望を餌に霊夢を引き寄せ、さとりは暗く微笑んだ。

「アサシン。霊夢先輩が指名した一人だけを、無傷で解放しなさい。もう一人はどうでもいい、食事にしても良いし、盾に使っても良いわ。

先輩、聞いての通りです。私は一人だけ、貴女に助けさせてあげたい。良いでしょう？」

「あーあ、私のマスターは酷いこった。早く選ぶんだね、あんた。わたしや命令が無くつちや、この結界を止める事は無い。

悩んでる間に他が誰もかれもくたばって、全滅さようならじゃ笑えやしないさあ……どうするね？」

人質が有効だと、さとりは他の誰よりも深く理解していた——心の内が見えるのだから。

現在進行形で霊夢が悩み、決断を下せずにいるのを、キャンパスの上の絵の様に眺めている。

殺してしまえば、人質など無意味だと知りながら——片方は死んでしまっても良いと、これも本気で考えていた。

「くっ……どうするの、マスター」

「……あんたなら、あの二人を同時にぶんどったりは」

「出来ない、きつと」

「そう」

霊夢は心を冷たく凍らせる。

短い問いと、短い相槌。吊るされた二人の顔を、交互に見やった。

「あんた達。助かったらまず、どうするの？」

「は、え……？　まず、助かったら……あ、そんな事、分からないです……」

リグルは怯えている——無理も無い。捕食者に頭を掴まれて、怯えるなど誰が言えるだろうか。

「ふーん、そう。あんたはどうよ」

それを、たった一言で、霊夢は斬り捨てる。斬った舌刀を返して、椀に切っ先を向けると、

「……悪いが、逃げる。逃げるぞ、私は」

椀にも同じく、怯えは見えた。スカートの端から除く尾を丸めているのが、分かりや

すい証拠だ。

だが——こちらは、どうしたいかを答えた。

“どうしようも分からず立ち尽くす”のではなく、“戦いの邪魔にならぬ様に立ち去る”と分かった時、

「そう。じゃあ、棍を放してもらえるかしら」

「……っ、先輩、なんで……!?!」

リグルが、喉に悶えた様な声を出した。棍は何も言わなかったが——安堵は目に見えて浮かんだ。

霊夢の意思表示に合わせ、古明地さとりは幾度も幾度も頷いて、そしてアサシンは苦々しげな顔で——

「そら、よっ……お」

棍を廊下の上に投げ捨て、そしてリグルを自分の体の正面に、盾として翳した。

二つ、アサシンに——黒谷ヤマメに誤算が有ったとしたら。

一つには、セイバーの霊夢に対する理解度を見誤った事。

そしてもう一つに——己の善良性をも、軽視していた事があげられるだろう。

主が、不要と断じた。たったそれだけを根拠に、セイバーは躊躇なく、アサシンに斬りかかっていた。

盾として掲げられた少女を、もはや意にも介さず。刀を濡らす血の種別が、一つ増える事に、何の感情も抱かぬ様でさえあった。

廊下に小さな播鉢状の穴が空く。一步の踏込みに力を籠め、体を矢の様に飛ばしたセイバーを、アサシンは正面から迎えて——

「——ちいっ!!」

咄嗟に取った行動だから、きつとアサシン自身も、その意図を理解出来ていないのだろう。

彼女は己の蜘蛛脚四つを交差させながら、セイバーに背を向けた。

体の正面に抱えていたリグルを、セイバーの斬撃から“庇ってしまった”のだ。

そうなれば——恐らくはこの聖杯戦争で、最大の威力の斬撃が、防御の上からだろうが、背を襲う。

刃物が産むとは思えない、鈍く沈む激突音。剣風と衝撃が、内側から窓ガラスを軋ませ、幾つかを砕け散らせた。

その場に留まろうというアサシンの意思是、台風の中の傘も同じ。僅かばかりの忖度もされず、打ち砕かれ、廊下を跳ねた。

「……あっさりと決めましたね。未練がましく思ってた癖に、結局は簡単に、いらないうて切り捨てたんですねえ……?」



「邪魔にならない方を選んだのよ。あんたを……」

今度こそ、霊夢は戦える。手にした札に霊力が満ちた。

「あんたを殺しやすいようにね——『破砕退魔陣・単』!!」  
なんじあらがうことなかれ

霊夢の手から放たれたのは、数枚の札の内、一枚だけ。さとりは避けきれず、腕を掲げて防いだ。

札が腕に張り付き——爆ぜる。範囲は狭いが、然しその威力は高く——肉ばかりか骨までが、破片を飛散させた。

「あつ……? あつ、あう、あ——あああああつあああうああつ!!」

痛みは遅れて届いたのか、痛みをそうだと認識できなかったのか——さとりが悲鳴を上げるまで、僅かな間があった。

その隙に霊夢は、さとのり足元に二枚の札を投擲。何れもが床に張り付いて、そしてきしきしと異音を立て始めた。

「二に二を重ねて四方の緊、四に転じて三界の縛! 『妖縛陣・二重』ふたえ——留まれっ!」  
 不可視の蛇が絡み付く。脚を止め、腕を縛り、舌を絡め取って自由を奪う。

本来ならば抵抗は容易い筈の、〃多重拘束〃の巫術。だが、理性と片腕を失った相手ならば、真つ当な抵抗を望むべくもあるまい。

「んん、んーっ……!」

「セイバー、近寄らせるな。あんたが仕留めなくても良い、止めておきなさい」

もう一枚、最初に投擲したものと良く似た札を取り出し、手に握り込む。霊力を再度充填して、確実に敵を殺せるように、細心の注意を払う。

動きは止めた、後は近づいてもう一つだけ、首にでも“退魔陣”を重ねれば良い。妨害する敵は、セイバーが押し留めて居る。

近接戦闘ならば、アサシンがセイバーに叶う筈は無い。成程、良く持ちこたえていたが——霊夢の元へは、到底たどり着けもしないだろう。

「……異変は解決する。老若男女を一切問わず、人も妖も区別無く——博麗の巫女は人の俤、全ての異変を解決する！」

誰に言ったものだろうか。きっと、自分に言い聞かせたのだ。

最後の札が発動し、古明地さとりを絶命させる筈の、僅か手前に——

——ひよ、おう。

風の音は、後から聞こえた。

「霊夢……！ 何が有ったの、教えて頂戴！」

霊夢が音源に振り返った時には、全てが急変していた。

アサシンを追い詰めていた筈のセイバーが、今は居ない。何が起こったのか、アサシンさえが理解出来ずに居るのか、呆けた表情は英霊らしさの欠片も無い。

僅かに窓枠に残っていたガラスさえ、今は粉々に碎けて散っている。廊下は夕日がガラス片に反射し、朱に染まっつて鮮やかだった。

「いいや、聞かなくても分かる。あれが全て悪いっていうのはな……！ やるぞアリス、腹を括れ！」

霊夢の傍らに、アリス・マーガトロイドが。

二人とアサシンの間に、アーチャー——霧雨魔理沙が立っている。

そしてセイバーの気配は、霊夢が意識を他に裂いた数秒の内に、数kmも遠ざかっていった。

## 五日目、放課後——風は今再び

風圧に体が軋む——靈的手段を伴わぬ接触ならば、傷も負わぬ筈の身体が軋む、異常をセイバーは味わっていた。

側面から抱きつかれたと思つた次の瞬間には、窓枠を肩で破り、景色は瞬間的に流れ——今は、地上を遙かに見下ろす高空。

移動によつて生じる負荷さえ、軽微ながら攻撃と成り得る程の速度は、セイバーの動体視力を以てしても、満足に現状を把握する事を許さない。

「ぐっ……う、う……このつ、離れなさいっ！」

魔力構築された白銀の鎧が守る胸——それに回された腕を掴み、引き剥がす。力ではセイバーが圧倒的に優位と知つて、黒い影は——ライダーは、素直に自ら拘束を解いた。空中で支えも無く向かい合う二者は、過去に一度、矛を交えている。その時の結果を鑑みれば、セイバーならば十分に勝ちを得られる組み合わせであった。

「お久しぶりですねえ、顔色がすぐれませんが。真つ白ですよ」

「深窓のご令嬢なのよ、優しくエスコートしてくださいませんか？」

「生憎と、姫は攫うのが流儀でございまして」

無論、それは「平常時」ならばの事。

魂魄妖夢の一閃で手酷く傷を負ったセイバーは、まだ万全とは言えない。その上で襲い来るのは、恐らくは速度という一点に於いて、己を数段も上回る敵。

そんな相手と戦うならば——空中という戦場は、極めて不利だ。自分が守るべき箇所も、敵が逃げられる箇所も大幅に増えるとなれば、体感速度の差はより大きくなる。地上へ降りる事こそ、勝利への最善手と見えた。

然し——聖杯戦争は、叶うならば秘匿すべし。これは、霊夢が見つけた書にも記してあった事項である。

これを破る事によるペナルティは無いが、霊夢が望むのは幻想郷の平穩。異常が有ると殊更に、示して回る道は望まない。

ならばセイバーも、真つ直ぐに地上へ向かつて路上に降り立ち、ライダーと戦う訳にはいかない。そしてまた、人目に付かぬ所があればと、探る猶予も無いのだ。

「……やつ！」

小手調べとばかり、真つ直ぐに飛び出し、刀二つで斬り付ける。腕の下を容易く掻い潜つて、ライダーはセイバーの背後を取ろうとする。

急上昇、旋回を駆使し、セイバーは敵を振り切ろうとするが、やはり速度も小回りも負けている。容易くは振り払えず、背中にピタリと張り付かれ——

「ま、ま、直ぐに終わらせようとは申しませんので。一先ずはお時間を——おおつと、口が滑った」

セイバーの背を蹴り付け——いや、蹴り上げる両足。地上からより遠ざける方向に、鎧を纏った体が打ち上げられる。

すぐさま姿勢を建て直したセイバーは、振り向き様、背後から迫る筈の敵を狙って刀を薙ぎ——当たり前の様に空を切る。

空中戦となれば、熟練度は天と地程の差があると、僅かな攻防でセイバーは悟った。だが、地上へ戻ろうにも、ライダーがそれを容易く許しはせず、寧ろ更なる高空へと運ばれていく。

然し、ただ捌られているばかりのセイバーでは無い。確かに空中戦ならば不利だろうが、「戦い」全てで考えれば、セイバーより長けた者などそうはいないのだ。

どうせ追い付けない相手ならば、せめて向き直るだけでも。全ての機動力を、一点に留まったままの方向転換に費やす。

迫る蹴りを、刀の峰で受け止める。僅かにでも止まった足を掴もうとする。

一度や二度では成功しない。だが、一度や二度の失敗では沈まない。執拗に幾度も、セイバーは繰り返し返す。

「ああ、鬱陶しいわねちよろちよろと……落ち着きの無い！」

「だから前にも言ったでしょう、30分動かないと私は死んじゃうと——つととと、危ないっ！」

ライダーもまだ速度は上がるだろうが、速度の上昇より先に、セイバーが慣れ始めた。防御から攻撃へ転ずるまでの時間が削られる。より早く、より速く、より迅く——。

「狂気の沙汰ですなぁ、つたく……！」

まだライダーには余裕が有る筈。だのに冷や汗を流すのは——セイバーの適応力故に他ならない。

全くこうも戦いの中で、広く物を見られる者が居るのかと、ライダーは感嘆さえ覚えていた。

視界の外へ外へ逃げようとしても、適宜セイバーは向きを変え、その動きに追い付いてくる。これは動体視力もそうだが——やはり、戦いに関する「勘」と呼べるものだろうか——それが、馬鹿げて強いのだ。

だが。老長けた技ならば、寧ろライダーはセイバーの上に行く。

防がれ、避けられながらも——その実、ライダーはまだ、速度を増す事は十分に出来た。だのにそうしないのは——そうしてしまえば「追い付けない者」が出ると知っていたからだ。

着実にライダーは、セイバーを目的の戦場へと引き込んでいく。何故に其処へ引き込

めと「命じられた」のかは知らないが、蹴る理由は無い「美味しい話」だ。

「ほらほら、お姉さんが遊んであげますとも、しっかりついておいでなさい……！」

離れぬ様に、だが己が沈まぬ様に。英霊と化しても胆は冷えると、自嘲気味にライダーは飛び続けた。

「はっ、はっ……くそっ、陸練混ざっておけば良かった……っ！」

霊夢は只管に、街を走っていた。

令呪の繋がりで、セイバーのおおよその位置は分かる。移動し続けているそれを追って、校舎を飛び出し、走り始めた。

夜に近い時間と成ったからか——やはり、人の出は減り始めている。

音は、良く聞こえた。

救急車のサイレンの音が、いやに煩いのは、誰かが学校の異変を通報でもしたのだからか。

変死体と、原因不明の重症者が多数——全く好ましくない、最悪の状況だ。

叶うものならば、秘匿したい。「自分の力であれば」叶わぬ事であると分かっている。既に監督役を名乗る、東風谷 早苗が動いている筈だ。



それでも、赦し難かった。

世界は何も変わらず、平穩を保たねばならない。

人は人の俤、人の如く有るべし。日常は日常の俤、常の如く有るべし。物事にはそう有るべき形が存在し、それから外れない事が最善なのだ。

人の命が軽々と吹き飛んで、人外が街の上空で戦う様を、良しと出来る理由は無い。

霊夢は息切れをし始めている——体力は有るが、ここ数日の精神的な疲労は、霊夢の想像以上に身に蓄積している。冬の底冷えする夜気にも関わらず、拭く事もしない汗が、顎から服の裾へと滴り落ちる。

すると、後方からクラクションの音が聞こえた。

軽二輪が霊夢を追い越し、数m前方で歩道に寄せ、止まる。運転手はヘルメットをしておらず、そして夜でも街灯に良く映える白髪と、顔の横でなく上に飛び出す、特徴的な耳を持っていた。

「博麗の、乗れ！」

「椛、あんた!?!」

言葉長く交わらせる事は無い。霊夢は跳ぶようにして荷台に乗り、犬走椛の胴体に腕を回す。すると椛は、アクセルを思い切りふかし、車道を殆ど暴走と呼んで良いような勢いで走り始めた。

「あんた、何して——」

「なんだあれは!? なんで命を狙われた!? お前は何処へ走ってる!? 全く、何も、私には分からない!」

殆ど混乱状態にあるような椀は、暫く一人で、何だ、何だと問い続けた。

霊夢は答えを返せない——何処から何を言えば良いのかが分からないからだ。

だからだろうか、最初に言ったのが、

「あんた、これ、どうしたのよ」

「倒れてた奴のポケットから鍵を頂いた」

「ヘルメットは?」

「……耳が折れて痛い」

「運転は何処で?」

「昔からちよくちよく弄つてた。公道に出なければいいんだ——どっちだ!」

「そこを右!」

自動車を追い抜き、交差点は殆ど直角に曲がり、時折は信号の変わり目に車体を割り込ませ、或いは歩道にさえタイヤを乗せ。二人乗りのオートバイは、霊夢の指示の通りに走る。

霊夢が目的地としていたのは、自分のサーヴァント——セイバーの気配の真下だ。

その気配は遙か上空、彼女達からすれば然程でも無いのだろうが、それでも人の尺度からは十分すぎる速度で移動を続けている。

それを霊夢は、運転する椀に、左右の曲がる道を伝えて走らせた。

「教える、博麗の！」

「言う事が多すぎてどうしたらいいか分かんないの！」

「二つでいい！ まず一つだ、お前は何をしてたんだ!？」

運転手にされながら、椀は霊夢に問う。

何を問われたか——答えて良いものか、霊夢は戸惑う。答えて知らせたのならば、この同級生がどうするかとシミュレートをしたのだ。

十中八九首を突っ込んでくるだろう。腕は立つし、荒事は好まずとも嫌わないし——義を見てせざるは、という性質である。

聖杯戦争などという争いが有り、その為に学び舎を同じくした者が、幾人かは死んだのだ。

犬走椀は、そういった戦いに巻き込まれるべきでは無い。

それは平穩の姿では無く、この堅物の剣道部員は、戦わずに生きるべきなのだと思ふ。

だが、それ以上に——彼女は、霊夢の友人であった。

知人は多いし、そこそこに親しくしている者もいる。寧ろ椛との会話の冷淡ぶりを聞かれれば、友人と呼んで良いものか、首を傾げる者も多からう。

然し、彼女と居て、霊夢は不快になる事が無い。彼女は良く距離を保ち、それでいて、必要な時に詰めてくるのも、躊躇いが無いのだ。

彼女は友人だ——この日、無免許運転をしてまで駆けつけた犬走椛の背を見て、霊夢は、初めてかも知れないが、強く認識した。

「……詳しくは言わない。けど、私が勝たなきゃいけない戦いが起こってるの。夢物語みたいな戦いよ」

「悪夢にしか思えないけどな！ あの化け物は、それに——横に居たのは古明地の家のだろう、どうしたんだ!？」

「聞かないで！ 私、古明地さとりと、あの蜘蛛の化け物を、殺さなきゃならないの！」だから、大きく嘘を吐きたくは無かった。けれど、真実を知らせる事も出来なかった。

然し伝えた事実は端的に、殺害の意図を示すもので——

「……そうか。やっぱ、博麗の巫女なんだな」

「え？」

「お前がだ、霊夢。お前は模範的な、秩序の側の生き物らしい……私も敵わないよ」

エンジンが更に喧しく吠え、合わせて椛までが、夜に遠吠えをしていた。

鼓膜を叩く振動は、何故か霊夢の胸に痛かった。

霊夢を乗せたオートバイは、立体駐車場の最上階まで駆け上がった。

月も見えぬ曇天が、頭上の全てに広がっている。この街で空を見るならば、これより他に適した場所もあるまい。

風が有るのか、雲の流れは速い。然し雲が動いて垣間見た空は、もう一層、雲がかかっているのだ。星も月の無い、だが地上は街の灯りが埋める——比較すれば尚も、暗い空である。

役目を果たした自動二輪を降り捨て、霊夢と椀の二人は、その曇り空を見上げていた。

「……何を見てるんだ、博麗の」

「あんたこそ、何か見えないの?」

「星も出てないのに、何かちかちかとしてる……あれは」

くうと目を細めて、椀は空の中に瞬く、点を二つ、追いかけていた。

霊夢には、少なくとも肉眼では見えない。上空で戦う二騎のうち片方が自分のサブジェクトでなければ、そも戦いにさえ気づかなかつたやも知れない。

「あそこで、戦ってる奴がいんのよ」

「誰だ？」

「……………」

答えぬまま、霊夢は目を閉じ、空の気配を探った。

追うべきものは分かっている——魔力のパスを辿れば、おおよその位置も当たりは付くし、魔力の乱れ方から、苦戦の程も窺える。

ダメージは少ないだろうが、蓄積した負傷が癒えていないのもまた事実。加えて霊夢は、セイバーが戦っている相手が誰なのか、まだ正確には認識していない。

あまりの速度から、推測だけは出来る。だが確信は持てず——仮に確信したとて、それが何になるか。

この戦いに、霊夢が割り込む事は出来ない。

人知を超越した、二つの力の衝突だ。手を伸ばせば巻き込まれ、渦の中で引き裂かれる。

いや、そも渦に手も届かない。遙か高みで二騎の英霊は、白く光る程、文字通り火花を散らした。

風が一つ、立体駐車場の屋上へと吹き込む。高空から垂直に吹き下ろされる風。それは、白と黒の異なる光を——セイバーと、黒影の英霊、もつれ合う二人を、尾を引いて伴わせた。

「あつ……！　セイバー、あんた！」

ほんの一瞬だけ、二騎は屋上すれすれまで降りてきた。

常人たる霊夢の目で、その姿を見て取れたのは奇跡に近い。低空に留まったのは、きつと2秒にも満たない時間だった。霊夢が名を呼んだ時には、再び舞い上がって、視界から姿を消している。

「くっ……！　ちよつとあんた！　勝てんの!?　勝てないの!？」

いずれが有利で、いずれが不利かも、まるで霊夢には分からない。声の届かない高空へ、叫ぶ他に出来る事は――。

一つだけなら、有る。左手に巻いた包帯を、右手で掴んで、強く握り――引き裂いた。  
——令呪。聖杯戦争に於いてマスターに与えられた、三度限りの「絶対命令権」にして「無色の魔力」。

身体に刻まれた三画の文様は、英雄の似姿にさえ、服従を強制する支配力を齎す。

その命令が、サーヴァントの行動を支援するものであれば、本来の力量を遥かに上回る力を以て、目的を果たす事も可能である。

つまりはコントローラであり、ブースター。マスターがサーヴァント同士の戦いに介入する、ほぼ唯一の手段である。

但し、一度の命令で一画が消える。加えて、最終局面まで一画は、必ず残しておくの

が、聖杯戦争の定石である。

サーヴァントには人格が有り、意思が有る。

理想が有り、誇りが有り、戦う理由が有る。

それらは必ずしも、マスターの目的に沿うとは限らない。

だから保険が必要なのだ——逆らえば何時でも自害を命じられるという、優位性を保つ為の保険が。

霊夢の知る限り、まだ一陣宮たりと、脱落した者達は居ない。再序盤から、自分が持つ唯一の武器を捨てては——

——だが、止むを得ない。

“傷を癒せ”と命じて、万全の状態で戦わせる。それ以外に、出来る事は何も無い。

己が無力であると強く知らされるのは、霊夢には初めての経験で、悔しさに内頬を噛みながら、左手を高く掲げる。

今は、個人の矜持など不要。何よりも勝たねばならない。

「令呪に寄りて、我が眷属に命ず——」

——その手を、掴まれた。

骨まで潰されるのではないかと思う程、強く、強く、掴まれた。

痛みに、思わず腕を振り払って、跳ねるように立っていた場所から逃れて——



「……やっぱりか。もしかしたらつて、此処まで待ったんだが」

霊夢の手首を掴んだ。『そいつ』は、泣きそうな顔で、懐から短刀を引き出した。鞭を投げ捨てて、逆手に握って、

「止めてくれ。それを使われたら、お前を殺さなきゃなくなる。お前は何もしないで、負傷したサーヴァントが死ぬのを待っててもらわなきゃならない。……頼むよ、お前は嫌いじゃないんだ——」

牙を剥く。

戦う事を厭うかのように嘆きながら、その敵意には、欠片程の妥協も躊躇も無かった。

右腕の袖を捲り上げ、上腕に刻まれた赤い三画の文様を晒しながら、

「——サーヴァントを自害させろ、博麗の」

「楯、あんた……!」

犬走 楯はまだ、警告で留める事を、諦めきれていない様子であった。

黒影の英霊——ライダーは、遙か眼下に、二人の人間を見ていた。

その内の片方は、実は名前だけを知らされている——博麗 霊夢というらしい。自分が戦っている相手、セイバーのマスターとして参加している少女で、加えて自分のマス

ターの同級生だとか。

戦う術は持っているが、サーヴアントに対抗できる程では無いと聞いている。

知恵の程は——無いとは言わないが、まだ思考に隙が有る。

警戒の糸を張り詰めさせながら、肝心な所で緩めてしまったから、ああして“敵”と二人で、人目の無い所に取り残された。

加えていうに、壁も屋根も無い場所とは、これまた狙ってくださいと言わんばかりである。

「平和なんですなあ、今」

息も切らさず——呼吸などは不要な存在だが——ライダーは上空に留まっていた。

然し、目は敵セイバーから離さない。

いや、離せないというのが正しいだろうか。

速度ならば自分が、セイバーに明らかに勝っている。飛び、敵方のマスターである博麗 霊夢を叩き潰す事も、出来ないとは言わない。

だが、それを為した時、自分が無事である保障もまた、無い。

敵に背を向け、一つの的を狙う——その時、背後への警戒は、確実に薄れる。意識を割く割かないでは無く、視界から敵を外してしまう行為こそが失態であるのだ。

敵の手の内は、まだ読み切れては居ない。マスターを潰した次の瞬間、背後から刺さ

れないとも限らない——飛び道具の有無が、まだ分からないのだから。

敵を仕留めたとして、自分も消えるのでは、これはまるで意味が無い。

肝心なのは、勝ち残る事だ。

「まま、おかげでお互い、目の前に集中できる訳ではありませんが。でしよう?」

「……どいがー!」

対してセイバーもまた、ライダー敵から意識を外す事は出来ない。

飛翔の最大速度は間違いなく、ライダーがセイバーを上回る。初動で出遅れたものならば、ライダーが霊夢を狙うのを、止める手立ては——無いとは言わないが、少ない。

自分が打たれるならば、どれ程に打たれようとも構わない。一撃の重さで、十分に取り返せる。

だが、自分のマスターである霊夢が、ライダーに一撃でも受けた場合——まず間違い無く、挽肉が一つ出来る。

心理的な優位は向こうにあると、セイバーは感じていた。

ライダーは、霊夢を狙つても良いし、狙わなくても良い。狙えば隙が大きくなるが、それでもセイバーの剣から逃れ、そのまま戦場を離脱出来る可能性も十分に有る。

一方でセイバーは、ライダーがおかしな動きを取ったなら、僅かの猶予も許さずに止めねば、即座に敗北に繋がる。自分の武器は強大だと知っているが、それは「酷く取り

回しの利かない”ものでもあるのだ。

此処までの均衡は、自分をこの場所へ引きずり込む為だ——ようやくと、セイバーは悟った。

然し、それを知った時には、既にライダーは、自分への制限を一つ緩めていた。

ぐおう、と風が固まりになって弾かれ、それを追いぬいて、黒影が砲弾となって飛ぶ。先程までより数段も速度を上げて、ライダーはセイバー目掛け、正面から突っ込んで行く。

攻撃はやはり単調に、蹴りを繰り返すばかりであるのだが——その速度が、異常なのだ。

腹へ届きそうな蹴りをセイバーが受け止めると、その次の瞬間には、背後から頭を狙われている。

振り向きながらそれを防ぎ、逃げる脚を掴もうとすると、数mも間合いが離れている。

——化け物ならば、幾らでも知っているつもりでいた。自分以上の化け物となれば然程も知らないが、それも居た。然し——これ程の相手が、さて、どれだけ居ただろうか。いいや——怪物としての“格”であれば、セイバーの方が余程上であろう。

だがこの敵は、速度というたった一つの武器を縦横に振るい、そして老獺とも言うべき戦運びで、セイバーと互角に渡り合っている。

「……あんまり調子に乗るな……っ！」

それが、セイバーの苛立ちを加速させた。

勝てぬ相手では無い筈だという思いが、己への怒りを増幅させる。

誇りは人一倍のセイバーである。不甲斐無さに、齒噛みするばかりの怒りを抱き——それが、保身を忘れさせた。

「とっ捕まえて握りつぶしてやる……！」

「レディ面は仮面ですか……おー、怖っ！」

勝利は譲れない。その為に、*「賢い」* やりかたを捨てる。

刀を右手に、高く上段へ。左手は徒手にして、やはり高く。鬮が獲物を前に、両腕を高く掲げたかの如き構えとなり、セイバーは咆哮する。

もはやそれは、人の形をした生き物が取るべき構えでは無い——二つの足で立つ獣だけが見せる、怪物的なくさ姿であった。

「しい——いいいいああらああっ！」

接近。

まさに熊の爪の如く、開手の左手の、指先がライダーを襲う。

体ごとライダーは、セイバーの背面へ回り込もうとするが、既にセイバーの速度はそれに追い付くばかりとなっている。

これまでも、反応だけは間に合っていたが——更に防御の一挙動を排除し、ほんの一拍だけ速度が上がったのだ。

更に、用いる攻撃も、加速・速度ともに最大の振りおろし。

左手を避ければ、右手に持つ太刀が。立て続けにライダーの頭を狙う豪雨となる。

それに、ライダーも蹴りを返す。

幾つも幾つもの、槍の様に突き出す蹴り。

手数は明らかに、ライダーが勝る。

防ごうともしない為、セイバーの体に、ライダーの蹴りが面白いように吸い込まれるが——

「くっ……っ……いつは、またお転婆なお嬢さんです……っ」

セイバーは、止まらない。

耐久力と装甲に任せて、構わず前へ進み、ライダーに一太刀浴びせようとする。

一度轢退かぬと決めたセイバーは、正に字の如く不退転である。

衝撃を受け流そうと後退するのではなく、全く逆に、衝撃を正面から迎えに行く。

あたかもライダーの飛行軌道上に、壁が一つ生まれたようであった。

「よっ、ほ、お……うぬ、むう……!?!」

然もその壁は、己へと向かってくるのだ。ライダーは次第に、飄々とした態度を保て

ぬようになり始める。

脚に返る衝撃は、自らが放つ蹴りを大きく上回っている。

セイバーはもはや、ただ蹴りを受けているのではなく——伸びて来るライダーの脚に、体当たりを打ち込んでいるようなものだ。

当然、自分も無傷では済まないが——耐久力で競うならば、自分が優位と知っているのだ。

「そろそろ止まりなさいよ、羽虫！」

「ですから私は動かないと——っお!!」

遂にライダーは、自らの蹴りの反動で後退した。

蹴りの速度が生む衝撃と、セイバーの前進する勢いがぶつかり、後者が勝つたのだ。

速度がゼロになり、マイナスに——逆方向への移動に転じるその一瞬、セイバーは手を伸ばした。

指先が、ライダーの足首に引っ掛かった。

「取ったあー！」

万力を込めて、掴む。

引き寄せ、下降へ転ずる。

遙か高空から下へ、下へ——眼下に広がるライトの海へ、セイバーはライダーを引き

ずり込む。

目標は、霊夢が立つのとは別なビルの屋上。

足を地に付け、刃を振るう腹積もりで、セイバーは飛んだ。

一身を砲弾と化し、ライダーを道連れに地上へ突き刺さりんばかりの勢いで——

「……ああ、くっそ」

その、全力での飛翔が妨げられる。

セイバーは空中で、自分の力とライダーの加速が釣り合ったのを感じた。

均衡さえ、一瞬。

膂力で遥かに劣るライダーが、セイバーの腕を逆に掴み返し——制止し、再び上空へ

と帰って行くのだ。

圧倒的な腕力の差をも覆す暴風が、垂直に暗天へと昇って行く。

「……!?!」

「最初っから本気じゃやりたくないのよ、私は！ ああもう、本気を出すとろくな事が無

いんだから……!」

周囲の音が歪む。

ライダーは、セイバーを掴み、音を追い越して空へ舞いあがる。

遥か眼下の夜景が、雲の下に消え——月が照らす夜空へ辿り着いた時、セイバーは見



た。

月光を受けてさえ輝かぬ、一對二枚の黒翼。

夜天の光全てを呑み込んで、その翼は黒く、ただ黒く、在る。

奇しくもそれは、地上に立つ「主」の白銀と対を為すようで――

枷は、取り払われた。

『――  
『ラスト・ストーム  
風神少女』』

幾十万の夜を経て、幻想の空に風が返り咲いた。

## 五日目、放課後——Unknown Child.

腐れた檻から、汚水が滴り落ちる。

どろどろ、どろどろ、床に沁み込んで、やがては柱を腐らせる。

重量に耐え切れず屋根が落ちて、内にいる人を潰して殺す。

その咎は、誰に有る？

屋根に咎を負わせるのか、倒れた柱に負わせるのか。それとも檻の中、孤独に死して腐れた屍にか。

博麗霊夢ならば、自ら檻に入って死した屍こそ、悪であると断じるだろう。

けれど——

「アリス、行くぞ」

「待つて……待つて、アーチャー！」

——私には、決められない。

重圧を齎すばかりだった屋根だって、悪いだろう。

屋根の重さを支えるという、己の仕事を全う出来なかった柱だって悪い筈だ。

檻を家の中に放置した者も居るだろうし、誰かが檻を開けて、閉じこもる彼女を救い

だしていいれば――

「待たん!」

そんな事は全て、後の祭りの結果論だと、アーチャーは言うだろう。

彼女の手から放たれるのは、眩いばかりの光弾。

無詠唱から放たれる牽制の矢は、威力こそ低いだろうが――相手がアサシンならば、それで良い。

対魔力スキルを持たないアサシンと、高威力の魔術を主武器に用いるアーチャーは、極めて相性が良いらしい。防御の為に折り畳まれた蜘蛛脚へ、幾つもの矢が突き刺さった。

「おう!?! ……つたあ、そうか、そういう事をする子だったつけねえ!」

「覚えてくれてたとは重畳。前みたいにあっさり負けてくれよ」

「生憎と今度は『弾幕ごっこ』じゃないのさあ!」

セイバーに一撃を受けていたが為か、暗殺者アサシンの名に似合わず、動きは遅い。

……いいや、違う。元々、そうだ。

宝具の真名解放に伴って、私には彼女の名が分かった。それと同時にステータスもはつきりと見える。

敏捷性はDランク。能力の中で高いと言えるのは、筋力と魔力のBランクくらいのも

ので——それも、恐れるには値しないのだろう。

このアサシンの脅威は全て、宝具にある。

黒谷ヤマメ——“何とも分からぬ”妖怪の一人。

彼女の伝承を、真剣に探ろうとすればするほど、彼女の姿は分からなくなる。

とある文献には、心優しき少女として描かれている。

また異なる文献には、巨大な蜘蛛であるとも描写される。

人と蜘蛛を掛けあわせた怪物——アラクネーとしての姿を持つという伝承も有る。

病そのものであると綴った文献さえ、私が読んだ雑多な本のどれかには、記載が有つた。

共通項は二つ。少女の姿で現れるという事と——病毒を意のままに操るという事。

それ以外は、何が正しいのかも分からない。

邪悪な毒蜘蛛であるのか。

遠く昔の英雄に討伐された、巨大な土蜘蛛であるのか。

或いは土蜘蛛という伝承それ自体が、迫害された民族の喩であるのか。

地底に住まい、地上の人と触れ合おうとしなかった彼女の、根幹までを知る者はきつといえなかつたのだろう。

だが、彼女の宝具は、名前だけは知っている。

“フィールドミアズマ”——人間が恐怖する、病を撒き散らす呪い。

変貌し、死を張り巡らす結果として具現したのは、“彼女は蜘蛛である”という説が主流になっているからだろうか。

本来は“弾幕ごっこ”の中で披露される、華やかな技であったとも言おう。

書き記したのは霧雨魔理沙——生前のアーチャー。

幻想郷の、自分が見たあらゆる弾幕を記録しようという試みは、寿命の為に潰えたとも言いが、その試みの過程で記された一つだ。

過去の、それ本来の姿はさておき、この時代に顕現してしまった『ゲエンナ・フィールドミアズマ瘴気満つ大窯の底』は、正に蜘蛛の巣の如き罠。

アーチャーが解読した情報を纏めれば、“範囲内の魔力が弱い生物を、内臓を融解させて殺す”というものだ。

単純に魂を喰らうのではなく、物理的に損壊して、啜る。

悍ましいやり方を選ぶのも、効率的な魔力の補給の為なのだろうか。

効果範囲は——少なくともこの学校全体を覆っている。全校生徒、教員の、一人に至るまでを、古明地さとりは殺させるつもりでいる。

「……アーチャー……この結果で、人が死ぬまでの時間は!?!」

猶予は？ どれだけの猶予が、私達には有る？

「分からん！ 前に見た時は、一週間で半死人だと思つたが——今回は分からん！」  
 アサシンへと、光弾を機関銃の如く打ち出しながら、アーチャーはそれだけ言う。  
 計算外は、令呪。

サーヴアントへの絶対命令権にして、サーヴアントの行動を支援する魔力塊としても用いる事が出来る。古明地さとりは、アサシンの宝具使用を強制し、後押しした。

積み重なる人間——あれが無傷とは思えない。放置すれば一週間どころか、一日と待たずに死んでしまいそうにも思える。

——考えても意味は無い。

けれど、考える以外に何も出来ない。

アーチャーとアサシンの、二度目の戦いは、やはり人知を超えていた。

アーチャーが放つ光弾、その一つ一つが、既に破壊的だった。

牽制の為に、数発単位で乱射する弾丸が、校舎の壁を抉り取って行く。

それはまるで、決して堰き止められない濁流のようだった。

単発の単純な物理的破壊力だけでも、鋼板を貫くだけの力があるだろう。そんなものが、息つく暇もなく、延々と叩き付けられる。

「悪いが、今日は無粋で結構！ 急ぎで片を付けさせてもらおうぜ！」

「はっ、ご大層な口上だねえ！」

言い返すアサシンは、蜘蛛足と両腕で体を庇い、前へ、前へと出て行く。

その速度も、常人でしかない私にしてみれば相当なもの。人間大の物体が、自動車並みのスピードで突っ込んで来る。

「アリス、飛ぶぜっ!」

「飛——待っ、此処、校舎……!?!」

然し速度も、アーチャーが上。

アーチャーは私の腰を左腕で抱き寄せると、正面を向いたまま、後方に飛んだ。

「危なっ、後ろ見て、後ろっ!!」

廊下を真っ直ぐに突っ切って急カーブ——階段の手前!

このまま飛べば、段差に背中を思いっきりぶつける事になる。

「見てる、安心しろ——」星は赤に変われ、浮かべ、留まれ、燃えろ!」

間一髪、アーチャーの体は浮かび上がり、階段の傾斜に沿って、屋上へと飛び出して行く。

追って走ってくるアサシン目掛けて、アーチャーは詠唱し、赤く燃える球体を射出した。

速度は——私でも、見切る事は出来るだろう。

アサシンは軽く体を横へ動かし、火球を回避し、私達を追い続けて来る。

「逃すかい……いいや、逃げられると思うな！　まだ毒が回ってるのは分かっているさあ！」

階段を、段差を踏むのでなく、壁を手足で走り、アサシンは更に加速した。

元よりアーチャーに、逃げ切ろうというつもりは無いのだろう。それどころか迅速に、アサシンを仕留める必要を感じている筈だ。

今は、逃がっている。

けれども、逃げるばかりでは無いだろう。

戦う場所を選ぶとしたら、アーチャーが有利になるのは、広く開けた空間。対してアサシンは、校舎の中、壁と天井が近い空間を望む筈。

「星は雲に交われ、浮かべ、煌めき、鳴らせ！」

雷鳴——アーチャーの手から放たれた光弾が、アサシンに着弾した瞬間、雷鳴が轟いた。

小規模の雷と呼んでも良いだろう属性弾——光と熱が、アサシンを焼く。

倒れない。

然し、追いつけない。

アーチャーは距離を保ち、飽く迄も離れた場所から、アサシンを撃ち続ける。

冷気。



暴風。

岩塊。

多種多様の弾丸を、止め処無く、矢継ぎ早に。

それでも前へ——前へ、前へ、前へ。

「——おおおおおおっ！」

前へ。

アサシンは、止まらない。

正面から戦えば、勝ち目は無いと知っている筈だろうに。

隠れ潜むという己の戦い方を捨て、愚直に突き進んでくる。

何故？

隠れ潜み、力を蓄えて、戦うのはそれから良い筈だ。

その為に学校に巣を張り、生徒の命まで奪って——

——違う。

考え方の、順番が違う。

結果から無理に過程を導き出そうとしても、きつとこの場合、上手くないかない。

結果としてアサシンは、アーチャーの陽動に乗っている。

過程がどうであろうと——今は、それは、無駄な事だ。

「アーチャー……！」

「なんだ!？」

私達が叫んでいるのは、耳の横を流れて行く暴風と、それ以上の音を鳴らす、アーチャーの砲撃の為。

粉塵ではなく、校舎屋上のコンクリートを削って巻き上げながら、多種多様の弾丸が飛んで行く。

赤、青、黄、緑——あれらの一つ一つがきつと、高度な属性魔術なのだろう。

鮮やかで、華々しい。

魔術を知る者ならば、見惚れずには居られない筈だ。

単純にして明快な、一つ一つではただの光でしかない弾丸が、その数によつて美を生む。

これが、調和なのか。

いいや——「弾幕」だ。

私は今、「それ」が組み上がるのを見ている。

アサシンが耐え、弾き、躲した筈の無数の弾丸は、いつしかアサシンの後方で、四つの光弾へと集束している。

地。

水。

火。

風。

以前に見た「賢者の石」の五行とは異なる理——四大元素に基づく魔術。

熱と冷。

湿と乾。

四つの属性の多寡によつて振り分けられた性質の——

「……「統合」」

熱は冷と交わり、ゼロに。

湿は乾と交わり、ゼロに。

「大鍋を掻き混ぜて、零れた雫が空に残った。朝の内に涙を失くして、夜になったら星

になった」

火が水を殺し、水は火を殺し、地と風が相互いに己を飲み、力は無軌道に混然一体となる。

性質を剥ぎ取られた純粹な力だけが、光として、其処に残っている。

「寄り合わせても一つにならず、近付けたって溶け合わず、また一つ星が燃えた、燃えた端から落ちて行った」

詠唱。

一小節や一行程で発動する、簡易的な魔術ではない。

大魔法使い霧雨魔理沙が、数小説を以てして放つ——神秘の消えた現代に於いては、想像だに追いつかぬ奇跡。

並行し、魔弾の乱射は止まらない。

アサシンの脚を止めたままで、大魔術は組み上げられていく。

「燃えろ、燃えろ、はぐれ星」

「お……っは、こりやまた……！」

その力は全て、破壊の為に。然してその様は、単一の目的が為に  
研ぎ澄まされた形は、刃の持つ美のように。

一步、また一步、アサシンがアーチャーへと迫るも——遂に手は届かぬまま。

「like THE star, My life burnt——」

極光——夕闇が蒼に染まる。

きいいい。

アーチャーを取り巻く大気が、軋んだ。

「——無指向性の光」

詠唱が完了すると同時、私とアーチャーの周囲に魔力障壁が——並行して詠唱を終え

ていたものか——張り巡らされる。

次の瞬間、青い光が、校舎屋上に乱れ飛んだ。

アサシンの背後、収束した四つの光弾が、相互に溶けて混じり合い——熱も冷も湿も乾も無い、ただ大きさだけを持つ、無軌道な奔流と化している。そこから、幾条もの光が、無差別に屋上を薙ぎ払っているのだ。

「う、お———っ!？」

此処へ及んで、アサシンの一切の防御は、悉く無意味だった。

防ぐ腕を、防ぐ脚を、光の柱が削り取る。

善悪の区別無く、敵味方の区別さえ無く——無秩序の具現として吹き荒れる光。そんなものを、誰が止められる？

出来はしない。ただ、耐える事を許されるだけだ。

対魔力のスキルを持つ、例えばセイバーやアーチャーならば、この光を防ぐか、或いは無効化する事も叶ったかも知れない。

けれどアサシンは、その類の技能を、何も持ち合わせていないのだろう。

「ぐ、あ、ああああつ、つがああああつ……!」

削れ飛ぶ——腕。

千切れ飛ぶ——蜘蛛脚。

背後からの光に焼かれながら、それでもアサシンは、前へ出た。

最後の、本当に最後の一步までを、諦めようとせずに。

手を伸ばそうとする。

手が無い。

構うものかと、顔を突き出し、牙をアーチャーに突き立てようとする。

「……お前のしぶとさには恐れ入るが——」

その顔を、アーチャーの手が抑えた。

アーチャーの手は、四つの光球同様の、蒼い光を纏って——

「ば——馬鹿げてやがつ……!?!」

「——残念だ。イリユージョンレーザ幻想の光」

三重詠唱。

擬似声帯よりの同時高速詠唱により、攻勢魔術二つと防御障壁を、同時に構築し運用する。

無茶、無謀の果て、生まれた光は強く大きく、アサシンを呑み込んで、尚も広がって

眩いばかりの輝きが夜を照らして、ほんの一時だけ消し去った。

しん。

と、静まり返った。

「……………ふう」

魔術障壁が解除されて、私達に夜の風が吹き付けられる。

アーチャーは、たった一度だけ溜め息を吐いて、

「アリス、飛ぶぞ」

「えっ? ……うわ、あつ!」

すぐにまた、私を箒に引つ張り上げて上昇を始めた。

「ちよ……ちよつと、せめて止めさせたかの確認くらい——」

「逃げられたよ! 焼き尽くす寸前で階下に逃げた! 壁抜け出来る奴は厄介だな!」

「だったら尚更!」

前回もアサシンは、戦闘途中で離脱した。

奇襲と、それ以上に撤退に長けたサーヴァントという事だろうが、ならばこそ今、追

撃するべきじゃないのだろうか?

放置して体勢を立て直されたら、次もまた——

「ありやもう無理だ、治せるもんじゃない。……そのうち消えるよ、あいつは」

そう言つて、市街地へと飛んで行く私達の後方では、校舎を包んでいた魔力が霧散し、

消えていくのが感じられた。

結界宝具フィールドミアズマが破られた——確かにこの短時間ならば、喰らった数も少ないだろう。

人知を超えた、本来なら使い魔に収まる筈も無い存在を使役する奇跡には、相応の代償——魔力が必要となる。

サーヴァントが現界を続ける為に、また傷を癒す為に必要とする魔力を、何処から供出する？

「古明地さとりも、遠からず——死ぬ」

アーチャーは、ぞつとする程冷たく、氷像のように顔を凍り付かせて言った。

「……何故？」

「ちらとでも見たろ。霊夢の巫術で腕を飛ばされて、目も……あれを、治す考えも、もう無いだろうよ。」

大体にしてあいつは、*“あの毒の渦の中に、魔力障壁も無しに立ってた”*んだぜ？」  
「え——」

魔術師である私だとか、技術体系は違うが博麗の巫女である霊夢は、所謂*“劣悪な環境”*に対応する為の策を持つ。

その最も汎用的なものが、身体に魔力を流し、体表に薄い障壁として張り巡らす方法だ。



物理的な衝撃も、魔力的な干渉にも等しく対抗出来る手段で、防御力は薄くとも、例えば空気に毒ガスが混ざった程度なら防ぎ得る。

「——アサシンの毒は、自分のマスターにも」

「だから嫌われるんだ、地底の奴らは」

——なんてこった。

殺すの、殺さないのと、迷ったのが馬鹿馬鹿しくなる。相手は最初から、自分を殺す算段だったんだから。

傷から染み入った毒が、古明地さとりを侵し、殺すまでにどれだけの時間があるか——

ああ、なんてこった。あんまり無残な終わりじゃないか。

何処までも報われず、忌み嫌われたまま、仲間同士で傷つけ合う、滑稽極まりない悲劇だ。

でも。

「……そうなんだ」

自分の口から溢れる音は、あんまりにも軽かった。

自分で殺さずに済んで良かった？ 下手な良心の呵責が無くて？

目の前で狂う姿を見た時には、人並み以上の同情心を抱いたというのに——

いいや、哀れとは思ふ。

彼女が生んだ惨劇に、怒りも無論、抱いてはいる。

けれど私が、一番、本心から思ったのは、そういう事じゃない。

「……何故？」

好奇心。

そうまでして、彼女は何を求めたのか？

己の命に釣り合うだけの願いだったのか——それとも狂気が故に？

彼女の行動原理を支配するのは、己の狂気か、目的か、何れか？

「彼女の望みは、何だったのかしら。アーチャー……ああなつてまで望むものが、自分の

命以外に有るの？

誰かの命なのか、それとも物質的欲——執着？ 何に？」

私は、そんな事を “知りたくなつた” のだ。

その思いがいつの間にか、情を塗り潰して、何処かへ隠してしまっていた。

「……だから、戦うんだろ」

飛んで行く——夜空に星の尾を引いて。

私達は真つ直ぐに、雲を突き抜けて飛んで行く。

「じゃあ、アーチャー。貴女は？」

分らない。

望みとはそんなにも、人を狂わせるに足る程、大きなものなのか。

「さあな」

答えを知つてそんなアーチャーは、はぐらかすように、そう言った。

嗚呼。

気になる。

風が吹いている。

ひよう。

ひゅおう、と鳴つて、都市の夜景を見下ろし、窓から零れる灯りの間を抜けて行く。

ビル風。

近代的都市は、如何なる山野よりも複雑な、人工の迷宮である。

風は高層建築にぶつかり、上下に別れ、左右に切り離され——或いは重なり、或いは

ぶつかり合い、複雑な流れを産む。

ビル壁面を撫で下ろし、地上へ打ち付ける風。

窓の間を、強く、一方向へ流れて行く風。

気圧によつても、大氣の温度によつても——或いは埃、塵によつてさえ、その流れは形を変えるのだ。

その全てがライダーの——射命丸文の“道”であつた。

——ひよ、おう。

高層ビルの壁面に、無数の傷が奔る。

射命丸の翼が起こす風が、刃の如く、壁面を斬り付けたのである。

黒翼で風の道をつ掴み、ただの一時と減速せず、射命丸は飛翔し——

「……私が本気を出すつてのはね、よっぽどの大事だつて意味なのよ。分かる!？」  
突撃する。

形容するに、槍——いや、実態に速度が劣る。

弾丸——質量に不足が有る。

砲弾——良い例えだが、まだ物足りない。

それは、此度の聖杯戦争に参加する全サーヴァントに勝る速度と、人間一個分の重量を持ち、己の意思によつて軌道を変化させる兵器である。

辛うじて似たものを探すのなら——無人制御の戦闘機であつた。

もはや一個の生物と比較すべきではない。

地上からの放火を幾ら束ねても、上空の翼には届かない。

それが、彼女の武器であった。  
ぞうつ、と風が袂られた。

射命丸がセイバーの頭上へ迫り——次の瞬間には、遙か遠方より“向かつて来る”。  
接近し、抜ける瞬間、激流とさえ錯覚せんばかりの暴風が、セイバーに突き刺さる。

「くっ……い！」

セイバーの纏う防具は、戦いの為というよりも——己の素性を隠す為、という色合いが強い。

それでも、神秘に属する者が纏う防具である。強風、砂塵などで傷付く代物では無い。然し、“射命丸文が起こした風”となれば、また話は別だ。

それはまるで、四方八方から止め処無く投げつけられる剃刀のようなもの。

刃の一つ一つは、殺傷力は薄いが——どれだけを叩き落としても、次、またその次が、延々と身に降りかかる。

そして、受け続ければ何れは——

「があああつ！」

セイバーが吠え、刀を振り回す。

接近の瞬間、自分から迎え、体ごと激突しながらの斬を狙った筈が——刃は空を切り、そして刃が描いた軌道に、射命丸は後から割り込んできた。

「ほいさあつー！」

セイバーの顔面へ迫る、下駄と、足の甲。

「らああつー！」

左腕で払いのけながら、セイバーは眼前を、狙いも付けずに薙ぎ払う。

手応えは無い。

何処か、と迷うより先に、後方から、背を斜めに蹴上げる衝撃。

背後に回り込んだ射命丸は、セイバーを蹴りで、更に高く打ち上げ——翼の形を、変える。

「さーあさお立合いお立合い、つまらぬ世をば面白く！ 新報でも無い、号外でも無い、

一面を飾る写真も無いが——」

左右へ広げた、雄大な飛翔の形を捨て——ともすれば、小さく纏まってしまったような姿。

然し、このシルエットを、現代の人間は知っている。

先端は槍の如く、後方へ行くにつれて広がって行く、三角錐の影。

射命丸は、翼を後方へ流し、羽ばたく事をさえ止め、風を「斬る」為だけの動かぬ刃と変えた。

幻想の空を飛ぶのには、翼も、魔女の箒も、何も必要は無い。

そうでありながら、「最速」たる彼女が、重量物である翼を備える所以とは——偏に、より迅きが為。

奇しくも射命丸文が、幻想に属する「最速」が作った影は、近代技術の粹たる超音速戦闘機と酷似していた。

「——あら懐かしの難行スペル、ご覧遊ばせ『幻想風靡』！」  
ぎい。

軋みが、鳴った。

セイバーでは無い。射命丸自身でも無い。周囲に立ち並ぶビルである。

人間大の飛翔物が生む衝撃波が、瞬時に地上近くで膨れ上がり——  
ビル群の窓ガラスを悉く、破碎し、地上に雨と降らせた。

その戦いに、二人のマスターは、介入する余地さえなかった。

周辺の異常——破碎音、爆発とも紛う激突音が高速で移動し続ける——は、察知している。

然し、目を横へは向けられない。

そればかりか、たった一度の瞬きをさえ、行うのが恐ろしいと思える程の対峙。

博麗靈夢は、令呪を晒した左手の手首を、犬走椛に掴まれていた。

「……………」

二人は、無言で対峙していた。

何れから、何れが動くか。

動きがあれば即ち、戦わねばならないのだ。

椛が、己の令呪を靈夢に見せてから、此処まで、一分程も経つてはいないだろう。

だが、その短い時間だけで、周辺の環境が変わって行くのは分かった。

地上からの悲鳴——窓ガラスの雨に打たれる者達の声か。

或いは、ガラスの無くなった窓から吹き込む暴風に翻弄され、反対側の窓から屋外へ

叩き出された者達のか。

目にも映らぬ高速の戦いを、ほんの一瞬でも速度が緩んだ瞬間、目の端に映した者だ

ろうか。

日常が、崩れてゆく。

「……椛、あんたは何が望みなの」

「言う必要があるか」

「あるわよ、また仲良くやれるかもしれないし」

椛は、短刀を左手に、逆手に構えている。



劍の腕は——劍道をさせたのなら、相当なものであると、靈夢は知っている。然しそれ以上に、ただ劍を振らせる方が、型に嵌った技より余程手ごわい奴だ、という事も。

この距離は、瞬き一つの間、喉を抉る事が出来る距離。

靈夢は、何か、手を探していた。

「私はね、勝たなきゃ無いってだけなのよ。聖杯は私の目の届く所で動作しなければならぬの」

「そりゃ大した自信過剰だ」

「ありがと。……けど、私の目が届く範囲なら、あんたが聖杯を使ってもいいのよ」

靈夢は、まるで日常の雑談のような声の軽さで、椀に言った。

椀の二つの耳は、本人の顔より数段も分かり易く感情を表す。

今は——ぴん、と二つとも立ち上がって、靈夢の発した音が、自分が捉えた通りの意味であつたかを疑っていた。

「……本気で言ってるのか、博麗の」

「本気も本気。私はね、私の知らない所で、私の世界を勝手に作り替えられるのが嫌なの。あんたが私に断りを入れて、こういう変化をさせたいって言うんだつたら、その程度を譲歩してやらないでもないわ」

手首を掴まれたまま、然し靈夢は、椀に対し「譲歩する」という表現を用いた。

その意味する所を知らぬ筈は無い。自分が折れ、相手に譲るといふ表現を、敢えて選んだのだ。

「お前に譲ってもらわなくても、私がお前から奪うとは思わないのか」

「まだ持つてないものを、無理に奪い取れる訳が無いでしょ。それにあなたは、私を敵にしておくのと味方にするのと、どっちが得なのかは分かつてる筈よ。」

私を味方にするって事は、人間一人を味方にするって事じゃないの。サーヴァント二騎、魔術師一人、それから博麗の巫女を、自分の味方につけられるって事なのよ」

その通りであると心から信じているかのように、堂々と、霊夢は言った。

互いがどういう存在であるか——この二人は、良く理解している。

博麗霊夢という人間が、どれだけ力の自認に満ちて、実際にやつてのける生き物か。

犬走椛という妖怪が、どれだけ難物に見えて、実際に人が良い生き物か。

霊夢が、自分にはこれだけの力があると主張した場合、それは嘘では無く——これだけの事が出来ると言ったのなら、それは実際に行われるのだと、椛は良く知っていた。

椛が、なんだかんだと愚痴を吐いたとて、結局は他人の為に動くのが性に合う奴だと、

霊夢は良く知っていた。

「あんたが、私を殺せる筈、無い。私と手を組みなさい」

「……悔ると痛い目を見るぞ、博麗の」

手首を掴まれながら、優位にあるのは、霊夢であった。

それはほんの僅かの事——時間にすれば、二秒か三秒か、それくらいの事。

あまりに、友人の自信に満ちた姿がおかしくて、犬走権は思わず、視線を右手に反らしながら、軽く嘖き出すように笑っていた。

たつた、二秒か、三秒。

見逃す博麗霊夢では無かった。

——じゃつ、

と、音が鳴った。

霊夢の左手は自由となり、引き戻され、懐の札を探していた。

何が起こったか、知るまでに、さしたる労力も要らない。

霊夢は、飛び切りの符術を用いたのだ。

発動は、無言で良い。

だが用意には、何日も、何週間も掛かる。

聖杯戦争とはサーヴァント同士の戦い、"だけ"で決まるものではない。そう知った時から霊夢は、己の力を符に閉じ込めていた。

瞬間的に力を込めるのではなく、長期に渡って蓄積させた力は、サーヴァントにはまるで効果が無くとも、マスター相手には有効であろうと。

その一つが——椀の右腕を、肘の先から、斬り落としていた。

「なっ——ああがああああああっっ!?!」

驚愕は長くは続かず、痛みに狂う絶叫が、夜の空に響く。

『妖縛陣・斬鬼《さんき》』——たった三枚、完成が間に合った、戦闘用の切り符きりふだ。

然し、それだけでは止まらなかった。

片腕を失い、痛みに吠え狂いながら——

「つが、はあつ、ああああああつ!!」

左手に逆手持ちした短刀で、椀は霊夢の喉を、横薙ぎにせんと迫った。

「……あんたが飼いやせない事くらい、知ってんのよ」

小さく、ぼつりと落とすように。

或いは——寂しげに、霊夢は言った。

右肘。

椀の左手首を打ち、刃を取り落とさせる。

左掌。

椀の顎を、斜め下から打ち上げる。

そうしてふらついた椀の体へ、横へ足を突き出すような、重い蹴りを打ち込んだ。

三挙動の打撃は、ほぼ一呼吸で放たれた——相手を打つ事に躊躇いの無い技であつ

た。

そうして、建物の屋上に倒れ込む椀を余所に、霊夢は、己の左手に意識を向ける。

「令呪を以て我が眷属に命ず——」

僅か三画の絶対命令権——その力が、命が、告げられる。

「——その身に残る傷を癒せ」

高速の戦闘は、誰も見る者が無いままに佳境を迎えていた。

翼の形を変え、超音速の粹に踏み込んだライダーは、数十mの距離を往復しながら、繰り返し、セイバーを上空へと蹴り上げていた。

『幻想風靡』——宝具ではなく、これは技巧である。

絶対無比の速度を以て突撃し、擦れ違うように打を放って相手を浮かせ、落下するより先に再び追いついてもう一撃——これを延々と繰り返す。

並みの妖怪であるなら、初撃で既に、肉片と化している。

セイバーは、もはや怪物的とも言える動体視力で、かろうじて防御を行っていたが、無益であった。

防ぐ以外に、何も出来ない。

防御を緩める猶予さえ無い。

肉体の頑強さに任せてぶつかって行けるような、温い攻撃では無いのだ。

——危ない。

自覚は有った。

このままの戦術を取り続けるなら、遠からず、自分は敗北し、消滅する。

然し、打開する策が無かった。

魔術スキルは持ち合わせているが、高レベルでは無い。射命丸にはそもそも、傷をつける事さえ出来まい。

近接戦闘であれば勝ち目は有るが、『幻想風靡』はヒットアンドアウェイを繰り返す技。近接戦闘に、持ち込ませぬ為の技であるのだ。

逃げるにも、戦場を変えるにも、圧倒的な速度の差——何処へも行けはしない。

このまま打たれ続け、じわじわと、削り殺される。

元より体温も薄かった指先が、更に、冬の夜空と同じ温度に冷えていく。

それが自分の、もう一度の、終わりだと思った。

——その身に残る傷を癒せ。

「っ!？」

それは、本当に、何の予兆も無く、突如起こった言であった。

セイバーの手に、力が戻る。  
体に残る痛みが、消える。

この戦いにおける痛みだけではない——完治していなかった、魂魄妖夢の宝具による傷さえが、消えていた。

魔力も——満ちている。

力を、速度を、十全に生む為の魔力が、まるでこの地上に現界した瞬間か、それ以上に満ちている。

まるで、生きているようだった。

「はあっ——」

セイバーは、刀二振りをも、思い切り振り回した。

何に当てようというのではないが——敢えて言うならば、射命丸が一度抜けて行き、もう一度戻ってくる筈の方向へ、渾身の力を込めて振るつたのだ。

その振りは、紙一重の所で回避されて——ぞうつ、と空に怪音を轟かせた。

「うおおっ………！」

呻き声を上げて、射命丸が急停止する。

直撃していれば、あれで終わっていた——そういう予感が有つたのだ。

もしかしたら、たった一度、呼吸と力が完全に噛み合った、偶然の一閃であつたのか

も知れない。

けれどもあの剣閃を、仮に己が防ごうとしていたのなら、どうなっていたか。死んでいたと、信じられる。

実際にはそうならないだろう。これと狙わずの闇雲な斬撃は、射命丸文の速度を以てするならば、十分に避けられるものであった。

にも関わらず、射命丸の心に宿つたのは、恐怖であった。

「……あんた、なんなの」

そう、恐れていた。

「最速」たる自分に、反応しているだけでも驚愕に値するのに——まだ、潰れていない、死んでいない。

数百か、或いは数千の打を与えて、反撃するだけの力を残していた。

それが、令呪の助けを得て傷を癒し、万全の姿に戻つたのだ。

「あんた、なんだつてのよー」

「……………」

だが、恐怖を覚えていたのは、射命丸ばかりではなかった。

誰何に答えず、セイバーは、じっと己の手を見ていた。

恐ろしい、手。



力、速度、そんなものではなく——もっと、もっと、恐ろしい手。

“良い”とされる事は、何も出来ない手だった。

然し今、セイバーは、そんな手がある事を嬉しく思った。

「——承知したわ、マスター」

叶うならば真名は、例え霊夢にであろうと、聖杯戦争の最後まで隠し通したかった。

だがもはや、己の意地などは無益。

ならばせめて——この手を取り戻した霊夢の意に、最大に適う形で名乗りを上げるのだ。

勝つてやる。

己の力を、最大限に解き放つ事を恐れながら——セイバーは、刀を鞘に納めた。

「私に名を問うたわね、烏天狗」

「……っ、だから？」

そして、セイバーは、防具の一切も捨てる。

兜も胸当ても、身を守る為でなく、他の目を欺く為がだけの枷を捨て——己の姿へと、戻って行く。

月が照らす空は、真の暗闇では無い。青の混ざる、暗くも深い、光の舞台。

その中にたった一人、セイバーは君臨した。

「平伏して乞うがいい、そうすれば慈悲はくれてやろう。瞬間の死じゃあなく、遺言を残せる緩慢な死をやろう」

彼我の強弱、有利不利、或いは生前の立ち位置、今の関係性——全てを踏みにじるような、絶対的支配者の言葉。

彼女“達”は、総べる為に生まれたのだ。

他ならぬ非支配者がそう望んだが為に、彼女達の形は、そのように作られた。

優れた者に額づく幸福を。見下される快樂を。求められる陶醉を。

傲慢に満ちた舌から、一方的な支配を告げて、人を焦がれさせるのが彼女達であった。

「……否が顔に出ているよ」

翼が開く。

夜を駆けるのはお前だけではないのだと、布告のように開く、一對の翼。

それが、一つ煌めきを増す度に、セイバーの身に宿る魔力は、加速度的に膨れ上がって行く。

緑。

黄。

橙。

赤。

紫。

藍。

青。

並びこそ異なっているが、それは、虹であつた。

セイバーの翼には、虹を象つた宝石の如き光が宿つていた。

神々しくも、禍々しく——だが何より、美しい。

夜空に月よりも眩しく、我こそは一つの星座であると謳うかのように、彼女はたった

一人、君臨した。

翳す手にたった一降り、黒の剣を持ちながら。

そう、*「彼女達」*こそは、生まれながらの王。

畏れを集めて立ち、憧れを従えて去る。

世界が幻想を忘れても、ヒトが *「彼女達」* に抱いた憧憬は、決して薄れる事は無く――

『——*「紅く禍為す禁忌の剣」*!!!』

——かくして王命は告げられた。

紅の光が夜天を裂き、空へと立ち上る。

昏く、悍ましくも猛き、破壊的な力の具現たる光である。

たつた一条の光——さりとて最も根源的な感情、恐怖を、それは呼び覚ますのだ。

「あ」

射命丸は、己の持てる全速力を、ただ回避する事に注いだ。

真つ直ぐ空を駆け、何処までも遠く、セイバーから逃れる為に。そして実際に、紅の光に吞まれぬまま、飛んで行く筈であつた。

大気が、振じれ狂つていた。

紅の光は、遙か遠い空までに、一条の空虚を刻んでいたのである。

その空虚には、何も無かつた。

完全な真空——気体も、物体も、そこには何一つ存在しない。

故に大気は、その虚ろを埋めようと、暴力的なまでの衝撃を伴つて流入した。

いいや——その一瞬は、空間さえが歪み、流れていた。『破壊された』という概念は、有形無形を問わず、紅光の進路上に撒き散らされたのだ。

空間ごと射命丸は、光の中に吞まれた。そして光の中で、万物との差別無く、『破壊』され、消えて行つた。

やがて、紅の光は消える。

夜の王は、自らの剣を掲げ、夜の空に立っていた。

彼女の頭上の空だけは、暗雲を消し飛ばされ、地上へ月の光を届ける。

白く眩い光は、紅の王家を称える冠の如く、フランドール・スカーレットに降り注いでいた。

## 五目目——perverseness

遠い空に私は、鮮やかな紅の光を見た。

それは、闇夜の中から突如湧き上がって、雲を抜け、空の彼方へと消えて行つた。  
ほんの一瞬の眩さ。

夢とも紛う程の、刹那の光。

けれどもあの光を目にしたのなら、夢であるなどと、迷う事は出来ないのだろう。

私はなんの裏づけも無く、あの光こそは真実であると、心から信じていた。

「アーチャー。あれは、誰？」

「……………」

風を切つてカーチェイスのように飛んでいた箒が、今は暗闇をゆつたりと、ドライブを楽しむように漂っている。

アーチャーはもう、急いでいなかった。

その目は——捉えているのだろう。

数キロ向こうの空に在って、領土を睥睨する王の姿を。

眩き虹の翼と、禍々しき黒剣を携えて浮かぶ、紅い支配者の姿を。

「——綺麗」

そんな言葉が、私の唇から転げ落ちていた。

あの眩き姿を、心の底から美しいと思つて——けれど私は、近づいて、彼女に触れようなどとは思わない。

触れず、何をも加えず、眺めていたい。そんな思いが、悲しみのように、胸に湧きおこるのだ。

誰、と聞いた。

けれど私は、あの光を知っている。

数多の伝承の中でも異彩を放つ『七色の吸血鬼』——『インセイ・インセンス無垢なる狂気』『滅びの紅』  
『人食い宝玉』など、物騒でぞつとしない呼び名を、数十も抱える伝承の一欠けら。

「彼女が——『悪魔の妹』なのね」

この時に、私が抱いた想いを、どう表現したら良いのだろう。

驚愕というのは平凡に過ぎる。

喜びというのも安っぽい。

畏れと記せば、その質を誤る。

私は兎角、遠くに立って、君臨する彼女の姿を、じつと眺めつづけていたいと思つたのだ。

あの存在を取り巻く環境に、己を投入し、崩してしまいたくない。

決して見る筈も無かった『幻想の幻想』が、現代に在るといふだけの事を、見ているのが幸福だったのだ。

「素敵だわ」

——全く、どうして気付かなかったのか。

私は嘆息と共に、期待が胸の中で、無限に広がっていくのを感じていた。

私は、何だ？

己の道に沿い、己の基準にのみ従う魔術師だ。

神秘の潰えた世界の中で、残された神秘を掬い取りながら、過去の幻想（ユメ）に思いを馳せる人種だ。

その、焦がれる程に想ったものが、今はこの世界にある。

「アーチャー、貴女って素敵よ。セイバーも、ライダーも、アサシンも、ウォーリアーも、あの黒い鎧の英霊だって、とても素敵……！」

皆、どんな文献を漁るよりもずっと恐ろしくて強く、あんなにも美しく、不思議に満ちてるんだもの！」

聖杯戦争——なんと素晴らしい奇跡なのだろう。

そう気付いた瞬間、私の目に映る世界は、七色に輝き始めたようだった。



丁度、セイバーの——フランドールの翼に輝く、宝石達のように。

「知らなかつた事ばかりだわ！ きつとまだまだ、新しい事が待つてる！ それが聖杯戦争の間は、多分、ずうつと続くのよ！」

望みは無いと、私は言った。生きて聖杯戦争を終えられるなら良い、と。

けれどその望みは、今にして思えば、勿体無い事この上無い。

誰よりも近くで、神秘がぶつかり合うのを見られる。

このままに生きていければ、決して叶わなかつた望みが叶う——違う、既に叶っているのだから！

もう一度、私は、深く息を吐いた。

そして、寒気がする程の幸福に、そつと自分の体を抱いた。

「……お楽しみ所、済まないが、アリス」

そんな私を、夢から引きずり出すように、アーチャーは醒めた声で私を呼んだ。

「気が変わったんなら、あれをどうする。助けるか、放つておくか？」

「あれ？」

遥か高みではなく、地上にほど近い場所——具体的に言えば、ビルの屋上付近。

見なれた影が、二つ。

どういう訳かその二人は、屋上から転落しかけていた。

「……勿論、助けるわ！　アーチャー、飛んで！」

「あ、い、よ」

この数日で、私がこれほどに能動的だった事が有っただろうか。

けれども私は、答えを見つけたのだ。

死なせてはならない。

博麗霊夢を、死なせてはならない。

場所を同じくして、今にも死んでしまいそうな、犬走椋。

死なせてしまえば——あの奇跡が消えてしまうのだから。

空間が『破壊』され、突如出現した完全な虚空。

其処へ周囲の大気が流れ込んだ時、ビル街の上空には、暴風が吹き荒れた。

屋内に居れば、ガラスを失った窓から吹き込む風によるめく程の——そして屋外に居たならば、低く伏せていても、体が転がりかねない程の。

「くうっ……！」

霊夢は暴風の中、手足を水黽のように広げてつつぱり、転がらぬように屋上で耐えていた。

これは、余波でしかない。

セイバーが振った力の奔流、その数百分の一か、数千分の一か、その程度の余波が引き起こした現象だと、他ならぬ霊夢自信が理解していた。

——こんなものを、呼んだのか。

他ならぬ自分が。

賭ける望みに平穩を選んだ筈の自分が、呼び寄せた代物が、これか。

——甘かった。

参加者は七人、その枠は変わらない。ならば自分が一つ、埋めてしまえば良いという思いも有った。

超常の力を得た者に対し、同等の力で抗し、闇に葬る。そうして、日常に起こった変異そのものを、無かった事にしてしまえば良いのだ、と。

その考えは、甘かった。

抗うなど片腹痛い。自分が得た力こそが、平穩の敵だった。

“悪魔の妹” フランドール・スカーレット——幻想の歴史を紐解いて、“狂った”と絞れば一番か二番目に名前が上がる。

その力は、万物に等しく、“破壊”を齎すもの。

“ありとあらゆるものを破壊する能力”と、それを制御する事の出来ぬ狂気、更には

吸血鬼の身体能力、種族由来の特性——全てが揃って出来上がった、完璧な化け物が、彼女であった。

——今回の戦闘で、どれだけの被害が出た？

数えて見なければ分からない。

数えるのは、霊夢の仕事では無い。警察やらマスコミやら、そういう所がやる。

明日の朝か、遅くとも昼頃には、ガラスの雨に刺殺された人間や、風に巻き込まれて数十mを転落した人間の数が分かるだろう。

霊夢は、己に問う。

その数は果たして——自分が参戦する事で、救えた人間より少ないか？

アサシンを追い、校舎へ向かった。其処から連れ去られて、ビル街の上空での戦いとなったが——本来の目的であった、学校生徒の救助はなったか？

——使い方を誤った。

博麗霊夢は、漸く、本質に気付き始めた。

自分が与えられた力は、汎用性に乏しい。

無論「戦闘行為」に限定するなら、高速近接戦闘、或いは遠距離より宝具での狙撃と、多様な戦術を選べよう。

だが『サーヴァント：フランドール・スカーレット』は、攻撃以外の運用は叶わぬの

だ。

守る事は出来ない。

害する者を、先んじて破壊する事しか出来ない。

刃物や銃器と同じ——“これ”は狂気にして、凶器なのだ。

ようやくと風は止んだ。

ビルの屋上に立ち、霊夢は夜の地上を見下ろした。

遠く豆粒のように小さな人間が右往左往し、救急車とパトカーのサイレンがひっきりなしに鳴り響く惨事。

ああいうものには見覚えが有った。小規模の地獄が出来ているのだと知っていた。

そして——見下ろす霊夢の視界の端。ビルの縁に片手でぶら下がる、犬走椀の姿があった。

「……！ 椀、あんた！」

霊夢は、同世代の学生と比して、敏い少女である。

にもかかわらずこの時は、凡百の少女と同じように——彼女の名を呼び、駆け寄り、手で椀の腕を掴んでいた。

彼女が先程まで、霊夢に刃を向けていたのを忘れたかのように。

彼女の右腕を奪ったのが自分だと、忘れたかのように。

「動け、この馬鹿っ！」

人間一人の重量は、長く支えられるものではない。早々に引き揚げねばならないが、然し椀は、霊夢に腕を掴まれても、自分から這い上がろうとはしていなかった。

幾度も霊夢は、椀の名を呼んだ。

出血で顔を青ざめさせた椀は、気怠そうに目を閉じたまま、耳をほんの少しだけ動かした。

「……腹が減ったな」

授業の合間の、他愛ない会話のような口ぶりで、椀は言った。

「何でも食わせてやるわよ、だから！」

「あの菓子パン、本当はそんな好きじゃなくてな……やっぱり米と肉だ」

腕一本の重さが減ったとしても、椀と霊夢の体重差は僅か。汗ばむ霊夢の手の中で、椀の腕が下がって行く。

「腕にたっぷり、炊き立ての飯を盛って……肉は安いのでいい、フライパンにたっぷりと、タレの味しかしなくらいに炒めて……。丁度、ほら、お前の所で御馳走になったあれみたいにな……」

痛みに夢を見ているのか、そうでないのか。紅葉の目は開かれぬまま、何時かを懐かしむような口ぶりをしていた。

霊夢も覚えている——ほんの数か月前の事。

時間に余裕が有ったから、気紛れに招いて、二人で食材を買って、料理をして、食べた。

それだけの記憶。

だが、一つの思い出。

霊夢は、その過去を守りたかった。

「また死ぬ程作ってあげるから！ だから、まず登って来なさい！」

自分が直接見えない所で、きつと、何人も死んだのだろう——自分の失策で。

そしてまた、目の前で死なせるのか。

よりにもよって、友人を。

自分の「平穩な日常」を象徴する者を、死なせて良いのか。

「……あの時に言つたよなあ、いつか礼をするって……今日がきつと、その時なんだろう」

「そうよ、とつとと上がって来なさい。私だってお腹が空いてるの！」

霊夢は、引き上げる腕に重さを感じた——椀が左腕を曲げて、体を持ち上げたのだ。

そうしなければ、ビル風に紛れてしまいそうな程、椀の声は小さく掠れて行くが——

「贈り物だ、博麗の」

——それでも最後に、犬走椀は、はつきりと言ったのだ。

腹が減ったと、戯れのように言った口をそのままに開き——靈夢の左手、令呪が浮かんだ手に、椀は鋭い牙を突き立てた。

「——っ!？」

皮膚を貫き、薄い肉も通り過ぎて、骨にまで届く、白狼天狗の牙。それは、針の鋭さと鈍器の衝撃とを併せ持つ、火の如く激しい痛みを呼び起こした。

靈夢は、反射的に手を引こうとして——だが、手を離しはしなかった。

手の肉を、ともすれば骨を貫いて砕きかねない椀の牙も、意を固めた靈夢を曲げられはしない。

だが椀は、靈夢の手にがっちりとかみついたまま——ビルの壁面を足で押し、落下していかうとする。

蒼白になった臉が開いた。

その下の目は、靈夢に、こう言っているようだった。

——甘いんだよ、私達は。

そして二人の体は、地上へと向けて転落し——

ざんっ。

空中で、犬走椀の首は、胴体と別れを告げた。



そして霊夢は、アーチャーの箒に拾い上げられてビルの屋上へ舞い戻る。  
セイバーは、刀身に残る椀の血を指で拭い——舐めて、啜った。

夜中に目を覚まして、自分が孤独だと感じる事が、子供にとつてどれ程恐ろしいかを知っているだろうか。

ベッドの暖かさから抜け出して、誰か頼れる者を探し求める時間の、心細さを知っているだろうか。

暗い部屋の中——灯りのスイッチが何処にあるかも分からない。

仕方がないから、窓から差し込む薄明りを頼りに、冷え切った廊下を裸足で歩くのだ。

ぺたん。

ぺたん。

足音がする。

すうう。

はあ。

呼吸音がする。

どちらも自分のものだと知っている。だが、そうでないかも知れないとも思ってしまった

う。

違うんだよと言って、抱き締めてくれる人がいない。

——寒い。

ベッドに戻って、温もりの中で、また朝が来るのを待っていたい。

けれどもそれ以上に——

——さびしい。

一人は、こわかった。

誰か、抱き締めてくれる人がいないなら、朝が来るまで眠りたくはなかった。

でも結局、眠さに耐えられなくて、孤独に震えながら、意識を手放す。

眠りに落ちる瞬間まで、心の中で、誰かを呼びながら。

「——、っ」

自分がほんの小さな頃の、悪夢。その中から抜け出すように、リグル・ナイトバグは目を覚ました。

時刻は、二十三時。日によっては目を覚まししている時間帯だが、今日ばかりは、帰宅して直ぐにベッドへ潜り込んだ。

夕食は摂っていない。使用人にも、部屋へは近寄らせなかった。

彼女が暮らす館は、かなりの広さがあり、また古い館であった。幽霊話の一つや二つ

が眠っていてもおかしくないような洋館——玄関ホールには大きな柱時計が有るが、それも使用人が毎日時間を調節する類のアンティーク。

夏は暑く、冬は寒い。私室にはクーラーがあるが、朝方や深夜の冷たさはどうにもならない——そういう館が、リグルの住居であった。

目覚めるなり、リグルは、廊下を走ってトイレに駆け込み——吐いた。

腹には殆ど食物が入っていなかったが、胃液を吐いて喉を傷めた。

「つは、あう、……うえっ」

吐くものが無くなっても、吐き気は収まらない。

それどころか、苦しきで意識が鮮明になるにつれ、余計に胸を焼く痛みは増す。

——見捨てられた。

その事実が、眠る前も、目覚めた今も、リグルの中で反響を続けているのだ。

何が起こったのかも分からぬまま、あの場に連れて行かれた。

認識が間に合ったのは、急に倒れ始めた同級生やら、上級生やら、教員やら——兎角、学校に居た者の大半が倒れる姿。そして、その中を歩く——

——あれは、確か。

知っている。同級生の、古明地さとり。

上級生の河城にとりと親しいという事も、それ以外の生徒と会話する機会が少ない事

も、知っている。

何処に住んでいるかも、家族構成——天涯孤独である事も、知っている。

その彼女の元に、何処から現れたか、“妹”が住み付いた事も、知っている。

妹の名前は、古明地こいし。

夜の校舎で、博麗霊夢とアリス・マーガトロイドが遭遇し、“なにか良く分からぬ存在”同士で交戦した事も知っている。

そう。全て、リグル・ナイトバグは知っていた。

烏天狗の俊足より、更に効率的に情報を知るものは何か。

それは何処にでも居て、何処にでも入り込み、そして誰よりも数が多い——蟲である。

昆虫と言わず、節足動物と言わず、有象無象、雑多の蟲。

それらの声を、ナイトバグの一族は、聞く事が出来た。

だから知っている。

博麗霊夢が呼び出した存在が、セイバーと呼ばれている事。人知を超えた力を持ち、今は四六時中、霊夢の近くに居る事。

北白河ちゆりとなる少女が、その実は“霧雨魔理沙”なる過去の人物である事。

それらを含む、合計七組の存在が、最後の一組になるまで争おうとしている事。

所詮は蟲の盗み聞きだが、リグルは知っていたのだ。

つまりは、自分を襲った蜘蛛の如き怪物が——博麗靈夢の敵であり、古明地こいし、いや古明地さとのり従者である事も、今になって考えれば理解出来る。

然しそれは、頭が冷えてからの事。

捕まり、盾として晒された時は——恐怖に勝る感情は無かった。

それでも「知っていた」から、安堵はしていたのだ。

古明地こいしの従者は、靈夢の従者に、戦力では劣る、と。

だから目の前に博麗靈夢の姿が有った時、怯えながらもリグルは、自分が助け出される事を信じていた。

——見捨てられた。

幾度目か、えずいて、もう唾液さえ零れない。

喉が乾き切つて、やっと吐き気が収まり、喉の渴きを覚えた。

ふらふらと廊下に出て、厨房へと歩く。

日中ならば、擦れ違う使用人の誰かに、水を持って来いと命じれば良かった。この時間であれば、起きているのは一人か、二人か——それも一階に居るだろう。

こうしてみると全く、自分は一人だった。

平時は鬱陶しい程に世話を焼こうとする使用人が、必要な時には、姿さえ見えない。

噂話を聞きたいと集まってくる者は多いが、この時間に電話やメールをして、嫌な顔

をしない友人など居はしない。

血を分けた親族など、とうにこの世に居ない。

冷たく長い廊下を、裸足で歩く。寒さが背を遡ってきて——身震いしながら、やっと厨房に辿り着き、戸棚を開けてコップを手にした。

その時、だった。

「——お一つ、いかが？」

背後から、声。

ぞつとする程に冷たい、心の無い声。

「——っ!？」

違う。心はある。それが酷く捻じ曲がってしまっているだけだ。

厨房にテーブルと椅子を持ちこみ、皿をグラスをふんだんに並べて、古明地さとりは夕飯を楽しんでいた。

殆どの皿は、ただ置かれているだけ。

だが、二つばかり、何の肉とも分からぬステーキが、何とも分からぬ赤いソースを注がれておかれている。さとりはそれを、ナイフとフォークで小さく切り分けながら、口へ運んでいるのだ。

グラスを満たすのは、ワイン。古風な館に相応しいビンテージ物を、惜しみなく注い

でいる。

酒の味は——分かるのやも知れない。さとりの挙動は一つ一つが、いやに様になつていた。

音も無くナイフが滑り、分厚い肉の塊を切る。すると、程良く赤身の残つた断面から、肉汁が溢れ出して皿に広がる。だが、そういう味のある部分に拘泥するでも無く、さとりは静かに、肉をフォークに突き刺す。

そして時々、ワインに口付ける。館に置いてあつたのは白ワイン。赤と白に拘りは無いのだろうが、さとりはそれを、水でも飲むように、苦も無い顔で飲んでいた。

それはまるで、威厳をさえ通り越し一種の荘厳ささえ醸し出していた——

古明地さとりの左右の眼窩から、眼球が全く抜け落ちてゐる事をさえ除けば、であるが。

「ひっ……!?!」

「上等の鳥のステーキよ。私の最後の晩餐だもの、一緒に味わつて頂戴……ねえ、リグルちゃん」

リグルはたじろぎ、手の中のコップを落とした。水を酌む前のコップは、こつんと軽い音を立てて床にぶつかる。

その時、厨房に灯りが灯る。

テーブルの上に燭台が置かれていて、その蠟燭に火がつけられたのである。

火をともしたのは、背中から蜘蛛の如き足を生やした、腕の無い女——「アサシン」のサーヴァント、黒谷ヤマメであった。

「あ、あなた、なんで——」

「……そう驚かなくておくれ、取って食いはしないさあ。あっちの連中も見ての通り、ちやあんと生きてるしね」

無い手の代わりに、蜘蛛脚で示す先には、館の使用人が寝かされていた。

白い糸で四肢を縛り上げられ、口には布を嚙まされ——だが、傷はつけられていないように見える。

人数は——六人。夜番二人だけでなく、止まり込みの四人まで、此処へ運ばれていた。「死ぬとしたら私達よ、だから最後に呪いに来たの。きつと貴女に相応しい贈り物よ」さとりは、椅子の音を鳴らさずに立ち上がった。

口を拭ったナプキンは、皮肉たつぷりに畳んで椅子に置き、リグルへと近づいて来る。

テーブルを回り込んで歩くさとり——足音の硬質さは、靴を履いていると見える。歩みは極めて遅かったが、リグルは逃れられず——アサシンに肩を押され、椅子に座らされた。

「呪い、つて——なんなの、それ」



「貴女の絶望を、撒き散らしたいの」  
動けない。

蜘蛛脚で背後から抑え込まれ、リグルは椅子から腰を浮かせる事も、腕を動かす事も出来ない。

額を突き合わされても。

空洞の眼窩で覗きこまれても。

そして、誰かの血に濡れた唇が、唇に重ねられても――

『――terrible souvenir』

古明地さとの精神が、記憶の中に踏み込んでも。

さあ、始めましょう。

狭くて暗い館を離れて、もつと広く、もつと暗い、貴女の心の中へ。

人は誰しも、自分をさえ理解できないもの。妖怪だって精神の在り方が、遠くある訳じゃないでしょう？

呼び起こしてあげる。

貴女の心の闇。

眠らせて、見ないふりをしていた、どす黒い貴女の色。

——私には。

そんなものは無い、つて？

違うでしょう、リグルちゃん。此処に立つとなんでも見えるわ。

貴女は本当に虫なのね。自分の意識が生まれた時、親の姿はもう無いの。

そして家来に傳かれて、当たり前のように女王として育っていく。

巢も、生業も、自分で作ったものじゃないけれど、自分のもののように扱える。それだけの力も引き継いでるのだから。

それも、女王だから当然と、思っているでしょう？

はつきりと言葉にしなくても、それが貴女。

——私は、そんな事。

貴女はとても恵まれている——皆が、そう思ってる。

大きな家、お金、無条件に頭を垂れる従者。何処から仕入れるのかは知らないけど、無限に集まる情報。きつと一生、喰うに困らないんだらう生活。沢山の友達。

それに比べたら、身内が無いなんて些細な事——

——違う！

ええ、そうよね……違うわ。

失うのは辛い事。持っていないのも、きつと辛い事。

ただど殆どの人は気付いてくれないの——自分の方が恵まれないと思ひ込んでるから。

だからでしょう、貴女に友達が少ないのは。

表面的な交友は有つても、向こうが貴女を友達と思つても、貴女が周囲を友人だとは認めなかった。

——……でも、だつて。

思ひ出しているのね？ あつちにも、むこうにも、見えるわ。

人の輪の真ん中で、貴女は楽しそうに話している。

なのに、ほうら！ 放課後、その輪の中に、貴女だけがないの！

彼女達は遊びに行つた……けれどその前に、貴女を誘つたのよ。貴女は自分から、彼女達との交わりを断つた。

孤独だ、孤独だと悲しむくせに、貴女はそうしてきたの！

——……だつて！ あの子達は……！

分かつてくれないから！

そうよね、よく分かるわ！ だつて私も同じだつたもの！

あの子達がどんな優しい言葉を掛けてきたつて、私には何も響かなかつた。貴女もそ

うなんでしよう？

“可哀想な子”として接してくるのが疎ましい。

“同情する私”に酔っていて、肝心の私“達”が大事な訳じゃない！

……そうやって拗ねながら、でも表は綺麗に整えるのが貴女。取り繕わなかったのが私。

——あなたと一緒にしないで……私は、

『同じ人を見つけたから』。

その思い上がりは、貴女をどれ程の幸福に導いてくれたかしら。

きつと貴女の中で彼女は、最初の予定よりも大きくなつていった——大きくなり過ぎた。

……ほうら、見えてきたわ。

最初の出会いは、四年前。本当に偶然の、どうでもいいような出会いね。

けれど貴女は、近隣に、博麗の巫女が住んでいる事を、その時に知った。

それから——彼女がつい最近、天涯孤独の身の上に“堕ちた”事も！

貴女にとってそれは、酷く都合の良いものだった。

——私じゃない……私は、何もしてない！

知っているわ、事故だった。

……ふふ、私は貴女の心を見ているの。そんな勘違いはしないわよ。

あの頃の彼女は幼い子供で、それが、目の前で母親を失った——交通事故で。

ただの子供なら、泣き喚いたでしょう。なのに彼女は冷静に、事故現場で、無関係の子供が道路に出ないように抱き寄せてた。

そんな話を聞いた貴女が、博麗霊夢に興味を持って近づいて——惑わされるまで、その時間は掛からなかった。

——あなたは、間違ってる。一方的に言うだけで……間違ってる！

——確かに、出会いは偶然だった。霊夢先輩がお母さんを亡くしたのを後で知ったし、それから親しくなった。

——けど、それは！ それは霊夢先輩が、他の誰でもない、私を近くに置いてくれたからで……

いいえ、博麗霊夢は完全な平等主義者よ。

……違うわね、平等ではあるけれど、特殊な平等。彼女は与えられた好意に、適切な好意を返すだけ。

超然とした彼女を畏れるなら、彼女から害を為す事は無い。

踏み込んで触れようとするなら、歳相応に毒も見せるし、軽口だって叩く。

そして貴女みたいに、過剰に好意を見せる相手を——無碍に扱う理由が無いって、そ

れだけなの。

そう、貴女はたんに、「周りよりマシだっただけ」の一人に過ぎない！

博麗霊夢は、貴女だけじゃない、誰にだって偏見を持たずに接する。貴女だけが特権を与えられていた訳じゃあない！

けれど、他に踏み込んでくる誰もいないから、四年間をだらだらと、隣に立っているつもりで居ただけなのよ。

所詮は、ただの交友関係。

命に係わる利害関係とは比べ物にならない。

……だから、アリス・マーガトロイドと、あのセイバーって子に負けるのよ。

——……っ!!!

自分の領域が侵された。それが貴女には耐えられない。

自分のモノが奪われた。それが貴女には許せない。

貴女は虫の女王だものね、与えられるのが当然の。

その傲慢が孤独を産んだ。

傲慢を苦に思わない博麗霊夢に惹かれて、でも、平等に扱われ——優先順位をつけられて、捨てられた。

貴女は優先されなかつた！

——…う、あ。

勿論気付いていたのよね!? 誰が悪いと言ったら、自分が悪いんだって!

同じ境遇の仲間だと勝手に決めつけて、それに依存しきって、他の関係は杜撰に扱った自分だって!

でも今更、途中でやめられない!

何年も掛けて作った自分の一切合財、間違いでしたって曲げられるんだったら苦労は無いわよねえ!

どうするの?

もう博麗霊夢が、貴女を一番にする事は無いわ。

あの時、彼女の中で、貴女は終わったの。貴女は不要物として切り捨てられた。玉座を追われた哀れな虫の王様!

二度と手に入らない願いを、涎を垂らして見つめるだけ! ところで、ねえ、気付いてる?

私の声の色、私の姿。それは本当に、貴女が思う私?

長らくおつきあい頂きありがとう、リグル。

私の名前は、"リグル・ナイトバグ"。

貴女に素晴らしい呪いを持って来たわ——

「——あああああああああああああああああああつっ!!!」

そうして、夢が醒める。

「——告げる」

唇を重ねたまま、古明地さとりが発した声——それは、酷く籠つて、また弱く掠れていた。

彼女の喉は、切れ味の良いステーキナイフに切り付けられ、空気と血を零していたのだから。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

詠唱は、さとりの喉から発せられた音であつたが——同時に、リグル・ナイトバグの唇が、その形を作っていた。

唇と唇を触れさせ、片方の為す動きを、片一方に強制する、物理的な魔術トレース。無論、このような手を用いて、魔術の素養の無い者に、術を行使できる筈が無い。

だが——今のリグル・ナイトバグは、違う。

古明地さとり、覚の力は、対象の記憶の内にあるものを、限定的にはあるが具現化する。



さとりは、自らの体内にある「魔術回路」を、丸ごとリグルの体に「想起」していた。本来、幻想郷には存在しない筈の「魔術回路」が、妖怪の異形の神経系と癒合し——動作を始める。

「『誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者——』」  
リグルが咄嗟に手にしたステーキナイフ——曇り一つ無く磨かれた柄を伝つて、血が、床に滴り落ちていく。

その血は、アサシンが床に張り巡らした糸を伝い、何時の間にか魔法陣を描いていた。そして、その陣の中央に、アサシンは居た。

まるで自らが、術式の供物であるかのように。

「——汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」!!!  
血の橋を引いて、唇は離れた。

最後の一節は紛れも無く、リグル・ナイトバグ自身が、自らの意思で告げたもの。陣を通じ、そして聖杯を通じ、流れ出す光の中で——  
ず、るうっ。

「——がはあっ……!」

アサシンの腹から、腕が突き出ていた。

それは、小さな、赤子のような腕だった。

丸く柔らかい手の甲、薄い爪の、幼い手であつた。

それが——みるみるうちに、育つ。

赤ん坊の手から、幼児の手に。

幼児の手から、少女の手に。

そして、アサシンの体を——内側から、引き裂き始めた。

ざぐつ。

ぶつつ。

引き千切られ——崩れゆく、体。

その肉は、アサシンの腹に開いた空洞の内へと引き込まれて行く。

喰われている。

アサシンは内側から、少女の手に、食われているのだ。

「おお……つ、は、あ、つははは、は——」

腹を開かれ、足も食われ、胸と頭と、それから蜘蛛脚が一对だけ残つて。

その形を保てぬようになったアサシンは、粒子となつて消滅を始める。

「——たぁんとお食べ、いい子だ」

最後の瞬間、アサシンは——己を喰らい生まれた忌み子を、蜘蛛脚で優しく撫ぜ、そして消えた。

慈母の如き笑みを浮かべ、安らぎに包まれて、暗殺者は逝ったのだ。

「問おう」

そして、忌み子は立った。

リグルと同じ程の背丈の、そしてアサシンよりは少し血の通った肌の色の。

少女は、古明地さとりの亡骸を抱いて座るリグルの前で、恭しく頭を垂れた。

「——君が、私のマスターか」

## 六日目、明け

何にも代え難く、美しい瞬間がある。

それは、決して留まらないが為に、永く触れる事は叶わない。

だが、この瞬間を永遠にと、願ってしまう程に——目を、心を、奪う。

それは、「境目」だ。

何かから、何かへ、世界が非可逆的に変化していく刹那こそは、正に何にも代え難きもの。

雨が川へと落ち、やがて海に辿り着くように。

花が咲いて、散るように。

人が生まれて来て、何時か死ぬように。

流転こそ、美。

留められぬからこそ、貴きもの。

何時か醒めるからこそ、愛おしき、幻想。

——夢を、見ていた。

それは、遠い昔の事。

歴史の中に閉じ込められ、物語となつてしまった、過去の記憶。

後世の人間は、その悲劇性を愛し、涙する事を楽しみ、仰々しくも言の葉で弄んだ。だが、事実は単純で、それ故に残酷。

彼女は、抑えが利かなかつた——それだけだつたのだ。

一人の少女が居た。

貴く、強い血の下に生まれながら——彼女は生まれついて、  
“狂つて”いた。  
愚かであるなら、ただの狂人として朽ち果てただろう。

けれど彼女は、極めて敏かつた。……或いは、彼女を取り巻く誰よりも。

思考の速度は極めて高く、自らの舌が追いつかぬ程。

発する言葉は混迷を極めたが、然し自らの中の秩序には、完全に則つていた。

舌が間に合わぬなら、どうすればいい。

自らの言葉を、誰も秩序として受け取らない。どうすればいい。

そんな問いに“彼女”は、“自分がもう一人いれば良い”と結論を付けて——何時の間にか彼女は、自分の姿をそっくり映した影と、日夜問答を続けるようになった。

眠り、目を覚まし、喰い。その間、引つ切り無しに問い続ける。

そも己が問うのは、問わねば己が成り立たぬという厳然たる事実が故の行為であるのだ。

僅かにでも疑問を抱いたとして、その疑問を解かぬままに生きて新たな疑問を積み重ねる事は、やがて真実を覆い隠す虚偽の瓦礫に埋もれて死ぬ事と同義。然らば虚無の蓄積に励む愚行を遠ざけて賢明なる事に努めよう。

諦観傍観の一切は無益思想。健全に。思考せよ、現身の我。

結論を求めるに過程の用不用を導き出すは数百年を遅れて巡る知的遊戯のムーブメント。現在必須と言えようものは即ちリザルトに他ならぬ。

我は、正常の一個である。

正常と異常の境界とは即ち、世界の“常識”の中にある。

周囲から外れていれば、つまり異常。周囲と等しく在れば正常。

然し我が世界とは、小さな館の一つに過ぎぬ。意思を持つ四個と、同じく意思を持つ我とが構築する五つの思想の集合体にしぐぬ。

その集団がこぞつて我を狂と見なしたとて、集合体の二割が否を唱えた常識を疑わぬ事こそ狂ではないか。

増してや我は一個にして、四個の知性に分ち得る者。四と四が対立したなら、道理

は平等におかれる筈では無いか。

それらの思考全てを評し、周囲は彼女を、狂っていると云つたのだ。

彼女の何が狂っているかと言えば、己の狂気を自覚せず、自らは正常であると信じていた事だろう。

狭い世界の中で育ち、それは終に改善される事が無かつた。

理解されぬ事に怒り、癩癩を起こした。

それが理性的な行為でないと気付けば反省し、心から詫びた。

全てが全て、彼女の中の道理に基づいた行為でありながら——誰にも彼女は、理解される事が無かつた。

理解されぬからまたフラストレーションを溜めて——そんな事を繰り返しながらも、良くなるでいたのだ。

人と触れ合い、広い世界を知つた。

世界は広く、たかだか数百年の思考遊戯程度で計り知れるものでは無く、彼女より賢い者は幾らでも溢れていた。

だから彼女は、その生のうち数十年程は、平和に生きていられたのだ。

然し彼女を取り巻く環境は、あまりにも早く流れていく。

数百年を経て、彼女はやっと、大人になった。

彼女が親しんだ人間は、数十年で、老いて死ぬ。

ほんの気紛れに数年、地下に閉じこもった事が有った。

久しぶりに外へ出た時、己の名は忘れられていた。

そうしてまた、彼女は安定を失っていき、やがて――。

やがて、その空の下に、辿り着く。

博麗霊夢は夢を見ていた。

誰かの生に寄り添い、その生を追いかけて行く、奇妙な夢。

数日前も、こんな夢を見た。

サーヴァントとマスターは、魔術的に深い繋がりが有る。魔力をつつがなく供給する為のパスが、時折だがこうして、意識まで共有してしまうのだろう。

原理は分からねども、霊夢は「そういうものなのだろう」と思いながら、自分が夢を見ているという自覚の元、セイバー――フランドール・スカレットの生を見ていた。

彼女の孤独、彼女の孤立を、早回しの映像を飛び飛びに見るように追いかけて行く。

周囲が、ある時は怒り、ある時は苦悩しながら、フランドールを説き伏せようとする姿に触れる。



靈夢にはまるで理解が及ばなかった。

フランドールは何故、自分が正しいと信じつづけたのだろうか。

周囲が正しく、自分が間違っているかも知れないと、一瞬でも考えなかったのだろうか。

“世間”とは“常識”とは、常に多数派が構築するものである。

そして世界は、多数派を優先するように作られているものだ。

秩序もまた、多数派が定めたルールに基づく。

少数派を顧みる事は、秩序の維持には繋がらない。

意見・利害の対立が見られた時、多数派の守護者と成る者——それが秩序の担い手、博麗の巫女であると、博麗靈夢は信じていた。

だから彼女には、フランドールの思いが分からない。

自分と世界が食い違った時、優先されるべきは世界だ。

フランドールにとつての世界とは、或いは幻想郷であり、或いは自分を中心とする小さな集団——紅魔館である。靈夢の見解としては、フランドールはそれらの為に、自分を抑えるべきであったのだ。

だが、そう出来なかった。

靈夢は彼女の目を通し、彼女の世界が崩れていくのを見ていた。

切つ掛けは——ほんの小さなもの。

些細な言い争いであつたかも知れないし、もしかすれば、思考が行き詰つた挙句の癩癩であつたかも知れない。

だが、理由はさておき、フランドールは激昂したのだ。

誰かが彼女を止めようとした——それには些かならぬ実力行使が伴つただろう。

然し、誰がフランドール・スカーレットを、力で大人しくさせられたらどうか。

その頃の紅魔館は、人間や妖精を、従者として雇つていた。日々の雑事をこなす者達だが——彼女達が束になつたとて、僅かにも止められるものではなかつた。

寧ろ、抵抗する力を受けるごとに、フランドールは狂つていった。

彼女の道理の中で、彼女は完全に正しかつたのだ。

だのに周囲の全て——世界の全ては、彼女を妨げる。

要か、要か。

この世界は、留めるに値するか。

いいや——要らない。

こんな世界など、別に——

それから先は、フランドール自身さえ、覚えていないのだ。

夜空が赤く燃えていた。

大地が紅く焼けていた。

形を留めぬ屍が、いくつも、いくつも有った。その全てが、フランドールの記憶に有る顔で、記憶に無い行為であつた。

屋根も壁も、彼女を封じ込める筈の一切が無くなつていた。

フランドールの世界は、フランドールの力で「破壊」されていたのだ。

——こんなことは、違う。

嘆いた。

そうしていれば、最善とは言えずとも、誰かが手を打つてくれていたから。

方法は多岐。

自分を閉じ込めるなり、魔術による封印を施すなり、或いは懇々と道理を説いて説き伏せるなり。

これまでは、そうやって、誰かが対処していたのだ。

その夜、フランドールに立ち向かえるものは、もう誰も——館の内には——残つていなかった。

——こんな事は、望んでいない！

フランドールはその時初めて、後悔という感情を知つた。

反省も、悔恨も、一切合切、誰もが当然のように生まれ持つもの全て、嘘のようにかつ

ちりと当てはまった。

もしかすれば、彼女に蓋をしていたのは、この紅い壁と屋根であつたのかも知れない。そして、一度蓋を開けたなら、もう元に戻す事は出来ないのだ。

「——フラン」

冷たい声が、彼女を呼んだ。

紅魔館の当代の主は、その日、館の外に出向いていた。

瞬き程の間に人里を駆け抜ける俊足で、己が城に辿り着いた時には——全てをありのまま、理解した。

そして姉妹は殺しあつた。

互いに泣き喚き、言葉を失いながら、

四肢を削ぎ、

首を潰し、

臓腑を引き抜き、

骨を噛み砕き、

それらを直ちに修復しながら、二人は長い夜を殺しあつた。

やがて、日が昇る。

フランドール・スカーレットは、幾重もの鎖で瓦礫に繋ぎ留められ、そして心臓を槍

で貫かれていた。

見えるものは、色の変わり行く東の空。

見慣れた暗闇が消えて、藍色が広がり、そして白い光が空を這う。

生まれて初めて見る夜明けだった。

嗚呼、こんなにも。

フランドールは嘆息した。

太陽はこんなにも暖かくて、空はこんなにも広い。

小さな世界の、紅や黒ばかりの天井より、何千倍も、何万倍も広い。

あの空を飛んで、何処かへ行けたのなら。

何処か知らない広い大地に降りて、本でしか知らない木々を探して、思いつきり駆け回ってみよう。

綺麗な花を見つけたら、それを摘んで持ち帰る。

誰の為に？

それは――

「――いめんなきこ」

自分の為に、じゃない。

世界の広さを、一人では味わい尽くせない。

けれど、分かち合うものは

「ごめんなさい……！」

もう、何も、無い。

陽光の中にフランドールの身体は、灰となって溶けていった。

その最後の時まで、深い後悔に溺れながら。

次があるならと、強く、強く願いながら。

「おはようございます。今は午前4時38分、良い目覚めでしょう？」

博麗霊夢が目を覚ますと、ほぼ垂直の角度で、東風谷早苗に顔を覗き込まれていた。

邪気の無い顔で、早苗は笑っていた。

「……何処がよ」

この、素性のなんとも分からぬ女に見守られての目覚めは、霊夢には居心地の悪いものであった。

そう望めば、首を落とせる状況だった——自分は簡単に殺されていたのではないかと、思わされるのだ。

無論、その発想は突飛なものである。

故無く人を殺すような相手ではないし、自分は彼女と敵対していないと、靈夢は正しく理解している。

——監督役。

聖杯戦争を見守り、衆目より秘匿する為に尽力する者。

絶対の中立者である彼女が、自分を害する筈が無いと知りながら、然し靈夢の目覚めは心地良いものではなかった。

「いいや、良い目覚めの筈だ。貴女が私の元を訪れる時は、夜分遅くに唐突にと定まっているようですが、その上で大の字の高軀。これで心地良くない筈が無い、そうでしょう？」

「長つたらしい嫌味は結構。……まあ、床の寝心地は悪くなかったわ」

むくり、と靈夢は床から起き上がった。

身体の節々が痛むのは、硬い床で寝たからか、それとも運動量の為か。

然しそれ以上に、左手が痛んだ。

「……あいつ」

鋭い牙を突き立てられた傷口は、僅か数時間の間に、早くも膿み始めていた。

常に湯に浸かっているような熱さと、鈍痛——じくじくと肉の奥から湧き出してくる痛みが有った。

『孤狼の隠し太刀』とはまた、古風な友人を持ったものです。数百年に渡って研鑽された毒は、博麗の巫女にも届きますか」

「毒……？」

歯に塗布し、咬傷より染み込ませる激毒『隠し太刀』。犬走権はそのような武器まで、霊夢に用いたのだ。

これは、一朝一夕に用意出来る武器ではない。

歯に毒を塗れば、当然のように自分も、その毒を飲み込む事になる。毒に体を晒し、何年もの歳月を経て、徐々に毒の濃度を上げ——免疫をつけて、やっと有効な濃度の毒を用いる事が出来る。

日常とは相入れない、害意の塊が如き秘伝。犬走権は、聖杯戦争の何年も前から、なんらかの戦いに備えていたのだろうか？

「命に関わる程の毒ではありません。日に日に痛みは増し、寝床でのたうつ程にもなりますが、貴女であれば死ぬ事は無いでしょう。これで死ぬのは単純に生物としての出来が悪いものばかり……弱い人間だけですから」

「知ったような言い方をするのね」

「無論。私は山の巫女ですのね」

それが当然であるというように、早苗は霊夢を見下ろしたままで答えた。



此処は守矢神社——妖怪の山の「麓」に有る。

霊夢は、白玉楼通りでの戦闘の後、霊体化したセイバー——フランを伴って、此処へ駆け込んだのだ。

先に言うべき事は多々あったが、それを伝えるより先、疲労しきった霊夢は、床の上で眠ってしまった。そして目覚めたのが、この深夜であったのだ。

「……その、山の巫女に——ううん、監督役に頼みがあるの」「ほう?」

手の傷を目に入れないように、両手とも背中の方へと回して、霊夢は立った。

立ち上がってみると、霊夢と早苗とは、背丈も殆ど変わらない。同年代の少女二人が、顔突き合わせているようでもあり——姉妹が向かい合っているようでもあった。

「聞きませう。事と次第によつては、私の力を振るう機が来るかも知れない。」

「……今回の聖杯戦争は、明らかに人を巻き込み過ぎた。これ以上の巻き添えを防ぐ為に、あなたから宣言して欲しいのよ」

不思議と二人は、適切な間を取るように動こうとしなかった。

早苗が、霊夢に向かって一歩近づく。

霊夢は動かぬまま、額がぶつかるに任せて、その場に立ち続ける。

「聖杯戦争の舞台を、市街地の外に置く」と。森林か、孤島か、何処でも良いから……

誰も巻き込まないような場所を選んで、そこで戦わせるように」

霊夢のすぐ目の前に、早苗の両目が有った。

鶯色では無い——紺碧。いや、それよりはもっと透明な、名づけ難い薄蒼の瞳。それが儼にぐうと細められて、何かを隠す様な笑みを作った。

「……あんたは『監督役』なんでしよう!? だったら、その程度の事——」

「そもそもにして、霊夢さん」

声を止めたのは、声と指。早苗は、霊夢の唇に指を当て、言葉の先を封じていた。

「確かに私は監督役として、中立的立場から聖杯戦争を監視し、随時必要な支援を行います。……が、それは何故だと思えます?」

「……何故?」

早苗は、所以を問う。

その時に初めて——本当に初めて、博麗霊夢はこの聖杯戦争に、『何故』という疑問を抱いた。

それは、そういうものだと思っていたのだ。

記された手順の通りに動けば、サーヴァントなるものが現れる。

そのサーヴァントを駒として運用し、勝ちあがる事で、望みが叶えられる。

そういうシステムが有り、監督役という役職が居て、自分はマスターという役職にあ

る。

おかしな事に霊夢は、そういった全ての仕組みを、*“*そういうもの*”*と認識していた。  
「……何故、つて……？」

だから、分からない。気付かない。気付かなかつた。

「そもそもこの聖杯戦争に、監督役など不要なのですよ。……というより、監督役というシステムを内包する *“*聖杯戦争*”*なるゲームが、全て、この世界にそぐわぬ借り物なのです」

世界は常の俛、常の如く在るべしと、霊夢は常々信じていた。

その前提は、既に崩れ去っていたのであつた。

「順を追ひ紐解きましょう。そも、この幻想郷に於いて、聖杯戦争というゲームの存在を秘匿する理由は？」

「それは……」

「極端に言えば、*“*そんなものは無い*”*のです。争いを隠せば平穏を得られると、貴女の個人的心情が訴えていたとして、それを斟酌したゲームシステムが組み立てられている道理は無いでしょう？

ならば、何故にサーヴァントが夜に跋扈し、マスターが市井に隠れ、私が監督役として隠蔽工作に努めるのか——それはひとえに、聖杯戦争とは *“*そういうもの*”*として作

「られているからなのです」

早苗の言は、まともに受け取ってはならぬ類の——霞が掛かったような声で紡がれる言葉であつた。

だが然し、霊夢は早苗の言葉を、一言一句逃さず聞き取り——そして、理解していく。「このゲームの形を真似ようとするなら、監督役という駒が必要だつた。だから私は此処に居ますが——そも幻想郷の聖杯戦争に於いて、何故“ただの山の巫女”の私が、名だたる英雄七騎に命を下せると思いますか？

恐らくは、霊夢さん。私に何らかの権力があり、私ならば誰かを制御できると思つているのは、参加者達の中でも貴女だけでしよう。他の五名は誰も、私を重要な駒と認識していません」

「……つまり、あんたは」

「監督役の名を冠しながら、ただ個人的に聖杯戦争の運営に手助けしているだけの酔狂人。誰かが借りてきたシステムの中で、居場所を見つけた人間に過ぎないのですよ。」

霊夢さん、貴女の望みは、貴女以外に叶えられない。私が貴女を手助けし、聖杯戦争を秘匿し、世間的には何事も無く戦いが終わるなど——決して、有り得ない」

東風谷早苗は、邪気の無い顔で笑っている。

悪意無く、霊夢の心の、触れてはならぬ部分を、土足で踏み躪っている。

それが壊れたら、彼女は、彼女で居られなくなるだろう部分を——  
「貴女が、叶えなければならぬ。」

聖杯を勝ち取り、願うのではなく。貴女自身が戦い、敵対者を捻じ伏せ、貴女自身の名の元に——博麗の巫女の名の元に、全ての奇異を秘匿し或いは粉碎し、不倶戴天の思想を根絶しなければならぬ。」

——いともたやすく、東風谷早苗は踏み躪る。

「貴女が、幻想郷の秩序でなければ、叶わない」

唇の隙間から這い出した、長い、先の割れた舌。

早苗の舌は己が首を這ってから、霊夢の喉へと伸びて行く。

それが触れる寸前——ほんの僅かに手前で、霊夢は袖を払って早苗に背を向けた。

「どちらへ?」

「『異変』を終わらせに」

それは良い事だと、早苗は手を叩いて笑う。

その頃には、宝具による消耗が激しかったセイバーも、最低限の戦闘行為——防御や回避程度なら出来るまでに回復していた。

霊地の一つである守屋神社の中は、霊体であるサーヴァントを回復させるのに都合が良いのだろう。

だが——それも、マスターが霊夢だったからこそ、である。

他のマスターであれば、フランドールの『レ紅く禍ッ為す禁忌イの剣ン』が要求する魔力を捻出したら——二日や三日、動けなくなってもおかしくは無いのだ。

「セイバー。動けるわね」

「……ええ、霊夢」

霊体化を解かぬまま、フランドール・スカーレットは博麗霊夢の傍らに立ち——

「……ごめん、霊夢」

「何が」

「黙ってた事。真名は誰にも——出来るなら、貴女にも知られたくなかった。私の事を知られたら……信じてもらえなくなるって、そう思ってたの」

——消え入るような声で、詫びた。

姿を現していたのなら、頬に涙さえ伝っていたかも知れない。それ程にフランドールは、己がサーヴァントである事にさえ、疾しさを感じているようであった。

「別に、良いわ」

「霊夢……!」

だが、今の霊夢は、セイバーの素性など気にならぬ事であった。

「あんたが誰だろうと、私に従ってくれるなら、それで良いの」

“駒の素性”なんて、“そんなもの”は、全く霊夢には無価値に成り果てたのだ。破壊しか出来ぬ駒であるなら、徹底的に、破壊の為に使う。

親しい者を裏切った逸話が有るなら、裏切りは事前に算段に入れて、令呪の使用を控えるだけで良い。

最悪、他にまだ、サーヴァントは何騎も居る——取り替えられないとも限らない。

例え己がサーヴァントが、最悪の破壊者であり、主殺しの剣を握る者であったとしても、

或いは最強の宝具と高いステータスを兼ね備えた、聖杯戦争最優のサーヴァントであったとしても、

霊夢に必要なのは、己の意思を実現する力——ただそれだけであった。

狼の毒は、牙を通して肉に沁み込んだ。

蛇の毒は、音に乗って心を蕩かした。

博麗霊夢は修羅の顔となって、己が霊地——博麗神社への道を、“それが当然であるように”飛んで帰った。

冥界町は白玉楼通りの、小さな山。

無数の桜の樹に雪化粧が施されて、暗闇の中に浮かぶ、墨染の山。

長い階段の他に、積もる雪を退けた道も無く、人も好んでは近寄らぬ、市中の孤島となつた山。

その頂上には、水の澄んだ広い池と——広大な屋敷が、一つ、有る。

数十年——或いは百年以上も主を持たず、地元の名士により管理されている和風建築。

——白玉楼。

通りの名前の由来となつた屋敷は、怖気さえ感じる程の清らかさで、昇りゆく太陽に照らされていた。

「マスター」

「……………」

「マスター、もう夜が明けましたよ」

魂魄妖夢は、主が奏でるピアノの音に、夜通し耳を傾けていた。

「主」とは、白玉楼の主では無い。今生に於いて、魂魄妖夢の主を務める少女——リリカ・プリズムリバーの事である。

日が暮れてから、再び日が昇るまで——僅かにも休まず、リリカはピアノを弾き続けていた。



「少しご飯を食べて、眠ってください。ピアノは逃げないように見張っておきますから」  
「……なんだか、止めるのが惜しくって」

窘めるように妖夢は言うが、その頬に浮かんだ笑みは、主の熱中を好ましく思うものである。

リリカは、奏でる曲の音を極力崩さぬように、後ろ髪を引かれる様を見せながら、鍵盤から指を離した。

「思い出せましたか？」

「ううん、全然……ちよつと、お風呂入って来るね」

「また湯船の中で眠らないようにしてくださいね」

長時間の演奏で、リリカの頬には汗が伝い、髪が張り付いている。妖夢はリリカにタオルを渡し、汗を拭くように促した——丁寧に洗って乾かした、新品のように柔らかいタオルだった。

それを受け取って、リリカは風呂場へと向かう。戸の向こうでシャワーの音が聞こえ始めると、妖夢は脱ぎ散らかされた服を拾い集め、洗い物の籠に入れ、代わりに着替えを用意していた。

マスターとサーヴァント——というよりも、主人と家政婦と呼んだ方が、まだ似合いの関係性。だが、甲斐甲斐しく働く妖夢に、辟易の表情など微塵も浮かんでいないのだ。

「……ごめんね、こんな事に付き合せて」

脱衣場と風呂場を仕切る戸の向こうで、リリカは小さく、水音に掻き消されそうな程に小さく呟く。

「いいえ、良いんですよ」

妖夢は、洗いを畳む手を止めて答えた。

「妖夢だって、叶えたい願いが有るんですよ。……本当は、私も戦いに出ないと無いんだよね」

リリカにも、魔術の素養は有る——寧ろそれを持たない者は、聖杯戦争のマスターたり得ない。

だが彼女は、この戦いが始まってからというもの、白玉楼の外に出ていなかった。

食糧や生活必需品は、業者に電話して階段の下にまで届けさせ、妖夢が受け取り、屋敷の中へ運び込む。資金は——リリカ一人では、使い尽くせぬ程に有った。

「思い出せば、いいんだけど……」

リリカ・プリズムリバーの記憶は、酷く断片的である。

自分の名前は覚えているし、言葉も話せる。自分が立っている場所が何処か、正しく

言葉に出来る。

だがリリカは、自分が何か大事な事を忘れてしまったという喪失感、空虚さに捕らわれていた。

そもそも自分が、白玉楼の中に一人で立っていた理由も、良く分からない。

自分の家は、寂れた洋風の館であり、この和風家屋では無い筈だ。だが、自分は確かに此処に居る。

呼べど叫べど、誰も答えない。寂しさが募った彼女が見つけたのは——  
ピアノ、だった。

屋敷の持つ空気に合わせぬ、だが無粋とはならぬ楽器に触れ、鍵盤を指で弄んだ。心地良い音色が、リリカに応えた。

リリカは心の空虚を埋めるべく、断絶の多い記憶を辿り、一つの魔法陣を思い出す。ピアノを中心にその陣を描き——言葉は紡がず、ただ思うに留めて、思うが儘に音曲を奏でた。

そして、魂魄妖夢は呼ばれた。

自分を主と仰ぎ、命を待つ妖夢に——リリカが最初に告げたのは、  
“お腹が空いたからご飯を作って”であった。

戦いと全く無縁の願いを受けて、妖夢は面食らい——それから晴れやかに笑って、そ

の願いを十全に叶えた。

それからは、只管、防戦の日々であった。

セイバーも、黒鎧の狂霊も退けた。

様子を窺いに来たアサシンは、そも近づけさせなかった。

リリカはただの一度も、攻撃に転じようとはしなかったし、妖夢も何処かへ攻め入るべしとは主張しなかった。

リリカは、ピアノを弾いていただけである。

音と交わり、音に遊ぶ時、リリカは何かを思い出しそうになる。

結局は何も思い出せず、音と共に、脳裡に描いた絵も消えてしまうのだが——リリカはその記憶を、どうしても手放したくなかったのだ。

「妖夢は、どうして戦うの?」

リリカは何時か、そう聞いた。そしてこの日も、戸の向こうで控える従者に、風呂場の中から訊ねた。

一度目は——答えは無く、妖夢は微笑んで誤魔化すだけだった。

「きつと貴女と同じです、主よ」

この日、魂魄妖夢は、偽り無く本心を述べた。

「……? 私、自分の願いも分からないんだよ……?」

「いいえ、貴女は望んでいらっしやる。自分が思い出せなくても、何か失ったものがある  
と知っていて——それを取り戻そうとしている。

私も同じです、失ったものを取り戻す為に此処に居る。……そして私も、一度、全て  
何もかも忘れたのですよ」

「えっ……？」

から、と、戸が開いた。

妖夢は長い髪を背で纏め、バスタオルを体に巻いて、洗い場へと入って来た。

「お背中、お流しします」

リリカは、髪を無頓着に、がしがしと指先を立てて洗っている。

その後で妖夢は、リリカの小さな背にハンドタオルを当て、石鹸を泡立てて、洗い始  
めた。

二人の何れも、これが当たり前の事であると信じているように——そしてこの時に心  
底安堵しているように、安らいだ目であった。

「生前の私は——晩年、酷く老いました。剣を極めねばならぬと思いながら、それは何故  
か、遂に思い出せなかつた。何の為に刀を取ったか思い出せぬまま、技量だけを磨き——  
—そうして今に至りました。

けれど今、私は全て知っている。私が何を求めて刀を取り——そして今、なんの為に

刀を振るうのか」

ざぼつ、とりリカの背に湯を被せて、湯船に浸かるように促し、妖夢は言葉を続ける。「貴女が思い出すまで、私は盾で在り続けます。貴女が願いを取り戻した時、私は刀となりましょう。だから、マスター、貴女はあの美しい音を奏で続けてください」

そして妖夢は、結んだ髪を解き、軽く手で絞るようにして水気を落とすと、風呂場を出て行く。

「……妖夢？」

「招かれざるお客人がいらつしやいました。……お引き取り願ひましょう」

薄桜色の振袖を纏い、6尺6寸6分の化け野太刀を携えて、魂魄妖夢は屋敷を出た。

山の麓から、長い階段を上った先には、分厚い扉の正門が有る。

その前に妖夢は立ち、まだ暗闇の中に潜んだままの、禍の気配と対峙した。

「名乗られませい、ご客人。ならぬと仰いますならば」

野太刀を正眼に構え、イレギュラークラス・ウォーリアは、戦に臨む。

「我が主<sup>マスター</sup>に時来たるまで、半霊を尽くし遮りましょう」

誰何に応えるように――

ぶうん、

と、羽音が鳴った。

## 六日目、魔女の小屋

——遠巻きに見ている。

魂魄妖夢は、その事に気付いていた。

サーヴァントの目を以てしても見通せぬ程の闇が、白玉楼の階段に降りている。敵はその中に潜んでいる。

攻め上がって来ないというならば、それでも良い。

過去に於いては霊界に位置していたこの白玉楼は、こと霊体に対しては、幾千の城以上に堅牢な壁となる。

白玉楼は、存在自体が、全ての霊体に対する「令呪」に等しい。

所定の手順を踏まずして、近づく能わず、離れる事能わず——即ち、ただ一つの出入り口を除いては、侵入する事も、また退出する事も叶わない。

屋敷の主の意思ではなく、「冥界の管理者」たるべく作られた結界は、サーヴァントでさえ踏み越える事は叶わない。

いや——仮に複数画の令呪を以て、強制的に踏破せよと命じれば、サーヴァントはそれに従うだろう。

だが、その結果は——現世に留まる事など、出来はするまい。

たった一つ、定められた出入り口は、白玉楼の正面——階段を昇り辿り着く、正門。そこに妖夢は立っているのである。

いかな暗殺者であろうと、魂魄妖夢の守りを欺き、その主へ辿り着く事は出来ない。そして、『不退転・A』を所有する妖夢は、正面からの戦闘に、絶対の自信を持っている。

更に加えて、マスターの支援も有った。

夜ごと弾き鳴らされるリリカのピアノの音色は、聞く人を夢遊病のように引き寄せ。彼等から、僅かずつでも吸い上げた魔力が、白玉楼に蓄積されているのだ。

妖夢はそれを、自分の魔力のバックアップとして存分に使用できる。

イレギュラークラスである為に、聖杯戦争の定石の中には無いが——ウォーリアの特性はランサーに近く、対魔力スキルこそ持たないものの、近接戦闘に於いて高い汎用性を持ち、魔力消費の効率も良い。

リリカの魔術師としての技量は、決して卓越しているとは言いが、それを補って余りある優位が、妖夢には在った。その上で妖夢は慢心せず、最も自分が有利となる階段の頂上で、侵入者を待ち受けていたのだ。

——来い。



寄らば、即ち斬る。

完全な布陣であつた——間違ひ無く。

敵が、霊体であつたのならば。

ぶう、う。

ぶう、ん。

「……！」

闇の中から、幾つも、幾つもの音がした。

何かが震えているような——いや、違う。この音は、誰しもが必ず、生きている間に耳にする、慣れ親しんだ音だ。

それは、羽音であつた。

そう妖夢が気付いた時には、その音は膨れ上がり、空気を揺らす程となつた。

幾十か、幾百か、或いは幾千もの羽音が固まりとなつて——闇を抜け、妖夢へと迫つていた。

「蟲か！」

知らぬ敵では無い——永い夜の下で、妖夢は一度、蟲の群の長と戦つた。

蟲の恐るべきは、数であり、また小さきである。一つ一つは決して、恐れるに値しない。

過去の己ならばいざ知らず、今この時、サーヴァントとして現界している自分であれ  
ば——

「——しつこいっ！」

なんの事は無い。

一対一を、数千回も繰り返せば良いだけの事だ。

なんの事は無い。

牙も針も小さな蟲を、たった何千匹も切れば良いだけの事だ。

妖夢は長刀・楼観劍を縦横無尽に振るつた。

6尺6寸6分の刀身は、針の穴を通さんばかりの精密さで、一閃ごとに十数匹の蟲を

落として行く。

——奇妙な、蟲だ。

斬撃を繰り返し、己の後ろにただの一匹も通さずにいながら——妖夢は、敵を観察し  
ていた。

羽が有り、牙が有り、針が有る。自然の中で目にした記憶は無いが、こういう蟲が居  
るとして、何も不思議は無い程度の外観だ。

だが——その牙と針は、英霊である妖夢の体に、確かに通じる武器となっている。  
つまり、神秘を纏っているのだ。

幾百幾千の蟲全てに、魔術の強化を施し、使い捨てにする術者が——絶対に居ないと  
は断言しないが、存在するとも考え辛い。

即ちこの蟲達は、自ら魔力を内包し、そして何らかの意思を以て妖夢に攻撃を仕掛け  
ている。

然し、まるで恐るに値しない。

妖夢は刃と共に舞い続ける。

蟲の牙はただの一つも、妖夢に届かない。

蟲の針はただの一度も、妖夢を掠めさえしない。

夜の中に、無数の薄羽が光を散らして、ぼんやりと、丸く塊が浮かんでいるように見  
える。それ程の数を以てしても、魂魄妖夢の裾にさえ、触れる事は叶わないのだ。

英霊が二人で掛かって、一太刀と浴びせられぬ無双の英傑。知恵を持ち、魔力を持っ  
たとて、有象無象の虫けら如きが及び立つ粹では無い。

斬、滅。

一閃が、数十の蟲を斬る。

身の丈より遙かに長い長刀を、妖夢は己の指よりも軽やかに振るう。

斬り捨てられた蟲は、屍を残さず、塵となつて雪に消える。黒灰色の死の塵は、雪よ  
りほんの少し暗く、雪より軽く舞い上がって消えて行くのだ。

「——如何なされた、竦みましたか」

そして何時しか、蟲は居なくなっていた。幾千とも分からぬ蟲は全て、魂魄妖夢の長刀にひれ伏したのだ。

妖夢は暗闇の向こうに、静かながら凜と通る声を向ける。

「元より、これで勝とうという心持ちではありませんまい……来られませ」

向こう側で、ざわ、と何か蠢いた。

そして、近づいてきたのは——表現するなら、闇そのもの“であった。

夜にも自然界の灯りは存在するが、誰かが人為的に灯り全てを取り払った時、そこには真の暗闇が生まれる。

見通すどころか、顔の前に翳した己の手さえが見えぬ世界。そういう空間が、夜の中を近づいて来て——

「応じようか、分かり易く」

球状の闇が晴れると、少女が独り、現れた。

闇と同じように、黒い服を着た少女である。

彼女は地に足を付けず、ふわふわと浮いたままで、妖夢の方へと近づいて来る。

「ほう。暗殺者が、堂々と姿を現しますか」

「アサシンと決まった訳じゃない。アーチャーかも知れないし、キャスターかも知れない

いよ」

「確かに。然しそのいずれであろうと」

——大差は無し。

妖夢もまた、ふらりと歩くように進み出て、少女を出迎えた。

歩いていたと思えば、既に空中に浮かんでいた。

飛ぶとも無しに間合いに近づき、太刀を横へ薙いでいた。

「しゃっ！」

横薙ぎの斬撃を、少女は上空へと浮かび上がって避け、妖夢はそれを追って同じく浮上して行く。

その間にも妖夢は、眼前の少女の戦力を分析していた。

武器、無し。

爪、短くも硬い。

牙——致命の凶器。

けれども、それ以外に恐れるものは無かった。

事実、少女はアサシンであり、姿を現した時点で、他に存在するどのサーヴァントにも、勝ちの目が見えない。

だから奇妙に思うべきは、姿を現した事そのものである。

飛び、斬り掛かる。

縦に、横に、長刀を縦横無尽に振り回す。

壁や大地という制約から解かれて、刀が描く軌道は、地に縛られた剣術では有り得ぬ多彩さを持つ。

その何れも、アサシンを仕留める事は無かった——アサシンは間合いを遠ざけ、回避に専念していた。

余裕で、とはいかない。

腕や脚を、幾度も斬撃が掠める。

攻撃を捨て、完全に回避だけに専念したとしても、そして己の主戦場である空中へ逃れていたとしても、アサシンは妖夢に斬られていた。

「その意気は良し——技量や、悪し！」

既に現時点で、アサシンは全力を以て、妖夢の太刀筋から逃れようとしていた。

だというのに妖夢の技量は、まだ二段、三段と、多重の底を残していた。

元よりセイバー、黒鎧の狂霊と、二騎のサーヴァントを敵とし、余裕を残して戦い得る剣術使いである。暗殺者の一人なぞ、何と恐れる事も無かった。

だが、慢心はしない。

手を隠して戦ったは、万が一にも敵に手の内を読ませ、こちらの知らぬ技で奇襲を受

けてはならぬと用心した為だ。

現状、敵は防戦に全力を注いでいる。

妖夢の実感では——近接戦闘に限るなら、己の四分の力と、アサシンの全力で、やつと釣り合うという程であった。

「……成程、見えました」

そして妖夢は、己が主への負担を強いぬように、八分の力までを費やそうと決めた。長刀を大きく振りかぶる、大上段の構えを取る。そして空中で、かなり急角度に、前のめりになった。

これからそこへ向かうぞと、告げているような。

然し回避を許さない、超高速の——もはや目にその影さえ止まらせぬばかりか、意識にさえ留まらせぬ程の速度を以て。

最大速度なら、烏天狗には敵わない。されどたった一瞬、彼女達に肉薄する速度へ、魂魄妖夢は技量のみで到達する。

それは大焦熱地獄の炎をさえ、瞬き一つで駆け抜ける、

「——二百由旬の一閃」

斬、であった。

妖夢はこの技を、霊体化してから放ち、アサシンを斬る一瞬で実体化せんと図って

た。

何故か？

白玉楼に、この技がどれだけの害を与えるか、当人が計りかねているからだ。

周囲の木々も、門も、石段も、全てが妖夢の私物では無く、主の財である。

超音速の踏み込みを以て、それらを粉碎するなどは——不敬。決して有り得ぬ罪。

だから、魂魄妖夢は、一切の慢心を抱いてはいない。

ただ——主家への忠義を、ほんの一瞬でも思った、それだけであつた。

「がああああつ!!」

アサシンは、超速の踏み込みに、真正面から向かつて行つた。

左右にも、後方にも、どう避けても追いつかれて斬られる——これは、そういう技である。

だが、たった一か所——妖夢の懐だけは、刃の届かぬ所であつた。

無論、容易くは入れない。

的が動くに合わせ、太刀を振り降ろすタイミングをずらす程度、妖夢はやってのける。

それでもアサシンには——ほんの一瞬の狂いさえあれば、それで良かった。

アサシンは、妖夢の手首を掴んだ。

抗い得ぬ刀身の速度に比べれば、まだ腕の動きは、見切るに容易い。そしてアサシン



もまた、敏捷性に関してはAランクである。

「……捕まえたわ」

そうなれば後は、力の勝負だ。

妖夢の筋力はBランク。対するアサシンはCランクであるが——アサシンは『怪力：B』を保有する。

力は十分に拮抗する——かに、見えた。

アサシンが、妖夢を押し込んで行こうとする。

妖夢は大地に根を張ったかのように動かない。

そればかりか、寧ろアサシンの腕は、妖夢に押され、体へと近づいて行く。

アサシンに『怪力』のスキルが有るなら、妖夢とて『不退転』スキルを持つ。

敵が正面から襲撃し、そして正面に置いて戦っている間、筋力、敏捷、耐久の3ステータスに補正を受けるパッシヴスキル。

単純な事だ。技量も何も関係無い、スペックを比べた時点で、妖夢はアサシンに勝っていた。

そして、其処までが、アサシンの思惑の内であった。

己が欺かれた事を、妖夢は知った。

「——っ!?!」

サーヴァントとマスターは、魔力のパスで互いに繋がりを持っている。

一方に何らかの異変があれば、それが大きなものであれば、自然ともう一方も、その事を察するのだ。

異変は、結界で固く守られている筈の、白玉楼の内より起こった。

「……っ、かあっ！」

妖夢はアサシンの脚を払うと、戦場に在るとは思えない程、至極あつさりとアサシンに背を向けた。

白玉楼の結界は、サーヴァントの侵入を決して許さない。

侵入し得るのは、自分が守護していた正面の門だけだ。

或いはマスターであれば、結界を堂々と通り抜けて入り込む事も出来るだろう。

だが——人間大の生き物が、屋敷の内へ入り込もうとするのを、自分と主の双方が気付かぬ筈など無い。

何故だ？

何が起こった？

「マスター！」

妖夢が戻った時、リリカ・プリズムリバーは、まだ湯船に浸かっていた。

浴槽の縁に頭を乗せ、両腕を湯の外に出し、くつろぐような恰好で——顔を青ざめさ

せていた。

「マ——リリカ、どうしました!？」

湯から引き揚げ、横たえさせる。

体に目立つ傷は無いが——腕に、小さな、ほんの小さな刺し傷があった。

「——その毒は、自然には治らない」

妖夢の後を追って来たものか。何時の間にか屋敷の内には、アサシンと、そのマスタ―が上り込んでいた。

斬る事が出来る距離である。だが、妖夢は、長刀に手を伸ばせない。

リリカの顔は蒼白になり、呼吸は速く——そして、体全体が恐ろしく熱かった。

湯に浸かっていたから、というものではない。体の中に火が有って、延々と熱を吐き出しているような熱さなのだ。

これは、病に似ている。

だが、平凡の病では無い事は、幾多の死に近い所で暮らしてきた妖夢には、嫌という程に分かっていた。

「数日持てば、運が良い方です。この毒を知っている人は、多分、誰も居ません」

アサシンのマスター——彼女の名前を、妖夢は知っている。「こちら」では初対面だが、見覚えのある顔だ。

リグル・ナイトバグは、夜に紛れる為か、黒いマントを学生服の上に羽織って、アサシンの後ろに立っていた。

リグルの肩には、小さな蟲が止まっていた。蜂のように見えるが、針はかなり細く、羽も小さな、奇妙な蟲である。

「貴様……！」

長刀の柄を握りしめ、然し斬りかかる事は出来ない。

結界を抜けたのは、この蟲だ。妖夢は、その事に気付いた。

人が抜けたのならば、警戒もしよう。だが、蟲の一匹や二匹を——それも、魔力も何も纏わぬただの蟲を、警戒する結界など、考えた事も無い。

静かに蟲は入り込み、リリカの腕を刺し、その体を毒に侵したのだ。

「何が欲しい………言えー！」

これは交渉であると、妖夢は察した。

手に刃を持ったままの、英霊の怒気。並みの胆力であれば、それだけで胆を潰して死にかねない。

然しリグルは平然として——それどころか、嘲るような笑みを浮かべたままで答えるのだ。

「勿論、私は治療法を知ってるけど………教えてはあげない。貴女が他のサーヴァントを、

全て倒すまでは」

「全て——馬鹿な、そんな時間はっ！」

無茶だと不平の声を上げるが、人質に取られているのは、主の命である。

昨夜、空に紅い光を見た。きつとあれで、サーヴァントが一騎脱落した。

しかし、それでも残数は6。自分とアサシンを除いて、残り四騎を、数日で発見し撃

破——出来るものか？

無理かも知れない、だがやるしかない。何も言えず、唇をぎりと絞った妖夢に——

「……ああ、でも。アリス・マーガトロイドのサーヴァントなら、治せるかも知れない」

リグルは、希望を与えた。

「——は？」

「博麗の巫女のサーヴァントが、セイバー。彼女と同盟を結んでいるアリス・マーガトロ

イドが、アーチャーのサーヴァントを従えてる。……そして、アーチャーとして召喚さ

れているのは、霧雨魔理沙」

「魔理沙……白黒の」

魂魄妖夢は思い出す。

確かに、そういう人間が居た。魔法を、何かのコレクションのように集め、整頓する

のが好きな、おかしい人間だった。

彼女が持つ雑多な知識の中に、蟲の毒を散らす術が有るとしても、不思議では無い。思考に用いたのは数秒。その間にリグルは、アサシンが作った闇の中に溶け込んでいく。

「ま——待てっ!」

「私を殺すのは得策じゃないですよ。貴女のマスターがいよいよ死にそうな時に、治せるのは私だけかも知れないですから」

追う足を言葉一つで止めて、リグル・ナイトバグは——“夜の蟲の女王”は、白玉楼より去った。

後に残されたのは、傷一つ負わぬままに敗北したサーヴァントが一人と——

「……………よう、む……………つ、うあ、はあつ……………」

「リリカ……………」

熱と痛みに呻き苦しむ、彼女のマスターであった。

「アーチャー、まだ見つからない?」

「今まで見つからなかったものがそんな簡単に見つかるか。私の魔法はカップラーメンじゃない」

雪積もる魔法の森の中、独り住まいの——今は二人住まいの家の中。私は長椅子に腰掛けたまま、アーチャーが魔術を行使するのを観察していた。

漫然と眺めるのは勿体無い。呼吸一つ、指先の数ミリの移動まで、全て見届けなくては損をする。そうと気づいたのが、遅過ぎたのが口惜しい。

そう、私は後悔していたし、その分を取り返す為に焦っていた。

現代に突如現れた神秘の塊——聖杯戦争。思えば思う程に、この形は異質で歪だ。

夜が明けるまでを思案に用いて、私が辿り着いた結論は、『聖杯戦争は幻想郷にそぐわない』というもの。有り得ないものが何処かからか、突然に世界に入り込んだのだ。

万能の願望機？ 聖杯？ それを魔術師が奪い合う？ 英霊を呼び寄せ？ そんな発想は『何処から来た』というのか。かの霧雨魔理沙が魔法を体系化し、魔術として学問に仕立て上げてより、過去の人物を使い魔として召喚しようなどと考えた者の話は、ついでに見聞きした事が無い。

それが、完成系として、此処にある。

主体たる召喚者より数十倍も高位の存在を当たり前のように使役し、あろうことか自害さえ強制し得るシステムが、全て完成している。

何処から流れ込んで来たものかは知らない。けれど、聖杯戦争はこの世界にとって、異物である筈だ。

除外される前に「知」らねばならない。

消えてしまわない内に、英霊という神秘に近づかねばならない。

だから私は、焦っていた。

「まだ？」

「まだ」

アーチャーは今、方々に使い魔を飛ばしている。

これまでの私達は、数の優位が有ったからではあるが、さして積極的に敵陣営を探してはいなかった。

勿論、全くのノータツチだった訳じゃなく、アサシンの拠点も、白玉楼に誰かが陣取っている事も、地図から割り出している。

けれども、今回行っているのは、そういう事じゃあなくて——もつと本気の、徹底したやり方だ。

実は、私も幾つかの使い魔を飛ばしている。

私が得意とするのは、自分が支配権を持つモノに対する「使役」の術。機械的に、インプットした動作を繰り返すだけのものではあれば、使い魔を作るくらいは出来る。

然しこれは秘匿性が低く、「魔術師か英霊ならば」対処は容易いだろう。

逆に言うとう、この使い魔に何か反応を示すなら、敵対勢力の誰かである可能性は高い。



つまり、監視カメラでありながら、疑似餌でもある訳だ。

私の使い魔に何らかの反応をした相手を、アーチャーの使い魔——本命の、完全な秘匿性を持った使い魔で探り当てる。その為に敢えて私の使い魔は、出来損ないの、目立つものにする。

「まーだー？」

「まだもマードーもレッドドラムも無い」

私の使い魔——人形達を、アーチャーの、不定形の雲のような使い魔が追う。

感覚共有、有人制御、隠蔽、複数の魔術を、アーチャーは事も無げに並行する。

とは言え、流石に数キロ単位まで距離を開けるのは難しいのか、アーチャーは目を閉じ、不要な情報をシャットアウトして、集中に努めていた。

「ああ……遅かったかしら、勿体無い……もつと早くに気付くべきだった。聖杯戦争！

こんな未知の塊からどうして私は逃れようとしたのかしら……！

ねえアーチャー、きつとこんな神秘、貴女の時代にも無かったわよね？ 無かった筈よ、どんな文献にも見つからない！」

けれど、一秒だって待っていられない。たった一秒待つ事さえ息苦しい。

不安に胸を潰されるという表現があるけれど、期待が膨らみ過ぎて、胸を内側から押し広げているようだった。

「……楽しそうだな」

だというのに、アーチャーの顔は、私が感じる高揚の一片片さえ感じていないようだった。

「貴女だって、興味深いとは思わないの？ 貴女の時代にさえ無かった神秘を、当事者として眺められる機会なのに」

「全く、これっぽっちもそうは思わん」

「魔術師の始祖が、欲の無い事を言うわね。本を書くのは好きだったって聞いたけど」

「……あのな、アリス」

「あ、ちよつと」

「私はな、人間なんだ」

手を休めるアーチャーへ不平を言う私に構わず、彼女は声を低く——何時もより覇気無く、呟いた。

「……今は違うんじゃないの？」

「正確な分類はどうでもいい。私は、生れてから死ぬまで、私は人間だと思いつけてたし、一度死んだ今だって、自分は人間だと思ってる。だから私には、こんな聖杯戦争なんて儀式、興味深いとも楽しいともちつとも思えない」

「論理の繋がりが見えないわ」

「論理じゃない、感情だ。人間が簡単に死んでしまうような儀式、誰が認めてやるもんか」  
——その答えは、私の考えの外に有った。

言葉が出て来ずに、二度、三度と瞬きを繰り返す。そうすれば視界に映るものが変異し、目の前の少女が、もつと頼りない存在にでもなるんじゃないか、などと思うように。勿論、そんな事は無い。

霧雨魔理沙はサーヴァントとしての力に満ち——

「いいか、思い違いが無いように言っておくぞ。魔法とか魔術ってもんは、人間が楽しく生きる為にあるんだ。人間を死なせる為にあるもんじゃあないし、無理に生き延びさせるもんでもない。自然に生きて、自然に死ぬ、それ以上に大事な事があるもんか」

——それだけでは無く。

言い表しにくいけれども、何か、もつと人間的な力を感じる。

少し考えて——それは、年長者に対して感じる畏怖と同じだと気付いた。

「でも、貴女は現に、聖杯戦争に参加しているじゃない。呼びかけに応じて召喚された、それは間違い無いわ」

「そうだな、確かにそうだ。だがそれでも、私はこの聖杯戦争ってシステムが気に入らん！ だからお前がはしやいでるのも、何時もの事ではあるが、全く気に入らん！」

私は叱られている——或いは、窘められているのだ。

驚く程に感情的な物言い——人の命が奪われる状況を楽しむなど、アーチャーは私を叱っている。

……まさかアーチャーは、私が、誰かの死という事象を楽しんでいるのだと、本気で思っているのだろうか。

——誰かが死んでいる。

そんな事は私だつて知っている。

ただ——実感が薄いだけだ。

昨日、通っている学校がサーヴァントに襲撃され、何人もの生徒が病院に送られた。

東風谷早苗が言うには、ガス管が破裂して有毒ガスが漏れたという体裁を取り繕つて誤魔化している最中らしいが——

その中で、何人かは死んだだろう。

床に落ちていた、“引き剥がされた顔面の皮膚”には見覚えが有つた——良い声で歌う後輩のものだった。

——確か、名前はミスティア・ローレライ。

認識する。

あの皮膚が、ただのタンパク質の塊でなく、人格ある一個の生物の、残骸であると認

識する。

その瞬間に、私の胸に覆いかぶさるこの重さは――

なんだろう、なんとさえばいいのか。

彼女と親しい間柄であったか？ 否、だ。名前を知っていて、顔を知っていて、声を知っている、それだけだ。

彼女の死は、私の生き方に何も影響を及ぼさない筈だし、彼女の死を愉快に感じる事も無い。

けれども――彼女の歌はもう聞こえない。

何日か後、曲がりなりにも日常を取り戻した風に見せて、学校が再開した時――学校の敷地へ入り、玄関口まで向かう間、私が聞く音は少し足りなくなっている。

その事実を認識しても、きっと私は、普段と同じ表情を保っているだろうという予感がある。

同時に――その時に受けるだろう、喪失感さえを予感している。

どんなに、彼女個人への興味関心が薄かろうと、彼女の声は人を聞き惚れさせる天性の資質を持っていた――その事実だけは忘れられない。

親しい間柄であれば、悲痛に泣き叫ぶ事も出来た。

それが出来ないからこそ、私の胸は苦しきを感じているんだろう。

自分が必ず、何日か後に、吐き出せない感情に苦しむと分かっているから——私の胸は、重圧に苦しむ。

「……けど、でもっ」

「でも……っ？」

それでも私は、どうしようもなく“私”だ。

「知る事は、諦められないのよ！」

書を紐解くように、私は私を理解していく。

古明地さどりの悲劇に同情し、ほんの一瞬でも、アーチャーに手を緩めさせようとした——それも、私だ。

後輩の死を悼み、苦しむ予兆を感じながら、何も出来ずに立ち尽くすのも、私だ。

「知りたいの、私が知らないものを！ 私が取りこぼしているこの世界の全てを、この世界の外にある全ての不可思議を、余さず知りたいの！ 我慢出来ないのよ！」

その全てを上回る絶望的な飢餓——知的好奇心。

それが私の根幹を成すものだ、私は昨夜、初めて知った。

「ねえアーチャー、沢山人が死んだんでしょ!?! この“聖杯戦争”というゲームの元になったシステムは、こんな非常事態にどう対処していたのかしら!?! 建造物や個人資産の被害の補填は、修復は、その費用の出所は!?! 数百人単位で人が死んだら、どうやっ

て秘匿するの!? それとも秘匿を諦めてしまうの!? それに、ああ、それに——」  
同級生や他人に興味が薄かった——違う。

いつかの時点では、興味を持っていた。知り終えたから、どうでも良くなったのだ。少ないながら友人はいる——違うのだろう。

知り尽くせない彼女達を、もっと知りたいと思うから、近くで観察を囚った。

私はどうやら健全な少女として、あらゆる感性が働いているが——そんな自分さえも興味の対象に留める程、私はただ、何もかもを知りたいのだ。

「英霊七騎! 一人呼ぶだけでも、方法論さえ見えないような超然たる奇跡! それを七つも呼び集めるような力が、何処から供給されているの!? 私の見立てが正しいなら、私どころかアーチャー、貴女の力を以てしても、英霊の一騎も時の彼方から呼び出すなんて出来ないわ!」

「——アリス?」

訝る声——異常なものを見る目。異常の最たるもの、サーヴァントが、私に向ける目。そんなもの、どうでも良い——私は今、幸福と焦燥の最中に居る。

「全て、このゲームシステムが補っているのよ!」

マスターは誰でも良い、私でも、霊夢でも、昨日死んだ沢山の誰かの内の一人でも——ほんの少し、システムにアクセスするだけの力があればそれで良い! 英霊の召喚、

契約、現世を生きる為のサポート、全てシステムが網羅している——このゲームデザイナーは天才だわ！

このシステムがある限り、永遠に聖杯戦争というゲームを繰り返す事が出来る——なのに、なんてことかしら、このシステムはこの世界に存在する筈が無い“!!”  
誰に叱られようが、誰に止められようが、この絶望的な飢餓は抑えられない。

私は、知りたい。

このゲームシステムの成り立ちを、運用を、盲点を、改善策を、過去の稼働時に発生した現象を、未来の稼働時に予測される現象を、ありとあらゆるものを——

私が、このゲームシステムを知り尽くして、興味の欠片も持たなくなるまで、解き明かしたい。

私の心は、天上の楽を聴くようだった。

「でも……その前に無くなっちゃったらどうしよう……私が解き明かす前に、私が知り尽くす前に、この奇跡が終わっちゃったらどうしよう……?」

一方で——そんな事を思い煩いもする。

「……終わったら、めでたい事じゃないか。もう誰も傷付かない、誰も死んだりしない、平和な日常だ」

「そうね、平和になる、悲しい事なんか何も無くなる……けど、寂しいじゃない……」



こうと定まっていけない事にあれこれ思い悩んで、胸が締め付けられるような思いに苦しむ。

こんなに辛いのであれば、聖杯戦争の事など想わなければ良いのにとさえ思う程、聖杯戦争が潰える事に怯える。

「どんな後悔をする事になったつて構わないから……私は！　今！　この気持ちを抑えたくないの！」

きつと、この気持ちをこそ、恋と呼ぶのだろう。

聖杯戦争の生む痛みが、自らを焼くと知っていながら、私はどうしようもなく、聖杯戦争に恋い焦がれていた。

嗚呼、なんて素敵な初恋！

私が見つけた白馬の王子は、ヒトでもない、生物でもない、ただの異界の概念に過ぎないなんて！

殺風景な魔女の小屋も、陰鬱とした魔法の森も全てが彩色され、七色の光に輝いて見える。

私の想いが恋ならば、日々の戦いは逢瀬——長く永く続けと、夜明けの光に恨み言を吐く、愛しい時間。

早く逢いたい。

一時も長く睦みあいたい。

歌いながら走り出し、抱きしめてキスをしたいくらいに、私は聖杯戦争の全てが愛しかった。

何も言わないアーチャーと、胸から湧き出す感情に身悶えする私の間に、奇妙な沈黙が広がる――

私の使い魔が、異変を感知したのは、その時だった。

「……」

「アリス、敵だ。サーヴァントだ」

私が接近に気付いたのと、アーチャーが腰を上げたのは、殆ど同時だった。

私が雑に作った監視人形が認識できるという事は、つまり、相手は隠れようとしていないのだ。

「アーチャー、相手は分かる?」

逢いに来てくれた――心を躍らせながら、私は出迎えの用意を始める。

使役可能な人形全ての機能モードを監視主体に切り替え、小屋の周りに飛び回らせて――私自身は、身を守るだけに留めて。アーチャーがこれから繰り広げるだろう戦いの全てを、この目に収める構えを作った。

「妖夢だな……なにかおかしいぞ、戦いに来た様子じゃない。移動速度も遅すぎる」

「遅い？」

「遅いと言つても自動車並みだけだな。あいつが本気出したら、白玉楼の庭を須臾に抜ける」

「見たいわね、体術の域を超えてるわ……」

何とも心躍る話をアーチャーは聞かせてくれるが、それに耽溺するより先、接近する気配は、小屋の前でぴたりと止まり、

「こん、こん、こん。」

と、律儀にノックの音が聞こえてきた。

「……扉に近付くなよ、アリス」

「手は出さないわ、見たいだけ」

この扉一枚の向こうに、魂魄妖夢がいる。アーチャーに止められなければ、扉を開け放ち、小屋の中へ迎え入れたいくらいだった。

だが、扉は向こうから開かれる事も無く、また三度、扉がノックされる硬質の音が聞こえる。

——何か、おかしい。

「おい、妖夢！ お前の主人なら此処には居ないぞ！」

アーチャーが、八卦炉を扉へ向けたまま、外の気配に呼びかける。

僅かの沈黙の後、答えは、小さく震える声と共に返ってきた。

「……私の主人は、私の背にいます。敵意は無い、此処を開けてくれませんか」

「信用できないな、断る」

「その声は霧雨魔理沙さんですね？ 私と貴女と、どちらが嘘が得意でしょうか」

「間違い無く私だ」

違いに名を知り——おそらくは、手の内をも知った者同士。再会を祝す言葉は無く、空気も凍て付かんばかり。

先に動いたのは、アーチャーだった。

扉の方へと無造作に歩いて行き、ドアノブに手を掛けて、

「開けるぞ、間合いの外まで下がれ」

「二十歩までは間合いの内ですが」

「じゃあ三十歩だ」

そう言い終わるより先に、アーチャーは扉を蹴り開け、八卦炉に魔力を集束させた。

然し、それが放たれる事は無かった。

そこに立っていたのは、ただの、悲痛な面持ちの少女だったからだ。

幾千万の夜を経て再臨した、遠く古の英霊——そんな気配は、微塵も感じない。人知を超えた魔術儀式の産物、使役者を遥かに超えた従<sup>サブサント</sup>者——そう思わせる覇気が、彼女に

は無い。

「恥を忍んで頼みます……助けてください……！」

そこに居たのは、青ざめた顔の少女を背負つて、夜道を馳せて来た少女でしかなかった。

けれどもその事實は、私の落胆を呼ぶものでは無かった。

そこに居たのは、誰かの死を恐れて戸惑い嘆く、臆病な少女でしかなかった。

だから私は、それを英霊に戻してやらねばと、義務感さえを抱いて——来訪者を抱き締め、出迎えたのだった。

## 六日目——Restrain.

私の住居に一人分しかない寝台を、来訪者が占有している。

色白の、手足の細い、小柄な少女だ。

不健康な瘦躯ではなく、例えるなら深窓の令嬢というところか——スプーンより重い物を持つには似合わない、長く繊細な指が印象的だった。

リリカ・プリズムリバーというらしい。白玉楼を拠点としていたウォーリア陣営のマスターだ。

浅い呼吸を繰り返し、苦しげに眉根を寄せている。頬と額が不自然な程に赤く、汗の量も尋常じゃない。

「こいつは厄介だな……」

アーチャーは、その胸に手を当て、目を閉じ、魔術回路に意識を巡らせていた。

魔術回路に流した魔力を、擬似的な神経へと変化させ、呼吸音や体温や、その他心身に起こっている異常を探る——と同時、身体を蝕む毒の種別をも、探ろうとしている。

「蟲にでもやられたか？」

「……恐らくは。治せますか」

「私は医者じゃない、永遠亭に行け——無いのか、もう」  
私は、その光景を観察していた。

作業の邪魔をしたくはないから、口を閉ざしては居たが、聞きたい事が山ほども有つた。

アーチャーは今、記憶の中の膨大な情報から、専門外の医療知識を引き出しているの  
だろう。そして今、確かに「蟲」と言つた筈だ。

単純な「虫」の毒ならば、魔術を用いての対応手段は幾つも見つかる。

単純に自然治癒力を増すものもあれば、患者の神経系のみを魔力を通して、毒性の伝  
達情報を阻害するという高度な手段もあり、荒つばいものでは単純に毒性物質を破壊す  
るというやり方も有る。あくまで、文献で見ただけだけでも。

だからアーチャーは、普通の虫の毒ならば、こうも固い表情を作らない筈だ。

然し——「蟲」だ。

音は同じだが、その実態には天と地程の差がある。

昆虫に留まらず、多脚の節足動物や、小型の偉業、人工的に産み出された使い魔の類  
に至るまで、多くを内包する、禍々しい言葉。

特に難しいのは、人の手が介在した場合。

悪意を以て作り出された、自然に存在しない毒性に対し、生来の耐性を持つ生物は極

めて少ない。

そういう類の毒ならば、どうやって治す？

そもそも、治せるのか？

私はアーチャーの口元に目を留めて、その唇が動くのをじつと待ち続けた。

やがてアーチャーは、強張った表情を少し和らげて、リリカの胸元から手を離した。

「……どうにかしてやらん事も無い」

「やったっ！」

この声は、私のもの。

これ以上マスターに、引いてはサーヴァントに脱落者が増えてしまつては困るのだ。

既に、確実に一体、恐らくは二体のサーヴァントが消えた。それだけ聖杯戦争の終わりが近づいてしまったのだ。

リリカ・プリズムリバーを救う事で、その終わりが引き延ばせるならば、私は迷わず彼女を救う。

けれども、アーチャーとウォーリア、二騎のサーヴァントは、いずれもが怪訝そうな目で私を見ている。

「複雑な毒と、複雑な呪いの混合物だ。解呪は数時間、解毒は暫く掛かるだろうが……こいつなら、死んだりしないだろうさ」



「知人みたいな言い方をするのね、アーチャー」

「知人だからな」

「……もしかして、貴女の時代の生き残り!？」

興奮の熱冷めやらぬ私の声が、更なる昂揚に上ずる。

「リリカは騒ホルダーガイスト 霊だ、人間みたいな形を取り繕ってても、内側の機能が違う。……妖夢、

お前のお仲間みたいなもんだろ、ちよつとは落ち着け」

「……面目無いです」

ウオーリア——魂魄妖夢は、叱られた子供のような顔でしよげ返っている。

英霊のこんな顔を見られるのも、貴重な機会かも知れないなんて思ったけれど、これは観察に値するものではない。

これから、アーチャーの、戦闘ではなく治癒の術が見られるのだ。

強者絶対の殺し合いを、スペルカードルールという様式の美へ発展させた時代——必然、アーチャーが持つ魔術も、本来は闘争の為のものより、その他の目的に用いられるものが多い筈。

彼女の真価の一端を、私が覗き見る事が許される。小躍りしたくもなる幸福だった。

——あれ、でも。

ノイズ  
雑音。

それは唐突に、私の脳内に飛び込み、忽ちに六月の雨のように、長く続いて他の思考を掻き消した。

私は、聖杯戦争を続けたい。

私が満ち足りるまで、飽きるまで、何処までも。

満足が行かなければ、五十年でも、百年でも。

その為に、私は今、何をすれば良いのだろうか？

「——待つて、アーチャー」

これが正答かは分からないけれど、

「……どうした、アリス」

「治療の前に、患者の同意を貰わないと。三十分、待つて頂戴」

正しいか、誤っているか、では無い。

私は私の欲求を満たす為の、最善の策を求め、意識から外部全ての音を遮断した。

思考する。

私の望みを叶える形とは、何処にあるのか。

聖杯戦争を飽きるまで——その望みを叶える道は、何処から何処へ伸びているのか。

— 聖杯戦争の継続条件：サーヴァントとマスターが、最低二組以上、存在している事 —  
— (?) —

単純明快にして、達成の難しい条件だ。

サーヴァントにも、各マスターにもそれぞれの思惑があり、自らの願望を達成する為に戦うというなら——私以外のマスターは、必ずや他の陣営の撃滅を求める。現在の同盟者、博麗霊夢でさえがそうだろう。

対して、私の望みは——

アリス・マーガトロイドの願望：聖杯戦争に携わるありとあらゆる事象の観察  
サーヴァントが一騎、減るだけでも惜しい。

マスターさえも、本心を言うならば残っていて欲しい。

理想は七騎のサーヴァントが、七人のマスターの元にあり、それぞれが三画の令呪を備えた——つまり、戦争開始直後の状況だ。

私の心の良心的な部分が、日常生活の友人の無事であったり、無関係な一般市民の巻き添えを防ぐと言った、常識的な事を望みもしているが——どうしようも無く飢えた心は、良心を簡単に食い潰す。

——つまり私は、この戦争に勝ち抜かなければならない。

この答えは、必然だった。

私が理想とする形を作る最善手は、”聖杯によつて望みを叶える”事だ。

心行くまで聖杯戦争を堪能する為、敢えて一度、私が勝利する形で、聖杯戦争を終結させる。

勝つ為には、”負けてはならない”。

今の私に与えられている駒は、攻撃に於いては、かなりの力を発揮するだろう。

アーチャー——長射程と高い機動力を持ち、遠距離狙撃や一撃離脱のような、負けな  
い戦い方に適している。身に着けた数多の魔術も、敵の接近を知る術となり、極めて有  
用。

魔術主体の戦闘方法は、『対魔力』スキルと相性が悪いが、私達には同盟者が居る。

セイバー。

近接の戦闘に於いて、単純な火力ならば無類の強さを誇り——そして、あの宝具。遠  
目にも、魔力の余波を感じられる程の、気高く紅く、昏い光。

あれがどういふものであるかは、まだ分からない。けれど直感的に、あれは、受けて  
しまえばどうしようもないものだと感じた。

だから、仮に高い『対魔力』スキルを持つサーヴァントが居たのなら、セイバーと戦  
うように仕向けなければならない。

セイバーと博麗霊夢のタッグは、きつと破竹の勢いで、立ち塞がる敵を打ち倒すだろ

う。

——それを、霊夢も考えている筈。

霊夢は霊夢で、セイバーと相性の悪い敵を、私とアーチャーに任せたいと思っている筈だ。

例えば近接戦闘の技量でセイバーを上回る敵や、宝具に対する防御手段を持つ敵など。

何より霊夢の、私に対する認識は——戦いに巻き込まれてなんとなく戦っている同級生と、それくらいのものではないだろうか。

ならば霊夢は、積極的に私達を倒しに來ない。

寧ろ、最後に戦う二騎のサーヴァントが、セイバーとアーチャーになるとさえ、予想している筈だ。

——その時と、その時までと。

霊夢とセイバーのタッグに勝算が立てば、聖杯戦争の制覇は、十分に狙い得る。必要なのは、そこまで自分が脱落せずに耐え抜く手段と、セイバーを仕留め得る手段。出来る。

私の脳髓が今、我欲を中心とした答えを導き出した。

私は、右手の小指の、第一関節を犬歯で挟み、

『Asssemble.』

単言詠唱キーワードと共に、自分の指先を噛み千切った。

「なっ……!!?」

痛みが意識を、雑多な音の世界へ引き戻す。

声を詰まらせ目を見開いていたのは、ウォーリア——魂魄妖夢だった。

成程、彼女に魔術の素養は無いらしい。

ならば、目を閉じて思案に耽っていた誰かが、いきなり自分の指を噛み切ったら、さ

ぞや驚いた事だろう。

「アーチャー、貴女の名前を借りるわ」

「……アリス、本当に“それ”をやる気か?」

流石に大魔法使い、霧雨魔理沙。私の思惑を早くも見抜いて——それを、止めようともしていない。

なにせ、これから私が行使しようとする魔術は、飽く迄私から発し、私に効果を及ぼすものだ。

私の身体、精神を、これから永久に縛る一つの盟約——

死後の魂をさえ縛る、破壊不可の約定——  
部屋の片隅に置かれた羊皮紙に、私は自分の血で書いた。

束縛術式：対象——アリス・マーガトロイド

魔術体系の祖の目と、子の術義の一切が命ず：下記条件の成就を前提とし、誓約は戒律となりて例外なく対象を縛るもの也

「これは……？」

ウォーリアは困惑と共に、文面を覗き込む。

赤く綴られて行く文字の羅列は、魔術の徒の他には、重要性を理解出来ないものだろう。

その当惑を察したアーチャーが、ウォーリアの隣に立ち、  
「自己強制証文……アリスが出す条件をお前達<sup>セルフギアス・スクロール</sup>が呑む場合、アリスがこの証文で誓った内容は、決して破られる事が無い」

私の意図を、魔術を知らぬ者にも分かるように伝える。

横目で見てみると、ウォーリアの表情の困惑の度合いは、寧ろ増したようにも見えた

が。

「決して——」

「魔術師がな、自分の血で、自分の名を使って、自分に呪いを掛けるんだ。これが成立しちまつたら、私だろうがパチュリーだろうが、もうこの証文を無効にする事は出来ない。そうするくらいなら、世界まるごと滅ぼしちゃう方が簡単だって話になるな」

「ええ、そうよ」

私は、アーチャーの言葉を引き継ぐ形で、ウォーリアに告げる。

「私は貴女達と友好関係を築きたいの。それが本気だっという事を知って欲しくって……だから！」

書き続ける。

赤文字が連なっていく、文章を為すにつれ、ウォーリアの当惑が怒りに変わって行くのは分かるが——それでも、止められなかった。

英霊の怒りを非力な身に浴びるのも、それはそれで、心地良いものだったのだから。

【誓約】

記述者アリス・マーガトロイドに対し、



リリカ・プリズムリバーを対象とした殺害・傷害の意図および行為を永久に禁ずる。  
リリカ・プリズムリバーへの治療行為に際して、可能であるあらゆる手段を講じる事を命ずる。

サーヴァント、同盟者を通じ、間接的にリリカ・プリズムリバーへの殺害・傷害を意図および実行する事を永久に禁ずる。

【条件】

使役契約にあたり、リリカ・プリズムリバーがアリス・マーガトロイドを対象として、自己強制証文を記す事。

以下：条件となる文面。

『誓約：記述者リリカ・プリズムリバーに対し、

聖杯戦争終結までの間、アリス・マーガトロイドを主とした使い魔契約を締結し、その意に従う事を命ずる。』

同期間内に於いて、アリス・マーガトロイドを対象とした殺害・傷害の意図および行為を禁ずる。

同期間内に於いて、アリス・マーガトロイドが死亡した際、リリカ・プリズムリバーもまた自死を行う事を命ずる。

条件：霧雨魔理沙によって、リリカ・プリズムリバーに対し、解呪の魔術が発動さ

れる事。』

「ふざけるなっ!!」

「私は酷く真面目よ、ウォーリア」

「これがっ、これではっ……これでは、我がマスターの身売りではありませんかっ!」

ウォーリアは、自らの刀を抜かんばかりに激していた。

当然の事だ。そして、予測の範疇に有る。

私が綴った文面は——好意的に解釈するなら、相当の譲歩である、とも言えよう。

自分自身の手による殺傷ばかりか、他者へ命じる・依頼するという形での殺傷の意図さえを、永久に——聖杯戦争の後までも禁ずる。加えて、治療行為に際してはあらゆる手段を——つまりは、アーチャーに対し令呪を用い、本人の意思に関わらず治療させる事さえが可能となる。

勿論、その為にリリカが差しだすものの大きさも、私は良く分かっている。

聖杯戦争の期間内に限るといふ前提ではあるが、端的に言えば——

自由意思を奪い、敵対の自由を奪い、私の死をトリガーにしてリリカも——果てはウォーリアまでも消滅するという、雁字搦めの不平等な契約。

この条件を呑んだ瞬間、リリカ・プリズムリバーとウォーリアは、私が飽きるまでの間、聖杯戦争に勝利する可能性が潰える。

平時ならば、この条件を呑む陣営は無い筈だ。

けれども、今の、この二人ならば。

「私も、条件は色々と考えたの。けれど……治療が終わった後、私が貴女達に倒されるのでは割に合わないし、私はリリカがどんな子かを知らないわ。ウォーリア、貴女がどれだけ義理堅くても、彼女が令呪で私を殺せと命じたら——」

「リリカはそんな事はしないっ！」

「——かも知れないけど、確証は無いわ。それに私だって、聖杯に託す望みがあるの——出来たのよ！ 万が一にだって、失敗したくない、どうしても叶えたい望みなの！」

我ながら、悪辣だとは思う。

自分にこの条件が提示されれば、怒りに震えるだろう。自分の知人が、この契約で心身を売り渡すと聞けば、不快には思うだろう。自分も私に、躊躇いを感じない。

寧ろ、この交渉が自分の望む形で纏まる事を、心から望んでいる。

「これはね、ウォーリア——妖夢と呼んだ方が良い？ これはリリカも貴女も、どちらも命を失う事なく、聖杯戦争を勝ち抜けるかも知れない手段なのよ」

「戯言を言うな——」

「黙つて聞きなさい」

自分の喉から出た声の筈が、聞き慣れない声音だった。

魂魄妖夢が、口を開いたままで押し黙る。

その目は、奇異なものを見る目と言うより——見知つた敵対者へ向ける、困惑の抜けた、警戒の目だった。

「私は、聖杯戦争を続けたい。もし私が聖杯戦争に勝ち抜いたら、その時は、この戦争をまた繰り返したいと願うわ。けれど、何十回か、何百回か、もしかしたら何千回目かも知れないけど——何時か必ず、聖杯戦争の全てを知り尽くして、飽きる時が来る。そうしたらリリカは自由で——その後、私を殺そうとしたつて良いのよ。その時、私は、リリカから身を守る事は出来ても、反撃して傷つけたり、まして殺したりする事なんて出来ない——そういう誓約だから」

噛み千切つた小指の先を、また羊皮紙に触れさせる——血が滲まない。

ふと目を向けると、私の右手小指は、すっかり第一関節から先が再生していた。

その指を口に咥え、軽く歯を喰い込ませて、

「それとも、文面を書き換えようかしら。マスターの権限と令呪全てを私に譲渡した上で、リリカの魔力を私に供給するように」

「!?!」

この脅迫は、予想以上に響いたようだった。

妖夢の、刀の柄に置かれたままの手が、力を失ってだらりと垂れ下がる。

「この形にしたのは、リリカにマスターとしての権限を残したかったからよ。そうしなければ、『治療の後で改めてリリカを殺害する』なんて事も出来ると疑えるし、譲り受けた貴女が素直に従うとも思えないもの。でも、令呪までを譲り受けて縛るなら、その気になれば貴女の手で、リリカを殺させる事だって出来るわ」

「貴様っ……!?!」

「——いいえ、実際には殺さないでしょうね。私一人で、サーヴァント二人分の魔力を捻出するのは難しいもの。マスター権を移動するなら、リリカを何処かへ監禁して、魔力だけ私に供給してもらおう。妖夢が私に逆らう事があれば、令呪で貴女を自害させた上で、監禁しているリリカも……殺しはしたくないけど、可哀想な目には遭ってもらうわ」

私は意図して、嗜虐的な笑みを作る。

自分の顔を操作するのは、案外に簡単な事だと、今日試みて、初めて分かった。

鏡を見ればきつと、自分が思い描いたのと全く同じ、凶悪な表情の私が居る事だろう。

その顔のまま、寝台の縁に腰掛け、眠るリリカの頬に触れた。

熱い。

騷靈も人のように発熱するのか——この緊迫した場の中で、一瞬、横に逸れた考えが駆け抜けた。

「魔力供給のパスの構築、色々な手段があるけれど、簡単なのは性交による同調だつて知ってる？ 私は女だけど、別に相手が男でも女でも、見た目が美しければどっちだっていいと思ってる。経験は無くても、一通りの知識は揃ってるわ。……それにこの子も結構可愛いとは思うし、楽しいのかつて聞かれたら知らないけれど……いえ、案外に興味深いかも知れないわね、騷靈との性行為」

言葉一つ一つを吐く度に、冷静な敵意が体を突き刺す。

きつと魂魄妖夢は、私の口を如何に閉ざすか、そればかりを考えているんだろう。

けれども私は、自分の優位性を知っている。

彼女には、私達以外に、リリカの治療を依頼出来る相手など、恐らくは無い。

「熱で弱ってる自分の主人に無理をさせて、自分の主人を犯した女を主に仰ぐよりは、最初に出した条件を呑む方が賢いと思うんだけど、どうかしら？」

道は二つ。その内の一つには、外道が舌なめずりして待っていると想像して、もう一つの道を選ばせる。その為に私は、彼女を殊更に煽り、嘲笑うような笑みを顔に貼り付けた。

「ぐ……ぐうっ……！」

怒りか、屈辱感か——目に見える程、ウォーリアは体を震わせる。

彼女が感情のままに動けば、私は死ぬだろう。

アーチャーの守りは、この狭い小屋の中では無意味だ——間に合わない。私の生殺与奪は、間違いなく、彼女に握られている。

けれども彼女は、どうやっても私を殺せないのだ。

そうすれば、自分の主を守る術を、投げ捨てる事になるから。

見て、少し話をすれば分かるような、忠義が服を着て歩いているようなサーヴァントが、そんな事、出来る筈が無い。

「よ、む………」

「リリカ……!?!」

彼女の迷う背を押すのは、やっぱり、主人マスターの言葉だった。

体を起こそうとする彼女の肩に妖夢が触れ、その動きを押し留める。

「まだ寝ていてください、治療は始まっていない……少しの体力も、今は惜しい」

「妖夢、その紙、見せて………」

「——!?! ですが、これは………」

「話、聞いてたから……お願い………」

間髪入れず私は、机からリリカの手の中へと、羊皮紙を渡した。

条件さえ整えば、その瞬間から私を拘束する自己強制証文の文面に、リリカはさっと目を通し——

「……受けよう、これ」

決断は、早かった。

私もこの早さには意表を突かれて、思わずリリカの顔をまじまじと覗き込んでしまふ。

憔悴した病人の顔ながら——聡明な光が、目の奥にある。

「リリカ、どういう事ですか……？」

「だって……これなら妖夢は、縛られないもの」

問い質す従者に対しリリカは、自分が主であるなどと微塵も考えていないような答えを返した。

「私は、聖杯戦争の間はこの人に従う事になるけど……妖夢は、私に従ってただけだから……。妖夢がそうしたかったら、私から離れて別な人のサーヴァントになればいい、そうすれば妖夢の行動は制限出来ない……そうでしょう？」

「ええ。魂魄妖夢が、私かりり力でないマスターに従うのなら、確かにこの誓約が、妖夢に影響を与える事は無いわ」

私の言葉が真実であると保証するものを、彼女達は何も持たない。だが、真実ではあ



る。

寧ろ、敢えてその選択肢を——魂魄妖夢がリリカ・プリズムリバーを裏切るといふ選択肢を残すように、文面を作ったのだ。

仮にマスターが死亡したとして、サーヴァントが、その瞬間に消滅する訳ではないと聞く。数時間あれば、或いは次の主に鞍替えし、聖杯戦争に参加し続ける事は可能だろう。

実際に、その道が選ばれないだろうとは思っている。

「受ければ、私は生きられる。受けなかったら私は死ぬ……けど、どっちを選んでも、妖夢……あなたは自由だよ。なら、断る理由なんか無い……」

「リリカ……!」

だが、こういう形で——リリカ・プリズムリバーが自ら進んで選択するという形で、契約が為るといふのは、予想の外だった。

少し、この少女に興味が沸く。

思考自体は、さして難しい問題を解いたという訳でも無いが、リリカは思考の瞬発力が際立っているようだ。

あの短時間——文面は、一度か二度、読み通した程度のもだろう。悩む時間も、殆ど無かった筈だ。けれどもリリカは、迷う様子も見せずに決断した。

「率直に言うわ、リリカ。今の私は、少し貴女に好意を抱きかけているかも知れない」  
興味を持ったものは、間近に置いて観察したくなる。触れて、様々な角度から眺めてみたくなる。

思うに私のこの感情は、恋愛感情にも近いものであつて、その一端が——今、蟲の毒に苦しんでいる少女にも向けられた訳だ。

この思考の経緯を、理解した訳では無いのだろうけれど、リリカが私を見る目に、警戒心のようなものは感じられない。まるで、私が彼女に害意を持たないことを、完全に見通しているような、落ち着き払った目だった。

「……ありがとう……羊皮紙と、ナイフを頂戴」

望まれるままに私は、リリカにそれらを預け。

リリカは指先にナイフで傷をつけると、自らの血で以て、羊皮紙に文章を綴った。

「リリカ……、っ……すみません、すみません……！」

その様を見届けるのは、自らの無力に齒噛みするウォーリア、魂魄妖夢と、

「お前——本当にアリスだよな？」

「……？ それ以外の何に見えるのよ」

おかしな物言いをする、私の小さなサーヴァント、アーチャー、霧雨魔理沙。

契約は、成った。

私は――

遙か古から今まで存在する騷霊を使い魔とし、

その従者たるサーヴァント一騎に間接的な命令権を得て、

更には彼女達が本拠地とする白玉楼を、霊体に対する城塞とも呼ぶべき拠点を得た。

「嗚呼、最っ高……！」

欲望を見出し、その求めるままに生きる事の、なんと甘美な事か。

早速私は、手に入れた騷霊の使い魔の、蟲毒の回復に至る過程の観察を始めた。

私の心の奥で、使われていなかった歯車が噛み合い動き出した日の、早朝の事だった。

## 七日目、博麗神社、朝

博麗靈夢は簡素な朝食を摂りながら、理由が何とも分からぬ不穏な予感を抱えていた。

その予感は、急遽対応せねばならぬ類のものではない。

だが——言い知れぬ心地悪さであった。

衣服の襟に草の棘が刺さっているようなものだ。皮膚にちくちくと刺さるが、出血もないし毒も無い。だが一度気にすれば不快でならず、取り除くまでは気持ちが悪落ち着かない——そういう類の予感であった。

食事の後に、着替えを始めた。

学生服ではなく——元より休日ではあるが、仮に平日だとして、先の騒動の後で授業も出来ぬだろう。さりとて平時の服でもない、*「博麗の巫女」*の正装たる巫女服である。着替えを済ませた後、霊夢は畳の上に座して目を閉じ、呼吸を整えながら境内の結界に意識を巡らせる。

*「外」と「内」*を断絶させる結界は、跨ぎ越える何者かの存在を鋭敏に感知する。長き年月に渡って練り上げられ、代々引き継がれた博麗神社の結界は、敷設の更新者たる

靈夢にとって、目や耳、指先と同様であつた。

「……あら、まあ」

そこへ訪れた「侵入者」が誰であるかも、今の靈夢には手に取るように理解できた。その上で漏れ出た言葉が、これだ。

驚きは多分に滲ませながら、嘆きや苦しみ、悲しみの色はそこに無い。博麗靈夢の感情は波一つ立たぬままであつた。

その内、「侵入者」は全く手馴れた様子で玄関口を開け、靴を丁寧に揃えてから廊下を渡り、靈夢が座す居間の戸を開けた。

「おはよう」

先に靈夢が声を掛けると、「侵入者」は嬉しそうに、然し気恥ずかしそうにも微笑んで、そつと靈夢の隣に正座する。

「おはようございます、先輩」

靈夢が薄目を開けて左手を見れば、リグル・ナイトバグは普段より、ほんの少し女性的な服を選んで纏つていた。

当人の容姿は寧ろ少年的な趣が有るのだが、衣服に借り物の如き風情は見えず、中々に似合いの姿であつた。

然し、色合いは暗い。

上下共に黒染めの、袖丈も長いゆったりした衣服には、申し訳程度の飾り紐が色を添えているばかり。重ねたコートまでが、雪を濁らせたような灰色——沈鬱たる着飾りであつた。

だが当人の面持ちは、陰りの端さえ帯びぬものであり——それが霊夢の“勘”に奇妙を訴えかける。

無論、奇妙はそればかりでない。

彼女が結界の中へ足を踏み入れた時点で、霊夢は既に“その異常”に気付いていたが、

「……なんか、安心するわ」

「えっ?」

「朝っぱらからあんたの顔を見てる事が、よ」

膝を崩して姿勢を変え、畳にだらしなく寝そべりながら、霊夢は長く息を吐き出した。「昨日がアレだったじゃない、幾ら私だって疲れるつてもよ……ワンパターンって良いわよね……落ち着く……」

「ワンパターン……それ、褒められてるんでしょっか?」

「すつごく褒めてるわよ、私にしては」

あまりに“霊夢らしい”物言いに、リグルは口を押さえる間も無く噴き出した。冗

談、軽口の類としては、いかにも普段の霊夢が言いそうな台詞であつたからなのだが――

然し霊夢は、全く真面目そのものの顔をして、天井を見上げていた。

幾度か霊夢は、金魚が水槽の中でやるように、ぱくぱくと唇だけを動かした。音を作ろうとして俣ならず、咳払いをしてからようやくやく発した言葉は、

「……悪かつたわね、昨日は」

聞いたリグルの身を強張らせ、輝かしい笑みに僅かの翳りを差させるに十分であつた。

「なんのことですか?」

「当事者がとぼけるんじゃないの。老人ボケする歳じゃないでしょう……昨日の蜘蛛女とさとの事よ」

長い夜の後だが、振り返ってみれば、たったの十数時間前。

古明地さとりとアサシンを追って学校に辿り着いた霊夢の前で、さとりは、霊夢に親しい二人――犬走権とリグル・ナイトバグの兩名を人質に取った。

二人のいずれかを選べ、選んだ方を助ける――それが、さとりの要求であつた。

今にして思えばそれは、実利よりも、霊夢の心を苦しめる為の二択。狂つた心が生んだ残虐であつたのだらうが、霊夢の決断は速かつた。

霊夢は『より戦いの妨げにならない方』として犬走椀を選び解放させ、その上でセイバーに、アサシンを攻撃させ——つまりは一度、リグル・ナイトバグの命を見捨てたのだ。

結果的に、リグルは生き残った。刃を向けられたアサシン——黒谷ヤマメが、人質である筈のリグルを逆に庇い、セイバーの斬撃を受けた為だ。

サーヴァントは機械ではなく、自らの意思を持った一個人格である。古明地さとりは他者の心を読み、努めて惨酷な手段を選んだが、然し己のサーヴァントの善性にまでは考えが及ばなかったのであろうか。

結果がどうであれ、霊夢は確かに、理詰めでリグル・ナイトバグの——数年来親しく交友する後輩の命を、あっさりとは投げ捨てたのである。

リグルもまた、あの選択の意味を理解している。  
だからこそ——“堕ちた”のだ。

もしかすれば古明地さとりは、あの時既に、こうなる未来を予測していたのかも知れない。血を流し弱った体で、消えかけのサーヴァントを従えての深夜の来訪が、今、リグルをして、再び霊夢の元へ足を運ばせた。

リグルは強張った笑みのまま、仰向けの霊夢へ覆い被さるように体を傾けた。

両手を霊夢の頭の両脇、畳に着いて体を支え、見下ろす目に滲むのは涙か或いは狂気



か——

「あんたが生きてて良かったわ、ほんと……」

——寸拍、狂気が和らいだ。

「本当に霊夢先輩は、そう思ってるんですか？」

リグルの声は震えていた。

どのような答えであれ、答えが返ればそれを信じざるを得ないジレンマの為であった。

そうだと言われれば良い。

否と言われた時、自分はどうすれば良いのか、どう耐えれば良いのか——

「当たり前よ」

然し霊夢の即答は、リグルの思考を一言に断つ。

「じゃなきや積極的に殺しに掛かるわよ……あんた、召喚者マスターなんですよ」

「……っ！」

リグルは左膝で霊夢を跨ぎ、腹の上に馬乗りになるや、左手を霊夢の首へ添えた。

その手の甲には三画の令呪が、赤々と己を示すように刻まれている。

令呪を持つマスター同士は、いずれかが意図してそれを隠そうとしない限り、近づけば互いの令呪の存在を感じし得る。

リグルは、手袋などで令呪を隠す事も無ければ、魔術的な遮蔽策も用いていなかった——自分が聖杯戦争の参加者である事を、秘匿するつもりなどさらさら無かったのだ。

その行為は、或る種の都合良い妄想に支えられていた。

他の誰が同じ事をしてても危機を招くばかりだが、自分だけはそうならないという夢の元、彼女はあからさまな敵意をさええ霊夢に見せつける。

「昨日、一人殺してんのよ、私」

だのに霊夢は、首元の手を押しつけるでもなく、リグルの顔を見上げるばかりだった。言葉の重さと裏腹、心が抜け落ちたように軽い声。喉から伝う音の振動にさえ怯えて、リグルは両手を胸まで引いた。

「……言うのも恥ずかしいけど、友達って奴だと思ってたのよ、椀は。その片腕を落として、首を斬らせて……：我ながらなんとまあ、友達甲斐の無い奴だと思わ」

自嘲交じりの言葉に、憐憫の微笑。

何を哀れむか——この時は、己であった。

「これ見なさい、あいつの最期のプレゼント」

「プレゼント……っ、先輩、手」

顔二つの間に、霊夢が左手を割り込ませる。

骨まで届いた丸い傷が、周辺の肉を膿ませている——咬傷であった。

リグルの顔が面白いように青ざめるのを、霊夢はぼんやりとした目で見ていた。

「しよ、消毒っ！ 包帯もっ！」

「いいわよ、出かける前で」

狼狽え、救急箱を取りに行こうとするリグルの袖を掴み、引き留める。

手の甲に丸く穿たれた傷は、丁度、令呪の消滅した一面の上に有った。

痛々しく変色した肉からは、腐った魚の発するような臭いが漂っている。

「こんな痛みで『嫌いになれ』って言いたいつもりなのかしらね、あいつ」

寂しげに、ぼつり。

それを聞いた後輩は、先までの己の態度を忘れて激昂した。

「……嫌えばいいんです、こんなことする人！ なんて酷い……！」

その時、霊夢は、そこに何の妨げも無いように体を起こし、腹の上に乗っていたリグルを膝に降ろすと、両腕でがっしりと、小柄な後輩を胸の中に抱きしめて、彼女の左肩に顎を預けた。

「あ——っ、え？」

「私の性格は分かかってんでしょ、あんた」

予想だにしない——だが夢想ならば幾度も繰り返した——行為が、不意について胸に刺さる。

耳の近くに置かれた唇は、力無く、掠れた息を交えて言葉を紡ぐ。

「……簡単に切り捨てられるんだつたら苦勞は無いの。あいつに刃物を向けられても、咬まれても——あいつを私が殺しても、私はあいつを嫌いになんかなれない。自分の周りのどんなものだって、本当は失くしたくないんだから……あんたなら分かってくれると思ってた」

囁くように吹き込まれる言葉が、耳から背へと這い下りて行く度、リグルは小刻みに身震いをしていた。

それは嫌悪でなく、一種の恍惚、ぞくぞくと背を抜けて体の芯へ向かう質の震えだ。望外の言葉が降りて来る。

唇が歪な弧を描いたが、それは泣いているのか、笑っているのか——  
「……もう嫌、これ以上失くすの」

背に回された腕に、力がこもる。

より近づいた心臓二つの拍動は対照的だったが、それを感じ取れるのは博麗霊夢だけであつた。

翻弄される少女は、腕の中で涙と共に破顔し、

「先輩……寂しかったですか……？」

答えとして霊夢が頷いた時、リグル・ナイトバグは幸福の絶頂を見た。

霊夢の答えは、リグルの妄想を肯定する、完璧なものであったのだ。

「もう嫌！ 裏切られるのも、先に死なれるのも嫌なの！ 母さんもいない、友達も死なせた、これであんたまで死んでたら……どうすりやいいのよお……っ」

「先輩……大丈夫、大丈夫ですっ！ 私は此処に居ます、裏切ったりしません、死んだりしません……絶対、霊夢先輩の傍に居ますから……！」

自分を胸の中に閉じ込め、泣きじやくる霊夢を抱き締め返し、リグル・ナイトバグは眩いばかりの笑顔でそう答え——博麗霊夢の脈拍は、平時より僅かにも乱れぬままであった。

それから暫しの後の事。

霊夢はちやぶ台に左腕を乗せ、それをリグルに治療させながら、テレビのチャンネルをあれこれと切り替えていた。

治療しろと命じたのではない。リグルが自ら申し出て、霊夢が承諾をしただけだ。

治療とは言うが、消毒をし、ガーゼを当てて包帯を巻くだけの簡易的なものだ。

傷を膿ませ腐らせる『孤狼の隠し太刀』も、所詮は古い時代の衛生観念に合わせた毒である。消毒と傷の保護さえ行えば、結界内に籠った「博麗の巫女」が治癒できぬ毒な

どではない。

傷は見えなくなった。霊夢はテレビ画面から目を離さず、だが何を見るときも無しに、目の焦点をぼんやりとさせていた。

「あんたさあ……」

「はい？」

まるで日々の会話の一環であるかのように、霊夢は直ぐ傍の後輩に呼び掛ける。

「最初からマスターだった訳じゃないわよね」

「……はい」

恥じ入るように、リグルが肩をすくめる。

その反応の意図は霊夢には分からなかったが、リグル・ナイトバグが、聖杯戦争の開戦当初から参戦していたのでない事は理解していた。

令呪の反応を、リグルは隠そうとしない——というより、隠せていない。

そもリグル・ナイトバグへ「半ば強制的に」植え付けられた『魔術回路』は、幻想郷のシステムに存在しない物である。

古明地さとの『想起』により発現したこの機能は、リグルの左手に宿った令呪と密接に結びついているが——それをリグルは、まだ完全には操る事が出来ていない。

技術だとか慣れだとかではなく、単純に「不整合」なのだ——人間の体に翼を繋いで

も、人は空を飛べないのと同じように、外部から付け足した器官が正常に動作する筈が無い。

だのにリグルの魔術回路は、息吹いたその時から駆動を止めていない。

これは寧ろ、“動かせない”というより“止められない”のだ。

常に最大回転し続けるエンジンのように、周囲に轟音を撒き散らし我此処に在りと喧伝し続ける、それがリグルの“出来損ない”の魔術回路であり令呪であった。

「あんたが居たら、他のマスターを探すの、楽になりそうね」

霊夢の意図は——名言はせずとも明らかに——リグルを囮とし、他のマスターを呼び寄せようというものだ。

聖杯戦争に参加するのは、魔術的な素養を持つ者であるという。ならばリグルの異常を感じし、攻撃を仕掛けてくる者もあるだろうと——

「いつ、いえ——」

然しリグルは、霊夢の言葉の後ろ端を喰うように声を重ねる。

「他のマスターの位置は、殆ど見つけています」

「……」

瞬間、刹那、寸刻——霊夢は体勢をそのままに、首だけをリグルの方へと回した。

平時と変わらぬ顔の中、両目だけが広く見開かれた凄絶な表情を見せた霊夢は、包帯

が巻かれたままの左手で、リグルの腕を掴み、引いた。

「せ、先輩っ!？」

指が皮膚に痕を残す程の、強い力であった。

「聞かせなさい。何処？ 何処に誰が居るの？」

修羅の形相、鬼の声音。

否と言わせぬと誰にも告げる、絶対者の覇気を受けて、リグルは腕の痛みに怯えながらも、陶然と、滔々と語り始めたのである。

リグル・ナイトバグは、虫を滑る一族の長子である——と同時に、たった一人の生き残りである。

何故か。一族全て、寿命が短いからだ。

野に這う虫が、春に生まれて冬に死ぬのと同じように、生まれ落ちたナイトバグの一族は、跡継ぎを産み落としたなら、死の他に仕事を残さない。

彼等は神秘の衰えた幻想郷に於いて、酷く“原始的”な——人と、雑多な虫とを分かち切らぬ、形を変えぬ種族であった。

虫は覇者である。獣より人より長く、さして姿も変えぬまま、地上に空に繁栄する。



“虫の王”たるナイトバグの血も、大きく形を変えず受け継がれてきた。神秘無き幻想郷に於いても、彼等は虫の声を聞き、虫に命じる。

故に、虫の忍び入る隙間があるならば、それ即ちナイトバグの耳が有る。ナイトバグの目が有る。

人の口より風より早く、彼等のみが幻想郷の広きを、居ながらにして知るのである。

その当代の主が、全ての耳目を己の為に意図的に偏らせたのならば——  
答えは静かに、上擦った声を以て開示される。

「……サーヴァントは、今、五騎が確認されています」

「そりゃそうよね、二騎が減ったんだから——ん、いや、違うか」

「はい。私の『アサシン』は——古明地さとの脱落と同時に召喚されました。先輩のセイバー、アリス先輩のアーチャー、白玉楼のウォーリア——イレギュラークラス、野良道士のバーサーカー、合わせて五騎です」

霊夢が二度、首を傾げた。

聖杯戦争は七騎で行われ、クラスの重複は無い——それが鉄則である筈なのだ。

脱落した二騎のサーヴァントは——

「あの蜘蛛脚は、アサシンだつて名乗ったわ。椛の方のは……」

「射命丸 文。伝承からも能力からも、ライダー以外の該当は無いと思います」

単純にこれまで確認されたサーヴァントを足すと、7騎。然し、その内の一つ——リグル・ナイトバグとアサシンの主従——は、恐らくは数に入らないイレギュラーなのだろう。

空白のクラスは二つ、ランサーとキャスター。ならば——霊夢が指折り数える。

「多分、あと一組——あんたの『虫の網』にも掛からない誰かが」

「はい、多分」

ただの推測に過ぎないが、案外にこれは的を外してはいないのでろう——霊夢は直感的にそう思った。

リグルの主従は、脱落した組の代わりに参戦した——と考えると、これはおかしなことになる。脱落者が補填されて行くのなら、何時までも聖杯戦争は終わらない。

だから、霊夢は逆に思考する。

古明地さとりと黒谷ヤマメの主従は、自ら聖杯戦争から降りる代わりに、リグル達を“参戦させた”のではないか——？

それが可能かどうか——分からない。だが、その前提で考えるなら、数の辻褄は合う。そもそもにして『英霊』なるものを呼び出し使役するシステムは、大量のエネルギーを消費する。ただでさえ横紙破りで一騎を途中参戦させ、この上更にもう一騎が枠より溢れているとは——無いとは言えぬが考え難い。

故に、二陣営ではなく、一陣営。霊夢は以上の思考を、明確な形とはせぬまでも、会話の内に完了していた。

「ならキャスターね、多分。『陣地形成』のクラス特性持ちなら、引き籠もり上等でしょうよ。……さっさと見つけないと」

加えて、自らの存在を秘匿しながら戦況を見定めるやり口は、生存力と燃費効率に長けたランサーを運用するには似合わないとも感じたが故、霊夢はそのように結論づける。

自陣内の防戦に於いて、魔術師キャスターは無類の強さを発揮するということ。備えが整うより先に潜伏箇所を特定し、襲撃する——それが勝利の最短手順であろう。

だからこそ、一刻も早く敵の所在を特定したいのだが——

「にしても、あんたの網に引っかからないって……どういう事？ コンクリートの核シェルターにでも閉じ籠ってるの？」

「……それだって、排気口がある筈ですし、人の出入りする環境なら虫は忍び込めます。サーヴァントが少しでも動けば、それ自体は感知できなくても、何らかの痕跡の一つや二つ——」

街に生きる虫の数は、人間の比ではない。彼等が見聞きしたものを知り得るリグルなら、如何に巧妙な秘匿だとして、何らかの痕跡は見つけ出す。この世に存在するからには、

周囲の環境に一切の影響を及ぼさず行動出来る道理は無いのだ。

ならば——『最後の一騎』は何故見つからない？

「——居ない、のかもね」

「いない……？」

「『この街にいない』か、或いは『もういない』か……『そもそもいない』か。あり得ないとは言えないでしょ？」

「……その考え方は危ないと」

敵が少ないかも知れない——と、想定するのは、楽天的な思考であると、リグルが咎める。リグル自身、自分の情報網を信用してはいるが、後ろ向きな思考は拭えない。

拠点が遠いか、脱落してるか、実は存在してさえないのか、まだ決め付けるのは早計だと注告——いや、『忠告』するが、

「あんたが居れば、危ない事も無いでしょ」

「えっ……？」

霊夢は何とも容易げに、ちゃぶ台に片肘を乗せたままで言った。それから、少し眠たげにあくびをした。

その瞬間——少なくともリグルの目には、博麗神社の狭い居間が、平穏な日常に在るように思えた。

これから朝食を済ませ、鞆を手に通学路を歩き、授業が済めば同じ道を、無為の戯れ言ばかり交わして帰る——退屈な、代わり映えの無い日々。

無論、それは幻想に過ぎない。

然しリグルは知っている——退屈な日常を、博麗霊夢が、どれ程に愛しているのか。常日頃変わらぬ大人びた顔が、時折子供じみて緩む時は、いつもそんな、平穏な日常の中に在る時だったと。

他の誰が知らずとも、自分だけは知っている——信じているからこそ、霊夢の言葉を肯定出来ない。

「……いいえ、そんな事は無いと思います。私の令呪は隠蔽が難しいですし、サーヴアクトはアサシン、正面切つての戦闘は——」

戦闘力を言うならば、リグルとアサシンの陣営は、霊夢とセイバーの主従に遠く及ばないと、リグル自身が良く知っている。だからこそ、自分が不当に高く評価されている事、博麗霊夢が自らの評価を誤り、危険に陥る事を、万一にも看過する事は出来なかった。自分は、博麗霊夢の日常を守る盾とは成り得ないのだ、と。

だがそれ以上に、自分もまた、平穏な日々を壊す因子であると、リグル・ナイトバグは自覚していた。

自分が居れば危ない事も無い——否。

既に、戦いに足を踏み入れた自分自身が、平穩とは程遠い——靈夢の愛する日常と、かけ離れた存在なのだから。

自分に頼る事は、良策では無い。リグルが、そう明確に告げようと、口を開こうとした時

「そーいう事じゃないの」

その唇を閉ざす、靈夢の指。リグルの目を覗き込む、黒い瞳。

ちやぶ台の上に身を乗り出すように、靈夢はリグルと前髪を交わらせた。

言葉を閉ざす指を引き——唇を、その空白に押し当てた。

軽く触れるばかりの口付けは、瞬き二つ程の間に過ぎて、離れてしまえばそれこそ夢であつたかのように形を残さない。

ただ、リグル・ナイトバグは、己の唇に残つた他者の体温を、無意識に舌先でなぞつて、

「……っ、え、あ、え……えっ、ええ、えっ？」

酷く狼狽しながら、耳から首まで真っ赤に染めた。

一方で博麗靈夢は、畳の上にごろりと転がり、自分の行為を忘れたかのように、「ねえ、お腹空いた。ごはん作ってよ、この手じゃレンジでチンしか出来ないんだもん」

世話焼きの後輩に、朝食の用意をねだつた。

その日、博麗神社の食卓には、余り物の野菜や惣菜を用いたとは思えない程、栄養バランスと味の双方に配慮した、豪勢な朝食が用意された。

白米の湯気が漂う居間と、壁を隔てて隣室。

少女二人が座し、向かい合っている。

友好的であるか——全く、否。片や既に抜き身の刃を手にし、もう一方も隣室の声に意識を置きながら、壁にびたりと背を当てている。

セイバーとアサシン、二騎のサーヴァントであった。

セイバー、フランドール・スカレットは、眼前の相手に対し、自らの真名を隠蔽する意図を持たぬのか、衣服も生前の物に近い赤、束ねた髪も本来の金を、余さず表に示している。

対峙するアサシン——彼女もまた、その姿は、自らの名を告げるように生前そのまま。襟付きの白いシャツに黒いベストを重ね、黒いスカート。淑やかな趣があった。

だが、少女的な服装の裏に秘められた本性は、凶暴な“魔”である。その事を示すように、アサシンが笑うと、並ぶ歯列は鋭い牙となっていた。

「残酷ね、貴女の主人は」

アサシンの口調は、自らのマスターに向けるものより、寧ろ柔らかいが、非難の色が  
ありありと浮かぶ。

セイバーは、苦々しくその言葉を聞いた。

「……霊夢は、覚悟を決めたの。他人の何もかもを踏みにする覚悟を」

「それが当代の『博麗の巫女』の在り方？ ふうん、私の生きてた頃と随分変わったわ  
ね——少なくとも本質は。顔とやってる事だけは、あんなにそっくりなのに」

「大して知りもしないで、勝手な事を言わないで」

「あら、貴女だつて別に、博麗霊夢を良く知っていた訳じゃあないでしょう、閉じ込めら  
れたお姫様」

二騎のサーヴァントは、隣室の音と声のみを聞いて、その様子を把握していた。そし  
て二者ともが、心の底では、同じ思いを抱いていた。

——むごい事をする。

恋人にするような行為を、思慕の情を抱いたような言葉を、贈り物ではなく武器とす  
るのは、極めて残酷な事だ。

「貴女の主人のやつてる事は、呪いとおんなじよ。これで私のマスターは、貴女の主人の  
為にどんな事だつてするでしょう」

「戦いなよ、仕方がないわ」



「へえ。ならば私のマスターが、私にどんな事をさせても『仕方がない』と言い切れるのかしら？」

私は怪物よ、とアサシンは言った。アサシンの目は、それ自体が光源であるかのように、らんと金色に光っている。

「夜は貴女達だけのものではないわ。有象無象、魑魅魍魎が何千、何万、這いずり回って蠢いて。その中で私の名が、今も残っている理由が分かる？」

「闇を侮るつもりは無いわ。けれど、貴女と私を比べて、私が劣っているものはない」  
「その傲慢、その矜持、流石に紅の吸血鬼ね。生まれつきの強者だから、弱者の振る舞いを分かっていない。警告しておくわ——貴女の主人は、あの行為の報いを受けるでしょう。報いは毒となつて、やがては彼女を殺すかも知れないよ」

平静の言葉に、ぞつとする程の怒りと憎悪が有った。セイバーは無意識に、間合いを一步、歩いて詰めていた。

元よりセイバーの間合いは、剣の常識を逸脱した遠距離。強化魔術により延長した刃と、対城宝具『紅く禍為す禁忌の剣』の貫通力を以てすれば、たった一步の間合いなど、埋める意味も無い代物である——

そういう理性の駆け引きを超えた、予感が有った。

この敵を、自分の手の届く範囲に置かねばならない。さもなければ、大きな災いがあ

る。

夜の王たる吸血鬼の本能が、たった一匹の、種族さえ定かでない妖怪に、最大限の警告を叫んだのである。

然し、均衡は破られなかった。

二騎のサーヴァントは、隣室から此方へ向かう足音を聞いたのである。

「アサシン、夜に動きます。『例の場所』に私を運びなさい」

リグル・ナイトバグは、この数十分で顔を変えていた。

青白かった頬に赤みがさし、強張っていた目が僅かに緩み、せわしなく揺れていた眼球も、余裕を覚えてか真つ直ぐに前を見据えていた。

自分は、価値があるのだ——そう信じる少女の、強くも愚かしい、愚かだが強い目になつていた。

「心得た、マスター。君の言に従おう……但し、忠告はさせてもらう」

「どうぞ」

「君の恋路は釣られた揺籃の中に在る。揺れる度に君の肌は破れ、滴る血が女を潤す」  
アサシンの忠言も、リグルの表情を変えさせる事は無い。

幸福の絶頂の中、少女は自らの従者を傍に、博麗神社を後にする。

二つの、同じくらしいの大ききの背を、見送る者は居なかった。

## 七日目——Artifactual.

この日、博麗霊夢は珍しく、「博麗の巫女」として、正式な依頼を受けていた。

依頼先は病院。過去、竹林の森と呼ばれた地区に立つ大病院の、とある兎妖怪の医師から、依頼である。

曰く、同じ学校の生徒さんが一斉に同じ症状で運び込まれて、検査しても病原菌だとかウィルスだとかが見つからない。調べれば調べる程に気味が悪いのでお祓いをお願いしたい、と——

同級生も多数入院している所に、巫女の正装で出向くのもむず痒い心地であったが、病院の中を堂々と歩き回れる機会という事で、霊夢はそれに応じた——ほぼ全ての生徒が面会謝絶とされているからだ。

今、霊夢は、一階丸ごと同校の生徒で埋められた病棟で、病室を順に巡っている所だった。

探し物は、令呪の気配と——入院していない、誰か。つまり、アサシンの宝具による襲撃に耐えられる、魔術師か、それに準ずる力を持った者。

然し結論から言えば、そんなものは居なかった。

そもそも、同校に於いて博麗靈夢、アリス・マーガトロイド、古明地さとり、三名がマスターとして選ばれた事自体が、奇跡的な確率の産物。さらなる偶然は望むべくも無かつたし、まだ見ぬ二陣営の誰かが、悠長に病院を潜伏先とするかと問えば、少なくとも自分はしない——靈夢はそう結論付けて、自らの仕事をこなしていた。

病室を回り、適当な文言と動作で、仰々しく祓いをして「見せる」——依頼内容を見るに、要は兎医者、安心が欲しいだけなのだ。そのついでに、病院にはつきものの悪霊などいれば、そちらは片手間に符術で祓つても居た。

多くの患者を、靈夢は見た。明日にも退院できそうな軽傷の患者も居れば、後々まで後遺症の残るだろう者も居た。その殆どが、見知った顔であるという事実が、靈夢の心に鉛の如くのしかかる。

——これだけの人妖を巻き込んだ。

たった一人か二人、殺そうという決断が遅れた為に、無駄な被害を増やした——靈夢は、己の行為を咎めていた。

次はきつと、しくじるまい。

自らの過ちは、自らが正す。それが博麗靈夢の、「博麗の巫女」たらんとする少女の決意であつた。

表面上は淡々と、靈夢は病室を巡つて行く。その足が止まったのは、小さな病室の

ベッドの上で一人、膝を抱えている河城にとりを見つけた時だった。

「ねえ」

「んっ? ……おつ、盟友じゃん、何そのかつこ。コスプレ?」

にとりに取つて“盟友”の基準とは、ある程度の期間会話した事がある人間の大多数である。

抱えた膝をあぐらに変え、人懐っこい笑みを浮かべたにとりは、見た目には健康的に見えた。

黒谷ヤマメの結界の毒は、効力にかなりの個人差があつたが、にとりは体質的に影響が少なかったらしい——出合頭に軽口を叩ける程度には、にとりは体力を持て余していた。

「コスプレ違う、本業。あんたらが呪われてるつて医者が怯えてるから、わざわざ祓つて回つてんのよ」

「あつはつは、呪いだなんて非科学的な! お祓いより私のお手製プラズマクラスターの方が、空気には優しいと思うな!」

「はいはい」

「あつ、信じてないなその言い方! ならば見せてやろうとも、実はここに隠してあつて

——」

と、病院のベッドの下から、金属製の箱を引きずり出すにとり。見た目はパソコンの本体部分にも似ているが、ぐねぐねとうねったケーブルが何本も突き出た姿は、あまり機能的とは言えない。

溜息半分、呆れ笑いも半分に、霊夢は病室の中央に立ち、所定の「祓い」の動作を行った。悪霊の類も、呪いも、その他の霊的な仕掛けも無かったが、他の病室より時間を長く取った。

適切な言葉を探していたのである。

「ねえ」

結局、病室を訪れた時と同じ言葉に、沈鬱な響きを載せる。

声色に、続く言葉を察したと見えて、にとりは手の平を霊夢に向け、首を左右に振った。

「さどりの事だろ、山の巫女さんに聞いたよ」

「山の——早苗に？」

その名を、此処で聞こうとは、霊夢は予想していなかった。確かに河城にとりは、妖怪の山方面に住んでいるが、東風谷早苗と面識があるとは知らなかったし、ましてや早苗が霊夢に先んじて病院を訪れていようとは。

その早苗だが、今朝方、霊夢の家に電話を——番号を教えた記憶など霊夢には無かつ

たが——掛けてきて、告げた事がある。

——今回の一件は、薬品会社の廃液流出が原因とします。

某企業のずさんな管理体制が祟り、劇薬の廃液タンクが流出。それが如何なる経緯か、命蓮寺高等学校付近に不法投棄され、水道管を腐食させ水に混入、蛇口を捻った折に廃液と水が反応を起こして気化。気化した薬品が生徒の呼吸器や皮膚に作用し大惨事となった、というのが、シナリオだという。

専門的な調査を行えば、その真偽は容易く知れるのだろうが、東風谷早苗は『何とかする』と言った。聖杯戦争に対し、何の義務も権利も持たない酔狂人に頼る他、霊夢には打つ手が無かった。

「体、弱そうだったもんな、あいつ。病院に運ばれた時には、もう駄目だったって……お医者様を恨むなつて言われたよ」

「……そう」

「最期だし、一回くらいは顔見たかったんだけどさ、駄目だつて言われた。薬品の噴き出した時、近くにいたんだらうって——」

早苗のシナリオの中で、古明地さとりは、狂気を同校生徒に向けた加害者ではなく、不運な被害者の一人とされた。死体は薬品汚染が酷く、近づく許可が出せないとされ——  
ニュースに名前が載って、それを最後に、古明地さとの存在は消えた。

「椀も、死んだらしいわね」

「それも聞いたよ。……霊夢、仲良かったよな」

「あんたもでしょ、将棋仲間だったって聞いてたわ」

「まあね。負け越したまんまだったよ」

犬走椀も、地上に落ちた首無しの亡骸は迅速に回収され、同じように、近づく事の出  
来ない死体として処理された。

そればかりではない。何人も、何人もが、同じように——二目と見られぬ無残な姿、内  
臓が融解し潰れた死に姿を、誰にも見られぬようにと葬られた。

「……残念ね、本当に」

霊夢の言葉は本心であつたが、抱く感情を表すには不足の言葉であつた。

だが、それ以上の言葉は見つからない。慰めや、憐れみや、同情や——そんな言葉に、  
なんの意味が有るか。ましてやそれを示すのが、事態を引き起こした一因であるなら  
ば。

「だねえ、本当に残念だ。さとりが居なくてにとりが一人つてか、あははつ、あはははは  
ははつ——」

から笑いの後、にとりは酷く咽せた。

その後は暫し、静寂が病室を包んだ。



何十、何百の人間が治療を受ける環境で、日中にも関わらず、病棟は静かだった。隣の、或いは幾つか離れた病室の物音が、声が、にとりの病室にまで届いていた。

「誰か泣いてる——」

初めて気付いたように、にとりが呟く。

霊夢は、その言葉に何も応じぬままで窓際に立ち、カーテンを開け、日光を病室に取り込み、それから——

「あんたも、泣いてもいいんじゃない？」

「ひゅい？」

ベッドに座したにとりに背を向けて、そう促した。

「はは、まさかあ。この天才発明家の河城にとり様に、涙は似合わない」と——

「うるさい、さつさと泣け」

「——はあ!? ちょっと横暴じゃないかね博麗の巫女さんよ、おー？」

ドスの聞いた声を出す霊夢に、にとりもガラ悪く応じる——学生同士の、他愛ない戯れ。

だが。

気丈に返すにとりの表情を、見る者は誰も居ない。だから、言葉とは裏腹に声が歪むのも、何故なのか誰も知らない——知らないのだと、霊夢の背が告げて。

「……良いから泣きなさい、私の分まで。『博麗の巫女』が誰か一人の為に、ビービー泣くなんてやってられないのよ」

「ははっ、酷い言い草だ。……泣くのとて疲れるんだぞう。二人分も泣いたら、ここにや川もない、干上がってにとりのミイラが出来上がりだよ。神社にでも飾る？」

「要らない。……ほら、さっさと泣けって言つてんのよ、しまいにやゲンコツで泣かすぞ  
ら」

「ひええ、ヤクザ巫女だあ……っはは、はははは、あはははは、あはは——」

おどけ合いながら視線も合わせず、泣け、と。自分の為に泣けないなら、私の代わりに泣けと、強請る声までが震えていると気付いた時——河城にとりの目から、涙が堰を切ったように溢れた。

ベッドのシーツをくしゃくしゃに握りしめ、赤ん坊のような大声で、にとりは泣いた。背から胸に突き刺さる哭声を聞きながら、霊夢は両手の拳を、爪が肉を抉る程に握る。霊夢は、涙を流さなかつた。滴る血を涙に代えて、目を見開き、肩を震わせながら立つていた。

病院の祓いを終えて、また暫し後の事——冬の短い昼が、夕に切り替わる程の頃合い。

霊夢は、白玉楼の階段に沿って「飛んで」いた。

飛翔——古を生きた英霊達は、当然のように備えている技能。然し本来、現代を生きる霊夢が使える技術では無い筈だった。

然し今、実際に霊夢は、空を飛んでいる。

寧ろ今までが異常であり、空を飛ぶこの姿が正しいのだと思える程、飛ぶという行為が「馴染む」のを、霊夢は自覚していた。

口数は、極めて少ない。

傍らに霊体化したセイバーを携えながら、彼女に掛ける言葉の一つも無かった。

階段の頂上、正門の前には、魂魄妖夢——イレギュラークラス、ウォーリアが立っていた。

対霊体の結界に守られた白玉楼の、ただ一つの入り口を塞ぐウォーリアは、来訪者の浮遊する姿を見て、ほんの少し瞼を広く開いたが、

「どうぞ、お通り下さい」

すす、と横へ滑るように道を開け、霊夢とセイバーを楼中へと通した。

霊夢の訪問の理由は、楼中の人物より送られた招待状。使い魔によって運ばれた、ルーブリーフのメモ書きである。

『白玉楼を拠点にしたので、どうぞご訪問ください。かしこ。アリス』

拠点にした——あまりにあっさりとした文面の、秘める意味の重さ。

セイバーと黒鎧のサーヴァント、二騎を以ても傷付けること叶わなかった、白兵戦の無双、ウォーリア。彼女が守る白玉楼を、アリス・マーガトロイドは、自分の拠点にしたと記してある。

初め、霊夢は、その手紙を、他陣営からの偽手紙ではないかとさえ疑った。然しセイバーが、文使の使い魔は間違いなくアーチャー霧雨魔理沙の作ったものだと言った——西洋魔術的文脈によれば、魔力による署名の如きものも施してあるという。だから疑念を持ちつつも、迅速に訪れたのだ。

正門をくぐった先、白玉楼中は、墨絵の如くに清浄であつた。

白砂を踏み庭先を行けば、雪華を咲かす桜の木々が列を成し、来訪者に道を示す。

木々の道を歩む先は、楼閣高く厳かにそびえ、目に見えぬ靈魂の気配ばかりが、柱や屋根に纏わりついていた。

——異界。

静謐の空間に、霊夢の直感が警鐘を鳴らした。

此は現世か、否、冥府であろう。冥府に人は留まるべきでない——只人ならば。

「博麗の巫女」として、この空間に漂う過剰な死の気配を、長く浴びて良い筈は無いと、霊夢は殊更に警戒する。

——此処は、日常の対極にある。

博麗靈夢と、決して相容れぬ空間が、白玉楼であつた。

「アリス！ 来てやったわよ、何処？」

同盟者の名を呼ぶと、わぁんと声は何処かにこだまして、それから足音。和風の家屋にはまるで似合わない金髪の少女が、二人、並んで姿を見せた。

「セイバー、それに靈夢、良く来てくれたわね。入つて、お茶を用意するから」

アリス・マーガトロイドは非常に上機嫌であることが伺える、弾んだ声で、靈夢達の名を呼んだ。

その言葉の選びに、些細な違和感を抱きながらも、靈夢は靴を脱ぎ、縁側から上がり込んだ。

「楽しそうね、アリス……緑茶？ 紅茶？」

靴を揃えながら靈夢は問い、同時に、違和感の答えに行き着く。

アリスは、先にセイバーの名を呼んだのだ。

霊体化し、姿が見えない筈のセイバーを、そこにいると分かつては居ても先に名を呼ぶのは——靈夢とアリスのここ数日の関係性を思えば、奇妙な事に感じられた。

「お勧めはハイブリッドね。緑茶<sup>3</sup>に紅茶<sup>1</sup>でミルク砂糖マシマシ」

「……普通に緑茶でお願いするわ」

「ちえつ。その部屋で待つてて頂戴、持つて来るわ」

然し、アリス本人に、違和の自覚はあるのだろうか？

冗談を口にしながら、ロングスカートの裾をはためかせて、また建物の奥へと戻つて行くアリス——足取りは軽い。軽いばかりか寧ろ、抑えつけねば浮き上がりそうにも思える。

浮かれている。

今にもミュージカルのように、歌い、踊り出してもおかしくない程に見えて、霊夢はその背を追いながら尋ねた。

「何か良いことでもあったの？」

「ええ、とつても！……あら、待つててくれて良いのに、まだお茶を用意してないわ」  
輝かしい笑顔で振り向くアリス。なんと無邪気な表情であったことか。

こうまで陰りの無い笑顔を出来る者が、自分が幸せであると心から信じた顔を出来る者が、この世界にどれ程居るか。

霊夢は急に、目の前の少女が、やがては自分と敵対するかも知れないのだと思ひ出した。

「……お茶は結構。それより話して頂戴、上機嫌の訳と、私達を招待した理由」

「そう？　……このお茶っ葉、上等なんだけど——じゃ、先にそつちの用事からにしましょ

う」

霊夢は、アリスとの距離を五歩まで広く取って、壁際に立った。その距離を全く無造作に、何の害意も無く、アリスは一步まで詰め、壁に手を着いて、霊夢の顔を覗き込んだ。

「本当に、来てくれて嬉しいわ、霊夢。時間が過ぎるのが、とつても、とつても長く感じたわ」

興味深いものを見る、好奇の目——アリスは博麗霊夢を観察しているのだ。

だのに霊夢は、アリス・マーガトロイドが自分へ向ける好意の強さを、アリスの目の光に感じ取っていた。

——これは、誰だ？

霊夢は、眼前の少女の正体を疑った。

この少女は、アリス・マーガトロイドという名前の魔術師と、同じ顔、同じ姿をしている。然し、その魔術師は、自分は聖杯戦争に掛ける望みが無いと、自分は偶然に巻き込まれたのだと、博麗霊夢に告げた。

人の心情の機微を解さないくらいは有るが、常人の範疇に収まる変人ぶり、同盟者として背を預けても良いとは思える少女——それが霊夢の、アリス・マーガトロイドへの評価だった。

今、目の前に居る少女は、自分の知るアリスより、自分に強い好意を向けている——それが七色の眼光を通じ、厳然たる事実として迫つて来る。その好意を受け取つて良いものか、霊夢は躊躇いを抱くのだ。つい数時間程前には、後輩から向けられた好意を逆手に、傀儡を一人作つたばかりの霊夢が。

——違う。

昨日までのアリス・マーガトロイドとは、明らかに違う。

聖杯戦争に巻き込まれた魔術師の少女は、たった一夜にして、本質を全く異にする怪物へと変貌していた。

その怪物が、鳶色の目を細め、心底嬉しそうに言う。

「アーチャーがね、『お前から単独でも身を守るように、私が授業をしてやる』つて！霧雨魔理沙よ、魔術師の始祖の独占講義よ！」

隣に立つアーチャー当人は、苦笑いを口元に浮かべ、帽子を目深に被っていた。

「それじゃあ今から霧雨魔理沙様の護身術講義を始めーる！生徒諸君は謹んで勉学に

励むように！」

「はい、先生」



さて。

博麗靈夢が、アリス・マーガトロイドを怪物と見做してから、まだほんの数分しか過ぎていないのだが——とかく、のどかであった。

白玉楼の庭に、机と椅子三組ずつと、ホワイトボードが運び出され、アーチャーがホワイトボードの前に立ち、靈夢とアリスが着席している。机一つは空席である。

靈夢の机の上には、アーチャーが用意した鉛筆二本と消しゴム一つ、それからA3の印刷用紙が一枚。一方、隣に座るアリスの机には、分厚い書が三冊ばかり重なり、書き込みがおそろしく細かい手帳やらノートやらが所狭しと広げられている。

「先生、そっちの空き席はどうしたんですか？」

「アリス君、質問は挙手の後に行うように。えー、リリカ君は残念ながら病欠と連絡が来ておる、後でノートを見せてあげるように、うおっほん」

「……なにこれ。ほんとなにこれ」

小学校ではおなじみの学校机に、伸びてしまった背を無理に押し込みながら、靈夢は呆然と——というよりは困惑しつつ——加えて呆れ果てながら——小さな体で踏ん返り返るアーチャーを見ていた。

ご丁寧に、口調に合わせた付け髭姿である。ちなみにカイゼル髭である。

「ちよ、ちよつといいかしら、要件ってこれ？」

場合によつては一戦交える覚悟を決めて、腹をくくつて来訪すればこのざまである。しかしそうは言いながらも、言葉をさし挟むのに、律儀に手を挙げている辺り、霊夢もアーチャーの勢いに飲まれていた。

「そうだけ、お前達頼りないマスター二人に、せめて自分の身を守れるようになってほしいという親心だ。私らが必死に戦つてる横で、ころつと蜂に刺されて死なれちゃかなわん」

「随分と信用が無いのね……結構強いわよ私達」

アリスが口を尖らせて、拗ねたような口振りで混ぜつかえず。

それを受けて、アーチャーが、ホワイトボードから数歩離れた。

「評価は何事も適切に下すべきだと思つて。お前達が、今の幻想郷で『比較的』優秀なのは良く知つてるが、絶対的に飛び抜けてる訳じゃあない。……そうだな、言葉にするよりも」

瞬間、アーチャーの手に顕現する箒——飛翔魔術の補助器具として最も一般的な道具であるが、アーチャーはそれに跨ると、地上から3m程の高さに浮遊した。

「アリス、霊夢。私を箒から落としてみる。石を投げるなり掴みかかるなり、攻性魔術を顔面にぶつけても、符術で箒を爆散させても——そうだな、他のサーヴァントを使わなきゃなんでもありだ。というかフラン、お前は座つてくれ頼むから。怖いわ」

「むうう、読まれた」

アーチャーの後方、何も無いように見える空間から不平の声——どうにもセイバーが、開始と同時にアーチャーに襲いかかろうと、手ぐすね引いて待つていたらしい。

「……悪いけど、帰るわ。こういう雰囲気に乗る気分じゃないの」

霊夢が、椅子を蹴るように立ち上がった——入れ替わりにセイバーが、空いた椅子に座って背筋を伸ばす。

箒に横坐りして地上を見下ろすアーチャーは、暫し、霊夢が地上から投げつけて来る、いやに重苦しい視線を受け止めていたが、

「知りたくないか？ お前の名前が、私達の時代の誰も知ってる理由」

「——」

今にも背を向けて去りそうだった霊夢の足が、白玉楼の白砂に釘付けとなる。

「私も、フランも、お前が博麗霊夢だって事が、見た瞬間に分かった。他のサーヴァントだって、お前の事なら大概が気付くだらう、気付いちまうだらう。いや——お前の事を知らなくても、お前の名前だけは、確実に当てる筈だ」

「……いかに『何かを知ってます』って口振りね」

「その事」は、霊夢も疑問に思っていたのだ。

アーチャーはまだ、召喚されてから霊夢に出会うまでの間に、誰かから先に聞いてい

たという理屈で頷ける。

然し、セイバーは？ 他ならぬ霊夢自身が、他者を交えずに呼び出した彼女の第一声は、

——霊夢？

そこにある筈の無いものを見た驚きと、過去への郷愁が混じりあつたあの声を、霊夢は忘れていない。

そうだ、何故だ？

何故、自分は、彼女達に知られている——？

「殆ど仮説みたいなものだが、八割は当たつてる筈だ。私を箒から落とせたら教えてや

——

アーチャーが、言葉を言い終わる寸前、ぱちつ、と何か弾けるような音がした。その音を追つた霊夢は、人形が一体、力無く白砂に転がっているのを見た。

傷一つ無く横たわる小さな人形——目を凝らせば、人形の爪が、白銀に光るのが見えた。

刃。

小さな刃が、片手に五本ずつ、その人形には備わっていたのである。

「……おいおい、アリス、張り切りすぎだ。霊夢がノるまで待つてろよ」

「待てないわよ。試したいの、私の『性能』を。デバツガーを霧雨魔理沙にお願いできるなんて、望外の幸福だわ！」

アリス・マーガトロイドは、既に次の人形を——齒列に釘が並ぶ凶相の人形を起動させながら、好奇の興奮に身を昂らせていた。

箒に座すアーチャーへ向けた目は、先に霊夢に向けたのと同じ、恋うるような、面白いような色。丸く見開いた目には、かつて彼女が表さなかった、多種多様の感情が宿り、発散されている。

そして、人形が飛翔する。

釘の並ぶ口を大きく開き、アーチャーの腕へ迫る人形——

「だから、急かすなつて！」

ぱちん。

アーチャーが指を鳴らすと、人形は力無く地に落ちた。

アリスは楽団を指揮するように手を振り上げるも、人形は反応を返さない。

「『使役』への干渉、制御の奪取——手癖が悪いわね、英霊のくせに！」

物体に所有権を刻み、排他的に干渉するのが『使役』の魔術である。外部から第三者が干渉するというのは、その在り方を根幹から覆す暴挙だが、アーチャーは一工程にて実行する。

アリスは分析する。

技量の高低の差はあるが、それだけではない。アーチャー、霧雨魔理沙は、この魔術の構成を熟知している。

おそらくは、循環する魔力の大小、比重、構成する魔力を編み込んだ配置の仔細も、このアリスは、初めて見せた術であるが、熟知しているのだと、アリスは確信した。

「ちよつと借りただけだぜ、返してやるよ！」

ばちん。

指を鳴らすという一工程にて、動き出すアリスの人形。然し、人形が牙を向けるのは、他ならぬアリス自身へである。

釘の並んだ口を開き、振り上げた手を目掛けて食らい掛かる人形——

『Asssemble』

単言詠唱——自らの性能を駆動させるキーワードが、アリスの口から告げられる。

その刹那、アリスの右手、五指の先端より皮膚を突き破って伸びたものが有った。

5 m長の、鋼のワイヤーであつた。

直径1 mm程度、本来なら数十キ口の荷重にも耐えられぬ筈の五本のワイヤーは、自ら意思を持ったように束ねられ、人形の首を括り、絞り斬つた。

「おつ……なつ、んだ、そりゃ!?!」

「これは知らないでしょう、『オリジナル』には出来ない筈だもの！」  
破断され、首と別れて落ちた人形の胴体に、ワイヤーが再び食らい付く。

五本のワイヤーは、人形の首の断面から、作り物の胴体の内側へと潜り込み、アーチャーの干渉によって麻痺した駆動装置に絡み付くと、接触点からアリスの魔力を流し込む。

首無しの人形が、再び立ち上がる。

「『オリジナル』——いつ気付いたんだ、アリス!？」

ぱちん——再び打ち鳴らされる指。然し、もうアーチャーの干渉は、アリスの人形を惑わす事はない。

否。瞬間的には、アーチャーの干渉は効果を生んでいる。然し、干渉により機能停止した人形は、コンマ一秒の間も無く、ワイヤーを通じて流し込まれるアリスの魔力により、再び機能を開始するのだ。

「昨日よ、指を噛み切つて確信した——ずっと自分がかかいたいと思つてたけど、やっとしつくり来たわ! 凄いわ、素敵だわ、私のオリジナルは——私が求めていた魔術の完成系は、まさか『私自身』だったなんて!」

首無しの人形が、アーチャーの箒に掴みかかり、地上へ引き下ろそうとする。

アーチャーが、人形を蹴り落とす。

地に落ちた衝撃で人形の右腕が挽げた——腕の断面からワイヤーが突き出し、挽げた腕を絡め取り、加工しつつ瞬時に縫合する。忽ち人形の右腕は、十数センチの刃長を持つナイフのように形状を変化させていた。

アリスは、更に左手の五指からも、五本のワイヤーを展開する。

十指に十本、鋼のワイヤーを躍らせて立つアリスの姿は、白玉楼の白砂に、異形の影を落としていた。

「……アリス。あんた、何?」

眼前に踊る異形の影に、博麗霊夢は呆然と問うた。

「何って、見ての通りよ! 全く人間と区別の付かない、継ぎ目一つない外見! 三大欲求のいづれも不要のまま生きられて、けれど摂取もできる! 外部から取り込む魔力、内部生成する魔力で迅速に修復も可能! 耐久性は人間の非じゃない!」

答えは、異常な高揚と共に返る。

アリスの指から伸びたワイヤーが、アーチャーの箒に絡み付く。即座にワイヤーは、アーチャーの放つ魔力弾に切断されるが、地に落ちたワイヤーはアリスの足元にまで這い進み、衣服の裾から、アリスの体内へと還って行く。

白い皮膚の下に鋼のワイヤーが蠢めくも、然し無機質のワイヤーには、血管より滲む赤い血が絡む。生身の肉体と金属部品が、互いを拒絶する事なく、アリスの体内で完全



に両立しているのだ。

「思考する、感情も持つ、喜び、悲しみ、苦しみ、笑い、望みを持つ、欲望を抱く——」  
怪物、化け物——違う、もつと理性的で、秩序に満ちた存在へ呼称を与えるなら、それこそ「まがいもの」とでも呼ぶのが相応しいのではあるまいか。

奇しくも彼女自身が「オリジナル」と呼んだ誰かと、全く同じ名を冠しながら——

「——私こそが自立式人形の最高傑作、『アリス・マーガトロイド』なのよ！」

彼女は、アリス・レプリカは、己の生と幸福を堪能していた。

## 七日目——collapse 1.

戦い——或いは師弟の戯れ——は、ものの数分で決着が着いた。

「どうした、ギブアップか？」

「さ、流星にもう仕込みが無いわ……」

霧雨魔理沙は初めと変わらず、箒に横坐りになったまま、地上3mに浮遊し続け——  
攻め手の全てを防がれたアリスは、椅子に腰掛けて汗を拭っていた。

アリスの姿は、ますます人の形から遠ざかっていた。

肩、肘、膝、手首——各部の関節から突き出たワイヤーが、それぞれに形状を変化させ、或いは槍、或いは剣、或いは斧と化して——その全てが打ち砕かれ、刃を失って、地に落ちていく。

十指から伸びたワイヤーは、二つの小さな人形に絡みついており、内側から四肢を補強しつつ、光ファイバーの如く迅速に大容量の命令を与えて——その人形二つも、魔理沙の放った魔弾により、地面に縫い付けられている。

アリスの衣服の腹部に、血が赤黒く滲んでいる。

攻撃を受けたのではない——自ら、内側から開いたのだ。両手で一体ずつ人形を操

り、魔理沙を左右から攻撃した折、更に「体内に隠していた」別な人形で、正面から奇襲を仕掛けたのである。

衣服の背は、大きく爆ぜて裂け、背の皮膚を破り突き出ているのは、変形した背骨の一部。一対二枚の翼にも見えるこの骨は、接近時、魔理沙の首を挟み込むように振るわれて、やはり一工程にて防がれた。

まだ有る、まだまだ有る。大小含めれば数十、アリスは自らの「部品」を、魔力による変形を経て、武器として用いた。そして霧雨魔理沙は、その全てを、アリスを傷付けぬままに防ぎきった——ほんの数分の出来事であった。

「驚いた、魔術師って器用なのね……正直、この時代の標準を甘く見てたわ」  
終始、椅子に座って眺めていたセイバーが、拍手と共に賞賛を送る。

無論、アリスの「性能」は霧雨魔理沙に遠く及ばず、勿論セイバー、フランドール・スカレットにもまた無力であろうが、それでも多種多様の武装は、無邪気な吸血鬼の目を楽しませるに足りた。

「この」アリスが特例なだけだ。大元のアリスだって、いやそりや器用なやつだったけど、自分の体にワイヤーなんか埋め込んだりしない」

「ワイヤーは無しでも、骨とか爪くらいは使わなかった？」

「幾らアリスが変な奴でもな、自分の体の一部を使役魔術でぶん回すなんて無茶はしな

かったぞ——少なくとも私が生きてた頃は」

模擬戦を終えたアリスは、呼吸を整えつつ、自らの形状を、日常の形へと戻し始めていた。

即ち、ワイヤーを体内へ引き戻し、突き出た骨を再変形させ収納し、腹の仕込み人形を再度埋め込んで、そして表面上は全く人間と違いの無い、アリス・マーガトロイドへ戻ったのだ。

この異形の光景を、当事者二名も、セイバーも、驚きはしながら、案外に容易く受け入れていた。

「……あんた、人間じゃなかったのね」

ただ一人——博麗霊夢のみが、先の光景に、殆ど本能的とも言える警戒心を抱いていた。

——もうこれは、私の知っているアリスじゃない。

精神が先に破綻し、肉体が追随したのか、肉体の異常を自覚したが為に精神が破綻したのか——その何れかまでは悟らねども、もはやアリス・マーガトロイドは、真つ当な生物ではない。

分類するなら、寧ろサーヴァント達と同列に置いて考えるべきではないのか？　そう、自分の理解が及ばぬ、超常の存在と認識するべきだ、と——

即ち、「非日常」の存在。

何時しか霊夢の唯一の同盟者は、霊夢が求める「日常」から遠く離れたモノと成り果てていた。

「そうね、元々が人間っぽくはなかったけど、まさか自分が非生物だったとは想像もしなかったわ……ああ、もつと早く知りたかった。時間が許すなら分解点検を試みたいくらいなのに！」

分解点検——自分自身の体をバラバラに切り刻み、中身を改めるといふ物騒なアイデアも、霊夢にはもはや、冗談とは受け取れなかった。アリス・マーガトロイドはそれを本心から望んでいるように感じられたし、けれども、そんな望みを生み出してしまう思考のルートが、霊夢には全く、想像だに出来なかった。

「アリス。あんた、何が望みななの？」

だから、だろう。問い詰める為に選んだ言葉は、これ以上も無く簡素なものとなった。「何が……？ どういう事かしら、霊夢」

「あんたが聖杯に託す望みよ。今更『望みは無い』なんて言わないでよ、信じないから」理解が及ばぬ存在に対し、何を問えば良いのかも分からぬままの問い——だがそれは、或る一面に於いて的確な問いとなった。

アリスは、答えが遅れた。

今日、この日、全ての言葉を心情の奥底から、欲望の赴くままに発していたようなアリス・マーガトロイドが、言葉を発する前に僅かなりとも思考を挟んだのだ。

「私の望みは、この聖杯戦争を、生きて見届けることよ」

「——へえ」

そっけなく答えた霊夢の前で、アリスはまた、ほんの一瞬だけ沈黙を置いてから続ける。

「ええ、そう、私にも望みが出来たわ。聖杯戦争、この幻想郷と整合性の無い命懸けのゲーム、奇跡に奇跡を重ねても届く筈の無い神秘の大渦！こんなものに触れてしまった魔術師が、このゲームを知り尽くしたいと望まない筈があつて!？」

「魔術師の思考は、私には分からないわ」

「知的好奇心が服を着て歩いてるのが魔術師よ、知識欲を満たす為なら空腹も、空気の欠乏も厭わない。……けれど、この聖杯戦争を勝ち抜くのは、どうやら私のサーヴァントじゃ難しいみたい。だから、私は貴女の隣に立つの」

アリスの目に再び、あの恋い焦がれる乙女のような、それでいて冷徹に対象物を観察する、狂気混じりの眼光が宿る。

彼女は恋をしているのだ——彼女がまだ知らない万物と、その中でも特に、聖杯戦争というおぞましい儀式、それに携わった人妖達に。

だが彼女の恋とは、対象を知り尽くしたいという欲望の発露である。仮に“それ”を知り尽くしたなら、直ぐにも火の消える、刹那的な感情である。

霊夢には、それが理解出来ない。

他者を知る事に、一体どれ程の意味があるというのか——未知数を好み、未知を理解する意味とは、果たして何か。

何故なら霊夢の価値観の中では“日常”——“既知”こそが至上であるからだ。

僅かの差異こそあれ、大なる差はなく連続と続く日常、平穩こそ尊いものと信じる霊夢には、激変する非日常を望み、動乱と異常に好んで踏み込むアリスの思考は、理解どころか想像さえ及ばない。

「聖杯戦争に生き残りたいから、私と手を組み続けるって?」

「ええ、そうよ。私は、私自身が生き残って、聖杯戦争の顛末を見届けられればそれでいい。誰かが勝利して、聖杯がどのように駆動し、その望みがどんな形で叶えられるかを知ればいい。だから貴女に手を貸すし、危ない時には貴女に守ってもらうの、合理的でしょう?」

「……合理的、ねえ」

然し、そんな霊夢にも一つ、分かる事がある。

アリス・マーガトロイドは、初めて、霊夢に嘘を吐いたのだ、と。

確信に至った理由は無い——言葉の矛盾、理論の破綻、そんなものは見つけていない。敢えて言うなら、言葉の前に置かれた僅かの空隙であるが、それさえも予感の裏付けに過ぎない。

彼女は嘘を吐いている。それが霊夢には、疑いようも無い事実として理解出来たのである。

そして、その確信に、誤りは無かった。

アリス・マーガトロイドの望みは、『聖杯戦争の継続』であり、『終結』ではない。彼女は永遠に続く非日常の中、万象を覗き見ようとしている。

その為に、見落としたものをもう一度拾い上げる為にならば、聖杯を駆動させ、もう一度聖杯戦争を繰り返す事をさえ望むだろう。己が満ち足り、飽きるまで、聖杯戦争を無限に繰り返し続けるだろう。

——日常に還る為、聖杯戦争を迅速に終わらせる。

——非日常を観察する為、聖杯戦争を継続する。

決して交わらぬ願いであると気付いたからこそ、アリス・マーガトロイドは、博麗霊夢を欺いたのだ。

何時しか霊夢とアリスの二人は、正面から向かい合いながら、無言のままに互いを見つめ合っていた。



見知った筈の顔の奥、自分が知らぬ新たな表情を、《忌み嫌う / 探し求める》ように。

さて、その視線を断ち割って、地上に降り立った者が居る。

「——うおっほん、生徒諸君！ 授業中の余所見は感心しないで、ん？」

教師の真似事を続けていたアーチャーは、場に漂う慳貪な空気をまるで読まず、軽やかに地面に着手し、二人の顔を見上げた——間に立つと、アーチャーの小柄さがより際立つ格好となった。

「まあ、なんだ、色々双方に思う事も有るだろうが、それはさておけ。今はお前達が、私達の力を借りないでも生き残れるようにしてやるのが先。若い二人のお見合いはその後だ」

そう言いながら、アリスの胸を押して後ろへ追いやりつつも、アーチャーの目は霊夢を見ていた。

子供のような小さな体につり合わぬ強い眼光は、迂闊な事を思うなという警告のようでもあり——

「じゃあ、次は霊夢の番だな。用意の時間は居るか？」

「……はあ？ 何がよ」

「何がって、今のゲームだ。アリスが先走って一人で暴れたからな、次は霊夢だけで来

「い  
ふわり、と小さな体が舞い上がる。アーチャーは再び箒に座り、地上3mの高さに浮遊した。

「結界術でも体術でも、武器を使っても石を投げても構わない。私に少しでも触れられたら、さっきの話に加えて褒美だってやろう」

「ふうん……お金になる褒美なら嬉しいけど」

「気のない声ながら、霊夢は、懐中の護符を手に掴み、地面を蹴って、自らもアーチャーと同じ高度へ浮遊する。

「霊夢は、褒美とやらには興味が無く、先の話——何故自分の名が知られているかも、気にはなるが、どうしても知りたいとまで思う程ではない。

だが、自分の能力を判断する、良い機会だとは考えた。

「アリス・マーガトロイドと敵対した時、自分が何処まで戦えるのか——それを、同じ物差しで測る良い機会である、と。

無言のまま、開始の合図を待たずに放たれる、霊夢の札。

同時代の人間が空を舞う様を見て、アリスがまた喜悦の声を上げた。

冷えた乾いた風の中、少女は高揚に頬を染めていた。

夜——時刻を言うなら、二十三日。淀んだ灰色の空の下、小さな影がたった一つ、歩いて行く。

衣服を見れば、何も代わり映えしない女学生でしかない。羽織るコートこそ高級なブランド物ではあるが、贅沢といえはその程度。

決して人目を引く姿ではないが——時間が時間である。女学生がたった一人で歩いていけば、不審に思う者も居よう。

そして、実際に、彼女に声を掛ける者が居た。

「ちよつと、あなた、いいかしら」

警官——婦警。

ここ数日で増加している事故に備えて、見回りをしている最中である。

「どうしたの、こんな時間に一人で……危ないわよ?」

少女は、答えない。

軽く膝を折って顔を覗き込めば、少女は俯き気味に視線を逸らす。

頬の紅潮と、目の下の隈——とても健康に見えぬ少女のかんばせに、婦警は憂いを示し、穏やかに声を掛ける。

「ご家族は近くにいらつしやるの? お家はどこ? ……具合とか、悪くないわよね?」

少女は、答えない。

婦警の存在を関知しながら、言葉も返さず、視線もくれず——そうして少女は、虚空へと「命じ」た。

「——アサシン」

少女の背後で『完全な闇』が蠢いた。

光が空間から抉り取られているのだ。

夜とは言え、住宅街。街灯や民家の窓から、幾筋もの光条が伸びているというのに、それが少女の背後に差し掛かると、忽然と消失する。

残るのは、全くの黒、全くの闇——何者も見通せない、完全な闇であつた。

その闇が、少女を胎の内に収めながら、婦警の方へと広がり始めた。

「ひっ——!?!」

婦警は反射的に後ずさり、左手をつっぱって、闇を押し止めようとする。

不定形の闇は、婦警の左腕を肘まで飲み込み——  
べきいつ。

婦警は、夜の路上に、仰向けに倒れた。

「あつ——」

柔道経験者の習性か、背を丸めて上手く倒れた為、背や後頭部に痛みを感じる事はな

かったが——その代わりに、顔へ降る雨粒の熱さを、婦警は鮮明に感じた。赤い雨粒だった。

肘から先を失った左腕の、肘の断面から空へ噴きあげた鮮血が、自らの顔へ降り注ぐ赤い雨であつた。

闇が婦警の左腕を喰つたのだ。

激痛と、それにも勝る恐怖が喉を押し開け、悲鳴を奏でようとする。

だが、叫びが発されるより寸拍速く、円筒状の芋虫の如き蟲が婦警の口内へ潜り込み、舌を顎に張り付かせ、氣道に碇型の頭部をめり込ませた。

呼吸がままならず両脚と片腕でもがく婦警へ、闇はじわりとにじりより——その闇を掻き分けて現れたアサシンが、身悶える婦警の身体に覆い被さつた。

婦警とアサシンは、手足を絡めあうようにして闇に飲み込まれた。

がりっ。

ごりっ。

ばきっ。

ぶっん。

ずずっ、ずずず、ずずず。

ぐちゃつぐちゃつぐちゃつぐちゃつぐちゃつぐちゃつ——

「美味しいの?」

女学生——リグル・ナイトバグは、闇から溢れ出る咀嚼音に、顔をしかめながら問うた。

「中々。ただの警官にしては、生まれが良いのか育ちが良いのか、肉に気品のある味わいだね。どこかのお姫様にも引けを取らないや、食べる?」

「……いらない」

「あつそう」

闇の中より、肉の纏わり付いた骨を差し出し、戯れるようにアサシンが問い返す。

否と答えれば、咀嚼音はますます勢いを増す——それまでは保っていた最小限の慎みさえ捨てて。骨が砕け、腱が千切れ、血が啜られる不快感のオーケストラが、住宅街の中でかき鳴らされていた。

人の肉を喰う——

いかなる時代であれ、常軌を逸したと誇られる行いであろう——人に近い者の価値観に照らすならば。妖怪に分類されるリグルでさえが、血肉の潰れる音に眉をひそめている。

アサシンは、遠く『幻想の幻想』の頃に生きた妖怪である。食人行為に抵抗は無く、寧

ろ好んで行うほどであるが、この夜の殺戮は、ただ空腹を満たす為だけではなかった。保有スキル『人喰い：B』——人間を主食にする怪物としての有り様。

サーヴァントは魂喰いとも称されるが、それは飽くまでも比喩的なもの——人妖の魂を、まさか皿に乗せてフオークで切り分け、噛み千切るような事はしない。魂、魔力といった霊的な力を、霊体であるサーヴァントが取り込み、己の力へ変えるというのが一般的な形である。

このアサシンは、魔力、魂ばかりでなく、人妖の血肉をそのまま自らの力と変える。変換効率は、人間一人を〃余すところ無く〃喰い尽くして、単独行動一日分。腹が空いている限り食い続けられるが、決して効率の良いエネルギー源とは言い難い。

然し、併せて『単独行動：A』のスキルをさえ持ち合わせるアサシンの場合、話が異なる。

彼女は——極論ではあるが——宝具を一切用いないのなら、マスターがおらずとも、聖杯戦争を戦い抜く事さえ出来る。その上で更に、マスターのバックアップの代わりとすべく、魔力のストックを作る為に、このスキルが活きる。

つまりアサシンは、己がマスターの目の前で、マスターを失った際の備えを作っているのだ。

——君、君たらずば、臣も臣たらず。

飼い慣らせぬ猛獣であるか。否、氣儘な流浪の妖怪に過ぎぬが、いずれにせよ主に準じて死ぬ類の忠義者ではなかつた。

さて——この不忠の臣と、蟲の女王とは、果たして何処へ向かつていたか。

郊外にぼつりと断つ、廃洋館を目指していたものであつた。



## 七日目——collapse 2.

紅魔大図書館——古い名を用いるなら『紅魔館』だが——に程近く、今少し森へ踏み入った所に、古風な洋館が佇んでいる。

もう数十年も、誰も住んでいないが為、壁に絡んだ蔦が窓ガラスを割り、雨風の吹き込む野晒しの館となっている。

市街地からそう離れている訳でも無いのだが、付近に舗装道路が無く、また観光・歴史的な逸話の一つも無い為、訪れるのは地元の若者、せいぜいが酒の席の勢いで「肝試しに行こう」となった連中ばかり。

だが、そういう連中が、二度、この館を訪れる事は無い。

何が起ころとも無いが、背骨の奥から本能が叫ぶのだ。此処に居てはいけない、去れ、と。

何故ならばこの館は、遙か『幻想の幻想』の頃から、人知れず其処に有り、人知れず霊体を飼いつける館であるからだ。

元は幾つかの騒霊が住むばかりであった。だが、その主達が館を去った後、空撃を埋めるように居場所の無い浮遊霊などが、一つ、また一つ——やがては不可視の霊体に、館

の部屋も廊下も埋め尽くされる事となった。あまりに高密度の霊環境故に、霊能力を持たない者でさえ、本能的な恐れを抱く程である。

リグル・ナイトバグが、『蟲の報らせ』を頼りに向かったのが、この館であつた。

「アサシン、行つて」

「……念の為に聞くけど、狙うのはマスターか、サーヴァントか、どちら？」

「二度言わせないで」

背後に控える従者と、既に館攻めの手は定めてあつた。

先にはリリカ・妖夢の主従に打ち勝つた必勝策——アサシンがサーヴァントの注意を引き、リグルが『蟲』を用いてマスターを仕留める。

もし、リグル自身が魔術師であり、魔術を以て敵マスターを討たんとしたなら、敵と対策を取るだろうが——住居に入り込む蟲の全てに、いちいち対策など施せるものか。ましてやその蟲は、毒性こそは強いが、魔術的な補助など何も受けていない——つまり、魔術的な探知網にはただの虫としか映らぬ、盲点の如き種であるのだ。

「さあ……行きなさい、私のしもべ達。居るのは二人、どちらかがマスターだから——両方とも殺して」

アサシンが夜闇に溶けて消える様を見届けてから、コートの裏に潜ませた蟲を夜空に解き放ち、下す命令は非常の言。リリカ・プリズムリバーのように、生き延びる術を与

えるつもりはなかった。

リリカには、生きていてもらう必要が有ったのだ。

生きて、アリス・マーガトロイドと接触し、彼女と手を組んでももらう必要が。

遠距離戦に長けた霧雨魔理沙に、恐らくは今聖杯戦争で近接戦闘最強を誇る魂魄妖夢。この二騎が一つの陣営に揃えば――

――これで、霊夢先輩は私だけの味方。

博麗霊夢は、警戒を強めるだろう。これまで同盟者であったアリス・マーガトロイドへも、いざ決戦となる日に備えるだろう。

だが、自分だけは――リグルは、そう信じていた。

自分は「特別」なのだ、と。博麗霊夢に、幻想郷の秩序たる博麗の巫女に選ばれた、彼女の唯一の味方だと――

そう、唯一。

リグル・ナイトバグはもう知っている――霊夢が従えるサーヴァント、セイバーの真名を。姉を、家族を、殺し尽くして自らも死んだ、狂気の具現の吸血鬼こそ、霊夢の従者である事を。

そんなものに信はおけない、やがては裏切りを選ぶに違いない。今は正常に見えていても、内に秘めた狂気が、破滅を選ぶに違いない――

アリス・マーガトロイドとて、聖杯戦争に参加している以上、己の望みを最後は優先するだろう。やがて敵になると分かっている同盟者に過ぎない。

——けれども私は、私だけは裏切らない。

自分だけが最後まで、博麗霊夢の隣に立ち、聖杯戦争を勝ち残る——博麗霊夢が願いを叶える様を、隣に立ち見届ける自分の姿を夢想しながら、リグル・ナイトバグは戦場に立っていた。

愛しき秩序の為に敵を排除し、その首を土産と持ち帰り——褒美はたった一言の褒め言葉と笑顔で良い。後は自分だけの“特権”を持ち続けられれば良い。リグルの願いは、聖杯に掛けるものではなく、たった一人の絶対者に委ねられるものであった

然し、気付いているのだろうか？

その願いには、あまりに妨げが多すぎるのだ、と。

一つには自らのサーヴァント、アサシン。彼女もまた、なんらかの望みを以て現世に呼び出された者である。自らの主が、聖杯を求めぬのだと知れば、彼女の牙がリグルに向かぬ保証は無い。

そして、数え上げればきりが無いが、この夜に限っては、また一つ。

敵を見誤った事——戦に於いて、致命の傷であった。

「——不精者よのう、家来を働かせて自らは動かぬか」

「!?」

その声は、いつの間にか、リグルの背後に立っていた。

振り向きながら距離を開けるリグルを、声の主は無理に追わず、ただ両腕を組み、小さな体で踏ん反り返り、堂々と立っているばかりである。

「全く、我らの主を見習うが良い！ 太子様は素晴らしいお方であったぞ、率先して学び率先して政治を司る、理知と才氣に満ち満ちた偉大なお人であった！ お主も見習って修行に励むが良い、我が監督をしてやろう！」

「……バーサーカーのマスターですか……！」

声の主は、時代錯誤の狩衣姿——物部布都であった。

驚愕で彩られたリグルの声に、布都は、痛快極まりないという顔で高笑いをして見せて、

「うん？ バーサーカーか、うむうむ、あの黒鎧の鬼は確かにいかれておるな。対してお主の駒はキャスターか、アサシンか、いずれにせよ我的駒が勝ろうな。我も鬼ではない、今ならば我に跪く事で投降を赦そうぞ！」

この場にはおらぬサーヴァント二騎の戦いを、見ぬままに推量する布都。その頃にはリグルも、サーヴァントとの魔力パスの変調により、アサシンが黒鎧の狂霊と交戦を開始した事に気付く。

リグルとて、言われずともアサシンでは、他のサーヴァントを長く食い止められない事は分かっているが——

そう長い時間は必要無い。蟲の一刺しを与え、後は離脱すれば良いだけだ。幸いにしてアサシンの宝具は直接的な攻撃力は無いにせよ、離脱・奇襲に適したものである。

「投降など……するもんかつ！」

ならば——この敵が、勝ち誇つたように喋り続けている今。リグルは、第二陣の蟲を、コート裏から解き放つた。

倍に膨らませた蜂のような姿の蟲が、五匹、布都の腕なり脚なりを狙い、ぶうんと羽音を鳴らして飛び——

ぼうっ。

と、燃え上がって、五匹ともが地に落ちた。

虚空より生じた炎が、蟲を焼き殺したのだ。

種火は無い。物部布都が、術を用いたのである。

「っ！」

「我に戦いを挑む気概や良し、と褒めてはおくが、相手が悪いぞ。なにせ我の得手は炎の術だからの——それっ！」

咄嗟にリグルは、更なる蟲を——コートからも、スカート裾からも、呼び出し、布

都目掛けてけしかける。

そのいずれもが、届かない。

或いは手に触れた瞬間燃え落ちて、指先に触れられて燃え上がる。意識の外から背を狙った一匹さえ、針が狩衣に届く前に、その身が塵となつて崩れ落ちる。

「無益、無益」

布都は、自ら攻撃に転ずる事こそ無かつたが、リグルが放つ蟲の全ては、布都の体に触れる寸前、瞬間的に消し炭と変えられていた。

結界術にも似た自動反応の術式——それに炎の属性魔術を組み合わせた、対生物用の発火防壁である。物理的な障壁とはならぬが、蟲にとつて、相性の悪過ぎる術であつた。

「くっ……い、このっー」

無論、リグルとて、万が一を想定してはいる。

万が一、蟲を扱えぬ状況で、敵のマスターと遭遇した時——その為にリグルは、此処までの道中、アサシンの行為を咎めずに居たのだ。

懐中より取り出したは、警官に支給されている拳銃であつた。

アサシンが喰らつた婦警の死体から抜き取つた銃は、弾丸も十分に装填され、安全装置も解除されている。引き金一つで発砲が可能である。

そして、その銃口は、布都の腹に向けられていた。額や心臓よりよほど大きな、当て

易いのである。

「ほう、銃器。幼子の手には余らんか？ 弓にしておけ、修練が伴わずに扱う武器は恐ろしいぞ」

だが、銃口にも布都はまるで怯まず、リグルを憂うような言葉を掛けながら、やはり腕組みのままで仁王立ちをしている。

その態度に寧ろ、リグルが怯んだ。

銃を知らぬ訳でないのは、その物言いかから明らかだが——銃弾が肉体を抉れば、傷付き、死ぬ事もあるだろう。未知の激痛と死の恐怖に、この少女は何故怯えもせぬのか。震える手を叱咤し、引き金に指を置いた時、

「う——撃ちますよ！ 嫌ならサーヴァントを自害させて——あつ、っ!？」

リグルの腕が、反射的に畳まれ銃口が空を向く——と同時に、リグルの手の中から、拳銃をむしり取る、また別な手。

布都と同じように、音も気配も無くリグルの後ろに、霊体の女性、蘇我屠自古が浮遊していたのである。

屠自古の霊体は、軽微な電流を帯電していた。それが銃身から伝わり、リグルの腕を痺れさせたのだ。

「最近の戦争というのは、のんびりしたものだなあ、布都」



「全くだのう、蘇我。我らの頃の戦争と来たら、焼き討ち、夜襲、一族郎等皆殺し、帝の前だろが不意打ち上等、大概の事はしたものであったが」

「……そこまでするのもお前くらいのものかも知れんがな」

溜息を零しながら、屠自古は銃口を己のこめかみに当て、躊躇無く引き金を引いた。

六度、銃声が鳴った。然し屠自古の霊体は、神秘を帯びぬ拳銃弾では、擦り傷一つ追う事も無い。銃弾は霊体を貫通してあらぬ方角へ飛び、屠自古は音の喧しさに右目を細めるばかりであった。

「そ……そんなんっ」

情けなくも裏返った声を上げ、敵陣営の二人から距離を取るリグル。

眼前に示されたは、理解の及ばぬ光景——というより、リグルの想定に無い光景であった。

こんな筈は無い——

博麗霊夢に唯一選ばれた特別な自分は、*「上手く行くようになってる筈」*なのに、こんな筈は——

蟲も、銃も通じず、当然のようにサーヴァントも——

「——マスターっ!!」

想定が狂った困惑の中、突如広がった闇が大蛇のように、リグルの体を飲み込んだ。

リグルは、自らを呼ぶアサシンの声を聞いたが、その音も、リグルの声や、その他全ての雑多な音も、闇の胎に吞まれると、その外へ漏れ溢れる事は無くなった。

光ばかりか音も臭いも、魔力の気配さえ通さぬ、真の無明であった。

そして、闇が次に縮小に転じた時、既にリグルの姿は無く、残されたのは数十の、焼け焦げた蟲の亡骸ばかりであった。

「——はれ？ あの虫妖怪はいずこぞ？」

「逃げられたんだろ……こいつが追つてきたからな」

突如姿をくらました敵を探すように、布都がぐりぐりと首を回す。

布都と屠自古の立つ傍には、闇の消失に僅かに遅れ、黒鎧の狂霊が実体化し、眼光どす黒く獲物を探していた。

だが——マスター二人ばかりか、このサーヴァントの感覚器官さえ、リグルとアサシンを捉える事は無い。

「……んー、逃げ足の速い。追うか、屠自古」

「行き先も分からんのか？ 無理だろう、どう考えても」

「確かに。まあ、あの調子なら次の交戦でも苦戦はするまい、備えるまでも無い相手よ」

「同感だな、ならば——」

しばらくぐりぐりんと回していた首をようやくやく止めて、布都が屠自古に問うと、屠

自古は一度だけ首を横に振って応じた。

さして残念そうな様子も無く、敵を侮るような言葉を「大声で」吐く布都に、屠自古もまた同意を示し、

「寝るか？」

「うむ！ 明日も早起きするぞ！」

二人は連れ立って、背後に狂霊を伴い、廃洋館へと戻って行く。

その何れもが無傷——魔力の消費さえ、これが聖杯戦争の一環であるとの前提に立てば、至極軽微なものであった。

制御出来ぬ狂犬を用いて、確実に敵を殺傷する術は有るか。

種々の思惑は有るだろうが、彼女達に言わせるのならば、「それは有る」。

苛立たせ、腹を減らさせ、敵の前に解き放てばそれで良いと、彼女達は言う。さすれば狂犬は敵に牙を突き立て、収まらぬ怒りの限りに敵を喰い殺すだろうと。

彼女達は、そういう事をするのに迷いが無い。だがそれは、根が悪辣であるからではないのだ。

仮に自らに与えられた駒が、誉れ高き騎士であつたのならば、彼女達は堂々と名乗りを上げ、敵の正面に立つ事も厭わぬだろう。

つまり、道具を適切に用いる術を知っている。

人を殺す道具には、様々な形がある。

槍や剣のように、返る手応えを味わい殺す武器。

銃撃や投石機のような、離れた場所から目視して敵を殺す武器。

果ては、敵の姿を影さえ見る事なく、千里の果てから殺す武器まで——

人は、あらゆる生物の中で、最も多様な手段で人間を殺す。悪意とはもはや、人間の文化の一つであるのだ。

人が文化を作るように、文化は人を作る。

“悪意の文化”たる武器を持つと、人は奇妙な事に、自らの中にも悪意を宿す事があ  
る。誰かを殺す為に武器を持った筈が、武器を持つ事で、人を殺したくなるという——  
根と枝の逆転が起こるのだ。

それは、聖杯戦争の参加者達ですら、例外ではない。

博麗霊夢は、万物を破壊する剣を得た。万物の裁定者たらしめる彼女は、或いは力  
に囚われているのではないか。

アリス・マーガトロイドは、万象に通ずる星に触れた。万象を知らんとする彼女は、過

たずサーヴァントという神秘の力に魅せられている。

古明地さとりは、幸福な過去に辿り着く術を得て、数多の人妖へ毒爪を振るった。

犬走椀は善良な本質を曲げてさえ、従属者の一面に踏み止まり、友と認めた少女に牙を剥いた。

悪意の文化の産物は、多かれ少なかれ人を狂わせる毒である。

だが——その毒を浴びる程にも飲んで、尚、己を保つ者が居る。  
慣れているのだ。

悪意は毒であるが、毒であるからには耐性が備わる日も来よう。

彼女達はどうの昔に、並ならぬ悪意の渦を泳ぎ、伏魔殿に過ごした者である。

力の毒など恐れない——過去に既に喰らい飽きた。かつて持っていたものを、今更何を恐れるべきや。

こと、悪意という毒への耐性を言うならば、

物部布都——

蘇我屠自古——

この両名に勝る者は、聖杯戦争に存在しなかった。

廃洋館より数百メートルを隔てた森の一角。

獣の行き交う道であるのか、少しばかり雪が踏み潰されており、下の黒い土が見えているそこに、夜をぼっかりとくり抜いたような闇があった。

「かつ——、あ、ああくそ、死ぬかと思った！ 死んでるけどもう一回死ぬかと思った！」  
闇は、己の苦痛を口から逃すかのように吠えたが、その声は夜天を震わせたりはしない。

彼女自身が生む暗闇に、音が吸収されているのだ。

光も音も臭いも、おおよそ一切の情報と呼べるものを通さぬ真の無明——それこそがこのアサシンの、最強の武器だった。

だが——まるで通じぬ敵がいたのである。

「あの鎧、ずるい、ずるすぎるっ！ 砕いても砕いても修復するし、動きは私より速いし——ああ、もうっ！」

血に塗れ、普段のどこか達観したようななぞぶりは影を潜め、体格に見合う子供じみた愚痴が溢れているが——無理も無かろう。

彼女が敵に回したのは、あの黒い鎧の狂霊。セイバー：フランドール・スカレットの筋力を持つてしても破壊し切れず、そして速度は吸血鬼である彼女をさえ上回る大怪物である。まして戦場は、その主の工房だ。ほんまきょう供給される魔力量さえ天と地の差であり、むしろアサシンが生きて逃れられたことが奇跡であった。

「どうするの、マスター。私は所詮は暗殺者<sup>アサシン</sup>、忍び寄るまでではいけないけどそれ以上はどうにもならない。狙う相手を間違えたんじや——」

勝ち目の無い戦である、アサシンはリグルへ進言する。必勝策であった、マスターがマスターを狙う戦術が失敗に終わった以上、今は退く他に道は無いのではないかと。だが——常ならば「その通りである」と受け入れられたらう言葉も、今ばかりは虚しく響くばかりであった。

「そんなはず、そんなはずない、だって——」

「……マスター。君、どうかしたの？」

リグルは己の体を抱きしめ身震いしながら、うつろな目のままに同じ言葉を繰り返していた。

恐怖で狂ったか——一瞬、アサシンはそれを懸念したが、そうではない。

彼女は現状を信じられずにいた。

「だって、私は、私だけが！ 私だけが、絶対に上手く行くはずなのに、なんで——！」  
「幻想郷の秩序たる博麗の巫女に特別扱いされた」自分が、どうして上手く行かないのか、それが理解できずにいたのだ。

そしてまた、上手くいかないことの憤りは焦りへと変ずる。

「殺さなきゃ、いけないのに……っ!!」

唇の端から血がにじむほど齒嚙みする主を前にして、アサシンは溜息を零す以外の何もできなかった。

“前”のアサシンは、毒と病そのものだった。しかし、こと己の主についてのみ言うならば、博麗 霊夢のもたらした毒の方が、何百倍も有効的であつたらしい。

だがアサシンは何も言わない。“昔から”そういうところはあつたなど、遠い過去を思い出して苦笑するばかりだ。子供じみた独占欲、小さな群れへの執着心、そして虫の女王としてのプライド——自分は優先されるべき存在だという、先天性の特権意識。これで力さえあれば吸血鬼にも並び立てるのだろうが、悲しいかな、彼女は虫だ。それこそ月夜の異変においては、前座として一蹴される程度の存在感しかないちっぽけな妖怪だ——

が、それを言うならば“自分もそうだ”と、アサシンは自らを省みる。

そもそも自分は“前”のアサシンと同じ、“何とも良く分からないもの”であるからこそ、英霊として呼ばれた存在である。逆に己の存在が、後世に真実のまままで伝えられていたなら、“あの女”<sup>にせのせいはい</sup>に呼ばれることも無かつたのだろう。

本来なら勝ち目の無い戦いだ。案外に聡いこの暗殺者は、冷静に戦況を認識していて——その上で、勝ち抜くことを諦めていない。

だから、戦いの方針に助言はすれど、主の恋路に口出しをできないのだ。自分を必要



とし、自分と共に聖杯戦争を勝ち抜こうと考えているのは、現状ではこのリグル・ナイトバグのみ。彼女との関係性を崩すことは、百万が一——令呪で自らの心臓を抉る羽目にならないとも限らないのだから。

「友情は恋愛に勝てないのね、結局」

拗ねたようにアサシンは呟いて、足元の石ころを蹴った。

その時、リグルはようやく震えを収め、両の足でしつかと立った。彼女の目に何らかの決意が浮いているのを見て取ったアサシンは、さてこの若い主人が何を言い出すのかと、彼女の隣に立って耳を寄せた。

「アサシン。宝具を展開して」

とリグルは良い、アサシンはほんの一瞬、返答が遅れる。

「……宝具う？ 君、私の宝具がどんなものか分かってるわよね？ さつきから散々使いまくってるっての」

「分かってる。……それを最大限に解放して、全力で」

この時アサシンは、諫めの言葉を脳内の辞書から探し、そして直ぐに諦めた。

なんと言ってもアサシンは、自分の脳みその作りが、主人と大差無いか些か弱いくらいだと認識していたからである。

己の宝具は、無能ではないが、今この時に用いるには不向きである。しかしリグル・ナ

イトバグなら、それも “この時代に生まれてこの時代の常識の元に育った” 彼女なら、もしかして自分にも思いつかない戦術を見出しているかも知れない。

「分かった……範囲は？」

「300mくらい、できる？」

「その3倍でもできるよ、オーケー——」

——アサシンの体が “溶けた”。

液化化ではない。例えるなら昇華——固体であったはずのアサシンの体が、黒い霧のように、大気に霧散していくのである。

たちまちアサシンの姿は、夜の闇と合一化した。

そして——その闇が、夜の中で一際暗く、まるで一切の情報——全ての振動を断ち切るように、黒塗りの球体として顕現する。

丸い闇は急激に拡大。廃洋館とその敷地を、光も音も通さぬ世界へ塗り替えて行く。

『——<sup>ナイトバード</sup>始原の符』

正しく歴史に残された内では最も古い “スペルカード” が、今再び、幻想郷に蘇った。

ルーミア——何とも分からぬ妖怪である。

闇を操ることは伝わっている。人を喰う妖怪であるらしいとも伝わっている。だが

それ以上の何かを語り継ぎ、彼女の実像を浮き彫りにする資料など、現代には何も無い。にも関わらず彼女の名前は、ある種の歴史を追い求めるものには、「博麗の巫女」や「最後の魔法使い」／「最初の魔術師」と並び重要な意味を持つ。

「確認されている最古のスペルカード使用者」として、だ。  
尤もこの称号は、半ばほどまで正解だが、半分は間違えている——召喚されたルーミア自身が、そのことを良く分かっている。

——あの白黒、適当に書き残してくれて。

異変を引き起こし解決するに当たって「スペルカードルール」が採択され、そして初めての異変が発生した時、最初にルーミアが用いたのは月符「ムーンライトレイ」であった。この聖杯戦争で用いるならば『「月影に閉ざされし揺籠」』としてAランク相当、「闇の中より放つ無数の光条が敵の動きを制限し、そして魔弾が敵を貫く」極めて攻撃的な対人宝具となるはずであった。

『始原の符』は「常時展開型の対界宝具」である。

効果範囲に存在する「情報の流れ」——光や音と言った振動や、大気に乗る臭いの粒子など、生物が外敵を警戒する為のありとあらゆる情報を、自分以外が受け取れないようにする。

ルーミアという妖怪の強度に比べて、この宝具が極めて強力であるのは、魔術師の始

祖たる霧雨 魔理沙が残した書籍を元に、<sup>〃</sup>ナイトバードこそ最初のスペルカードである”という誤った認識が広がっているからなのであるが——

——こんなもの、サーヴァント相手には気休めじゃないのよ。

この聖杯戦争においては、些か世界のルールが異なる。

サーヴァントが魔力で編まれた<sup>〃</sup>霊体である以上、何らかの行動を起こす際には、必ずや魔力の変動が起こる。そして『始原<sup>ナイトバード</sup>の符』は、魔力に対する認識阻害の効力を持たない。

無論、アサシンであるルーミアには、クラススキルの『気配遮断：A+』がある。ただ息を殺して潜むならば、宝具と合わせ、決して察知されることはないだろう。だが攻撃に移ろうとした瞬間、彼女の存在はたちまちに察知される。

では、この宝具はどう用いれば良いのか——無論、直接対決の折に発動するのである。いかに英霊とて、戦いにおいては自分の耳目をセンサーとして用いる。その大半を奪い取った上で、『怪力・B』を用いて近接戦闘を挑むのなら、わずかに勝機はあるだろう——聖杯戦争におけるルーミアとは、その程度のサーヴァントであった。

だが、この戦いのシステムにおいては、宝具所持者であるルーミアだからこそ思いつかなかつた運用法が存在する。

リグル・ナイトバグは、その単純明快な運用法を用いて、再び戦いを挑もうとしてい

るのである。

「五歩、そのまま歩いて」

「いち、にい、さん、しい、い——い——い——で良い？」

「そこから半歩だけ前に出て、直角に右」

光も音も臭いも、空気の温度さえ察知できぬ世界を、リグル・ナイトバグは歩いていった。

声は出しているが、自分の声も聞こえない。帰って来るルーミアの言葉は、空気振動の産物である声ではなく、脳内に直接届く念話である。

真なる無明を、己の従者のみを頼りにして、虫の女王は歩いて行く。

——アサシンには攻撃させない。私が、やる。

アサシンは攻撃に移った瞬間、気配遮断の効果が無くなる。ならばアサシンには、自分を標的の元まで移動させるだけで良い。

後は自分が、サーヴァントでもなんでもない自分が、神秘のかけらもない刃物を用いて、敵マスターの心臓を貫けば良い。

既に虫を用いての諜報で、敵陣営の二人——物部布都、蘇我屠自古、どちらがマスターであるのかは知っている。霊体の屠自古であれば厄介だったが、幸いにも物理的接触を無効化しない布都の方だ。

殺して、アサシンの宝具に紛れて逃げる。リグルの策というのは、それであった。

音としては聞こえぬが、胸の奥で鼓動が早鐘となつてゐるのを、リグルはひしひしと感じてゐる。

自分はこれから、誰かを殺そうとしている。

別にその決意だけならば、何日も前に決めていた。放置すれば死ぬと分かつて、リリカ・プリズムリバーに毒虫を放ちましたし、つい数十分前の襲撃も、確実に殺すつもりで行つてゐた。

だが——自分の手に刃を握り、返り血を浴びる距離で殺すまで、数十分で仕立て上げた急拵えの覚悟である。

膝が震え、歯がカチカチと鳴る。にも関わらずリグルの顔に、誰にも見えぬ闇の中に浮かぶ表情は、涙交じりの笑みであつた。

自分は役に立つ。

自分は、役に立てる。

それだけを無上の喜びとした、歪んだ笑みであつた。

——しかしながら、痛ましくも。

彼女はあまりに戦いに慣れておらず、敵はこの戦いを「戦争」と認識している。そしてここは、敵の工房ほんきょうの中であつた。

カチッ

「——え？」

その音をリグルは、耳で聞いた訳ではなかった。靴裏から伝わった感触に、擬音を割り当てるならこれだろうと、脳が自動補完しただけのことである。

だが、それに続く痛みはこれ以上も無いほど明確に、リグル・ナイトバグの右脚を喰らい潰した。

小爆発。

発火の符を絨毯下に埋めた、魔術的に作られた地雷であった。

始め、薄く感じた痛みにも、リグルは足をさすろうとした。

痛みがあるはずの場所に、脚が無かった。彼女の右脚は、太腿の半ばから炎に喰われ、骨まで炭化して崩れていたのである。

「あ——あ、あああああああああああつ！」

痛みは幻肢痛でしかなかった。

切断面が見えなかったのは、リグルにとってはむしろ幸いであった——高熱に切断面が焼かれ、止血を施したも同様の状況になった、それも幸いであっただろう。

だが代償に彼女は片脚を、平時には校庭のトラックを駆け回り、非常時には己の命を救う為に駆け回る脚を失ったのである。

「マ、マスターっ!!」

「あ、ああ、脚、いっ——い、ぎいい、いいいいいい……!!」

立つことなどままならない。苦しみ、呻き、床をのたうち回る。

すると、今度は数メートル離れた壁のどこかでまた——

カチッ

——今度はルーミアが、確かにその音を聴いた。

「くっ——、畏かつ!」

実体化したルーミアが、両腕を広げてリグルの前に立ち塞がった次の瞬間、ルーミアの全身に、細かい陶器片が大量に、暴風の如く叩きつけられた。

その陶器片は、僅かにだが魔力を帯びていたが、サーヴァントに対して用いるなら、せいぜい砂埃程度の威力である——が、リグルがこれを受けたなら、身体から無数の肉片を削ぎ落とされ、まず確実に死んでいたことだろう。

カチッ

カチッ

カチッ

廃洋館の至るところで音が鳴る。アサシン主従はこの時初めて、ここは敵のねぐらではなく、愚か者を誘い込み喰らう獣の口なのだ知った。





暴威の具現たる狂靈はルーミアの気配を——リグルをトラップから守る為、臨戦態勢となつてしまつたが故に発された気配を追い、恐るべき速度で空を飛ぶ。

「ちいっ——！」

ルーミアは、戦う意思を見せなかつた。

勝ち目が無いからだ。

現時点で、あらゆる奇跡と幸運が自分に味方しようと、それを覆してあまりある戦力差が、現状の二者には存在する。

できることはただひたすらに逃げ、何処かの闇へ姿を隠し、気配を断つて嵐が収まるのを待つだけ。

——だが、逃げ切れるか？

己に問えば明確に分かる。

速度が違いすぎる、やがては追いつかれる。逃げ続けることは不可能である、と。どうする。

片脚を焼き落とされた主人を抱えて、相手を傷つけられる宝具も持たず、自分はどうやってこの場を切り抜ける——!?

「……！」

その時、ルーミアに舞い降りた天啓は、長期的に見れば自分達を不利に導くものであ



「その台詞、どっかで聞いたことあるな。真似するなら私の方にしとくべきだぜ」

「真似——『弾幕はパワーだぜ』だったかしら」

「同意しかねますね、弾幕も剣も心技体の合一こそ要でしょう」

——三つ、聞き慣れたとは言わないが、懐かしい声。

「出迎え大義でありますこと……ちよつと、ウチのマスター助けてくれない……？」

ルーミアは仰向けになつたまま、両手を持ち上げて無抵抗の意思を示した。

セイバー：フランドール・スカーレット。

アーチャー：霧雨魔理沙。

ウオーリア（イレギュラークラス）：魂魄妖夢。

三者三様に得物を携え、寸泊の内に侵入者を破壊出来るよう、万全の体制で構えていた。

そしてまた彼女達の後方には、博麗霊夢が能面の如き無表情で立ち、またその隣にアリス・マーガトロイドが、事態の奇妙を心から楽しみ、破顔していた。